

# 長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

—茅野市その4・富士見町その3—

昭和51・53年度

日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会

茅野市 その4. 富士見町 その3 正誤表

P		誤	正
	序 13行目	大きく <sup>・</sup> 没 <sup>・</sup> 編 <sup>・</sup> している	大きく <sup>・</sup> 没 <sup>・</sup> 編 <sup>・</sup> している
5	挿図1	頭殿沢遺跡付近の地形 (1:2000)	頭殿沢遺跡付近の地形 (1:3000)
6	挿図2	頭殿沢遺跡土層図 (1:2000)	削 除
7	挿図2	頭殿沢遺跡土層図 (1:2000)	頭殿沢遺跡土層図 (1:200)
9	挿図3	■ 羽条縄文	■ 一羽状縄文
11・12	挿図4	頭殿沢遺跡調査区・遺構全体図 (1:4000)	頭殿沢遺跡調査区・遺構全体図 (1:400)
13	挿図5	……………出土状態実測図	……………出土状態実測図 (1:60)
22	挿図11	1. 3号住居址 2. 壘壁炉断面図	1. 3号住居址 (1:60) 2. 壘壁炉断面図 (1:30)
28	挿図15	頭殿沢遺跡集石1実測図 (1:30) 実測図 (1:60)	頭殿沢遺跡集石1実測図 (1:60) 削 除
31	挿図18	集石土壌 394実測図	集石土壌 394実測図 (1:60)
35	上から15行目	千鹿頭社遺跡に	千鹿頭社遺跡に
42	挿図22		縮尺スケールにcm挿入
48	挿図27	A B ……………節理面からの折損 ……………A以外の折損	A…節理からの折損 B…A以外の折損
51	挿図28	● 不整形円形状	● 不整形円形状
51	上から2行目	1977	1977から引用した。
73	挿図13	御射山西遺跡出土石器実測図 (1:5)	御射山西遺跡出土石器実測図 (1:1.5)
148	註 C	研磨し形状を成すもの	研磨し形状を成すもの

# 長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

—茅野市その4・富士見町その3—

昭和51・53年度



日本道路公団名古屋建設局  
長野県教育委員会

## 序

茅野市に所在する頭殿沢遺跡の第1次発掘調査は、昭和51年4月5日より6月19日にかけて実施された。第2次発掘調査は諏訪南インターチェンジ建設にかかる本線幅の拡幅部分で、1年おいた昭和53年8月21日より12月7日まで実施され、同時に富士見町の手洗沢・御射山西岡遺跡の調査も行われた。

この3遺跡は、八ヶ岳連峰の山頂付近から放射状に広がる帯状の台地の先端部分にあたり、標高900から1,000mの位置にあって、縄文時代の遺跡が多いことで夙に知られる地域である。中央自動車道は、これらの台地を横断して計画されたが、山林等のため分布状態があまり明確でなく新しい遺跡の発見も予想されていた。ちなみに、昭和51年度に発掘調査を実施した10遺跡のうち、居沢尾根・阿久岡遺跡以外の8遺跡（入の日影・柏木南・中阿久・オシキ・上の原・判の木山西・判の木山東）は、中央自動車道の路線が発表されてから新たに発見されたものであり、この地域が予想以上に大規模な遺跡であることが判明した。今回報告される3遺跡も新たな発見によるものである。

発掘調査の結果は本報告書にみられるとおりであるが、3遺跡とも縄文時代中期を中心とし、平安時代にまで亘る集落址で、住居址・土壇群・集石群が多く発見された。特に頭殿沢遺跡の規模は他の2遺跡を大きく凌駕している。これらの成果は、八ヶ岳山麓台地の原始・古代の集落立地を考究する上で特色が層明らかなにできる資料になりうるものと思われる。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査や整理作業に深い御理解をいただいた日本道路公園名古屋建設局、同諏訪工事事務所、長期間発掘調査に精励された大沢和夫前所長をはじめとする調査団各位、調査のために、御協力いただいた諏訪中央道事務所、茅野市、富士見町当局並びに同地区被買収組合等の関係各位に対し、深甚の謝意を表する次第である。

昭和56年3月20日

長野県教育委員会教育長

内 山 袈 一

## 例 言

1. 本書は日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいて行われた、長野県茅野市御狩野頭殿沢遺跡、長野県富士見町神戸手洗沢遺跡、同御射山西遺跡の発掘調査報告書である。このうち頭殿沢遺跡は、さきに刊行した『長野県中央道遺跡文化財包蔵地発掘調査報告書茅野市・原村その2』に平安時代に関するものは掲載されたので、それは省略し、第1次調査分で残された縄文時代関係を、第2次調査分と一括した。
2. 報告書の体裁は従来刊行された報告書に従って編纂したのであるが、重複を避けるため、すでに刊行された報告書に記載された事項は一部省略してある。
3. 調査結果に関して、一部はかなり検討を加え、類型化などを試みたものもあったが、全般的には十分な余裕もなく記述したので、精粗の差があるため、原則として検出された遺構・遺物の図示に重点を置いている。
4. 発掘調査と整理作業の間はかなりの時間が経過しており、その上調査関係者の途中退団も多く、遺物整理の段階では全く新しい班編成を組まなければならない状況であったので、多少の見解の相違や不明確さは生じたが、基本的には当初の協議事項を踏襲してきた。
5. 作業分担は関係者一同の協議により決定し、途中退団者の分担は、その都度残留者に引継がれてきた。各遺跡の発掘調査及び、整理作業担当の全体は本文3頁に記載してあるが、各パートは次のように分担した。

	頭殿沢遺跡（縄文関係のみ）	手洗沢・御射山西遺跡
整理・復元作業	岩生今朝人 伴 信夫 丸山日出夫 樋口誠司 鈴木御恵子 重倉理恵子	青沼博之 小池 孝 三ツ井さみ子 桑原正枝
遺構図トレース	丸山	小池・三ツ井 桑原
遺物実測・採拓	岩佐、伴、丸山、樋口	青沼、三ツ井
遺物トレース	丸山、樋口、重倉	三ツ井

写真は、木下平八郎、土器復元は福沢幸一が専ら当たった。

6. 本報告書は、本文、図、表、図版に分け、本文中へ入るものは挿図、表とし、本文後に一括した分は図・別表・図版とした。なお、土器、石器、土製品の採拓、実測図は各項目とも通し番号を付してあるので、本文中に引用する場合は、特別なことがない限り番号のみを記載し、簡略化した。
7. 執筆に関しては協議により分担し、文責は報告書の末尾に別表で示した。編集は主として頭殿沢遺跡は岩佐今朝人が、手洗沢・御射山西遺跡は青沼博之が行ない、樋口昇一が全般を総括した。
8. 本報告書関係の遺物・実測図等は長野市長門町長野県中央道遺跡調査団事務所に保管してある。

# 本文目次

序	
例 言	
目 次	本文・挿図・表・図・図版
第1章 調査状況	1
第1節 調査にいたるまで	1
1 中央道関係の経過	1
2 発掘調査委託契約	1
3 長野県中央道遺跡調査会	2
1) 昭和51・53年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿	2
2) 昭和51・53年度長野県中央道遺跡調査会同名簿(茅野市・原村・富士見町班)	3
3) 発掘調査協力者	3
4) 現地指導・視察者	4
第II章 調査遺跡	5
第1節 頭殿沢遺跡(STDB)	5
1 調査の経過	5
2 層 序	6
3 遺構と遺物	6
1) 縄文時代早期・前期の遺構と遺物	6
(1) 遺物の出土分布状態(7) (2) 遺構外遺物(7)	
2) 縄文時代中期初頭の住居址と遺物	13
(1) 5号住居址(13) (2) 10号住居址(14) (3) 11号住居址(14)	
(4) 12号住居址(15) (5) 14号住居址(16) (6) 15号住居址(17)	
(7) 遺構外出土土器(18)	
3) 縄文時代中期中葉の住居址と遺物	21
(1) 3号住居址(21) (2) 4号住居址(22) (3) 9号住居址(23)	
(4) 遺構外出土土器(25)	
4) 縄文時代後期の土器	26
5) 竪穴遺構	27
(1) 竪穴3(27) (2) 竪穴4(27)	
6) 集石と遺物	27
(1) 集石1(27) (2) 集石2(28) (3) 集石3(28)	
(4) 集石4(30) (5) 集石5(30) (6) 集石6(30)	
(7) 集石7(30) (8) 集石8(30) (9) 集石土壇394(30)	

7) 土塚・ロームマウンド状土塚	31
(1) 土塚 (31) (2) ロームマウンド状土塚 (34)	
4 まとめ	34
1) 集落	34
2) 土器	35
(1) 縄文時代早期・前期 (35) (2) 縄文時代中期初頭 (36)	
(3) 縄文時代中期中葉 (38) (4) 縄文時代後期 (39)	
3) 石器	41
(1) 小形石器 (41) (2) 大形石器 (48)	
4) その他	51
(1) 土製品 (51) (2) 炭化物・自然遺物 (52)	
第2節 御射山西遺跡 (SMYC)	53
1 位置・環境	53
2 発掘区の設定と調査の経過	53
1) 発掘区の設定	53
2) 調査の経過	59
3 遺構	62
1) 縄文時代の遺構	62
2) その他の遺構	65
4 遺物	69
1) 縄文時代早期の土器	69
2) 縄文時代中期の土器	71
3) 縄文時代後期の土器	71
4) 石器	72
5 まとめ	77
第3節 手洗沢遺跡 (STAB)	78
1 位置	78
2 調査の経過	78
3 遺構	78
4 遺物	81
1) 縄文時代の遺物	81
2) 平安時代の遺物	83
5 まとめ	83

執筆分担一覧 あとがき

## 挿 図 目 次

### 頭殿沢遺跡

挿図 1 遺跡付近の地形図	5	挿図15 集石 1 実測図	28
挿図 2 土層図	6	挿図16 集石 2・3・4・5・6 実測図	29
挿図 3 縄文時代早期遺物の出土分布図	8	挿図17 集石 7・8 実測図	30
挿図 4 調査区・遺構全体図	11	挿図18 集石土壇394実測図	31
挿図 5 5号住居址・炭化材出土状態実測図	13	挿図19 小さな土壇実測図	32
挿図 6 10号住居址実測図	14	挿図20 土なロームマウンド状土壇実測図	33
挿図 7 11号住居址実測図	15	挿図21 石鏃形並分類図	41
挿図 8 12号住居址実測図	16	挿図22 AW36出土石鏃・BA49出土スクレイパー実測図	42
挿図 9 14号住居址実測図	17	挿図23 使用痕付着部位推図	43
挿図10 15号住居址実測図	18	挿図24 小形石鏃の刃こぼれ・刃つよれ・つよれ; 単位の見きの分布図	44
挿図11 3号住居址実測図	22	挿図25 黒曜石出土分布図	45
挿図12 4号住居址実測図	23	挿図26 黒曜石相関図(長さ・幅)(1)-(4)	46
挿図13 9号住居址実測図	24	挿図27 打製石斧・横刃型石鏃新根状版式図及び打製石斧接合実測図	48
挿図14 竪穴 3・4 実測図	27	挿図28 土製円板相関図(長さ・幅)	51

### 御射山西遺跡

挿図 1 富士見町内遺跡分布図	54	挿図 9 ロームマウンド、断層実測図	67
挿図 2 御射山西・手洗沢遺跡地形、グリッド配置図	58	挿図10 ロームマウンド実測図	68
挿図 3 A～D地区遺構配置図	60	挿図11 出土土器拓影	70
挿図 4 E・F地区遺構、遺物分布図	61	挿図12 出土土器実測図・拓影(昭和54年度発掘)	71
挿図 5 土壇実測図	63	挿図13 出土土器実測図	73
挿図 6 集石実測図	64	挿図14 出土土器実測図	74
挿図 7 ロームマウンド長軸方向	66	挿図15 出土土器実測図	75
挿図 8 調査地方の風	66	挿図16 出土土器実測図(昭和54年度発掘)	76

### 手洗沢遺跡

挿図 1 遺構配置図	79	挿図 3 出土土器拓影、石器実測図	82
挿図 2 土壇・ロームマウンド実測図	80		

## 表 目 次

### 頭殿沢遺跡

表1 遺構別出土石器一覧表	41	表5 縄文時代中期・後期主要土器一覧表	142
表2 使用痕付着部位分類表	44	表6 出土小形石器一覧表	144
表3 土壇一覧表	133	表7 出土大形石器一覧表	146
表4 縄文時代早期・前期土器観察表	137	表8 出土土製円板一覧表	148

### 御射山西遺跡

表1 長野県東部御射山西見町遺跡一覧	55
--------------------	----



## 目 次

### 頭版近景

- 図1 土器拓影図 (早期I~III群)  
 図2 土器拓影図 (早期IV・V群)  
 図3 土器拓影図 (早期IV・V群)  
 図4 土器拓影図 (早期VI・VII群)  
 図5 土器拓影図 (早期VIII群)  
 図6 土器拓影図 (早期IX・X・XIV群)  
 図7 土器拓影図 (早期・前期XV~XVI群)  
 図8 土器拓影図 (早期XIII群)  
 図9 土器実測図 (中期初頭 5・10・11・12号住居址)  
 図10 土器実測図 (中期初頭 12・14号住居址)  
 図11 土器実測図 (中期初頭 14・15号住居址・遺構外)  
 図12 土器実測図 (中期初頭 土溝・遺構外)  
 図13 土器実測図 (中期初頭 遺構外)  
 図14 土器実測図 (中期初頭 遺構外)  
 図15 土器実測図 (中期初頭 遺構外)  
 図16 土器実測図 (中期初頭 遺構外・中期中葉 3・4号住居址)  
 図17 土器実測図 (中期中葉 4・9号住居址)  
 図18 土器実測図 (中期中葉 土溝・紫石・遺構外)  
 図19 土器実測図 (中期中葉 9号住居址・遺構外)  
 図20 土器実測図 (中期中葉・後期 遺構外)  
 図21 土器拓影図 (中期初頭 3・5・10号住居址)  
 図22 土器拓影図 (中期初頭 11・12・14号住居址)  
 図23 土器拓影図 (中期初頭 14・15号住居址)  
 図24 土器拓影図 (中期初頭・中葉 15・4・9号住居址)  
 図25 土器拓影図 (紫石・紫石・土溝)  
 図26 土器拓影図 (土溝)  
 図27 土器拓影図 (土溝)  
 図28 土器拓影図 (土溝)  
 図29 土器拓影図 (土溝・中期初頭 遺構外)  
 図30 土器拓影図 (中期初頭 遺構外)  
 図31 土器拓影図 ( )  
 図32 土器拓影図 ( )  
 図33 土器拓影図 ( )  
 図34 土器拓影図 ( )  
 図35 土器拓影図 (中期初頭・中葉 遺構外)  
 図36 土器拓影図 (中期中葉 遺構外)  
 図37 土器拓影図 (後期 遺構外)  
 図38 石器実測図 (石錘・石錘)  
 図39 石器実測図 (スクレイパー・彫刻器具)  
 図40 石器実測図 (徳川蔵ある石器)  
 図41 石器実測図 (打製石斧)  
 図42 石器実測図 (打製石斧・その他・横刃型石器)  
 図43 石器実測図 (横刃型石器)  
 図44 石器実測図 (敲打器・特殊磨石・磨石)  
 図45 石器実測図 (磨石)  
 図46 石器実測図 (凹石)  
 図47 石器実測図 (凹石・石皿)  
 図48 石器実測図 (石工・乳棒状磨製石片・砥石)  
 図49 土製品拓影図 (土製円板)

## 図 版 目 次

### 頭版近景

- 図版1 1. 遺跡近景 2. 遺跡近景 (BC区西側)  
 3. 遺跡近景 (BC区東側)  
 図版2 尾根頂上部近景  
 図版3 1. 竈道取付部近景 2. 早期土器集中区  
 3. 3号住居址  
 図版4 1. 4号住居址 2. 5号住居址(1) (炭化材出土状態) 3. 5号住居址(2)  
 図版5 1. 10号住居址 2. 4号住居址埋藏炉  
 3. 3号住居址埋藏炉 4. 12号住居址埋藏炉  
 5. 10号住居址埋藏炉 6. 14号住居址埋藏炉  
 7. 15号住居址埋藏炉  
 図版6 1. 9号住居址 2. 11号住居址 3. 12号住居址  
 図版7 1. 14号住居址 2. 15号住居址 3. 9号住居址石間伊(新)と埋藏炉(旧)

- 図版8 集石1 1. 上面 2. 中間木炭出土層 3. 底面
- 図版9 1. 凹地のロームマウンド群 2. 土壌235とその周辺 3. 土壌301
- 図版10 1. 集石4 2. 集石8 3. 土壌228 4. 土壌304 5. 土壌319 6. 矢羽標識器と押型文土器の出土状態(C1-52) 7. 土壌189
- 図版11 1. 遺跡遠景(調査前) 2. 遺跡遠景(調査後) 3. 木線南側近景
- 図版12 1. 西側近景 2. 土壌374 3. 土壌385 4. 土壌390 5. 集石土壌394 6. 土壌388 7. 竪穴4
- 図版13 1. 遺物出土状態(1)15号住居址 2. 土器出土状態(2)9号住居址 3. 土器出土状態(3)AX-62
- 図版14 早期縄文土器(1)(縄文・推定文)
- 図版15 早期縄文土器(2)(山形押型文)
- 図版16 早期縄文土器(3)(格子目押型文)
- 図版17 早期縄文土器(4)(貝殻遺跡文)
- 図版18 早期縄文土器(5)(糸痕文)
- 図版19 早期縄文土器(6)(絡糸体圧痕文)
- 図版20 早期縄文土器(7)(糸痕文)  
早期縄文土器(8)(貝殻遺跡文)
- 図版21 中期初頭縄文土器(1)
- 図版22 中期初頭縄文土器(2)
- 図版23 1. 中期初頭縄文土器破片(1) 2. 中期初頭縄文土器破片(2)
- 図版24 中期中葉縄文土器(1)
- 図版25 中期中葉縄文土器(2)
- 図版26 中期中葉縄文土器(3) 後期縄文土器
- 図版27 中期中葉縄文土器(4) 煮罨付着土器  
種子圧痕土器 炭化物(くろみ)
- 図版28 1. 石鏃 2. 石錐 3. 石匙・スクレイパー  
4. 使用痕ある石核 5. 定形石器A~D  
6. 形器器類 7. 使用痕のある割片
- 図版29 打製石斧・礫石類 横刃型石器  
敲打器 特殊器石
- 図版30 石器に残された製作・使用の痕跡 (1)調整痕  
(2)磨耗痕 (3)線条痕 (4)磨耗痕 (5)線条痕  
(6)局部磨製

#### 御射山西遺跡

- 図版31 1. 遺跡付近航空写真 2. 遠景(南より)
- 図版32 1. 遠景(西より) 2. 近景(東南より)  
3. 近景(南より)
- 図版33 1. E地区(西南より) 2. F地区(南より)
- 図版34 1. 土壌16号 2. 土壌1号 3. 集石1号  
4. 同断面 5・6 ロームマウンド9・14号  
7. 新層
- 図版35 出土土器(1:2)
- 図版36 出土土器(1:1)
- 図版37 1. 出土石器(1:3) 2. 出土石器(1:3)
- 図版38 昭和54年度発掘出土遺物 1. 出土土器(1:2)  
2. 出土土器(1:1) 3. 出土石器(1:3)

#### 手洗沢遺跡

- 図版39 1. 近景(南東より) 2. 近景(北より)  
3. 土壌3号
- 図版40 1. 出土土器(1:2) 2. 出土石器(1:1)  
3. 出土石器(1:3)

# 第 I 章 調査状況

## 第1節 調査にいたるまで

### 1. 中央道関係の経過

昭和32年4月に公布された「国土開発縦貫自動車道建設法」に基づく中央自動車道の宮線は、小牧・東京間約360km、そのうち長野県内は岐阜県中津川市から恵那山トンネルで飯田盆地を通じ、大竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓をかすめて山梨県に至る間約122kmの長さである。

昭和42年9月に文化庁と日本道路公団との間に取り交わされた「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」に基づき、漸く昭和45年9月に下伊那郡阿智村小野川地籍から発掘調査が開始され、本年で9年を経過した。その間、用地買収・登記の終了を持って、原則として下伊那・上伊那・諏訪郡の順に発掘調査が進められ、昭和53年度までに216遺跡の調査が終了した。

発掘調査には県独自の組織が持たないので「長野県中央道遺跡調査会」を特設し、その中に調査団を組織してこの業務を遂行している。

昭和51年度は調査団を3班に分け、中阿久・居沢尾根・オシキ・上の原・入の日影・柏木南・阿久・判ノ木山東・頭殿沢・判ノ木山西の各遺跡（調査費9,174,4千円）の発掘調査を実施した。この内、阿久・居沢尾根・判ノ木山西の各遺跡は規模が大きく、次年度への継続調査となった。

昭和52年度は岡谷市の調査も予定され4班編成となり、茅野市・原村地区では阿久・居沢尾根・判ノ木山西・金山沢北・判ノ木山東一取り付け道路分一・御社宮司遺跡の調査が行われた。

ところが53年度に入ると前年度末急に決定した諏訪南インターにかかる調査が追加され、調査員の補充がないまま主任4名の増員で調査体制がスタートした。4月5日、発掘調査（茅野市御社宮司、同頭殿沢、原村阿久、富上見町手沢沢、同御射山、岡谷市船盛社計6遺跡調査費106,891千円）と整理作業（茅野市入の日影遺跡以下9遺跡分調査費24,509千円）に分割した契約が公団と交され、発掘調査3班、整理作業1班で開始された。53年度はとくに阿久遺跡の保存問題が激化し関係各機関の度重なる慎重審議の結果、現路線を変更せず、土盛り方式による遺跡保存という新方式によって結着をみた。「阿久」に明け暮れた1年ではあったが、茅野市御社宮司遺跡も1ヶ年を費やし、岡谷市船盛社遺跡も買収以前ながら地主の理解によって路線内の未調査地区が完掘され、ここに昭和45年9月からはじまった中央道西の宮線にかかる県内の遺跡の発掘調査はほぼ完了し、あとは記録保存のための報告書作成業務を残すのみとなった。

### 2. 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業地行前に日本道路公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で保護協議することになっている。この結果、記録保存と決定、発掘調査が必要となった場合、公団は県教育委員会に委託して調査を実施している。そこで、つぎのような発掘調査委託契約が締結された。詳細は「中央道報告茅野市・原村その1」にあるのでここでは要項のみかかげる。

発掘調査委託契約書（）内は53年度

- 1 委託事務の名称 中央道埋蔵文化財発掘調査 茅野市、原村その2（岡谷市その4・茅野市その4・5  
富士見町その3・原村その3・4）
- 2 委託期間 昭和51年4月5日から昭和52年3月20日まで（53年4月5日～54年3月20日）
- 3 委託金額 91,744.00円也（106,891.000円）

## 3. 長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当たっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度当初の理事会において、発掘調査の受託が決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公同と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。昭和51年・53年度役員、茅野市・原村・富士見町地区調査団組織はつぎのとおりである。（調査会規約は既刊の中央道報を参照）

## 1) 昭和51・53年度中央道遺跡調査会役員名簿（共に10月現在） ○印は53年度 ●印51年度

顧問	一志茂樹（県文化財保護審議会会長）	
会長	水口米雄（県教育長）	
理事	金井寛久一郎（県文化財保護審議会委員）	●久保義幸（岡谷市教育長）
	米山一政（県文化財保護審議会委員）	○岡西良治（岡谷市教育長）
	榎原 健（県文化財保護審議会委員）	●中村文武（諏訪市教育長）
	原 嘉藤（信濃史学会常任理事）	○今村正明（諏訪市教育長）
	●村上 一（県教育次長）	木川下年（茅野市教育長）
	○毛浜 修（県教育次長）	●小泉真澄（原村教育長）
	●太田波大（県文化課長）	○松沢 達（原村教育長）
	○千野久義（県文化課長）	小林繁治（富士見町教育長）
	下平 晃（伊那教育事務所長）	●小島与四郎（諏訪教育会長）
	●名取又男（諏訪地区教委協議会長）	○八幡栄一（諏訪教育会長）
	○花岡文吉（諏訪地区教委協議会長）	林 茂樹（宮田小学校長）
	熊谷大一（辰野町教育長）	
監事	●小栗栄重郎（県文化課課長補佐）	●上原 寛（茅野市教育委員会社会教育課長）
	○青木和久（県文化課課長補佐）	○矢島雅幸（茅野市教育委員会社会教育課長）
幹事	青沼一之（県文化課文化係長）	●水島良彦（伊那教育事務所総務課長）
	●浅井舎人（県文化課文化財係長）	○吉沢乙一（伊那教育事務所総務課長）
	○久保浩美（県文化課文化財係長）	久保田秀明（伊那教育事務所主査）
	○小林正良（県文化課主査）	●武井今朝人（伊那教育事務所主査）
	堀内規矩雄（県文化課主事）	●寺沢公明（伊那教育事務所主事）
	●宮島孝明（県文化課主事）	○内河一男（伊那教育事務所主任）
	●平野益雄（県文化課主事）	○木藤辰男（伊那教育事務所主事）
	○佐藤正志（県文化課主事）	●星野政清（伊那教育事務所社会教育課長）

西沢宏明 (県文化課主事)	○片桐光雄 (伊那教育事務所社会教育課長)
小山民雄 (伊那教育事務所社会教育課主事)	関孝一 (県文化課指導主事)
小口幸雄 (伊那教育事務所諏訪支所長)	小林秀夫 ( " )
今村善興 (県文化課指導主事)	青沼博之 ( " )
樋口昇一 ( " )	○白田武正 ( " )
●山田瑞穂 ( " )	○山下泰男 ( " )
伴信夫 ( " )	○百瀬長秀 ( " )
丸山敏一郎 ( " )	○土屋 積 ( " )
笹沢 浩 ( " )	○和田博秋 ( " )

## 2) 昭和51・53～55年度長野県中央道遺跡調査会調査団 (茅野・原・富士見班)

## 〈昭和51年度〉 発掘調査

団 長	大沢 和夫
調査主任	伴 信夫 今村 善興 (総括)
調査員	細川 光貞 根津 清志 松永 潤夫 田畑 辰雄 郷道 哲章 蓋那藤麻呂 片桐 孝雄 知名 定順
調査補助員	片山 敬 原 明芳 山内志賀子 丸山 雅子 赤羽 淑子

## 〈昭和53年度〉 発掘調査

団 長	大沢 和夫
調査主任	青沼 博之 白田 武正
調査員	細川 光貞 斎桑 俊雄 (山本賢治)
調査補助員	島田 哲男 (中村健一 白井泰彦 塚川敏彦 関喜子 欠崎つな子 矢嶋忠美子)

## 〈昭和54・55年度〉 整理作業

頭取遺跡	岩佐今朝人・伴 信夫・丸山E出男・樋口誠二・鈴木恵美子・重合理恵子
手洗沢遺跡 御射山西遺跡	青沼博之・小池孝・三ツ井きみ子・桑原正枝

## 3) 発掘調査協力者

昭和51・53年度の現場発掘調査に際して、地元市町村当局の御援助・御協力により、多くの方々に参加してもらい調査遂行の中心となっていた。51年度については前書に掲載してあるので、ここでは53年度関係者名のみを記し、御礼としたい。

富士見町	朝合 くに 雨宮うたよ 雨宮さち子 有賀 榮作 有賀 善門 伊藤徳久光 伊藤 よし 植松 広 小沢 安喜 菊地ふたみ 久保田 勝 久保田よし子 小池 朝七 小池たえ美 小林 儀平 小林 仁平 小林 弁 小林はつよ 小林 平吉 小林まさ子 小林三代子 小林弥太郎 小林ワカエ 小林 清之 後町はる子 名取千富巳 原田りょう 細川よし美 丸山 吉代
茅野市	赤沼 幸一 赤沼やよ子 有賀 正男 伊藤やす美 北原今朝一 藤森ます子

4) 現地指導・視察者

日本道路公団 名古屋建設局庶務課長他

県教委事務局 教育長・伊那教育事務所一行

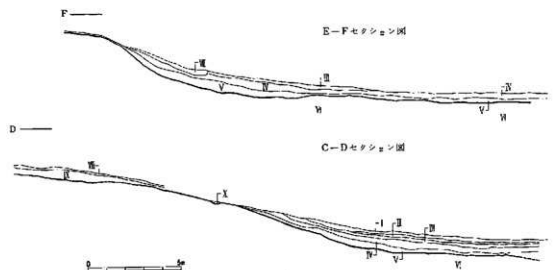
市町村関係 原村市長・同助役・同村会議員一行・同教育長・茅野市教育長・富士見町教育長

研究者 会田進・安藤茂良・一志茂樹・鶴岡幸雄・岡田篤子・折井敦・笠原安夫・金子裕之・小出  
義治・小林公明・河野喜映・末小健・田畑辰雄・戸沢光則・外山和夫・長崎元広・西克久・  
能登健・林茂樹・原嘉藤・松本豪・宮坂虎次・宮坂光昭・武藤雄六・森山公一

その他 労政事務所長・茅野市民新聞・桜映画社・信濃毎日新聞社 (敬称略)

なお、「発掘調査の経過」については、頭殿沢遺跡は前書にあるので省略し、手洗沢・御射山西遺跡分は各節で記述したので、ここでは節をたてず、また「発掘調査の方法」も前書同様なので、すべて削除した点御了承下さい。





挿図2 頭取状遺跡土層図 (1:2000)

## 2 層序 (挿図1・2)

本遺跡は、尾根状台地頂部の平坦面から斜面に位置しており、加えて新作物(長芋などの栽培)による擾乱もあり、地区により土層の相違が著しい。特にC区は、一時沢が流れており礫が多い。

本調査で確認された層序は6層である。以下、その標準層序について概説する。

第I層・粘土層 約20cm前後。現代の生活具や縄文時代の遺物の一部を含んでいる。

第II層・黒色土層 約10~15cm前後。歴史時代や縄文時代の遺物を含んでいる。

第III層・暗褐色土層 約20~25cm前後。平安時代の遺物包含層である。

第IV層・黒褐色土層 約35~40cm前後。縄文時代中期から後期の遺物包含層である。下層部からは、織維土器片が出土している。

第V層・褐色土層 約30~40cm前後。

第VI層・ローム層

なお、尾根頂部の STA 268+00~80の間は深耕擾乱部を除いて、第I層が粘土(黒土)で厚さ20~25cm、第II層は黒色土層で約10cm、第III層が黒暗褐色土で5~10cm、第IV層がロームとなる。尾根南斜面下部では、前記標準層序と変りないが、御射山沢寄りのテラス部では表土層は薄い。第I層は粘土(黒土)が20cm前後あり、5~10cmの暗褐色土上の第II層(縄文早期遺物包含層)を挟んでローム、または、混雑暗褐色土層となる。

## 3 遺構と遺物

### 1) 縄文時代早期・前期の遺構と遺物

早期・前期の遺構は明確ではない。調査時点ではC区の遺物集中箇所を織維土器生活面として捉えたが、最終的に遺構としては理解せず、単なる遺物の比較的多い地点として取り上げ、後述するようにその分布状況を検討したのみにとどまった。

出土遺物は、1点の矢柄研磨器と425点の早期土器、6点の前期土器で合計432点である。矢柄研磨器については整理作業段階で紛失したため、写真図版10~6のみを掲載した。なお土器については、記述が複雑になるので別表として観察表を付し、簡略化を計ったために一応の基準を述べておく。



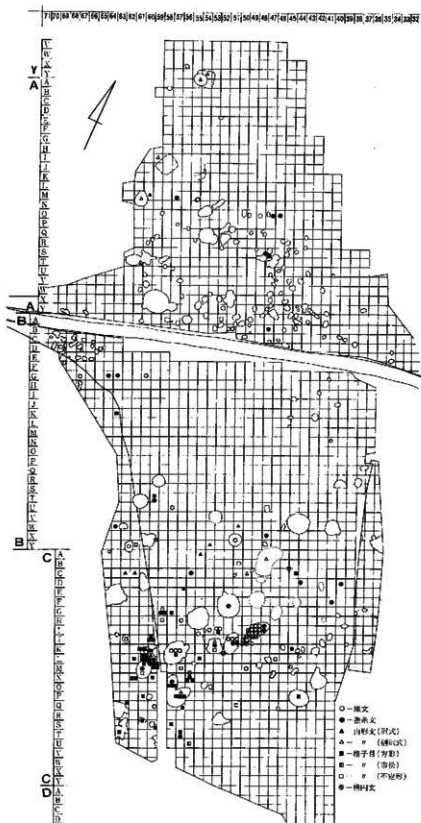


2類 横方向に施文するもので、燃りの太い原体を使用する8~15、細い原体を使用する7がある。原体間隔が広い8・9と狭い10~15があり、器面調整は1類に酷似する。13~15は軟らかい段階で施文しているため、沈線状に深くなっている。関東地方、燃糸文系土器の末期的な施文手法と類似する。

第II群土器(図1-16~24、図版14) 縄文系土器を一括する。口辺部から以下に施文する16・17と口唇部、内面にまで及ぶ18がある。施文方向は斜位が多く、軟らかい段階で施文する17・20がある。18は表裏縄文で、胎土に金雲母を多量に含み焼成は良好堅緻である。

第III群土器(図1-25~32、図版15) 沢式土器を一括する。胎土に黒鉛を多量、白色砂粒を少量含み、焼成は良好堅緻である。色調は30が褐色で他は総て暗灰色であり、黒鉛含有量の差と思われる。いずれも帯状施文を特徴とするが、小破片のため文様単位は不明だが、横帯が1条のみの25~27と表裏に施文する30がある。口辺部以下は縦帯施文が一般的で28~31がその破片である。

第IV群土器(図2-33~41、図版15) 縄沢式土器を一括する。III群土器同様帯状施文を特徴とし、焼成は前者に比べ堅緻ではない。山形を刻む方法にも種類があり、頂部が丸身をもつ37~39、鋭角の33~36・40、頂部が連続しない41などがあり、これらが時間差によるものか個体差なのかは不明である。



様式3 須賀沢遺跡縄文時代早期遺物の出土分布図(その1)

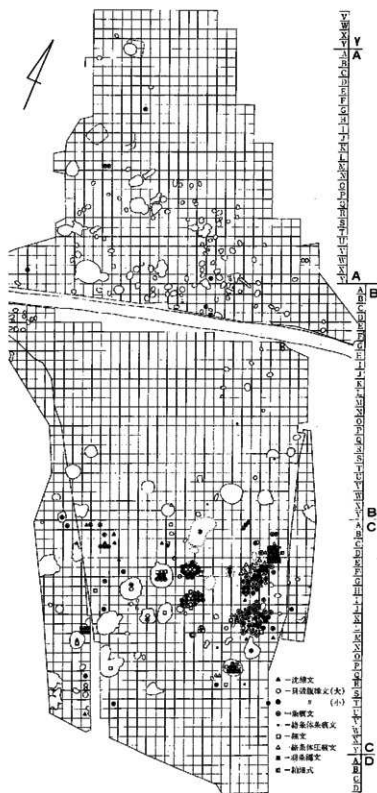


図3 頭取沢遺跡縄文時代早期遺物の出土分布図(その2)

1類 棒状工具による太い沈線で平行沈線文を有するもので、沈線は浅いが工具の先端が鈍いものを使用している93・95と鋭利な104・106の2種があり、93・95はアナグラ属系の貝殻による覆線を充填している。

2類 半截竹管の腹部を利用しているもので、太く深い施文を行う97・99～102と細く浅い施文を行

第V群土器(図2・3-42～92、図版16) 立野式土器を一括する。施文具形態により5類に類別できる。

1類 格子目文の一群で、菱形を成す42・55・65・67と正方形の58・60・64・66がある。文様施文後指でナゾリ無文部をつくっている42～45や、無文部を残しながら施文する58～60があり、III・IV群土器と同様の効果をわらっているものであろう。

2類 山形格子目文で61・1点のみの出土である。刻目は菱形で矢羽状状している。

3類 市松文で91一点のみの出土である。施文具と直行する方を5分割している。一周に刻む単位は把握できない。

4類 不定形目文の一群で、69～90は刻目が多角形或は円形で、格子目状に刻む例と不明のものがあり、刻目の単位は把握できない。施文する時間は1～3類より早いことが窺える。

5類 楕円形目文で、92一点のみの出土。胎土は精練され、焼成は良好無燻で色調は灰褐色を呈し、IV群土器に類似する。

第VI群土器(図4-93・95～107、図版20-2) 沈線文系土器群を一括する。沈線は太いものと細いものに大別され、施文具等により更に類別できる。

う 98・103・105がある。101は下端に1本の沈線が通っている。

3類 格子目状に施文するもので、太い沈線の96、細い沈線の107とがあり、107の外面には鈍い艶が認められ、96は101と同様、下端に1本の沈線が通っている。

第VII群土器(図4 94・108-122、図版20-2) 貝殻腹縁文のみの土器群である。幅広の腹縁を用いる例で破片総数16点である。個体数は本群のみで4個体以上と思われる。94は胎土に石英粒子を多量に含む他とは異り、内外面に乾燥が進んだ段階でヨコナデをしている。腹縁の施文方法は、器面に対しわかせて(平行)行われている。108・109は、内外面とも入念に調整され平滑であり同一個体である。110-113も外面貝殻条痕で入念に調整され、内面はヨコナデされており同一個体である。114-122は胎土、焼成、色調等が類似し、外面に浅い条痕を施す114・116・118・120・121と、入念なヨコナデのみの117・119、内外面に条痕を施す115・122がある。これらが同一個体中の部位の相違によるものかは不明である。以上108-122の腹縁の施文方法は、器面に対し立てて(垂直)施文している。

第VIII群土器(図5-123-127・130-132、図版17) 幅広の腹縁を用いるもので、口唇部及び口辺部に施す125・126・130-132、口唇部のみの123・124・127があり、125を除き他は繊維を多量に含む。器面調整は条痕を用いる123・124・130-132と板状工具の126、指ナデのみの125に分けられ、繊維混入の少ないものに条痕がないことから、繊維の含有量の多少により条痕が使い分けられているものと考えられる。

第IX群土器(図5-128・129・133・134、図版17) 口唇部に刻み、或は指圧痕あるものを一括する。134以外は条痕で入念に調整され平滑である。先端が細く鋭利な工具による128や、瘤状の工具と思われるもので刻まれている129、板状工具による133があり、134のみ指頭で波状にしている、いずれも波状口縁の一部分である。

第X群土器(図5-135、図版17) 拍煙式土器である。微量の繊維を含み良質の胎土である。器面乾燥後刮削工具によりヘラ削りを内外面に行ない、皿状把手部及び口唇部に刻みを施している。

第XI群土器(図6-142、図版17) 鶴ヶ島台式土器である。胎土に金雲母、不透羽粒子を少量含む、繊維も微量に含まれる。調整は、内外面とも粗いヨコナデをしその後沈線、押し引き沈線等を用い文様を施文している。

第XII群土器(図6-136-137、図版20) 本遺跡出土土器群中で最も多く繊維を含有し、内外面には繩の圧痕があり、これと同一施文工具による条痕が付されるものを一括する。136は、内外面とも簡単にナデられ、内面には結条体条痕を用いて調整しており、その圧痕が一部分にみられる。文様は口唇部及びその直下とに浅い刻みを施し、1本の隆帯を一風させその両脇を沈線で押えつけているのみである。胎土中に混入する繊維は、焼成時間が短いため完全に燃えきっていない。137は内外面、口唇部は入念にヨコナデされ、結条体条痕がヨコ方向に施され、内面には圧痕が一部にみられる。

第XIII群土器(図8-163-173、図版19) 結条体圧痕文土器を 一括する。胎土は白色粒子を含み、繊維を多量に混入する。器面調整は、内外面とも軟らかい段階で結条体条痕を施している。文様は器面調整後に隆帯を一本巡らし、その上側に結条体を押ししている。隆帯下端は沈線状にヨコナデされ、条痕を磨り消している。

第XIV群土器(図6・7-139-141・143-154・157、図版18) 所謂条痕文土器群を一括する。条痕文の種類により細分できる。本群中で最も乾燥した段階で条痕を施し、条間が太く浅い138・140と条間が2ミリ程度の139・140・149-152、細い刷毛状の工具で施す143・144などがある。149-152・154・157・158は色調、焼成等からVII群1類土器の副部片にあたる可能性がある。

第XV群土器(図7-155・156・159-161、図版18) 無文土器を一括する。総て乾燥した段階でヨコナデされているため、胎土中の砂粒が移動して所謂撫紙状になっている。内面はいずれも入念にヨコナデさ



れ、161の内面には、指おさえの痕跡が残る。

第XVI群土器(図7-162) 羽状縄文の土器で、同一個体片が他5片出土している。胎土は良質で焼成は良好堅緻であり、繊維の混入はみられない。調整は、内外面とも人念にヨコナデしている。文様は、口唇部ヨコナデ後、細い粘土紐を貼りつけ、束腰をナデで密着させ器表にはLR・RL縄文を用い下方から上方へ交互に施し羽状にしている。

以上、本遺跡出土の縄文早・前期土器をI類～XVI類に分類し、その概要を述べたが、各類土器の問題点については、後章にゆずりたい。

註1 この用語は、粘着により生じたものではなく、光沢という用語とは区別して用いた。

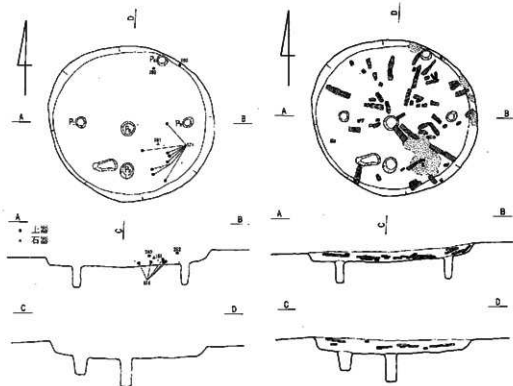
註2 土器製作が成形→調整・整形→文様施文という行程であれば、最終工程である文様施文までには時間を要し、当然土器内にある水分は蒸発し乾燥するのであろう。ここでは器面の乾燥の度合において、およその時期に施文したかを観察して用いた用語である。

註3 「多摩ニュータウン№269遺跡の調査」で安藤子氏が用いている粘着体炭灰と河原のものと思われる。また岡本壽氏は「大湊川遺跡」の報文中で「粘着体炭灰を駆逐せずにひきずったと思われるものがあり 種の炭灰をあらわしている」とあり結びつきのあるものとして注意されよう。本遺跡の土器には明らかに匠痕と引きずっている痕跡の二者が認められ、粘着体炭灰と考えて間違いないであろう。

## 2) 縄文時代中期初頭の住居址と遺物

### (1) 5号住居址 (挿図5、図9・21・42、図版4)

遺構 2号生の貼床部から木炭・遺物が検出され、下層に本社が存在することを確認したものである。従って本址上部は削られており、実際の深さは不明である。2.70×2.50 mのほぼ円形の竪穴住居址で、垂木材と思われる炭化材が生居址中心から放射状に全面に検出されたが、南東部は少ない(挿図5、図版4)。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>間を入口とすると軸はN51°Eである。残存壁高は東16 cm、西14 cm、南16 cm、北11 cm



挿図5 頭取遺跡5号住居址・炭化材出土状態測図

で、床面はロームであるが、やや軟弱で痕が入り凹凸がある。中央のP<sub>5</sub>(22×21、-57cm)は埋竈炉を抜いた痕跡とも考えられるが、焼土が認められず相当の深さを持っており、柱穴と考えることが妥当であろう。主柱穴はP<sub>1</sub>(17×16、-34cm)・P<sub>2</sub>(24×21、-29cm)・P<sub>3</sub>(8×15、-38cm)・P<sub>4</sub>(17×15、-26cm)の4個である。P<sub>2</sub>の西には35×16、-25cmの凹穴がある。

遺物 土器片と石器が10数点、炭化材の間から出土したのみである。火災にあった住居としては遺物が極めて少ない。深鉢底部(174)はP<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>間の床面に散乱し、深鉢片(289-294)は本址床面より浮き、上部の2号住居址床面までの覆土内出土である。いずれもRL縄文を地文とし、単沈線で文様を構成し、290には三角印刻文が付されているらしい。292は沈線によるY字状懸垂文を持つ型になる。石器では横刃型石器(191)が床より10cm程浮いて、彫刻器1点が覆土より出土している。

出土遺物からみて、本址は九兵衛尾根II式の盛期に属する。

(2) 10号住居址(挿図6、図9・21、図版5・21)

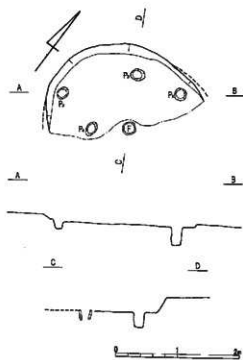
遺構 長尾根から下段平坦面への斜面下部に営まれた竪穴住居址である。この部分では黒土層が厚く堆積するため遺構の大部分は黒土中に存在し、グリット掘りの際埋竈炉の存在に気づいた時には、既に南東部を破壊してしまった。残存周壁から径2.60m程の円形を呈するプランと推定される。北側壁線は暗褐色土中で確認したが、P<sub>1</sub> - P<sub>5</sub>以北の床面はローム層に掘り込まれている。原初の状態を把握したのはこの部分のみで、壁高は北27cmである。残存部床面もやや軟弱で凹凸がある。ほぼ中央に位置したと思われる埋竈炉Fも浮いてしまい(図版5)、掘り方の確認はしていないが、内部には、炭化物を少量含む黒土が充満していた。柱穴はP<sub>1</sub>(20×19、-30cm)・P<sub>2</sub>(22×8、-24)・P<sub>3</sub>(20×17、-16cm)・P<sub>4</sub>(25×16、-20cm)が検出された。

遺物 床面からは磨製石斧片・打製石斧・凹石が出土し、該当グリット及び覆土からは土器片が相当量出土している。大部分が九兵衛尾根II式で、縄文中期中央の土器片も若干含まれる。九兵衛尾根II式土器では、本址に確実に伴出するのは、炉に使用された深鉢(175、図版21)と炉内に落ち込んでいた土器片(177・308・313)のみで、他の図示したものは該当グリット遺物である。なお、175は口径25.3cm、現高16.5cmである。口縁がキャリパー状になるもの(297)が7個体、口縁部が短く外反するもの(175・298-301)が8個体、口縁外反し放射状となるもの(302)が2個体ある。底部では直立成いは僅か張り出すもの(309-312)が5個体と多く、外傾するもの(313-315)は3個体である。295は暗赤褐色を呈し、大粒な長石・石英と金雲母を多量に含み結束RL縄文を地文とし、半隆起線で施文するが、平出第3類Aとの類似性を感じさせる。厚手で細半隆起線の296、平行沈線の307とともに九兵衛尾根I式の手法を残す。細い単沈線の314も若干先行する土器とみられる。浅鉢片3点のうち179-180は本址に伴う可能性が強いが、181は縄文中期中央であろう。

埋竈炉の土器からみて九兵衛尾根II式の盛期に属する。

(3) 11号住居址(挿図7、図9・22・41・45、図版6)

遺構 長尾根からの南向き斜面の中腹に位置するため、



挿図6 頭取沢遺跡10号住居址実測図

黒土層も比較的浅く、南部は耕作などにより攪乱を受け破壊されている。輪郭はローム上面と暗褐色土中で確認したが、径2.80 mの円形を呈する竪穴住居址で、 $P_2 - P_3$ を入口とする主軸は $N 10^\circ E$ である。北壁はロームで壁高43 cm、東西壁は漸移層中にある。残存する床面はロームの硬いたたきで、中央へ僅かに傾斜するが、北壁下と中央にある地床炉の肩部とでは16 cmのレベル差があり、本来の床面も南へ傾斜していたと思われる。床面の覆土中に大きなものは径5 cm、高さ30 cm程度の炭化材が散在しており、或は、火災にあってはいるかもしれない。地床炉F(55×40、-17 m)は床面に焼上が見られ、木炭を少量含む焼土粒混入黒土が落ち込んでいた。主柱穴は $P_1$ (28×22、-44 cm)・ $P_2$ (24×24、-39 cm)・ $P_3$ (29×28、-44 cm)・ $P_4$ (23×18、-37 cm)・ $P_5$ (20×18、-31 cm)の5個で、 $P_4$ ・ $P_5$ は近接しすぎており、遺物の落ち込む $P_5$ は建て替え後のもので4住構造であったと思われる。壁下には径7 cm内外、深さ5~10 cmの小ピットがほぼ等間隔に並び、壁柱穴と考える。

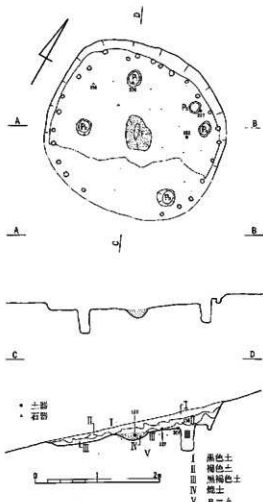
遺物 床・生活面出土遺物は僅少であるが、深鉢胴部(182)が $P_4$ 寄り、浅鉢片(327)が $P_5$ 基で出土している。覆土には踏沓式2片を含め約130片ある。

図2-316はRL補文を地文に斜沈線を持ち、317は平行沈線を施文し、若干、先行する。318-319は薄手で内

面に指圧痕を残し、長石・石英粒を含み、赤褐色を呈する東海系の土器である。九兵衛尾根II式では深鉢(182・320-326)があるが、縄文を地文に太い単沈線で文様を構成する盛期のものである。浅鉢(327)は遺構外出土と接合したもので、口唇には鏡刻目を付す。土製門板1点が覆土より出土している。

石器では打製石斧(156)が床面で、磨石(304)が床より浮いて出土している。

本址は九兵衛尾根II式の盛期に属する。

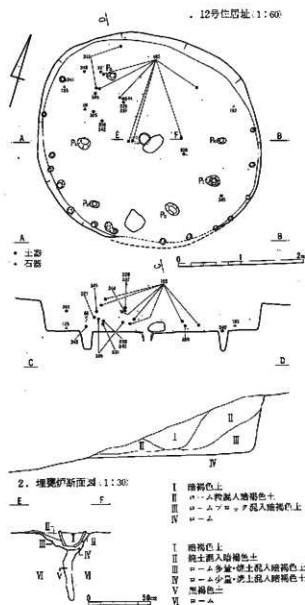


埴野7 頭版沢遺跡1号住居址実測図

#### (4) 12号住居址 (埴野8、図9・10・22・38・39・41・42、図版5・6・21・22)

遺構 長尾根からの南斜断面中に検出された住居で、一部が一次調査時用地境にかかるため、地主の了解を得て完掘した。検出面は北がローム直上、南が暗褐色土層中であるが、相当の傾斜があるため南部床及び壁は破壊されていた。3.75×3.35 mの楕円形を呈し、南壁寄り床直上の安山岩平石は入口部磨み石とみることができ、主軸を炉の中心方向へると $N 9^\circ W$ となる。壁は垂直に近く、壁高は北85 cmと高く、南が急速に低くなると考えられる。地形からみて南壁は30 cm程度であったと推察される。床面はロームの硬いたたきで平坦である。 $P_2 - P_3$ から北壁にかけては移動したローム上による10~15 cm程高いテラス部があったが特別な施設はない。このロームと床面の間からは打製石斧(図41-135)の出土をみた。中央には浅鉢(図9-184、図版21)を埋設した炉(図版5)があり、上に40×26 cm、厚さ13 cmの安山岩が密着し、恰も退去時に消火のために置いていったように思われた。炉に接する部分は煤が認められ、中央下部に根が入っている。主柱穴は $P_1$ (23×18、-33 cm)・ $P_2$ (25×16、-38 cm)・ $P_4$ (20×17、-30 cm)・ $P_5$ (14×11、-





挿図8 埋燗炉遺跡12号住居址実測図

(135)、横刃型石鏟(193)が出上している。

出土遺物から判断して、本址は九兵衛尾根Ⅱ式期に所属する。

(5) 14号住居址(挿図9、岡10・22・23・39・41・43・45・46、図版5・7・21)

遺構 長尾根南側肩部にあり、検出面はローム層であるが、南側は傾斜面下部にあたるため耕作で攪乱されている。プランは径3.15mの円形を呈し、 $P_4 \cdot P_8$ 間を入口とすると主軸は $N 67^\circ E$ である。残存する壁は斜上20cmと浅いため随所に攪乱が入り荒れており、北壁で51cmと高く、南側は破壊され不明である。ロームの床面は僅かに中央が低いが、根が入り荒れている。南側は黒土中に床面があったものと思われる。

ほぼ中央の北寄りに埋燗炉 $F_1$ があり、深鉢(図10-186、図版21)が埋設されていた(図版5)。その上部では炭化オニグルミ1点が出土し、炉周辺覆土中にも更に7点ある。主柱穴は $P_1(17 \times 14, -19 \text{ cm}) \cdot P_3(26 \times 19, -28 \text{ cm}) \cdot P_4(20 \times 17, -13 \text{ cm}) \cdot P_8(29 \times 22, \times 19 \text{ cm})$ の4個で、棟持柱と考えられる位置に $P_2(22 \times 21, -13 \text{ cm}) \cdot P_5(22 \times 18, -10 \text{ cm})$ があるが浅い。補助柱穴は $P_7(16 \times 10, -33 \text{ cm}) \cdot P_9(13 \times 12, -14 \text{ cm}) \cdot P_6(12 \times$

30 cm)の4個と思われ、特に奥壁寄りの2個は径が小さく、その中間には柱穴を検出できなかったが、壁が高かったため棟木を壁外からさしかけるだけで充分だったのかと推察される。補助柱穴の $P_9(16 \times 11, -15 \text{ cm})$ は入口施設のため設けられたと考える。奥壁寄りを除いて壁下には径7~13cm、深さ5~17cmの壁柱穴が検出されているが、土止めに最も必要とする奥壁部にはないことや、内部床面にも小ビットとなる落ち込みがあり、根による疑いもあり、断面観察が必要であった。

遺物  $P_8$ と $P_9$ の中間床面で炭化クルミが1点のみ出上し、生活面出土土器(図22-338・343)の他は覆土遺物である。半隆起線によるB字文を持つ土器(185、図版22)は斜面上方からの流入とみることがこの一部が、清水ノ上第3群第1類Bの胴部片と一緒に出土している。該当グリットの7片を含め41片あり、殆ど九兵衛尾根Ⅱ式とみられる。キャリバー状口縁(328~332)、短く外反する口縁(333~335)には緩やかな波状突起部内面に三角や状縦帯文を持つ。他に胴部片がある(336~345)。329の外面には煤が、342・549の内面には炭化物が付着している。炉体の浅鉢(184)は口径24.3cm、現高11cmである。

石器では覆土から石鏟2点(9・10)、握指状スクレーパー(68)、床面からは打製石斧

10、-19 cm)・P<sub>10</sub>(12×10、-13 cm)・P<sub>11</sub>(9×7、-17 cm)を検出している。壁下には径7-15 cm、深さ15 cm内外の壁柱穴がめぐるが、補助柱穴とも一部は根穴かもしれない(図版7)。

遺物 床或いは生活室からの出土土器は188・347・355・356・364・367・369である。これと上層遺物包含層との間には無遺物に近い間層を置き、沈線文系を主体とする九兵衛尾根Ⅱ式片や線が面をなして集中的に出土した。この間層があることは土層遺物が単に上方からの流れ込みでなく、廃絶後、期間において他の住居から投棄されたことを示すと思われる。189・190(図版21)は下層出土であるが、斜面下方に位置し床面と間層を置いている。近接する炉のレベルを考慮すると、若下の期間において廃棄されたものとみる方が妥当と思える。煙竈炉に使用された口径17.5 cm、現高18 cmの深鉢(186)と188、半隆起線を隆帯に沿って垂下させるもの(367)は九兵衛尾根Ⅰ式の手法を残す原沢式期のもので、列点文を付すもの(365)など床面遺物には九兵衛尾根Ⅰ式からの移行期であることを示すものが多い。346は縄文を付す隆帯に沿って沈線をはき、他は半隆起線で文様を構成する。347は口縁部に平行沈線文を、頸部には彫刺目を施す隆帯をめぐらし、胴部はRL縄文となる。東海系の土器が9片、5個体分(348-350)あるが、いずれも覆土上層から再流入した状況である。348は赤褐色・長石・石英を多量に含み、低い隆帯に爪形を密施し、それに直交する彫刺突と楔形文を加える。349は橙褐色を呈し、長石・石英粒を主にチャートの磨耗した砂粒を含む。350は無

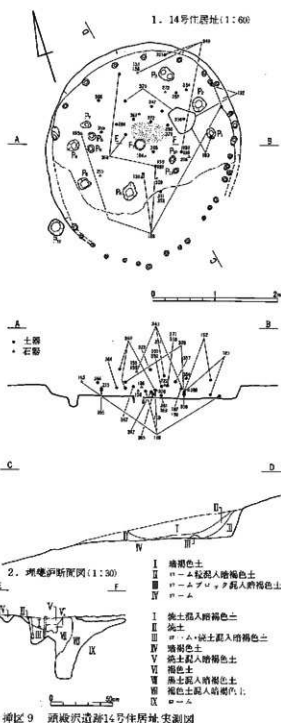
文頸部片、351-366・368-371はRL縄文を地文に太い単沈線を施し、369・370は無文となる深鉢である。372は口縁にRL縄文と竹管による押し沈線を持つ浅鉢である。なお、190は口径25 cm、器高27 cmである。

石器はすべて覆土内の出土である。スクレーパー1点(74)、彫刻器1点、ピエス・エスキュー1点、打製石斧4点(138・154・155・165)、横刃型石器5点(194・215・217・222・238)、磨石1点(289)、凹石2点(289・320)、その他磨痕を持つ磨(252・253)、復縁加工する石器(186)がある。

煙竈炉及び床面出土土器から、本址は九兵衛尾根Ⅱ式の初期の住居と判断する。

(6) 15号住居址(挿図10、図11・23・24・41、図版5・7・13・21)

遺構 長尾根南斜面下部に位置し、厚い黒土に覆われていたため、遺構の保存状況も良い部類に属する。



輪郭線の北部は漸移層中で確認したが、南部は黒土中で流失したためか壁線を把握できず、床面から範囲を推定するだけとなった。本址が土壌367を切る。プランは2.85×2.55mで、P<sub>2</sub>-P<sub>4</sub>を入口とすると主軸はNアEとなる。壁は北北西が49cmと高く、南では消滅しているが、本来は黒土中にある程度の高さであったと思われる。床は北壁下はローム層まで掘り込まれるが、大部分は褐色土層中にあり、南端は黒土である。北から南へ10cm傾斜し、全面に根が入り凹凸があり、やや軟弱な床である。中央やや南東寄りの埋藏炉F<sub>1</sub>は推定口径14cm、現高14cmの深鉢(図11-194、図版21)を埋設しているが、火種保存程度の用しかなさないとと思われる(図版5)。東側床面に45×25cmの範囲で厚さ5cmの焼土がみられ、炭化物が混入していた。主柱穴はP<sub>1</sub>(15×14、-55cm)・P<sub>2</sub>(23×21、-20cm)・P<sub>3</sub>(25×24、-27cm)・P<sub>4</sub>(24×20、-23cm)の4個で、P<sub>5</sub>(35×29、-53cm)は壁を切り込む貯蔵穴と調査者は考えているが、屋外のP<sub>7</sub>(31×21、-40cm)とともにロームにまで掘り込まれ対をなしており、柱穴の可能性があろう。P<sub>6</sub>は48cmと深く先遣が瓦礫に細まり、P<sub>8</sub>は褐色土面でとまり下部へは小ビットが延びるが、両者とも根穴を誤認した可能性が高い。壁柱穴も同様のものが多い。

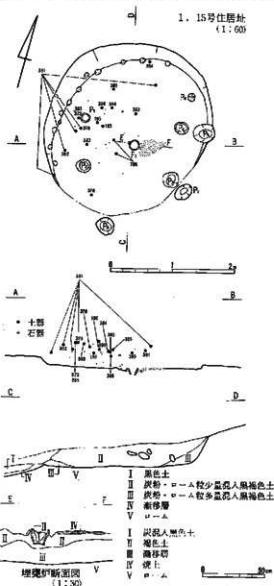
遺物 床面出土の土器は炉内に落ち込んでいた深鉢口縁片(377)の他に微小片が数点あるのみである。然し、この口縁は上面三角形の袋状をなすもので、口唇に連続爪形文を、その下部に太い単沈線をめぐらし、九兵衛尾根I式の手法を残すものである。これと炉体の深鉢が同時存在した可能性は極めて強い。194は区画隆部のみ縄文を施し、胴部は単沈線を垂下させるがY字状の懸垂文となっていない。太い単沈線で同文を持つものは総て上層にある事実に着目したい。194は九兵衛尾根II式の初期の所産と考えたい。図示した他の土器は床面との間に無遺物に近い間層を置いて上層より出土している(図版13)。東海系の土器群(373-376)がある。373・374は爪形隆帯に沿って半隆起線、三角印刻文を付し、RL縄文を地文とする。375・376は外反する口縁となり、口辺に爪形隆帯をめぐらし、下部は無文帯となる。378-394・396は縄文を地文に太い単沈線で文様を構成し、392・395はRLの軸束縄文を持つ。典型的な九兵衛尾根II式である。上製門板1点(78)がある。

石器では該当グリッドでビエス・エスキュー1点が出土しているのみである。

以上の所見から、本址は九兵衛尾根II式の初期に営まれたと考える。

(7) 遺構外出土土器(区12-16・29-35、図版21-23)

中期初頭土器は該期住居址の存在する範囲内に当然とはいえない。5号住居の位置する北西への斜面では、土壌139の東から1号住居周辺にかけて累次式段階のものから九兵衛尾根II式土器片が多出し、同址の調査



押図10 頭城沢遺跡15号住居址実測図

終了後に無遺物層まで削り下げたが遺構は確認できなかった。また、尾根頂部では4号住と土壌86・134の間に同様遺物の集中をみたため精査し、ロームマウンド状の土壌72・73等や堅穴1などが検出された。然し、後者は、最終的に風倒木による擾乱として欠番とされた。弧射山沢寄り下段テラス部でも、C区での出土は散発的である。以下、形式を追って遺物の概要を述べる。

龍塚Ⅱ式 (207・229・599) 御射山沢寄りの下段テラスで少量出土している。207・209は岡上復元した土器であるが、近接したグリットの出土である。599は橙褐色を呈し、RL縄文を地文とし半隆起線で渦文等を描いている。

九兵衛尾根Ⅰ・Ⅱ式 深鉢・浅鉢別に型式分類を試みている。施文技法により大分類し、更に、器形の判断できるものについてのみ小分類した。

深鉢A型 九兵衛尾根Ⅰ式系の半截竹管による半隆起線・平行沈線文を持つもので、地文に縄文を施すものと欠くものがある。574～578は半隆起線で区画した内部を平行沈線で寛切する斜格子文で埋めるもので、九兵衛尾根Ⅰ式の色彩が濃いが原沢式期の可能性が高い。579～581は前者の後出手法とみられ、単沈線で区画する。582～597はRL縄文を地文に平行沈線を多用し、586～588は同一個体とみられる。596・597は地文を欠く底部片である。598・600～610はRL縄文を地文に縦半隆起線と降帯で文様を構成する。612～617・619～621は竹管文を主にするもので、612は結節状沈線文、616は玉施と三叉文となるようである。618は大粒な石英粒を含み、暗赤褐色を呈し断面三角形の降帯を持つもので、後出の可能性もある。651は半隆起線帯に縦の爪形刺突を加えている。A1型 口縁がキャリパー状に内湾し胴部の張る器形となる。全面に縄文を施文し、口縁部には弧状降帯区画を持ち、胴部には頸部の横定する降帯から2対の降帯が半隆起線による懸垂文を垂下させる。209・210に代表されるが、212もほぼ同様の器形と予想される。A2型 口縁がほぼ直に外反し、胴はやや張りだす器形で、半隆起線による区画内を縦平行沈線や斜格子文で充填する。203は2種の半截竹管を用い、頸部の区画文の接点に背面押圧点を付す特色をもつ。211は胎土・色調等平出第3類Aに似ているが、交互刺突文・結節状沈線文を多用し(図版21)、622と同一個体となる可能性もある。A3型 円筒形の胴部から口縁が、ほぼ直に外反する器形となる。213は基本的なモチーフは九兵衛尾根Ⅱ式のものとなりながら、半截竹管による平行沈線により円文等を施文する。推定口径30cm強、器高32cmとなる。

B型 東海地方との関連の強い土器群で、爪形文を密施する降帯文を持ち、薄手で小形な深鉢が多い。

B1型 口縁部がくの字に内折する器形で、内面や外周肩部に縄文・半隆起線・模形文による施文帯を有するもの(205・635～637)は、暗赤褐色を呈し無文部は丁寧に荒磨きされる。爪形施文帯のみを付すもの(214・215)は、赤褐色を呈し調整も難である。B2型 円筒形に近い器形で、三角印刺文が多用されることが他の型との差である。217は口縁に蛇行する降帯を貼付し竹管背面による押圧を加え、218は口縁の突起部から蛇行する高い降帯を垂下させ、その側面に三角印刺文を施文し、長石・石英の角砂に加え硅質岩の丸砂を含んでいる。B3型 かぶと状の器形で、口縁が大きく外反し、球形に近い胴部となる。概して、橙褐色を呈する。口唇に爪形降帯文を横走させその下は無文となり、胴部は縄文を施文し、模形文・弧状沈線文による文様帯となる(221～223・631～644、図版21・22)。胎土は長石・石英を主とするが、221～223・644は他にチャート粒も含む。638・639は半隆起線、642は口縁の爪形降帯間にも縄文を施文している。B4型 219は口縁に特異な縦線文をもつ。降帯を貼付し上方から連続指圧後、下方から同様の底面をつけるもので平出第3類A等にもみられる手法とは差を感じる。183も同様である。

C1型 内湾する口縁部に単沈線による縦平行線を施文する。631は全面に、632は頸部降帯に縄文を持つ。227は暗赤褐色を呈し、長石・石英・金雲母を含み、五領ヶ台Ⅱ式の浅鉢の胎土・色調と共通する

もので、胴部はC 2と酷似する施文となる。C 2型 器形は不明であるが、623～625は平行沈線に沿う押圧列点文を、626～630・633は単沈線に沿って下方から刺突し、634は平行沈線に平行に施文する。C 3型 224・648～650は結節状爪形文・爪形隆帯間に単沈線文・三角印刻文を配するもので、224は口縁に具象的で複雑な加飾をする。648は波状口縁突起部が鬚斗状となり、15号住出土377と同一個体の可能性が高い。

D型 口縁や頸部に交互刺突文帯を付するもので、E～F型では部分的に施文するのに対し、232は全周するものと推定され、独立した型となることが他遺跡例から予想される。兼い単沈線である。

E型 単沈線等で文様を構成する九兵衛尾根II式の中核となる群で、胴部凹筒形となる例を1、胴上部で張り出すものを2とした。両者とも、施文する口縁部が内湾するが、平縁のものや波状を呈するものがある。E 1型 228・233に代表されるが、後者の頸部のV字状把手から隆帯を垂下させる手法は隆帯によるY字状懸垂文の先駆形態と思われる。652～667の内の多くは本型の口縁部となろう。E 2型 234は断面に種子痕を持つ。235は10号住の下方に接するグリット出土(図版22)で、236は尾根頂部で単独出土(図版13・22)し、口径31.5cm、現高33.0cmである。668～672は本型の口縁の可能性が高い。

F型 縄文を施文する短い口縁部が円筒形の胴につくものを1、胴が張り出すものを2とした。F 1型 238は推定口径21.6cm、器高27.2cmで口縁に顔面状把手を貼付する。この型は平縁が基調をなすが、673～694にみられるようなさまざまな把手を付し、変化をつけている。F 2型 237があげられるが、この型は個体数が非常に少ない。

G 1型 F 1型と同様の器形となるが、F 1型の口縁部文様が簡略化されたともみられる土器群である。231・695～707が該当し、704・705のように内面に沈線文を付すものも含めた。

H型 主として縄文が施文される群である。H 1型 220は口唇に連続爪形を付す。H 2型 722は円文と思われる隆帯が剥落しているが、縄文を施文に口縁に楔形文を全周させる。H 3型 遺構外では図示しなかったが、14号住出土の189に代表されるもので該当する破片がある。H 4型 230は裏形となり口唇に篋刻目を付すものである。

I型 無文か、僅かに隆帯文のみの深鉢である。各種の器形が予想されるが区分しない。赤褐色～暗赤褐色を呈し、外面を丁寧な彫形するものが多い。239～243・716～721が該当する。

浅鉢 A 1型 723～729 九兵衛尾根I式以来の系統を踏むもので、口縁内面肥厚部に幅広い連続爪形文を付すが、I式期では3～5条であるのに対し、1～2条と少なく、爪形文をくくで区切る手法や2条の連続爪形文間に付す三叉文から延びる単沈線が加えられるのが特徴でもある。また、724・725のように、波状突起部の溝文・凹文の中心に刺突や穿孔する頻度が高まる傾向もみられる。胎土は本遺跡例では、前段階の比して金雲母が減少し、殆んどが微量含むだけとなるが、この型の全般について言及することはできない。器形は波状傾向が強まり、A 2型とともに平面形は六角形に近い舟底形を呈するものが多いと推察される。729は押引が粗周隔となり角押文に類似してくるものは類例をみない。

A 2型 730～732 口縁内面の肥厚部に縄文を施文し、その上に連続爪形文、楔形文を加えるのを基本とするが、732は縄文のみである。胎土・色調・焼成はA 1とはほぼ同様の特徴をもつ。遺構外では3個体のみである。

B型 連続爪形文を口唇と口縁肩部にもつ群である。B 1型 244・733・734は金雲母を多量に含む暗赤褐色を呈す。244は4号住南側グリット、他は1号住周辺出土で、4個体分5片がある。B 2型 次のC型との中間型で連続爪形文とRL縄文を口縁に付し、ε字状隆帯文によって4単位に区画すると

考えられる。735は1条の単沈線、737は結節状沈線、245・736は単沈線による長楕円文を付し、いずれも長石・石英の他金雲母少量を含む。3個体分5片があるが1片がC又、他は1号住居周辺出土である。

C型 交互刺突文を口縁に施文する群である。C1型 くの字に内折する口縁に縄文も施文されるもので、247は下方からの刺突する手法で特異であるが、738～740・743が基本となる。7個体分の破片がある。C2型 口縁の立ち上がりが消滅し、肥厚帯に交互刺突文のみを施文する。暗赤褐色を呈し、長石・石英・金雲母を多量に含む。図示した741・742・744の3個体のみである。

D型 口縁部に沈線文を施文する。D1型 246・745～748のように口縁が内折し、その部分にRL縄文を地文とし沈線をひくの原則とするが、748は縄文を欠く。6個体分7片ある。D2型 749の他に2個体分があるが、口縁が低く稜を持ちRL縄文を付す。D3型 750の他に3個体分があるが、沈線を口唇の僅かな肥厚部に付すもので、胎土は縄文時代中期中葉に近づいている。

E型 D2・3型の口縁断面形で、フの字隆帯文を貼付する例で、248・249の他2個体分がある。

以上は九兵衛尾根式内の一時期帯でセット関係をなすと考えられる七器群であるが、明らかに客体的な移入器として船元Ⅱ式がある。645・647は尾根頂部東側で近接し、646は1号住北翼のグリットより出土しているが、このグリットでは九兵衛尾根Ⅱ式約10片以外に中期中葉土器片はみられない。645・646は幅広い爪形文と刺突文を持ち、口縁内面にも繊細なRL縄文を施文するが内面は無段である。647は揚子底となり同様の縄文を有する。いずれも、黒褐色～橙褐色を呈し、長石を主に、他にチャーットの磨耗した砂粒を少量含んでいる。移入された時期は確定できず、登沢式期の3・4号住に近接する出土地点で、同式期かとも思われる。

### 3) 縄文時代中期中葉の住居址と遺物

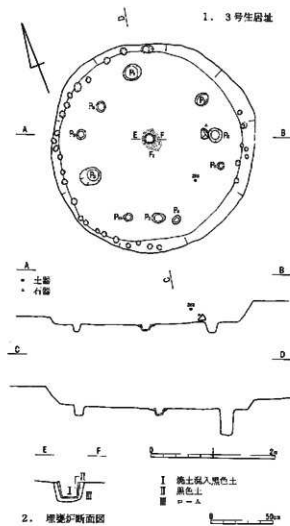
#### (1) 3号住居址(棟図11、図16・21、図版5-2・25)

遺構 須賀沢に沿ってのびている主長尾根から北へ突出する支尾根の分岐点頂部、西方への緩傾斜面に位置し、表土層は約20cm～30cmで耕土である。耕土を剥いだ第二層は暗褐色土で、炭粉が少量含む黒土の落ちこみを確認し輪郭は容易に把握できた。規模は3.35m×2.25mのはほぼ円形を呈し、土壌102を切っている。P<sub>4</sub>～P<sub>5</sub>を入口部と考えると主軸方向はN25°Wである。壁は良好で壁高は東36cm、西12cm、南26cm、北18cmである。壁沿いには入口部と北東部を除いて小ピットが並ぶ。径8cm～15cm、深さ10cm内外が多く、一部傾斜するものも含まれP<sub>1</sub>の北側のものは根跡の誤認かと思われる。床面はP<sub>4</sub>～P<sub>5</sub>にかけて硬いが、他はやや軟弱で北西方向へ8cmほど傾斜する。中央に埋燗炉F<sub>1</sub>が設けられ、周囲の床面が27×35cmの範囲で焼けていた。主柱穴はP<sub>1</sub>(30×25・-41cm)・P<sub>2</sub>(33×27・-60cm)・P<sub>3</sub>(22×15・-14cm)・P<sub>4</sub>(23×21・-16cm)と考えられる。P<sub>7</sub>(22×17・-28cm)は北へわずかに傾斜するが、主柱であった可能性もある。

補助柱穴は入口蓋葺と推定するP<sub>1</sub>(15×11・-12cm)・P<sub>2</sub>(12×11・-44cm)とP<sub>3</sub>(16×15・-7cm)・P<sub>4</sub>(15×15・-10cm)・P<sub>10</sub>(16×13・-7cm)がある。

遺物 極めて少ない。埋燗炉に使用された250は胎土が長石・石英・金雲母を含み中期初頭の胎土に近い。251も同様でしかも胴部に荒削り痕が顕著で底部には部分的ながら幅25mmほどの連続荒削り痕を残す整形技法から、ともに猪沢式とみてよいと思われる。本址の所属時期を判断する唯一のものである。なお覆土下層からはP<sub>6</sub>周辺で九兵衛尾根Ⅱ式鋼鉢小片285・288と上層でさきの登沢式鋼鉢小片284の1片をえたのみで、他に打製石斧片1点が出土している。

本址は猪沢式期の住居址である。



2. 埋燬炉断面図

挿図11 頭取沢遺跡3号住居址実測図

挿図11 頭取沢遺跡3号住居址実測図  
 ビットより深く平均して、位置的にも主柱穴ではないかと把握できる。P<sub>2</sub> (20×20・14cm)・P<sub>4</sub> (30×29・18cm)・P<sub>7</sub> (32×26・17cm)・P<sub>8</sub> (22×18・8cm)・P<sub>9</sub> (30×29・13cm)・P<sub>10</sub> (32×24・12cm)・P<sub>11</sub> (40×32・17cm)・P<sub>12</sub> (26×24・10cm)・P<sub>17</sub> (37×36・11cm)・P<sub>18</sub> (40×30・18cm)・P<sub>19</sub> (34×29・13cm)は大きさ深さともほぼ平均したビットであるが、補助柱穴と考えてよからうか。P<sub>20</sub> (44×30・32cm)はやや大形で袋状を呈し、底の広いもので貯蔵穴と考えてもよいと思える。P<sub>21</sub> (97×74・9cm)は楕円形の広いビットで、住居址とは別に構築された遺構ではないかと思われる。

遺物 土器252は住居址の床一面にバラバラになって散乱していたものを接合したものである。今回調査の出土土器中一番大形の深鉢土器である。253は埋燬の土器で底部を欠いているが胴上部は完全の形で検出された。254は埋燬炉の土器と混在した一片と床面及びグリットから検出された土器片と接合したもので橙褐色の明るい土器である。床面よりはるかに255の小形の深鉢土器片、257の浅鉢土器の口縁部片と別個体の底部片が出土し、覆土内の土器402、251、256を含めると合計70点余の多量にのぼる。石器は打製石斧(148)1点、横刃型石器(244、214)2点、磨石(277、283)2点、敲打器(248、283)2点、黒曜石片3点が出土している。

本址の埋燬炉の土器を初め床面から出土した土器の特徴は、細かい長石・石英・雲母等有色鉱物を多く混じえた胎土で、赤褐色の明るい焼きのものが多く、施文は横の楕円区画文と角押文の押引いた文様を中心で猪沢式のもので、本址の所属も該期として間違いないと思われる。なお、土壌との切合関係であるが、

(2) 4号住居址 (挿図12、図16・17・24・41・

43・44、図版26)

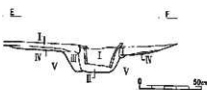
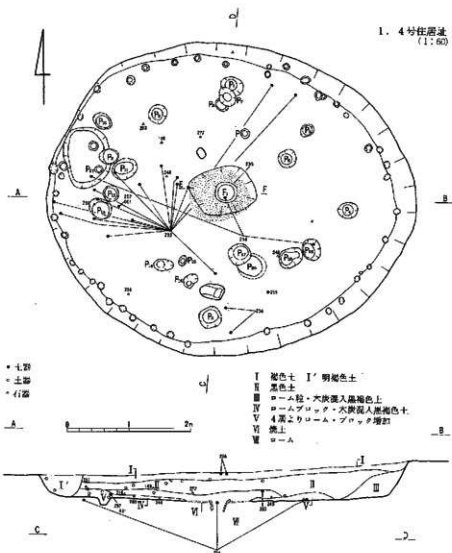
遺構 頭取沢に沿った主尾根頂部、農道の北側の台地上に位置する。本址はグリット掘りにより、ローム面まで掘り下げたところ住居址の存在に気づいたのである。表土を全面排除し、ローム面に暗褐色土による落ちこみを確認し、輪郭が容易に把握できた。東西5.9m 南北5mの規模を持ち、ほぼ円形を呈する大形の住居址である。土構182は本址に切られ土構189は本址を切っている。なお土構183は隣接している。入口部をP<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>の間と考えると主軸方向はN35°Wである。壁は明確で良好、壁高は東56cm、西10cm、南44cm、北28cmである。壁に沿って住居の壁を支えた留杭と思われる小穴が径約10cm、深さ10cmほどの大きさで等間隔で全周している。この小穴の掘り方はどれも内側に傾斜している。なお入口部と思われるところは小穴がみられない。炉は埋燬炉であるが、周囲は径約1.4mほどの楕円形状に焼土が広がっている。床面は入口部と思われる南東部がやや高く硬い。多くの炭化物が床面に散乱していた。住居址内にはビットが多く掘られ21を数える。この内P<sub>1</sub> (36×25・69cm)・P<sub>2</sub> (29×24・68cm)・P<sub>3</sub> (38×34・75cm)・P<sub>4</sub> (32×25・76cm)は他の

発掘調査の時点では不明の点があり、遺物整理の段階での検討が求められていた。幸い 182-189 の 2 土壘とも、完形あるいは完形に近い土器を所有し、しかも良好な出土状態を示しているため、容易に結論を導きだせることができた。土壘 182 の土器 (198) は九兵衛尾根 II 式で、明瞭に前後関係が理解でき、土壘 189 の土器 (263) は新道式の特徴である三角印文を混じえた施文があり、住居土出土土器より新しいタイプに入り、前後関係は明らかに土壘 189 が新しくなるといえるのである。

(3) 9号住居址  
(棟図 13、図 17・19・24・38・42・43、図版 25)

遺構 主尾根の南斜面の裾部に位置する。規模は 4.7×4.3 m のほぼ円形を呈する。入口部を P<sub>1</sub> -

P<sub>4</sub> と考えると、主軸方向は N 20° W である。壁はおおむね垂直で良好、壁高は東 42 cm、西 18 cm、南 6 cm、北 45 cm である。壁沿いに 20~30 cm の間隔で径 5 cm、深さ 10 cm ほどの円形の小孔が全周し、南側は住居地内部まで入りこんでいる。北側半周は壁直下に幅約 10 cm、深さ 10 cm~15 cm の溝溝が掘り巡らされている。床面は小石張りであり凹みがあり、南へやや傾斜して全体的に硬くしまっている。炉は中心より西寄りであり、縦 35 cm、横 30 cm 板状の安山岩で 4 枚方形に組み、石囲炉としている。柱穴と思われるピットは 8 個あり、P<sub>1</sub> (26×25・-49 cm)・P<sub>2</sub> (27×24・-61 cm)・P<sub>3</sub> (30×30・-59 cm)・P<sub>4</sub> (28×23・-55 cm)・

1. 4号住居址  
(1:60)

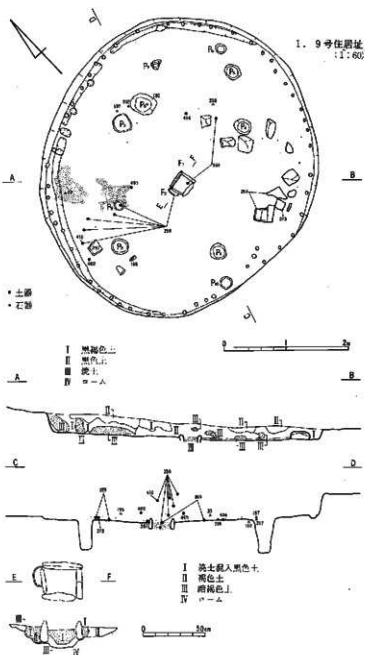
2. 埋蔵炉断面図 (1:30)

棟図 12 頭殿沢遺跡 4号住居址実測図



P<sub>9</sub> (28×23-48cm)・P<sub>8</sub> (39×31-54cm)・P<sub>10</sub> (19×19-46cm)である。他にピット2個P<sub>6</sub> (39×31-54cm)・P<sub>7</sub> (14×13-27cm)がある。さてこの住居址は石囲炉を精査したとき、現住居址とは別の遺構と思われる埋燗炉を発見し、住居の重複、炉の造替などの注意すべき点を知った。まず、炉であるが、埋燗炉の土器は猪沢式の典型的なもので、石囲炉を中心とした現住居址の土器と形式的に若干のずれがみられるのである。次に柱穴であるが、掘り出されたピットでは配置が雑然としていて数も多く、また、P<sub>9</sub>のごときは焼土に埋もれて明らかに古い時期に掘られたものと推測がつくので、新正の住居の建替えを考えてみた。P<sub>1</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>を主柱とした住居とP<sub>6</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>8</sub>を主柱とし拡張した現プランの住居である。この点は細密な検討と他の例を参考に考察されるべき問題であるが、今後の課題としておきたい。短期間において連続した同心円状の建替住居址の例はいくつかあるが、曾利遺跡の66・67号住居址の例は最近知られたものである。

遺物 258は本址石囲炉の下から発見された埋燗炉である。P<sub>9</sub>内や北西隅の焼土内から検出した破片と接合でき、復元した深鉢土器である。長石・雲母粒を多く混入し、指圧痕の鮮明な器面で、胴上部には楕円区画文、強い押しきによる角押文がみられ、猪沢式の典型的なものである。259・273は南東壁寄りの床面に喰いこむように密着し、押しつぶされた状態(図版13-2)で検出したもので、ともに長石・雲母その他の有色鉱物の粒子を多く含む。器形も深鉢である。楕円区画文・方形区画文をいく段か重ね、区画する隆帯に沿って角押文、巨大した口頸部には三角形区画文、区画内にはジグザグの刺突文などを特徴とする土器である。その他床面出土の土器片は、人粒の長石・石英粒を混入し黄褐色で内外よく横ナデした平出3類A(399-400)、金雲母の混入が目立ち、太い紐を指圧により蛇行させた隆帯に仕上げたものを貼付けた大破片(397)、口縁部に細い竹管により斜めの刺突文を帯べる浅鉢片などである。覆土内からは九兵衛尾根II式敷点があったが、他からの流入によるものであろう。石器は石鏃(33)、横刃型石器(192・195・197・207・239)5点を検出している。



2. 石囲炉・埋燗炉断面図 1:30

挿図13 須崎遺跡9号住居址実測図

旧住居は煙突炉の土器からみて、猪沢式期に構築され、時間差を置いて新道式期に新住居が掘り込まれたと考える。

(4) 遺構外出土土器 (図 18-20・35・36、図版 24-26)

猪沢式 破片のみで図上復元例も少数である。約 150 片が尾根頂部から東斜面下部まで散乱する。

- 1 類 光沢を有する器面に断面三角形の隆帯を貼付し、暗赤褐色～黒褐色を呈する深鉢である。767 は隆帯区画内に単沈線で文様を描く。図示しなかったが、大石遺跡 6 号住居出土土器 (同書区 118-17) に酷似し、口縁隆帯下に 1cm 強の半隆起線線をそれに直角に施文する大形深鉢がある。
- 2 類 黒 3mm 弱の細い角押文を施文するもので、光沢を有する。267 の他に 2 個体ある。
- 3 類 角押文以外に禾本科茎内直による斜格子や押し文を施文する。755 は口縁下の 2 条の角押文間に交互刺突文を、その下部と頸部に鋸歯状押し文を付する。778・779 は黒褐色で同一個体の口縁は前者と同文様である。ともに長石・輝石を含み、3～5 類は長石を主とする砂粒を多く含み、表面はザラつく。
- 4 類 角押文の区画内や条間に竹管刺突による凹文を充填する。隆帯は 5 類とともに断面かまぼこ状となる。761・762 は暗褐色、763 は橙褐色で口縁に U 字状隆帯文を付する。
- 5 類 多くは横凹区画内に角押文による施文をみるが、指圧痕を残すものもある。754・758-762・764・773 が該当し、末尾は幅 5mm と 3mm の角押文である。771 は本類の底部である。
- 6 類 浅鉢を一括した。a 種 268 は縄文中期初頭浅鉢 C I 型の後続型で交互刺突文が頰間隔となり、単沈線が部分的に角押文となる。交互刺突文の下部に更に 1 条角押文を横走させるものがある。b 種 角押文を口縁に 1 条横走させるが、同 D 3 の断面形となり口縁部に更に横文を付すものと、欠くもの各 1 点がある。c 種 内折する口縁部が幅広となり、横走する角押文に直交する押し文を施文する 257・405 の施文手法となるものだが遺構外にはない。d 種 269・772 のように鋸歯状文・凹文等を施文する。e 種 262・769 のモチーフは三角押し文に変化して新道式へ継承される。f 種 幅広の口縁と肩に紐線文を有し、体部の整形手法も猪沢式のものである。

新道式 272-275・277 は 9 号生南辺から 10 号生南グリットの径 10m 程の範囲で出土し、273 は底部が 9 号住居床面で出土している。これらの一部は阿址に由来する可能性もある。

- 1 類 楕円区画に沿って連続爪形文を巡らし、角押し文による鋸歯状文を横走させる。271 の他に数個体分ある。2 類 方形区画で 1 類と同様の施文をみるものは 274 のみである。3 類 楕円区画を残しながら、他の区画手法も取り入れ器具による施文をする。273 は口縁最大径 29.7cm、器高 25cm で口唇の一部に赤色塗彩され、外索には部分的に煤が付着する。275 は口径 23.6cm、器高 37.2cm で三角押し文の施文具先端を平らにそいだ筈での施文である。279 は口径 30cm、現径 18.5cm であるが、777 とともにモチーフは角押し文が三角押し文に変化しているだけで祭祀式的手法を残している。4 類 連続爪形文と三角押し文が共用されるもので、755 の他 8 個体以上の破片がある。5 類 三角押し文による文様で 278 は三角区画をもつ。6 類 6cm 程の短い粘土紐を全面に幾つも貼付するもので、768 は連続指圧痕が顕著に残されている。7 類 口縁に隆帯貼付文を付すだけの無文に近いもので、145・272 は磨沢～新道式期であろう。

以上、1～7 類は深鉢であるが類別しなかった小片 776 は連続爪形・角押し文による区画内を器具の押し点文で埋め、隆帯は一部剥落している。780 は二種の三角押し文による施文である。

- 8 類 有孔銅付土器で 770 の他 2 個体分片がある。9 類 浅鉢を一括する。276 は口縁に 2 条の三角押し文を横走させるもので新道式の基本となる型である。

10類 北陸系及びその影響下で成立した土器群である。781は橙褐色を呈し透明な石英粒・長石・金雲母を少量混入する焼成堅緻な深鉢で、内外面は丁寧に横ナデされる。口縁に2～3個組の山形突起が付されるものようで、その脇下部に屈折部が盛り上るL字状隆帯を付すが4個現存する。口縁には半截竹管を押圧し花卉状部を作り出した有扶蓮華文を配し、下部には器面に深くくい込む半隆起線、結節状沈線文を9条横走させ、頸部の狭い長方形無文部には周囲に同具先端の一方を器面に押し当てる方法で連続爪形文を施文する。胴部はRL縄文を地文として、半隆起線によるL字人組文・B字文を縦に割りつける複雑な文様構成で、半隆起線に囲まれる空白部は半円形三叉文となる。なお、口縁内面は竹管背面による沈線がめぐらされる。胎土等からみて移入土器である。尾根頂部の農道南側のBK～L47グリットから出土した。

783～787は黒褐色から暗赤褐色を呈し長石を主にする砂粒を多量に含み、新道式期の土着の深鉢である。783は前記と同手法の蓮華文ではあるが、竹管幅も狭く莖切沈線も長く類例も多い。784はRL縄文を施文後に相い隆帯を2本腰部に貼付し、浅く細い半隆起線区画文となる。785・786は深い半隆起線区画を、787は781の頸部にみられた文様帯を縦に有する。

藤内式 明らかに該式と認められるのは、楕円区画内を沈線で巡める788と屈折部の789のみである。

#### 4) 縄文時代後期の土器(区20・37、図版26)

縄文時代後期に該当する確実と思われる遺構の発見はなく、遺物も他の時期に比し少ない。土器は遺跡全体から断片的に小破片を採集したが、特に尾根頂上部の西、農道より北側にあたるグリット内に集中的に発見され、大半はこのものである。復元され器形のおかるものは4点あるが、他は破片で百余点である。土器以外は、後期の遺物と断定できにくいのでとりあげることではできなかった。

I群土器 破片のみで器形を知るものはないが、280は土壌248の覆土中より同一個体の破片がいくつか検出でき、土器の全貌が窺い知れる。細かい長石粉末を多く含み、器肌は荒い、色調は暗い赤褐色である。器形は口縁部と底部を欠くが、胴部はやや張り頸部はやや縮る。口縁部が内湾したキャリバー形の面影を残す深鉢が推定できる。文様は太い沈線で曲線縹文を主に描く。縄文帯と無文帯を分けている。803～814はこれと同様な施文構成を持つ土器である。801は縄文は施されないが同じ構図である。828は厚手で胴部に縦の細い半截竹管による沈線文を引いている。これらの土器は中期終末から後続するもので、大安寺式として知られる称名寺式に併行関係にある土器群である。

II群土器 この土器が破片の大半を占めている。281はCF54・55グリットより多く検出された土器片で図上復元したものである。細かい砂粒を混じり、明るい橙褐色で、器形は胴部が球形に近いまで張り、頸部は強くくびれ、くの字状を呈する。頸部に8の字貼付文を等間隔に付し、これを起点とした沈線の曲線縹図の文様を胴部に描く。この文様を持つものとして815があり、817～824はその胴部破片であろう。282は口縁が大きく開き、胴部径より大きくなる浅鉢形態を持つ土器である。口縁がくの字状に折れ曲り縁辺部に簡単な文様を描くいわゆる縁帯文がある。また、この土器の頸状隆帯文も特徴的であり、類例は、諏訪市千鳥頭社遺跡出土列がある。縁帯文を持つものとして、790・791・793・798・800などあげられる。799は小突起ある口縁部、829は胴底底、831は素文の把手である。これらはみな竈之内I式の特徴を示す土器である。

III群土器 283は精選された粘土に砂粒を混じり、薄手(4mm)で黒灰褐色をしている。器形は胴上部より口頸が開き、底部はやや張り出した朝顔形である。文様は縄文はなく、三角形をモチーフにした正・逆の構図を持ち、沈線で胴部を巡らしている。類例は岡谷市上向、諏訪市千鳥頭社にみられ、竈之内II式の典型的なものである。825は磨滑縄文手法を用い、827は鋭利な篦先きで、弧状の曲線を控えている。

## 5) 竪穴遺構

本遺跡において住居址の体裁を整えず、また土壌とは言い難い遺構が2基検出された。

## (1) 竪穴3 (挿図14左)

10号住より北東へ2m程離れた尾根状台地の裾部に位置する。東西1.80m、南北1.96mの規模で、ローム層に掘り込まれ、壁高は、東24cm・西17cm・南12cm・北42cmを測る。覆土は、小木炭片を混入した黒色土である。床面は、タタキ状で硬く締っている。深さ5cmと12cmのでピットが対照的にあるが、炉址、焼土はない。ピットを結んだ線は、最大傾斜線にはほぼ直交する。本址に類似した遺構としては、静岡県経ヶ谷遺跡で弥生時代の住居址として報告されているが、本址は、住居址とは言い難く、上層構造を有するものと思われる竪穴状遺構としておく。遺物は何ら出土していない。

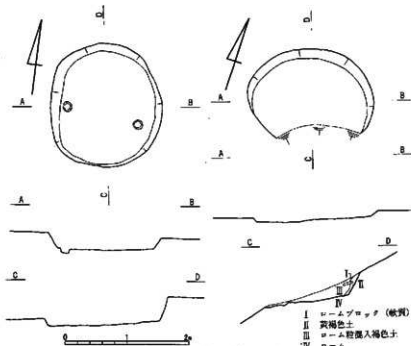
## (2) 竪穴4 (挿図14-右)

12号住より南へ5m程離れた斜面上に位置する。東西1.98m、斜面のため南壁は確認できなかった。覆土は2層である。1次堆積は、黄褐色土で壁ぎわにわずかに堆積し、次に、ローム粒が混入した褐色土が1層となり落ち込んでいる。柱穴、炉址は認められない。本址南下方に黒曜石が集中しており、本址と何らかの関係があるかとも思われる。出土遺物は、覆土中より表面に煤が付着した無文土器1片のみである。本址へ流れ込んだものと思われ、直接の関係は持たないであろう。

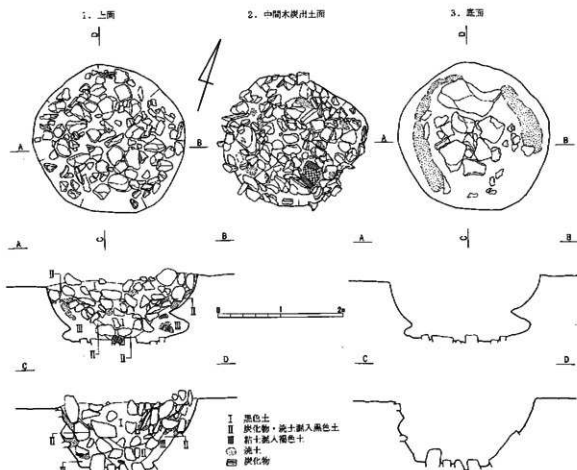
## 6) 築石と遺物

## (1) 築石1 (挿図15、図48、図版8)

須賀山沢寄りの下段の中央部、CM48グリットにあるが、本遺構は其中でも北北東から尾根状に走る微高地の先端部を認めている。排水の利を考えてのことであろう。上層の黒土25cm程を除去後、漸移層から落ち込む本址を確認した。1.28×1.22mの円形を呈する築石炉でローム層中に掘り込み、最深部まで53cmある。断面は基本的にほぼ円形をなすが、袋状となる部分があり地山の石が抜き取られた痕跡とも考えたが、その中に比較的大きな炭が入り込み即断できない。内部には人頭一傘人の礫がびっしり詰まり、その間隙に相当量の炭を含む黒土が入り、各所に焼上りがみられる。殆どの礫が焼けており、火熱のためひび割れたものも相当みられた。礫のあり方をみると、部分的に同一方向に並べられたかと思える箇所もあるが、全般に雑然としている。但し、下底面は大礫が敷き詰められており、その下部のローム層でも相当量の焼上り・炭がみられた。III層はローム・粘土を含み、部分的に焼けて硬くなったところもある。焼上りが各レベル



挿図14 須賀沢遺跡竪穴遺構3・4実測図(1:60)



神田15 須藤沢遺跡集石1 実測図 (1:30) 実測図 (1:60)

にみられることは、礫を投入しながら何回も火が焚かれたことを示していると思われる。

遺構内からは黒曜石チップ20片と砥石(375-376)を、南壁外でLR調文を斜位施文する深鉢片1点、検出面の礫上面で織機土器小片を得ているが、本遺構が茅山式期より古いことを示すとみられ、近接して出土している格子目押型文の立野式に属すると考える。

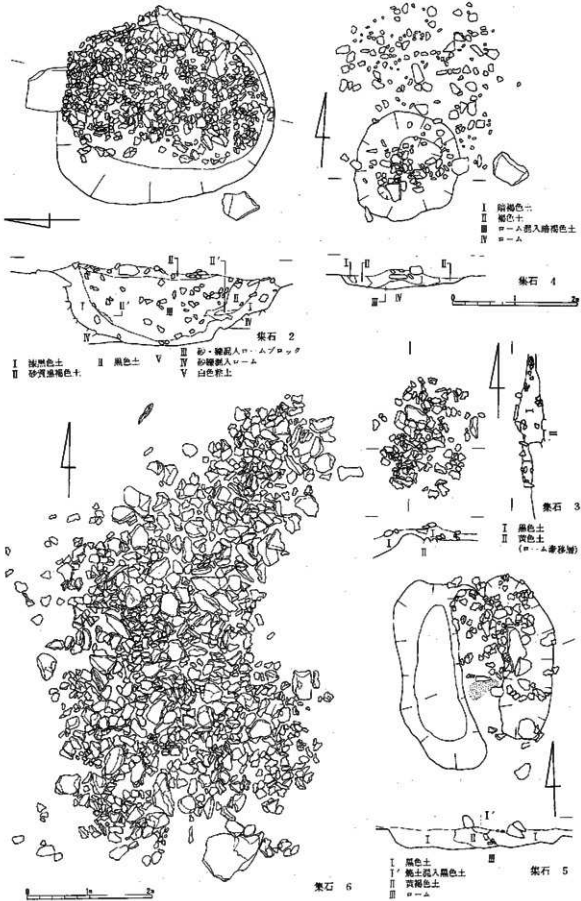
(2) 集石2 (神田16、図25)

C区下段平坦面の尾根よりCFグリット他に所在する。黒土層中に径10~20cmの礫が集中して発見され、集石として捉えたが、断面観察からはルームマウンドと同様の性格と考える。規模は3.45×3.10mで深さ1.20mとなる。本遺構周辺の基盤は礫を多量に含む二次堆積ルーム層で、マウンド部の礫混入ルームブロックは基盤ルーム層と同一である。マウンド部周囲から底部の一部を除き黒土が帯状に入り込んでいるが、特に西側の黒土帯は幅広である。掘り下げ後一定期間を置いて埋め戻され、右側の黒土は埋め戻し後に流入したものと考えられる。

本遺構黒土層中と周辺から田戸上層式片や九兵衛尾根II式土器片(414~416)、縄文時代中期中葉深鉢片(417)が出土しているが、時期を決定することはできない。集石2から土壌301にかけては田戸式土器片が比較的多い。

(3) 集石3 (神田16)

CF44グリットにあり尾根斜面下の自然礫群から僅かに離れて位置する。この礫群より上層の黒土層中に1.80×1.70mの範囲に礫が集中して認められた。ルーム層までは50cmあるが、礫下に掘込みは存在しない。風倒木により基盤の礫が持ち上げられたかと考えたが、礫間より田戸系糸痕文深鉢片、特殊磨石などの遺物が出土し、縄文早期末の遺構であるかも知れない。



神田16 頭城沢遺跡集石2・3・4・5・6 実測図(1:60)

(4) 集石4 (挿図16、図版10)

CH 41 グリットにあり、黒土層中に礫混入暗褐色土の高く盛り上がる部分が確認され、その下部から1.7×1.6mで深さ32cmの暗褐色土の落ち込みが認められた。断面観察では炭・焼土は認められず小規模なロームマウンドに似た様相を持ち、風倒木により基盤の礫層が持ち上げられた擾乱と思われる。上面で茅山式深鉢小片が出土している。時期は決定しがたい。

(5) 集石5 (挿図16、図18・25)

集石2に近接するCG46グリットにある。黒土層中に礫群が突出している部分があり、2号集石と同様に上面のロームが流され礫だけが残存したものかと思われた。然し、中央部に焼土があり、それを中心に礫が集まっていることが判明した。礫の下部は3.10×2.50mの凹穴となり、深さは33cmである。焼土東側の上部礫間には、九兵衛尾根II式土器片(418・419)、猪沢式浅鉢片(266)・深鉢片(番号不明)1、緑泥岩製片1、南壁外で特殊磨石片が出土した。礫が意識的に集められたかは不明であるが、本遺跡と無関係のものとすることもできない。

(6) 集石6 (挿図16)

CB47グリットを中心にあるが、黒土層中に礫群が10×4mの範囲で突出していた。西外縁部で早期山形文、上面で乳棒状石斧頭部片、中期初頭深鉢、浅鉢片各1を得ているが、断面観察では下部に掘り込みもなく人為的な可能性は少ない。北東から南東へ延びるが、ほぼ傾斜方向に沿っており、南側の自然流礫群より上層にあり、斜面にあった礫がなんらかの状況でこの位置へ集中していたことが考えられる。

(7) 集石7 (挿図17、図25)

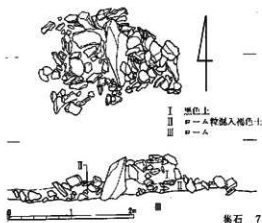
集石6の南に接している。2.2×1.5mの集石である。自然流礫群より30cm程盛り上がり、中央部の大石を中心に礫が集まる。礫間より九兵衛尾根II式深鉢片(420-426)を得ている。下部に掘り込みもなく、人為的なものでないという。

(8) 集石8 (挿図17、図版10)

CD 41 グリットにある。黒土中で黒褐色土に礫を多量に混入するマウンド状部を確認し、東側に広範囲に繊維土器片が散乱するところから集石伊等の可能性を考え調査した。下部には2.60×2.10mの浅いローム面の落ち込みがみられ暗褐色土が入り込み、東側の礫を欠く部分に1.35×0.6m 深さ25cmのビットがみられ炭粉混入黒土が充填していた。凹穴の底面も荒れており、上層の礫はビットを掘った際のものとも考えたが、礫量の方が多く不合理で風倒木根とした。

(9) 集石土壌394(集石伊) (挿図18、図29、図版12)

下段平根面の御射山沢寄り先端部にある。1.35×1.26



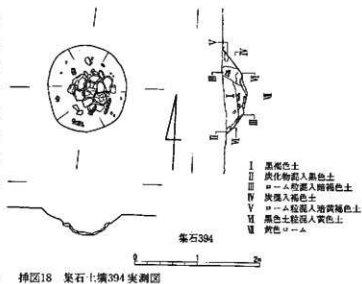
集石 7



集石 8

挿図17 頭取沢遺跡集石7・8 実測図(1:60)

mの円形を呈する炉灶遺構で、掘り方最深部まで42cmである。下層に木炭を多量に含む黒土が堆積し、底部には安山岩平石が整然と敷きつめられ、長さ25cm程の炭化材も認められた。敷石と地山のローム層との間には2~5cmのローム粒混入黒褐色土が入る。断面観察からは使用中止後短時間で自然埋没したとみられた。覆土内には礫径10~20cmが6個、10cm前後11個、5cm前後11個が検出されたが、殆ど、安山岩の平石が割石であり下層に多い。また1層中からは九兵衛尾根II式深鉢片4片(570~573)が出土している。縄文中期初頭九兵衛尾根II式期の屋外炉と考える。



挿図18 集石土溝394実測図

#### 7) 土溝・ロームマウンド状土溝(挿図9・20、図版9~12)

すでに刊行した『茅野市・原村その2』で、平安時代に関する土溝は報告してあるので、大部分にある縄文時代の関係分のみここに取上げる。

本遺跡のある地表は、縄文時代早期より中期・後期そしてさらに平安時代を経て、今日に至るまで断続的ではあるが人間活動の舞台とし生活が営まれ、多くの痕跡を残してきたことは報告書の示す通りである。だが、それにも増して自然の風水害やその他物理的な営力による地表面の侵食は相当激しかったことも想像される。このことは、調査時においても理解され気付け注意もしていたのであるが、発掘され出土する遺構は、それぞれ判別も困難で検討する余裕もなく、どうかという事実としてすべてを取上げざるを得ない状況であった。発掘記録や遺物の整理が進む中でこのことの検討が迫られ、自然的要因によりできたと思われる遺構は概略整理してきた。しかし、ロームマウンドについては、風倒木などの自然営力説、肥料穴説などいまだ結論をみない今日、蔽遺の上二・三の例にとどめ、今後の検討の素材として取上げておくことにした。

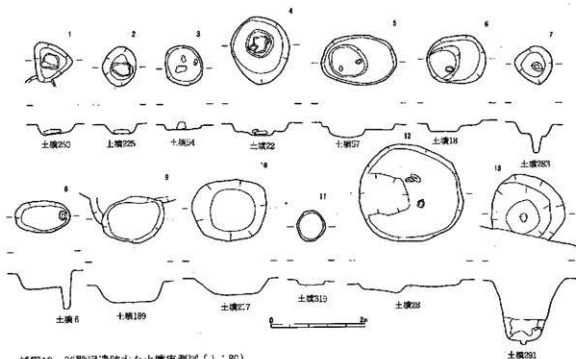
#### (1) 土 溝(挿図19)

土溝は表3に示す通りであるが、総数215基を数える。大きさからみると計測のできた206基のうち最大が、土溝140で長軸3.1m、短軸1.27mの楕円形の例から、最小は土溝260のような径35cmの円形のものがあるが、長径1.0m以内が73基で35.4%、2.0m以内が124基の60.2%、3.0m以内は8基の3.9%とここへくると急に落ち、3.0m以上の土溝は前記の最大のもの1基0.5%となってしまう。径50cm以下は一・二基しかないので60cmから2.0m以内にほとんど納めてしまう。

平面プランは、多分に複式的なものだが、A円形、B楕円形、C方形、D三角形、E不整形円形に分けられる。形態のつかめる216基のうち、円形48基の22.2%、楕円形148基68.5%と両者を合すると90%余となる。方形7基33%、三角形2基0.9%、不整形円形11基5.0%とあるが、これは偶然的なものか、後の変化であろう。平面プランは土溝の構築法や目的も多少窺える。土中を穿って必要な空間を求めた土溝は、たいした設計的なプランは要しなかったことであろう。

断面形態は壁が垂直におり、底部は平らで浅いたらい状のものが、145基67.1%で過半を占める。壁が斜めに下り底の深い摺鉢状のものはこれに次ぎ46基20.8%である。土溝18・22・57のごく底面の一部





挿図19 頭殿沢遺跡土壌実測図(1:80)

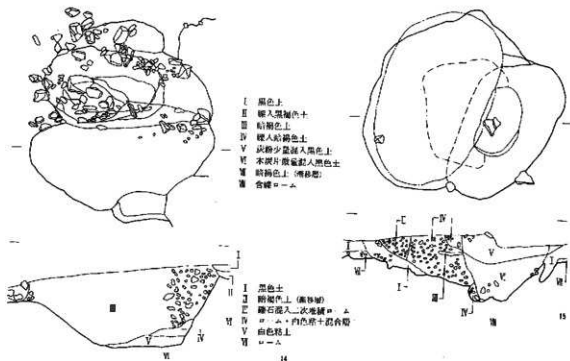
をさらに掘下げ二段底にしているものがある。また土壌6・283のごとく小さな深いピットを穿っているものもある。ともに10基で4.6%づつある。土壌内には樹木の根がはびこり、この痕跡のみられるものも多く、人工的な操作によりできた形態とは見分けの困難なものであったが、ここでは人工的な形態と考えられるものを選定した。

土壌9・69・244のごとく明らかに礫や石が流れこんだもの、あるいは礫層中に構築したとわかるものがあるが、土壌7・8・19・20・28のごとく上部に平らな石を覆土上にのせているもの、土壌5・22・40・54・225のごとく底部に据えられているような状態のものがある。このような土壌は墓塚として考えられる遺構として報告されている例がある。

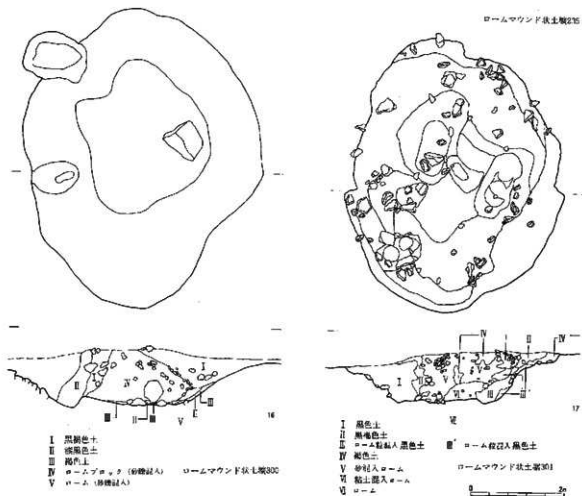
内部に炭・灰など多く検出する土壌は33基13.6%ある。土壌217では柴炭の炭化したものが検出された。これらの中には採集された栗・くるみなどの食糧の貯蔵穴もあろう。土器片を検出したものは、全体の42.8%、石器・土製品などが検出された例は15.2%あり、この中には土壌182・252・319のごとき完形ないし半完形の上器が出土したものがある。特に189のように土壌の床面に新道式にみられる角押文のある浅鉢が伏せた状態で検出されたもの、182や319のように丸兵衛尾根II式の土器が横倒しの状態で出土したのが注目されよう。人骨や骨片・骨粉の出土した遺構は一つもみあたらなかった。

各土壌の検討から墓塚的なもの、貯蔵穴的なもの、狩猟の落とし穴等々土壌の機能的な面までみたいのであるが、今のところ決定を下すものは、構造的にも出土する遺物からも裏付けられるものはない。強いていえば、大きな形態から墓塚的なものが大部分である。今後の検討を待ちたい。

土壌の構築された時期は出土土器により一定の推定はできる。推定できるのは100基で全体の41.2%にあたる。うち早期11%、中期初頭62.0%、中期中葉24.0%、後期2%である。これらの分布状態をみると、早期は早期土器片の集中的にみられるC区の窪地に集中し、中期はA区・B区にわたる尾根頂上部に密集してみられる。これは当時の集落のあり方と関連して考えられよう。この時期に関連した集石群も多く展開している。この間に早期の土壌が縫うように散在している。中期は遺構も遺物も頭殿沢遺跡において質量とも大半を占めている。土壌もこの時期のものは合せて86%になる。住居址をみると尾根を囲むよう集落を営んでいる。中期をさらに初頭と中葉に分けてみると初頭の住居址6基、中葉3基となる。土壌もこ



ローママウンド状土層228



挿図20 頭藏沢遺跡主なローママウンド状土層実測図(1:80)

れに関連した比率を示している。このような住居址と土壌との関連や土壌自体の使居目的等、詳細な検討は今後の研究課題としておきたい。

(2) ロームマウンド状土壌(構図20、図版9)

この種の遺構は全体で28基あり、このうち土壌235・300・301をあけてみたい。

土壌 235 遺跡の東南隅に当る一部礎群中にかかる位置にあり、規模は南北3.8m、東西2.3m、深さ1.0mに達する楕円形のロームマウンドである。東側は土壌状の遺構に切られている。上面はもり上りまわりの黒色土は底面約20cmの深さ、幅約30cmほどで暗褐色の土塊に披し、さらに四方からクサビ状にマウンドに向って斜めに入りこんでおり、完全にマウンド真下まで続かず、マウンド真下は黒土の塊となって切れぎれに挟みこまれている。マウンドは下層に砂質暗褐色土を包むように、鉄分の多い赤褐色土・粘質の褐色土が二重に覆い、上部に礫混入暗褐色土が重なっている。遺物はマウンド部にはなく、東側の土壌状落ちこみの覆土から炭粉が少量混じり、繊維を含む早期土器片が数片検出された。

土壌 300 遺跡の南側に当る下段のテラス上にあり、南北6.3m、東西5.5m、深さ1.15mの規模を持つ大形のロームマウンドである。マウンドをとりまく黒褐色土は幅約1.0mでマウンドに接するところは深さ約1.0mに達する。マウンドはわずかにすり上りをみせ、ローム塊中には小礫を多量に含んでいる。下部には褐色土や漆黒土が入りこんでいる。遺物は周溝部にあたる黒褐色土中に多く、早期・中期・後期に及ぶ土器片が混在していた。

土壌 301 C区の西寄りの傾斜地の付根中央部付近、礫の多い場所にある。規模は南北5.8m、東西4.5mで中心の深さ1.0mに達する楕円形の大形ロームマウンドである。上面はややもり上りまわりの黒色土は西側は厚く約80cm、まじりのない黒色土であり、東側は薄く(20cm-50cm)ローム粒や暗褐色土が混じった黒色土である。マウンドに向い斜めに入りこんでいるが、真下までは達せず真下は粘土質ロームである。マウンドの土塊は砂質でところどころ褐色の土塊も含まれている。塊内には四つの方径約50cm、深さ20cmほどの楕円形のピットが存在する。遺物は真下の黒色土から早期・中期初期・後期の土器片が数片検出された。

4 まとめ

1) 集落(構図1・4)

縄文時代早期では立野式から茅山式までの長期間にわたる遺物があり、本遺跡で断続的に生活が営まれたことを示している。立野式期に所属すると考えた集石(か)1は赤坂遺跡、網ヶ谷B遺跡にみられるものと類似し、押型文期の生活の中心が御射山沢寄りの下段テラス部にあったことを示している。茅山式期では土壌228・235の脇に掘り込まれた深いピットがあるが、遺物はSTA268+90を中心に用地内東側に集中する傾向をみせた。いずれにしても、早期には仮治地として利用されている。

縄文時代中期初期には九兵衛尾根II式期の6軒の住居が確認されているが、用地外に残存する可能性が強い。遺物から14・15号生は初期段階の原沢式期に営まれた最初の住居で5・10・11・12号生はII式の最盛期の住居と考えられる。いずれも、尾根斜面か樹部を選んでいるが、本遺跡の縄文中期中葉の住居が平坦部に立地するのと対照的である。近接する遺跡でも、この傾向は感じられる。原沢式期の遺物は4号住居側の取付道路付根部と1号住居辺に集中する傾向だが、14・15号住居から尾根をこえて廃棄されたとは考えにくい。近くに住居があるのであろうか。尾根頂部での遺物・土壌は多く、この空間が貯蔵穴等を設ける場として利用されている。また、屋外炉の性格をもつ土壌394は栢田第IV遺跡に2基の類例を見る。関東地方では既に幾つかの遺跡で同様遺構が確認されているが、県下では初めての発見例である。九兵衛尾根II

式でも盛期の可能性が強く、本遺跡の場合、4軒ある住居の中央、尾根頂部ではなく御村山沢寄りに位置していることから、祭典的造格より水の使用と結びついた行為、例えば、集落の共同作業による食料保存のための煮沸処理施設ということも考えられよう。

縄文時代中期中葉では落沢式期の3・4号・9号E住、新道式期の9号新住が存在するが、集落構造の解明は用地外の調査が行われた段階で始めて可能となる。今後に期待したい。

## 2) 土器

### (1) 縄文時代早期・前期 (区1-8、図版14-20)

燃糸文・縄文系土器：中部地方の本系土器群は、発見されても明確な遺構と伴出する例がなく、小破片であることから詳述されず従来あまり扱われてはこなかった。極沢・細久保等の押型文を出土する遺跡でも発見はされているが、確実に同時期のものかは不明である。本遺跡の遺物についてみると、1-3は外面に艶がみられ研かれている可能性があることや、節が大きい、条間隔があくこと等からも夏鳥式の特徴に類似する。縦方向に施文する燃糸文は、伊那市西春近細ヶ谷B遺跡、塩尻市ぬか塚遺跡、松本市岡田合戦場遺跡、岡谷市浅矢遺跡等があるが、これらには繊維が含まれていて当遺跡とは様相が異なる。一方、横方向に施文する燃糸文は伊那市西春近北丘B遺跡、同百駄刈遺跡、諏訪市千歳神社遺跡に同種のものがみられるが詳述されていないため、比較することができない。土器への繊維の混入は、当遺跡では横方向に施文する燃糸文(2種)からであるのに対し、他では縦方向の燃糸文からすでに始まっている。このような現象は中部地方特有なものかも知れないが、繊維土器が象徴的要素であるならば、本遺跡の燃糸文と他遺跡のそれとは、時間的な差として捉えることができよう。他方、縄文系土器は箱遺跡と比較する際に、分類上後出する土器と一括されて扱われているため、どの時期に属するかが不明で記述が曖昧なこともあり抽出できなかった。当遺跡の分布状態は散発的で法則性を見出せず、層位的にも十分把握できないので帰属する時期は不明だが、胎土がV群1類に類似するものがあることを記しておく。いずれにしろ今後十分検討されなければならない問題であろう。

押型文土器：III群土器が沢式、IV群土器が極沢式、V群土器が立野式に各々類似する特徴をもっているが、なかでもV群土器が比較的まとまって出土し、1類と4類の分布が異なる点に注意される。百駄刈遺跡では、格子目文と市松文が主体であり、当遺跡の分布が異なる点を時間の差とすれば、4類土器は百駄刈遺跡の格子目文と市松文の中間を埋めるものとして扱うことができよう。

沈線文系土器：VI群1類が田戸下層式、同2類が田戸上層式に類似する特徴をもっている。以下少し詳しく述べる。田戸下層式の型式学的特徴は、①口唇部が外ソギ状になる。②器面研削後沈線区画内に貝殻腹縁、竹管等を充填する。③太い沈線、細い沈線による平行沈線、幾何学文様を構成する。④天狗の鼻状の尖底部を有す等であり、1類土器93-95は口唇部が外ソギ状をなさないが大略田戸下層式の特徴と一致する。伴出土器の内容等が複雑だが、特に貝殻腹縁を施す系類は、下高井郡木島平村三枚原遺跡、小県郡真田町富沢畑遺跡、伊那市浜弓場遺跡、茅野市御座岩遺跡、塩尻市古山遺跡、松本市中山遺跡、更級郡大岡村鍋久保遺跡等があり、1類土器93-95は鍋久保遺跡2群2類に比定できる。2類土器は半截竹管状工具で平行沈線を引く手法で県内では類例がない。これらは夏鳥貝塚のIV式期、東方第13遺跡の3群2類土器と彫形手法や繊維の含有量の度合等が類似する。3類土器は繊維が混入するものとししないものがあり、田戸下層式から野鳥式のいずれかの型式と思われる。

貝殻腹縁文土器：VII・VIII群土器が含まれ、VII群土器は田戸上層式、VIII群土器が茅山上層式に類似する特徴をもっている。田戸上層式については、田戸遺跡、夏鳥貝塚等で層位的に把握され、少なくとも下層式との間に時間差があるものと認識できる。型式内容については、徐々に資料が蓄積されてきているが内

容はまだ明らかとは言えない。また併行期である常世式についても十分な内容を持っている訳ではない。田戸上層式の型式学的特徴は、①貝殻覆線文が発達する。②繊維が混入する。③文様一般の感じは鋭さに欠け、曲線的な沈線、隆線文が採用される等でVII群土器はこれらに類似する特徴をもつ。駒ヶ根市舟山遺跡の第IV類F、鍋久保遺跡の第2群I類に比定できる。VIII群土器は繊維の含有量が多くなり、条痕が発達することからも茅山上層式の特徴をもっている。また共存すると思われる拍烟式土器も出土しており、分布域もほぼ同一であることから、伊那市西春近山の根遺跡例に比定できると考えられる。

条痕文土器：条痕自体は、田戸上層式から発達する手法であり、型式分類の基準でもある。本遺跡でも田戸上層式に類似する土器群からは条痕が基本的につけられている。ここで対象とした条痕は前記したもの以外であり、Ⅹ・ⅩⅢ群土器の絡条体条痕とそれ以外の条痕である。特にⅩ・ⅩⅢ群土器についてみることにする。器形がおよそ判明できるのは136個体のみである。口唇部が内側にやや内傾し、砲弾形を呈する。ⅩⅢ群土器は、内外面に絡条体条痕を施し、口辺部に隆帯を貼りつけた後に、絡条体を押捺している。本遺跡では、田戸上層式以後の土器群が判然としないこと、器面調整を行う工具が絡条体であること等を総合すれば、田戸上層式以後茅山上層式以前のいずれかの時期のものと考えられる。同様のものは、茅野市樹畑遺跡の第4類Aにみられる。

無文土器：擦痕が顕著なものがあり、繊維が混入しているかは不明であるが、色調等から条痕文土器のいずれかに相当すると考えられるが、詳細は不明である。

羽状縄文土器：共存する他の土器はないと思われる。無繊維で内外面の調整は入念に行われていることや細い絨線が貼られていることなどから前期後葉と思われる。

以上土器の型式学的特徴を提示し、頭版沢遺跡の編年の位置付けを試みたが、十分な検討ができなかったものもある。中部地方弥生系土器の編年の確立と絡条体条痕あるいは凹痕がつけられている土器群の性格づけと、編年の位置については今後検討されなければならない問題であるとする。

## (2) 縄文時代中期初頭

各型式の特徴については、2) - (7)の項で概略を述べている。ここでは代表例を他遺跡と比較検討することによってその性格を把握したい。

A 1型 209は堂地狐窪遺跡、原沢遺跡に類例を求め得る。後者は弧状隆帯区画内に単沈線文が用いられ、より九兵衛尾根Ⅱ式へ接近した様相を持つが、半隆起線等の深部施文手法は共通する。船倉社遺跡にも破片で存在する。185は同遺跡土器No.5が単沈線でB字文を描出するのに対し、半隆起線であり、その先駆をなすと考える。同土器No.299が同一手法である。この原沢式期にはB字文や、186に施文されるU字文が相当の頻度で用いられる。この時期に北陸地方からの影響を受け、土着の土器にその手法を取り入れている証処であろう。

A 2型 187は栢田第IV遺跡土器156に近似する。203・211は類例をみないが、特に、後者は平出第3類Aの胎土に類似している。現在のところ、平出第3類Aの最古型は九兵衛尾根Ⅱ式の終末期である船倉社遺跡11号住出土土器No.38と考えるが、203の胴部区画内の新格子文が深切沈線に変化したものとみられる。後続する弥生式期には261の型となり安定する。従来、平出第3類Aの祖形を架久保式或いは九兵衛尾根Ⅰ式に求める考え方が種々発表されてきたが、時間的な重疊がありすぎ、間に別形式を挟むため無理がある。本型が九兵衛尾根Ⅱ式の盛期まで残存した確証はないが、前記の型に最も近い時期の資料として注目されよう。

A 3型 213は船倉社遺跡土器No.52に近似する。A 4型 186の類例は知らない。

B 1型 205の施文手法でこの器形となるものは類例を知らない。214～215は雑な整形で土着の土器が

もしれないが、北裏CⅠ式Ⅰ類に類似するが、B3型を模した可能性が高い。

B2型 202は大石遺跡18号住居遺跡<sup>94</sup>及び船靈社に類例をみる。B3型 216・221・223は清水ノ上貝塚3群第1類Aに胴部片が、Bに口縁部が分離されている。船靈社遺跡14号住居に伴出するが、原沢式期である。B4型 183・219は柏窪遺跡<sup>95</sup>に類例がある。

C1型 631~632は曾利遺跡14号土壙で原沢式と共存するものに類例がある。その胴部から類推すると、575~581がこれらの胴部であって良い。227は宮ノ原貝塚第7群b中の地文に縄文を付す土器19に近い。756は口縁に連続爪形・交互刺突文を付し、暗赤褐色で多量の金雲母を含み、前者に類例する。

C2型 623~630・633~634は清水ノ上貝塚第3群1類Aに該当し、住居址内出土が皆無であることから、原沢式期に伴出する型で、九兵衛尾根Ⅱ式の少なくとも最盛期には削減していると考えられる。

C3型 224は頸部に連続爪形文のある棒状把手を付すなど九兵衛尾根Ⅰ式の手法を強く残している。鳥頭状の口縁部把手は386や曾利遺跡34号住居址例の先駆とみられる。

以上の土器群は一部に沈線を施すものもあるが、多くは細いもので、九兵衛尾根Ⅰ式系の最終段階・原沢式期に位置づけられる。本遺跡での分布状況はA2・4、B4、C1型を除いて他の大部分は尾根頂部の長道北側に片寄り、A1・3、B1・3は1号住居周辺と4号住居西側に集中した。勿論、本格的な九兵衛尾根Ⅱ式も相当量出土しているため簡単に結論を出すことは危険であるが、他遺跡の状況も勘案すると原沢式期、少なくとも14・15号住居址の宋・生活面遺物の時期までに限定されるものと考えられる。東海地方との関連を持つB型の土器群は粘土からみると移入品であるが、個体比率でみるとA・C型に対し、相当高い。本遺跡に限られるかもしれないが、この期のセットの一部を構成し、船元Ⅱ式のような客体的存在とは異なる。

上記土器群は遺構外を含め全資者に近い形で図示した。実際には、下記の単沈線文系の九兵衛尾根Ⅱ式が90%以上を占める。口縁形でみるとF型が60%、D・E型などのキャリパー状口縁となるものが40%で胴部から直立する口縁となるものは206など数点にすぎない。底部は80%が屈折底乃至直立に近いもので占める。胴部文様は単沈線によるY字状態垂文の比重が高いようにみられた。

D型 232のように口縁か頸部に交互刺突文帯を持つものは、船靈社遺跡では胴部のY字状態垂文の未発達な初期の深鉢にみられ、同態垂文を持つ最盛期では部分的に施文される特徴がある。

E1型 182は原沢式の弧状隆帯区画手法を残し、177・199はそれが消滅している。ともに初期とみられるが、前者をa、後者をbとして細分する。196・228は本型の胴部であるが原沢式の色彩が濃い。

E2型 194は195・236より若干先行すると思われるため、それぞれa・bと細分するが、この器形となるものは船靈社遺跡にはない。大石遺跡にあり、口縁突起部や頸部に橋状把手をつける。

F1型 船靈社遺跡土器No55は初期とみられaに、175は隆帯によるY字状態垂文の三角区画が大きく、内部に文様を充填するものでbに、190は175とともに盛期と思われるcに、206は頸部に横凹区画の根形ともみられる横帯を持ち、胴部隆帯垂文も窪沢式への傾斜が始まっていると考えるためdに細分したい。

G1型 198は最盛期型で、口唇部や部分的な角押文を付す。H3型 189は大石遺跡に例をみる。

I型 尾根頂部西側の土壙331を中心とする径4mの範囲に225・240・241が集中し、他は尾根の南斜面に散在する。底部では10数個体存在する。九兵衛尾根Ⅱ式の終末期に出現する型であるが、この時期の生活が用地外に存在する可能性がある。240は船靈社遺跡土器232・373の退化型であろう。茅野和田遺跡西5号特殊遺構にも類例をみるが、相伴したとする有孔銅付土器は上で出土し後出であろう。

J型 751~753は繊細なRI。縄文を地文に角押文を多用する。751は429のように部分的に施文されたものの可能性も強い。然し、752~753は他の同一個体片でみると、F1型の器形で頸部に6条の細い角

押文を横走させ、胴部に懸垂する隆帯に沿っても同文を施文する。757は2条の同文を横走させC2型と同系の土器であるが、垂型として含めておく。I型とともに落沢への移行に手懸りとなる例である。

浅鉢 A1型 192・251は九兵衛尾根I式期の大石遺跡Ia型に類似するが、前記の特徴を持ち別されなければならない。10号住坪内より1片と192の一部が14号住床面出土で、同II式の初期まで存続していることは確実である。船靈社遺跡1号は原沢式期であるが、ここにもある。本型は原沢式期から九兵衛尾根II式の下げてまで使用されたものであろう。羽田第IV遺跡土器No.287は本型に属し、同遺跡G2類は大石遺跡Ia型と本型に分離される。また、中西充氏がG1・G2類は勝坂式の古い段階まで存続するとされるが、G1類に該当する浅鉢と阿玉台Ib深鉢が共存したとされる月見松59号住例は重複する61号住との切り合い関係が不明確であったもので、後者は61号住の遺物と誤認しているものと考えられる。59号住は九兵衛尾根I式の後半期であろう。勝坂期の住居で破片に入っているものは混入とみられ、船靈社ではG2類に該当する小片があるが、九兵衛尾根I式に伴った可能性が強い。

A2型 201は九兵衛尾根II式の初期に属する大石遺跡42号住に類例を見る。本例は深鉢A型の多かった地点での出土であり、11号住床面からも小片が出土している。船靈社遺跡にはないが、九兵衛尾根II式の前半にA1型と共存したと考えて良い。

B1型 244。B2型 197・245。197は船靈社遺跡1号住にあり、原沢式期である。瓜形文からいっても九兵衛尾根II式の初期までの型と考える。

C1型 179・200・247がある。179は10号住坪内より一部が出土し、C2・D型とともに盛期に中心がある型であろう。

D1型 184・246は船靈社遺跡土器71の退化したものである。

E型 180・248は船靈社遺跡にはない。

F型 181は端部を平らに整形するものであり、中期初頭の可能性もあるが落沢式浅鉢の769・772の断面形に近づいている。

以上、原沢式・九兵衛尾根II式の初期・盛期・終末期と分けて考えてきたが多分に予察的なもので、独断であろう。原沢式に伴う単線文系が木遺跡で分離されていないなど問題が残されている。今後、他遺跡の検討・資料の充実を待って解決して行かなければならないと思う。

### (3) 縄文時代中期中葉

落沢式 1類は大石遺跡6号住・18号住出土の浅鉢文を付す大形深鉢例以外に類例を知らない。2類は4号住の255も断面三角形の隆帯を持ち、阿玉台Ibに比定されよう。4類は藤ノ台遺跡、新木東台遺跡に類例が見られ阿玉台I式とされる。本遺跡では761が楕円区画となるが、264、762は落沢式に見られない文様構成である。然し、胎土・整形等5類と差はなく、それとセットをなすものと思われる。5類は4号住の主体をなす土器で252～254の3点がある。この土器組成に類似したセットを持つのは茅野和田遺跡西17号住で、272に類似する深鉢を伴う。9号住出土258にみる渦文は月見松63号住に類例を見る。典型的な落沢式とみて良いと思われる。6類とした浅鉢の穴a～e種は落沢式の各段階に伴うものであるが、c種は大石遺跡にも類例がない型で4号住床面の深鉢253・254とセットをなすことが確認されたことは好運であった。f種は同遺跡21号住に類例をみるが、新道式とともに上層で出土しており、幅広の口縁・楕縁文とも新道式浅鉢では後出段階のものにみられ、新道式まで降ることは確実である。

新道式 9号住床面出土の259は新道式でも特異な型で、口縁部第1文様帯は大石遺跡21号住出土図

179-4の区画手法に、胴部は同15号住出土器162-12などに類似し、同遺跡新道式深鉢I型と対比できる。然し、同型が連続爪形文と角押文を混用するに対し、本例は角押文のみで施文され、長胴となり独立した型とみられる。同址床面で出土した一部の273は、同IIa型に対比され、方形区画文を多用する274は同VIa型に該当し、いわゆる後田原式の代表例とされて来た型である。後田原式を構成する個々の土器については再検討されるべき時期にきているが、この後田原型は火石遺跡21号住下層で見られ新道式の前半であることは認めて良い。277は火石遺跡同VII C型、279は同II a'型に対比されよう。

10類中781は明らかに移入された土器で、上山田貝塚第III様式第3型式の特徴と完全に符号する。上山田古式ともされるもので、大石遺跡22号住床面で塔沢式から新道式への移行期の土器と同じ第III様式第4型式に比定される小形深鉢が伴出する。また、月見松遺跡65号住でも同第4型式が塔沢式の新しい段階と共存している。本遺跡において伴出関係を確定することは出来ないが、浅鉢263はこの移行期の好資料で角形の器形も塔沢式からこの時期に盛行するものである。この浅鉢の時期の可能性が強い。

従って、塔沢式期の終末から新道式への移行期に中信地方は北陸からの相当強い影響を受け入れ、塔沢式にはない半隆起線による施文手法を模倣し、新道式期の土器セットで相当の比重をしめる783-787の型として土着させていったものと考えられる。新道式が北陸へ濃厚な影響を与えていることが指摘されているが、その逆の流れも強く存在し、上山田貝塚第III様式の各型式の発展に忠じ、中信地方のこの型の土器群も変化して行くと思われる。

#### (4) 縄文時代後期

後期の遺構は確認されなかったように、ここから発見される土器の量も少なく、変化も乏しい。遺跡における土器のあり方は全く短期間小人数の存在しか考えられない。八ヶ岳西麓の縄文時代は、今まで調査され研究された結果、中期に爆発的に繁栄し、質量とも豊富に足跡を残した各遺跡とも、中期が終るとほとんど姿を消し、晩期に至るとほんのわずかの痕跡をとどめるに過ぎないことは定量化している。頭藏沢遺跡についても明瞭にこのことを示している。土器は中期終末から継続した中に生まれた後期最初頭から前半にわたるもので後期中葉には全く姿を消している。一般に後期の土器は精製・粗製の区分、器種の分岐などあげられるが、ここでは量が少ないこともあり、深鉢土器以外他の器種は認めにくい。また、精製・粗製土器の区別もしがたく、ただ非常に胎土が密となり、丁寧な調整が施された土器(790・794・798・802)が現われていることは事実である。型式の上でも後期土器は地域性があまり認められず、関東の編年型式に含まれてしまうことも通例であるが、ここでも他地域との関係が考えられるような特徴的な資料には恵まれていない。

注1 高野康彦氏「上田県志原坂遺跡における押型土器と遺構」『長野県考古学全集』16 1973

2 今村吾典・丸山敏一郎他「赤坂遺跡」『長野県中央遺跡報告—伊那市古墳近』長野県教委 1973

3 『野田遺跡群』八丁了西資料刊行会 1979

4 戸沢光則「縄文押型土器群」『石器時代』2 1965

5 松沢宗生「細久保遺跡の押型土器」『石器時代』4 1967

6 この用語は、比定できるという意味では使用していない。あくまでも型式学的特徴が疑いで使用している。以下この用語は、これに従い用いている。

7 今村吾典・宮沢恒之他「細ヶ谷B遺跡」『長野県中央遺跡報告—伊那市古墳近』長野県教委 1973

8 藤沢宗平他「西か塚遺跡」『東京学芸大学松本市・塩尻市誌』第二巻歴史上 1973



- 9 藤沢宗平他「真田合戦跡」『東筑摩郡・松本市・篠・筑市誌』第二巻歴史上 1973
- 10 樋口丹一他「浅川遺跡」『長野県中央道報告-岡谷市その4』長野県教委 1980
- 11 今村善興・藤木孝雄他「丸丘B遺跡」『長野県中央道報告-伊那市春近』長野県教委 1973
- 12 今村善興・宮沢徳之他「百草町遺跡」『長野県中央道報告-伊那市西春近』長野県教委 1973
- 13 今村善興・小林正春他「下鏡坂遺跡」『長野県中央道報告-諏訪その3』長野県教委 1975
- 14 広瀬昭広「三枚原遺跡」水島平村教委 1977
- 15 森嶋健・川上元他「富沢遺跡」『菅平の古代文化』菅平研究会書冊5 1970
- 16 友野良一他「沼野遺跡」伊那市教委 1973
- 17 宮坂英次・坂根虎夫「藤科」実古考古博物館研究報告書巻5 1966
- 18 藤沢宗平他「古山遺跡」以下注8に同じ
- 19 藤沢宗平「中山遺跡」以下注8に同じ
- 20 森嶋健・笠沢浩「鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24号 1976
- 21 杉原延介・宮沢長介「神奈川県足尾における縄文文化知識の具象」『明治人文学部研究報告書-考古学』第二冊 1957
- 22 伊藤壽「東方第13遺跡」『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』田原西市埋蔵文化財調査委員会 1971
- 23 赤原直忠「須賀野市田戸弥史時代遺跡調査」『史前学雑誌』7-6 1935
- 24 中村孝三郎・小井保「笠谷河原」『長野県博物館研究調査報告』第6冊 1964
- 25 林茂樹「舟山遺跡緊急発掘調査報告書」駒ヶ根市教委 1971
- 26 今村善興・藤木孝雄他「山の根遺跡」『長野県中央道報告-伊那市西春近』長野県教委 1973
- 27 三戸式段階から築成は使用されているが築成途である。築成自体は原則として、合戦津→当面築成の必然性→築成の発見という相関関係において成り立つもので、田戸下層式併行の三戸式や、田戸式に影響された三戸式では、築成が用いられる手法は後出的であるといえる。
- 28 宮坂英次他「細畑遺跡」茅野市教委 1971
- 29 今村善興・伴信夫「常地気岩遺跡」『長野県中央道報告-箕輪町地区』長野県教委 1974
- 30 戸沢光則「栗沢遺跡」『岡谷市史-歴史編上巻』岡谷市教委 1973
- 31 青沼博之・島田哲男他「船置社遺跡」『長野県中央道報告-岡谷市その4』長野県教委 1980
- 32 注8に同じ
- 33 増子謙真「岐阜県八百津町東森遺跡発掘調査報告」八百津町教委 1980
- 34 伴信夫・上屋精他「大谷遺跡」『長野県中央道報告-茅野市・原村その2』長野県教委 1976
- 35 杉崎幸他「津水ノ上貝塚」愛知県南知多町教委 1976
- 36 『静岡県文化財調査報告書』第16集 静岡県教委 1977
- 37 武藤雄六他「台形-第3・4・5次発掘調査報告書」富士見町教委 1978
- 38 宮坂英次他「茅野和田遺跡」茅野市教委 1960
- 39 注3に同じ
- 40 宮沢慎之・遠藤麻呂他「月見松遺跡」『長野県中央道報告-伊那市西春近』長野県教委 1973
- 41 西村正樹「千葉県小瓦町阿古貝塚」『学術研究』19 早稲田大学教育学部 1970
- 42 川口正幸・桐生直彦「町田南郷の合戦跡の調査」『考古学ジャーナル』163 1979
- 43 上守秀明他「新木宮古遺跡」我泉市教委 1979
- 44 注38に同じ
- 45 注40に同じ
- 46 高塚勝春・平口哲夫「上山川貝塚」石川県考古学研究会 1969

引用・参考文献

安孫子昭二「平尾遺跡発掘調査報告1」南多摩郡平尾遺跡調査会 1971  
 大野政雄・佐藤運夫「岐阜県沢田遺跡調査年報」『考古学雑誌』53-2 1967

- 岡本勇・戸沢克則『縄文文化の発展と地域性』『日本の考古学』II 1955  
 岡本勇『泰山貝塚』『横須賀市博物館研究報告』1 1957  
 岡本勇『三浦市大洞止遺跡』『横須賀市博物館研究報告』4 1960  
 岡本勇『三浦市鳩ヶ島台遺跡』『横須賀市博物館研究報告』5 1961  
 岡本勇『横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(一)』『横須賀市博物館研究報告』6 1962  
 森嶋徳・宮澤新治他『縄文』千曲川水系古代文化研究所 1980  
 原川昌幸他『藤の台遺跡II』藤の台遺跡調査会 1980  
 松島道一『辰野集立野遺跡の遺型文と器』『石器時代』4 1957

## 3) 石器 (図38~48, 図版28~30)

本遺跡からは、総数1,271点の石器が出土した。若干の後期の土器片を出土しているが、早期から中期の遺構・遺物が多く、出土石器もほぼこの時期に属するものと思われる。ここでは、その機能や形態・石質等を考慮し、便宜的に大形石器と小形石器とに分けて検討・考察することにした。器種毎の遺構及び遺構外出土状況は表1にまとめてある。

表1 遺構別出土石器一覧表

遺構	住 居														その他		計
	3	4	5	9	10	11	12	14	15	土壇	集石	グリット					
石				1			2			6		48	57				
石										1		10	11				
スクレイパー							1			1		10	12				
彫刻器			1	1				2		3		27	34				
使用痕ある石等	4	3	12		4	5	19	2	76			406	531				
打製石斧	1	1				1		5	14			160	182				
磨製石斧		2	1	6		1	1		4			158	173				
石匙												3	3				
敲打器			2							1		1	4				
磨製石斧												1	1				
時器		2								2		27	29				
石						1		1		2		48	54				
石								1		3		53	57				
石										1		12	13				
乳鉢												18	19				
磨製石斧												2	2				
局部磨製石斧												2	2				
砥石										2		3	5				
その他の石器									2	2		11	15				
資料館のみの資料		2		10			1	4	3	12		26	58				
合計	1	13	5	31	0	6	11	29	16	128	2	1026	1262				

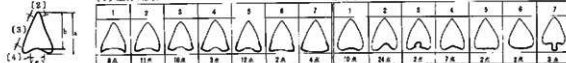
定形器、破砕品に限りなく、1点として載せた。また遺物出土層は遺構別調査からのものではなく、遺構外調査から遺構部7点のもの一括しているため、遺構によるグリット遺物数と遺構内遺物として載っている。

- (1) 小形石器(挿図21~26, 図38~40, 図版28)  
 定形石器125点、不定形石器531点、剥片・石核・原石(使用痕の観察できないもの)906点が出土している。これらの石質は、チャート1点・緑色変岩1点の他は総て黒曜石である。以下、器種別に検討・考察し概説する。  
 ① 石鏃(1~47) 57点(遺構出土3点)出土した。殆どが透明度の高い、良質の黒曜石製である。形態を「1」全体「2」基部「3」裾辺「4」逆刺「5」袂りの各形状で分類した(挿図21)

## (1) 全体の形状



## (4) 逆刺の形状



不整形による形状の不同-O 欠損による形状の不同-Z

挿図21 石鏃形態分類図

- ② 石匙(59~60) 2点出土している。59は、石質がチャートで刃部を2ヵ所所持つ縦型石匙である。

積み部は、丁寧な調整による浅い切りを有し、刃部は共に両刃の直刃である。基部は全体に軽いねじれを生じているが、これは素材そのものがねじれていたものであろう。60は、主として使用したであろう刃部と整形時の剥離面を利用した従的刃部との2カ所に刃部を持つ楕型石匙である。積み部は、調整剥離による切りを有し、刃部は共に両刃で、主とした刃部は軽く外湾し、従とした刃部は直刃である。石質の関係から、積み部・刃部共に剥離は大きかなものとなっている。

- ③ 石錐 (48+58) 11点(完形品7点・破損品4点・内2点は先端のみ)が出土している。積み部を持つものと、両端が調整加工されたものとの2形態がある。積み部の断面形状は三角形を成し、両端が調整加工されたものも積み部と成り得る部位は、同様に断面三角形形状である。

錐にとって最も着目すべき錐部を中心に、その製作状況や断面形状等により下記のように分類できる。

- 製作・全周縁を両面より調整加工 48・49・52・58
- ・1側縁あるいは2側縁を両面より調整加工 53~55・57
  - ・2側縁を片面より調整加工 56
- 形状・長さ・最先端のみ調整加工 49
- ・二等辺三角形形状に調整加工 48・52・53・57
  - ・基部と錐部の境に加工あり内湾する 54・55・58
- 断面形・円形もしくは楕円形 48・51~59・57・58
- ・方形もしくは扁平形 49・50・56

56は、錐部の作りにおいて興味深い。2側縁を片面より調整加工しているが、その加工は、挿図22上に示すごとくモーメント方向となっている。これは、明らかに回転を意識したものと見えよう。

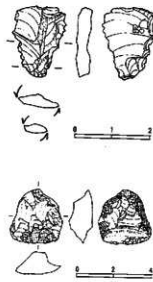
- ④ スクレイパー類(61-70) 石器の一边あるいは円周部に調整剥離を施し、刃部を作り出しているものをまとめて扱い、さらに調整剥離の状態等により、便宜的にサイドスクレイパー・挿指状エンドスクレイパー・スクレイパーと分類した。以下、その特徴等を概説する。

- A サイドスクレイパー(61-64) 5点出土。石匙の1側面に直刃を持つナイフ状のものを指す。総て破損品であるが、1端部を有するものは3点ある。62は、両刃の直刃で、広い調整剥離を施した端部を持つ。断面形状は、三角形を成し使用するのに持ち易い。63は、片刃の直刃で、刃部は広い剝離が施され、端部は彫刻器等によくみられる細い丁寧な調整が施されている。61・64は、雑な調整剥離が施されており、あるいは石槍の一部かもしれない。

- B 挿指状エンドスクレイパー(68-69) 2点出土している。石器側縁の全周に調整剥離を施し刃部とした挿指状のものを指す。68は、大剥離により形作られている。表面は、平坦にするため調整剥離が施されているが、余りにも雑であり未製品かもしれない。69は、丁寧な調整剥離を施した片刃であるが、表面はプラットホームを平坦にする調整が施されている。

- C スクレイパー(65-67-70) ここで扱うものは、その形態に特徴的なものがないため単にスクレイパーとした。5点出土している。総て片面加工の刃部を有している。70は、裏面に丁寧な調整が施されているが、表面は雑な大剥離となっている。丁寧な調整が施されると挿指状スクレイパーとなろうか。また、挿図22(下)のように刃部のあり方に興味を覚える。一般的に、ここに挙げたものは整形が丁寧な形作られていないが、刃部は丁寧であるといえる。

- ⑤ 彫刻器(79-92) 34点出土している。両端あるいは片端に彫刻器状の調整剥離が施されたものを



挿図22  
A W36出土石錐(B)・B A49  
出土スクレイパー(C)裏面図

指す。各々の形態や剥離の状況により、管根型彫刻器、壺管根型彫刻器、ピエス・エスキュー、コア型彫刻器、片端彫刻器、彫刻器と分類した。以下、分類ごとにその特徴を概述する。

- A 管根型彫刻器 (79-81) 4点出土している。柱状の石器の両端に細長い剥離を持っている。
- B 壺管根型彫刻器 (82-84) 6点出土している。管根型彫刻器に類似したものであるが、管根型彫刻器ほど丁寧に作られていない。82はシマ状の夾雑面があり、83は調整を施していない端には夾雑物が入り込んでおり、84は細長い剥離と成らずにつぶれ状となっている。
- C ピエス・エスキュー (85-88) 11点出土している。扁平状の両端に細長い剥離を持っている。
- D コア型彫刻器 (89-91) 6点出土している。ピエス・エスキューが扁平状を呈しているのに対し塊状を成す石器である。
- E 片端彫刻器 片端のみに刃部を有するものが2点出土している。観察の結果、刃部の状況は両端に刃部を有する彫刻器と何ら変わるものでないとし、この項で扱うことにした。
- F 彫刻器 (92) A-Eの分類に属さない彫刻器が5点出土している。刃部は丁寧に調整剥離が施されている。
- ⑥ 使用痕ある切片・石核・原石 (図93-132) 本遺跡から出土した黒曜石1,437点余のうち531点 (37%) に使用痕が認められた。このうち切片を利用したもの342点 (64%)、石核を利用したもの151点 (28%)、原石を利用したもの38点 (8%) である。

本稿においては、本遺跡出土の全黒曜石を検討し、使用痕あるものの性格を明らかにすべく若干の考察を行うことにする。

- A 素材について 使用痕あるものをその素材の状態において分類すると次の通りである。

切片  $F_A$ ・チップ状 (93-97)、 $F_B$ ・自然面を有するもの (98-105)、 $F_C$ ・所謂「切片」(106-108)

石核  $C_A$ ・自然面を有し、何ら調整を施さないもの (120-121)

$C_B$ ・調整が施されているが、使用箇所とは関係を持たないもの (122)

$C_C$ ・所謂「石核」

使用痕あるものの素材は、チップ状のものや自然面をそのまま使用していること等から、特に選択しての使用とはいいいくい面がある。夾雑物についても、層を成して混入している等多量の夾雑物を含むものは別にしても、使用痕あるものとなしものとの両者に差違は認め得るものではない。

- B 使用痕付着部位について 石器の形態等を考慮した時に、わずかではあるが、右手或いは左手による使用と考えられるものなど、使用方法が窺い得るものがある。しかし、出土した大部分は、明確に使用方法が窺い知れないものであり、それらにおいては、使用痕が石器のどの部位に付着しているかについて検討することにした。

使用痕付着縁辺を右に置いた

- (1)上側辺に付くもの(a)
- (2)下側辺に付くもの(b)
- (3)真中に付くもの( $\gamma$ )

とし(挿図23)、一つの石器で

2-3箇所あるものは、その組み合わせとし分類した。表2で



挿図23 使用痕付着部位指図

表2 使用痕付着部位分類表

使用痕付着部位	石核数	切片数	合計
i 縁でaの位置につくもの	48	99	147
ii 縁でbの位置につくもの	33	84	117
iii 縁で $\gamma$ の位置につくもの	32	100	132
iv aとbの位置につくもの	9	23	32
v aと $\gamma$ の位置につくもの	3	9	12
vi bと $\gamma$ の位置につくもの	4	10	14
vii aとbと $\gamma$ の位置につくもの	1	5	6

は、上側辺と下側辺に付く率はほぼ等しいことがわかる。

- C 刃部の剥離状況について 挿図24は、切片・石核における、刃こぼれ・刃つぶれ・つぶれの長さを最小計測値0.5mmとし計測したものの分布図である。この分布状況により刃こぼれにおいては、1単

位2.5mm前後となる。刃つぶれ・つぶれは、個数も少なく明確なラインは出てこない。また、刃部の剥離を観察した結果、剥離の大きさや剥離順序・使用痕の状況等について次の事柄に気づいた。

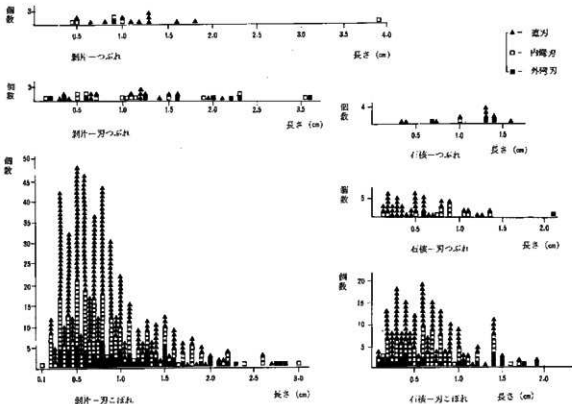
(i) 剥離の大きさ・順序について 剥離の順序がわかる遺物は皆無といえるが、その中でもあえていうと何片かが認識し得た。それによると、次の3分類ができる。

イ) 剥離痕の大きさが一定で剥離順序に規則性が認められるもの……片36・311・核49 etc

ロ) 剥離痕の大きさは一定であるが順序には規則性がないもの……片111・191・201・核21・108

ハ) 剥離痕の大きさが一定でなく順序にも規則性がないもの……片53・299・320、核40・177

剥離の大きさが一定であるか否かは、使用時の対象物と使用方法に関係する事かと思われる。



押図24 小形石器の片こぼれ・刃つぶれ・つぶれの1単位の長さの分布図

(ii) 剥離痕の状況 剥離痕の状況を観察すると特記すべきものとして次の2つがある。

イ) 尖突状を有する石器にドール状の使用痕が見られる。土城49より出土した核179は、断面三角形の錐状の尖突端を有し2側面に使用痕が付いている。この使用痕には、回転により付着したと思われる線状痕もあり、ドリルの使用が行われたものと思われる。

ロ) 核8は自然面を有しネガティブな主要剥離面を持つクズ状のものであるが、その1側面に「彫刻器」的な使用痕が見える。同様に核77は、層状に夾雑物が入り、端部は細長い剥離の「彫刻器」的な使用痕が見える。端部以外は何らの調整も施されていない。

D 使用痕あるものとなしものにおける様々な比較 押図25は、本遺跡における不定形黒曜石の水平分布の状況を示した図である。これによると、遺構内及び遺構近隣に集中して出土し、使用痕のあるものとなしものの分布状況に差違は認められない。また、押図26は、剥片と石核を形状及び縁辺の角度で分類し、長さとはとの相関関係を示した図であるが、使用痕のないものの分布は、あるもの分

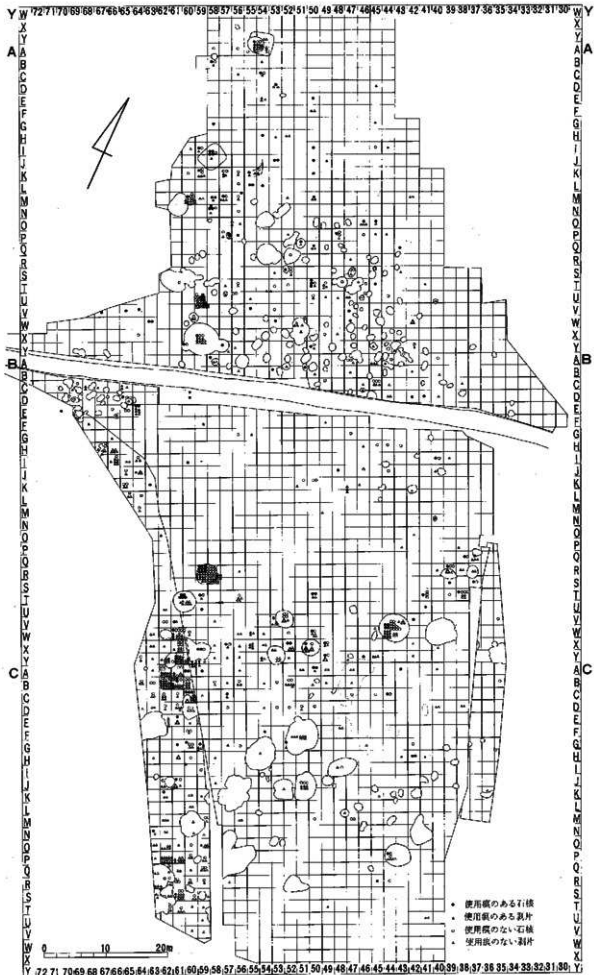
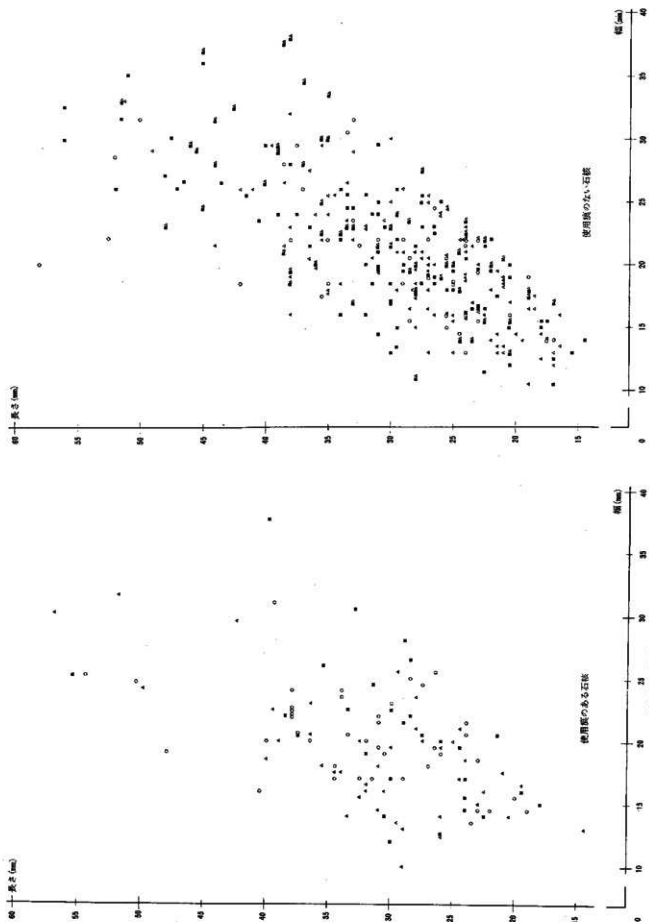
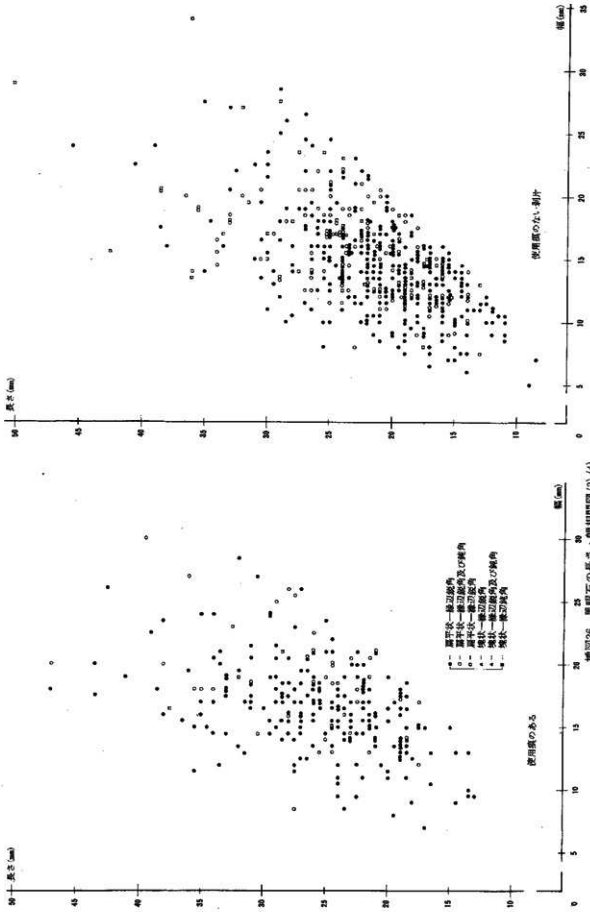


図25 黒環石出土分布図



挿図26 黒曜石の長さ・幅相関図(1)(2)





布を一回り大きくしたものととなり、ここにおいても明確な差違を認めることはできなかった。

当調査団では、使用痕ある石器については、十二ノ后遺跡より注目しており、「平順な縁辺を持つ良質の素材であれば十分」であり「作業自体も不特定」のもの、「特定作業のために使用されたもの」ではなく「各作業のために任意の石材を使用したもの」と、明確な結論付けをさせてきた。これは、今後十分な検討を要するものとの配慮からである。本稿においても同様ではあるが、ほんのわずかではあるが、用途や使用方法を暗示する痕跡を持つものが出土していた点と、遺跡内での水平分布と形状分布においては、使用痕あるものとないものとに差違が認められなかった点などを指摘しておきたい。今後さらに、細い点までも検討・考察することが大切であろう。

(2) 大形石器 (挿図27-29、図41-48、図版29・30)

総数615点が出土した。所謂定形石器585点、その他の石器15点である。以下、各器種毎に分類し、観察した内容を概述する。

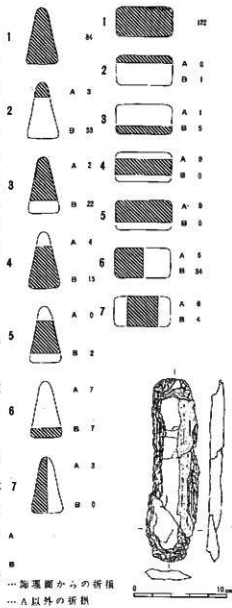
- ① 打製石斧 (133-172) 182点が出土した。完形品84、破損品98点である。形態別にみると、I-短冊型97点、II-撥型9点、III-分鋸型1点で短冊型が圧倒的に多い。他方、刃部形態についてみると、A-直刃12点、AB-直刃と円刃の中間型19点、B-円刃30点、C-斜刃36点、D-ペン先状5点、E-直線的な斜刃2点となる。また、特にI・IIの偏縁部形態を見れば、頭部幅に対し刃部幅が長くなる「ハ」の字状のもの、頭部を頂点に刃部が最大幅をもつ直線状のもの、頭部幅と刃部幅がほぼ同じく平行で直線のもの、胴部に最大幅をもち胴張型のもの、同じで内湾するもの等がある。

使用痕については、縁状痕があるものは2点 (139・161) のみで、他は総て磨耗痕である。使用痕のつく部位は、側縁部ではつぶし加工が行われている部分以下に認められ、基部面ではつぶし加工と平行する位置か、それ以下に集中して観察される。また、断面では片側に長くつく傾角がある。このような現象は、つぶし加工が着柄時の緊張のためにつけられるものと仮定すれば、使用方法によるものか着柄法の差違によって起るものと思われる。

破損品の折損状況を模式化したものが挿図27である。石器自体が持つ節理面と、それ以外で折損しているものを見分け、数量を出した。これらから、頭部のみ残存するものが多いことが窺える。

接合された石器は10例である。このうち一ヶ所で折損しているもの8例、二ヶ所は2例である。挿図27はその一例で、58メートル離れた場所から出土し、石斧の長さは19.7cmと当遺跡最大である。刃部に近い第一次折損部は、断面右から左へ力が加って折損している。第一次折損部の裏面に一部加工を施して再使用し、最終段階に第二次折損部で破損したものである。

- ② 横刃型石器 (188-247) 総数173点が出土した。完形品122点、破損品51点である。刃部



形態をみると、A-内刃 37点、B-直刃 82点、C-内湾刃 10点となる。背部の形態は、I-直線的なもの 61点、II-丸身を呈するもの 32点、III-三角形のもの 34点、IV-内湾するもの 10点である。使用痕は打製石斧と同様の痕跡がみられる。磨耗痕のつきかたも、刃部の一部分のもの(188・189・237)、全体につくもの(190・213)、割縁部から刃部までのもの(219・220)がある。痕状痕は、刃部に平行する 228、刃部に直行するもの(190・242)のほか、200のように砥石状に平滑な磨耗もみられる。このように使用痕のつき方が一定でないことは、使用方法が多様であったことを意味している。製作については大きく二種類あり、第一次剥離面を残し、縁辺部に粗雑な調整加工するもの(208~212)と、背部、割縁部を人急に調整剥離するもの(213・215・216)に分けられる。背つぶし加工を行っているものは僅か2例にすぎない。

破損品の折損状況を示したものが挿図 27 である。打製石斧同様、節理面とそれ以外で折損しているものを見分け、数量を出した。完形品が最も多く、次いで半損品が多い。打製石斧とは明らかに異った使用方法による結果であると思われる。

- ③ 横型石匙(184) 砂岩性の石材を利用している。大きなつまみを持ち、側縁を両面から剥ぎとり、両刃を作り出している。磨滅や風化作用が進み全体を知ることはできないが、ほぼ完形品であると思われる。
- ④ 敲打器(248~251) いずれも転石を利用している。敲打が両側縁部から両端に集中して行われているもの(248~250)と、一部分に敲打が集中し、周辺が剥離されるもの(251)とがあり、使用方法が異った結果であろう。
- ⑤ 特殊磨石(254~269) 合計 29 点の出土である。完形品 7 点、破損品 22 点である。形態は円柱状をなし、断面三角形か不整形形を呈する。所謂「機能磨面」を有し、他の面とは縁を持って分たれ区別される。機能磨面は形状に左右されるのか、磨面の幅が一方のみ広いもの(254・256・260)、ほぼ均一なもの(255・259・269)、比較的小規模な直のもの(261)などがある。磨面の面数も1面~12点、2面~1点、3面~2点があり一面のものも多く、また、敲打痕を持つもの(254~258)があり、いずれも円柱状の軸身部分の先端に限り認められる。
- ⑥ 礫核石器(185) 1点のみの出土。節理面で半損するが残存状態はよく、割が少し張った三角形と思われる。刃部の調整は片側に多く剥離を施し、裏面は部分的に行われるのみで片刃を呈す。
- ⑦ 磨石(270~312) 54点の出土である。完形品 30点、破損品 24点である。凹部や敲打調整をもつものがあるが、転用の先後関係が石質等により不明確なため、磨面を有するもの総てを磨石として一括することにした。磨面は素材のある一面にみられ、ほぼ平滑面を有するものと直面を有するもの二種類に分類でき、後者は更に二ヶ所に磨面あるもの(270・277)、二ヶ所のもの(284・286~289)、凹をもつもの(290~311)、凹と敲打調整を有するもの(304・305・307・309~311)、敲打調整のみのもの(312)に分類できる。
- ⑧ 凹石(313~350) 磨石に比べ、不定形の石を多用する。形態別にみると、平面円形で断面右輪形の 344、平面及び断面が不整形のもの(319・340~343)、平面及び断面が不定形のもの(332・333・335~339)がある。凹の形状は、深い凹縁状のもの(335・343)、浅い凹のもの(316・320~322)があり一定しない。凹の個数も、小さな凹が多数のもの、単一のもの、二つかそれ以上のもの、連結して溝状になるものも多様で、更に凹面の面数も、一面、二面、三面と各種があり、規則性を見出すことができない。
- ⑨ 石皿(351~358) 13点出土。351を除き総て破損品である。皿部の形状についてみると、「口」状のもの(351)と「口」状のもの(352~358)に二分できる。352は土壌 28・BA 60、BO 60 より

の出土で接合したもので、皿部には赤色顔料が塗られている。354の裏面には、凹石にみられるような敲打による凹が4ヶ所にある。このような破損は、石皿自体が皿部と凹部を使用の対象とするだけならば、擦り減ることはあっても破損はしないと考えられる。機能的な面以外の利用法があったものと理解した方が合理的である。

- ⑩ 乳棒状磨製石斧(359-368) 19点の出土で、完形2点、破損品17点である。365を除き他は、つぶし加工・研磨調整の製作途中段階である。形態は刃部から基部にかけて直線的なもの(359・360・363)と片側に反るもの(361)とがある。断面形は凹形と偏平のものに分けることができ、刃部形態も凹刃と偏刃とに各2分できる。折損状態は、斜めと直線的に折れる二者があり、ある程度強度の力を加えない限り起らない状態で、刃部のみの調整で使用された可能性がある。折損部を再加工し、形態と機能を保ちようとしているものや、砥石として再利用しているもの(368)がある。
- ⑪ 小形磨製石斧(369-370) 2点のみの出土である。いずれも頭部(基端)を欠損している。刃部形態は「弱凸強凸刃」で、右側基部は整形剥離面が残存している。370は頭部が細くなる形態で、刃部は「両凸刃」である。側基部は整形剥離・つぶし加工が残存している。
- ⑫ 局部磨製石斧(371) 371は剥片を利用し、片面を入念に整形剥離を施し、図版30-(6)は打製石斧と同様の整形調整剥離を行っている。371より入念に磨いている。
- ⑬ 砥石(372-376) 5点の出土である。有溝の372・線状度の373、磨面のもの(374-376)と多様である。372は表裏面に三条ずつ溝をもち、片側のみ一条深くなっている。373は、対応する面の二ヶ所に同様の線状痕がある。374-376は自然礫の平滑な面を利用して、磨面はいずれも一面のみでかなり使用している。
- ⑭ その他の石器(173・176-183・186・187・252・253) 意識して製作された石器で、上記項目に分類されないものを一括した。176は、側縁を部分的に一方からのみ調整し、剥離を行ったものである。177は節理面で剥離した部分の一方を加工して刃部としており、表裏面とも刃部から縦長の磨耗がみられる。182・183は把手状のつまみを有し、それ以外に調整を加え刃部としているようである。186・187は靴底状を呈し、一辺を残し他に調整加工を行い刃部としている。252・253は卵形を呈し、両端及び片方をペン先状に研磨したものである。これらは調整を加えたものか、使用の結果生じたものか不明である。

註1・森山公一氏の報告を基に分類した。磨製型及びピュース・エスキューに関しては、時代を含めた意味で命名している。

- 2・原石とは、採石し一次加工を施さないものをいい、石核とは、ネグティブな整形剥離面を有するものを、剥片とは、ポジティブな整形剥離面を有するものをいうこととする。
- 3・使用痕に関しての検討は、『長野県中央道報告一岡谷市その1-昭和52・53』で試みられている。参照されたい。
- 4・ここでいうチップ状とは、そのものから定形石器を作り出すことが不可能である大きさのものをいう。クズもしくは、それに等しいものである。
- 5・使用の方向が押し出す方向か引く方向かにより、右手使用・左手使用と異なるが、石器の形態・使用痕の付着等を検討した結果、111は押し出す方向での右手使用、126は押し出す方向での左手使用というようにおかものがある。
- 6・使用痕ある石器においては、剥片は「製O」、石核は「核O」、原石は「原O」と番号を付け整理した。
- 7・C区A・B 61・62に黒曜石が集中して出ているが、この地は斜面であり上方には裂穴イが存在している。
- 8・石原良秀「越前道誌」『長野県中央道報告一岡谷市その4』 1980
- 9・青沼博之「越前道誌」『長野県中央道報告一岡谷市その4』 1980
- 10・打製石斧の修整分類・形態分類は、『長野県中央道報告一岡谷市その4』 1976の十二ノ后遺跡、磨製石斧の修整分類・形態分類は、岡谷市その4を参照しそれに従った。

11. これらの用語については 佐原真「石斧種—類斧から類斧へ」『考古論集—松崎寿和先生六十三歳記念論文集—』同刊行会 1977

#### 4) その他

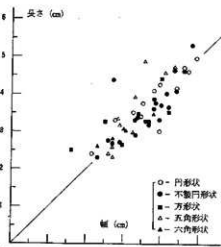
##### (1) 土製品 (挿図 28、図 49)

縄文時代の土製品として土製円板<sup>(1)</sup> 60点 (遺構内16点、遺構外44点) が出土している。土製円板の加工は、a・打ち欠いて円形状等の形状を成すもの (2点・3.3%)、b・打ち欠いた後に縁辺部の一部を研磨し整形したもの (28点・47.7%)、c・縁辺部全部を研磨し整形しているもの (29点・49%) の3段階に分けることができ、また、形状を分類整理すると次の通りである。

I・円形状 (12点・20%)、II・不整円形状 (23点・38.4%)、III・方形 (9点・15%)、IV・五角形状 (11点・18.3%)、V・六角形状 (5点・8.3%)

挿図28は、形状別に長さ<sup>(2)</sup>と幅<sup>(3)</sup>の相関関係を示したのであるが、45°線上に分布し、形状による何らかの意味あい<sup>(4)</sup>は読み取れない。挿図28 土製円板相関図 (長さ・幅) また、各形状のパーセンテージも、ほぼ等分であり、この形状が直接土製円板の性格を決定する要素になり得るかは不明である<sup>(5)</sup>。

土製円板に使用された土器片の部位を見ると、1 口縁部 (2点・3.3%)、2 胴部 (52点のうち底部に近い胴部1点を含み—86.7%)、3 底部 (6点・10%) となる。胴部を利用した土製円板が多いのは、土器における胴部の占める割合が多いので当然といえよう。口縁部や底部に近い胴部、底部等も利用されており、特にどの部位を利用するということとはなかったと考えてよからう。



注1・ここでいう「土製円板」とは、土器片を再加工した縁辺部に切り込みを持たない製品をいう。遺構内・編み物のおもり・メソコなどの玩具と考えられているが、本来そのものが研究対象とされることが少なく、その製作過程や性格等に関しては不明な点が多い。

2・縁辺部の研磨は、1) 加工によるもの、2) 使用途上におけるもの、3) 露置後に付けられたもの等が考えられるが、本遺跡の遺物においては、角形を示す各型が明確に準られていることから加工時における製作態と考えた。

3・ここでいう「長さ」と「幅」とは、円形状・方形の遺物においては、長手方向の最大長さを「長さ」とし、それに直交する最大幅を「幅」とした。五角形状のものは、一辺を水平に置き対する頂点への長さを「長さ」とし、それに直交する最大幅を「幅」とした。六角形状のものは、対角線の最大長さを「長さ」とし、それに直交する最大幅を「幅」とした。

4・土製円板が、残片あるいは数を示す用具であるならば、形状は重要な要素になるかもしれない。

5・厚さが一定していない底部に近い胴部においては、厚さを整えるための加工は施されていない。

##### (2) 炭化物・自然遺物 (図版 17)

炭化物・自然遺物は遺跡の数箇所<sup>(1)</sup>で出土したが、主なものを挙挙したい。

- ① 土器付着炭化物 1はAW-65グロット内から検出された、中期中葉無文深鉢土器片の、内面に付着した炭化物である。深鉢土器の中には煮沸器として実際使用され、土器面に蒸こぼれを付けたリ、お焦げを残しているものがある。これは上層内面に焦げ付いている煮沸である。炭化して細かく炭化の進んだもので、厚さ2mm以上も付着しているところもある。なんの煮沸かは判別しないが、多分食物の煮沸後の焦げ付きであることは間違いない。なおこのような焦げ付の付着した土器は他にも

あり。それぞれの土器のところで指摘している。

② 土器面・器肉内に残る種子痕 2は九兵衛尾根II式深鉢胴部の胎土中に混じりこんだ植物種子であろう。縦5mm、横3mmの米粒状の種子である。3・4は同一個体の土器の口縁部であるが、内外面は勿論器肉内にも無数の種子痕を残している。大きさはどれも2mmほどでやや長い球状である。粟粒状の禾木科の種子であろう。5は中期中葉の土器内面に残る長径7mm、短径5mmの卵形の圧痕である。カヤの実ではなかろうか。

③ 自然遺物 14号住居址と12号住居址より出土したもので、完形のものはないが、半割にされた殻は両住居址から各1個づつ検出されている。共にくるみである。14住出土のくるみは、縦2.1cm、横1.9cmで鬼ぐるみである。12住出土のものは縦2.2cm、横2.3cmの廻くるみである。

## 第2節 御射山西遺跡（SMYC）

### 1 位置・環境（挿図1・2、図版31～33）

諏訪南インターチェンジ用地内の遺跡発掘調査は、既に本線内に於て昭和48年に調査された手洗沢遺跡、51年に調査された頭版沢遺跡の一部、新たに追加された御射山西遺跡の3遺跡について行なわれた。頭版沢遺跡については、第1節において昭和51年発掘分とともに報告したので、ここでは同一地形上にある手洗沢、御射山西遺跡についてまとめてその位置、環境を概述する。

西遺跡ともに、諏訪郡富士見町御射山神戸にある。富士見町に数多く存在する遺跡の中では、西はずれにあり、御射山、一ノ沢、徳久利下遺跡とともに御射山遺跡群を構成している。昭和48年度中央道報告書・『諏訪郡富士見町内その1』で報告された遺跡数は124箇所、昭和54年に長野県教育委員会によって行なわれた「八ヶ岳西南麓遺跡分布調査報告書」によると137箇所と、13の遺跡が新たに発見追加されており、御射山西遺跡は、御射山中遺跡とともに新発見の遺跡としてあげられている。

八ヶ岳西南麓に広がる広大な視野が、幾筋もの沢や川とともに、糸魚川——静岡構造線である宮川の谷へ急になだれ落ちるその縁に両遺跡はある。遺跡附近の地形は、八ヶ岳火山列の噴出活動によって形成された泥流堆積物を主体とする基盤の上に、上・中・下部の三段階のローム層が堆積して扇状地状になっており、この扇状地状を示す裾野を手洗沢が南を、御射山沢が北を開析してできた帯状の台地に立地する。南を流れる手洗沢との比高差15～20m、北を流れる御射山沢との比高差も7～10mと大きい。

遺跡の北東約300mの位置に、諏訪大社上社の摂社である御射山社があり、附近からは平安時代から中世にかけての遺物が採集されている。また、手洗沢に沿って参道であった松茸木も遺存している事等から、御射山祭に関係する遺構の存在も推定されている御射山遺跡（挿図1-2）と、道路をはきみ東の尾根部に縄文時代早期、後期土器片や、石鏃が採集されている御射山中遺跡（挿図1-3）が、尾根東方に位置している。手洗沢遺跡はこの尾根の南斜面に位置し、昭和48年の調査で、平安時代末の住居址1、土壇2、ロームマウンド3、溝状遺構1が検出されている。御射山西遺跡はこの尾根上の、西へゆるやかに傾斜する平坦部にあり、遺跡一帯は赤松を主体とする山林で覆われ、今日まで遺物の採集等もなされずにきた。しかし、御射山遺跡と地続きであることや、御射山沢を隔て北西に接する頭版沢遺跡との関連も考えて、新遺跡として追加された。御射山沢に沿って小さく張り出す小尾根上に、縄文時代早期の土壇が検出された他は、縄文時代早期・中期・後期の土器片が点在するのみで、人々の生活址は確認されず、狩猟・採集等の後背地としての性格が強い遺跡である。

### 2 発掘区の設定と調査の経過

#### 1) 発掘区の設定（挿図2、図版31～33）

諏訪南インターチェンジにかかる用地は、既に掘削工事が完了している本線部分を除き、本線東八ヶ岳寄り位置する御射山西遺跡で約46900㎡、本線西南宮川寄りに位置する手洗沢遺跡に約17400㎡、頭版沢遺跡では本線の両側に約1000㎡と広範な地域に及んでいる。このうち御射山西遺跡地内に19200㎡、手洗沢遺跡地内に3900㎡の広さで、現地形が残される地域が設けられてはいるが、いずれにしても調査予定範囲が大きな広がりをもっていることと、掘削により、現地表面より約10m下げられている本線部分、密



附図1 富士見町内遺跡分布図 (1:75000)

表1 長野県諏訪郡富士見町遺跡一覧

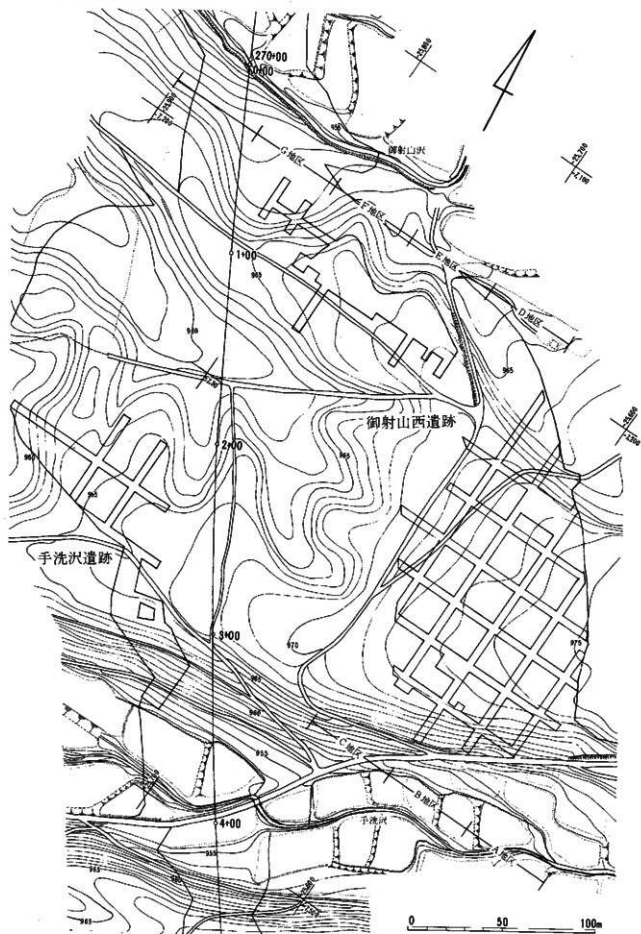
No.	遺跡名	所在地	旧石碕	縄文時代		弥生時代		奈良・平安	中世	備考
				草	早	前	中			
1	徳久利	富士見町富原			○	○				縄中期住居跡7 横溝跡 * 6
2	御射山	富士見町神戸						○	○	
3	御射山中	富士見町神戸		○	○					
4	御射山西	富士見町神戸		○						土境
5	手洗沢	富士見町神戸手洗沢		○			○	○	○	平安住居跡1 土境
6	大石	富士見町神戸大石		○						
7	川音	富士見町神戸川音		○						
8	山沢上	富士見町富原山沢		○			○	○		
9	山沢下	富士見町富原山沢					○	○		
10	大久保	富士見町富原大久保		○			○			
11	一の沢	富士見町富原		○						
12	徳久利下	富士見町富原		○						
13	ツヤブ	富士見町神戸ツヤブ		○						
14	長尾根尻	富士見町神戸長尾根尻		○			○			
15	坂上	富士見町神戸坂上		○						
16	牛旗城跡	富士見町神戸							○	
17	大沢川端	富士見町神戸		○						
18	小テングク	富士見町神戸小テングク		○						
19	雨乞池	富士見町神戸小テングク	○				○			
20	池の平	富士見町神戸池の平		○						
21	清水窪	富士見町神戸清水窪					○			
22	太郎口	富士見町神戸太郎口		○			○			
23	新屋敷	富士見町神戸新屋敷		○						
24	堤下	富士見町神戸堤下		○			○	○		
25	御所平北	富士見町神戸御所平		○			○	○		
26	御所平	富士見町神戸御所平		○	○		○	○	○	平安住居跡1
27	御所平峠	富士見町神戸		○					○	
28	牛首城	富士見町栗平							○	
29	栗生東	富士見町栗生								
30	せど平	富士見町大平		○						
31	中山	富士見町若浜							○	
32	芝平	富士見町松目		○						
33	松目原	富士見町若宮		○						
34	大背戸	富士見町木ノ間大背戸		○						
35	八幡社	富士見町若宮		○						
36	阿原下	富士見町木ノ間		○			○	○	○	平安住居跡2
37	蛇場見	富士見町木ノ間		○						
38	城の尾根	富士見町木ノ間		○						
39	馬詰平	富士見町木ノ間		○						
40	無法塚	富士見町休戸		○	○					
41	広原	富士見町休戸		○						縄中期住居跡16
42	大小原	富士見町大蓋		○			○			
43	ホウズキイA	本郷立沢ホウズキイ		○	○					
44	ホウズキイB	本郷立沢ホウズキイ		○						
45	ススキイノ	本郷立沢ススキイノ		○						
46	大佐東尾根	本郷立沢大畑		○				○		



## 第11章 調査遺跡

No	遺跡名	所在地	田 石 器	縄文時代				弥生時代			中 世	備 考
				早	前	中	後	前	中	後		
47	ミズカケ	本郷立沢ミズカケ			○							
48	大 畑	本郷立沢大畑			○							縄文中期住居跡11
49	ウツボギ	本郷立沢字津木			○							
50	南原山尾根	本郷立沢南原山		○					○			
51	野 田 原	本郷立沢野田原			○							
52	藤 原	本郷立沢藤原			○					○		
53	二の沢	本郷立沢				○						
54	ビヤグリ	本郷南原山							○			
55	分 太	本郷南原山										
56	一ツヤブ	富士見	○									
57	一の沢	富士見			○							
58	大 畑 奈	本郷立沢大畑奈			○							
59	立 沢	本郷立沢			○							縄中期住居跡 4
60	栗師尾根	本郷立沢栗師尾根		○	○							縄中期住居跡 1
61	坪 平	本郷立沢坪平		○	○							縄、ドルメン状遺構
62	札 沢	本郷立沢札沢			○							
63	中道尾根	本郷立沢中道尾根			○							
64	オギハラ	本郷立沢オギハラ			○	○						
65	杉 原	本郷立沢杉原			○	○						
66	稗の畝	本郷乙事稗の畝			○					○		中世集落跡
67	薮 尾 根	本郷乙事乙事沢			○							
68	匠 垣 外	本郷乙事	○									
69	丸 尾 根	本郷乙事			○						○	
70	岡 屋	本郷乙事			○						○	
71	金 山	本郷乙事							○			
72	足 場	本郷乙事足場			○				○	○	○	平安住居跡14 土 遺24
73	母 沢	境小六母沢			○							縄、土壇
74	南 沢	境小六			○							
75	乙 事 沢	境小六乙事沢			○	○						
76	御 柱 尾 根	境小六			○					○		
77	小 六 石	境小六								○	○	平安住居跡 1
78	当 内	境小六当内			○							
79	蛇 込	落合瀬沢蛇込			○							
80	オクノサマ	落合瀬沢			○							
81	小 手 沢	落合宇ノ木小手沢										
82	宇 の 小	落合宇ノ木			○							
83	番 匠 原	落合机番匠原			○							
84	声 原	落合机番匠原			○							
85	机 平	落合机番匠原机平		○	○				○	○	○	前期住居跡25 土壇 中期 1
86	欠 の 上	落合机番匠原			○							平安 2
87	天 白	落合机番			○						○	
88	小 母 沢	落合烏帽子小母沢			○	○				○	○	縄後期住居跡 2 土 遺 8
89	底 滑	落合烏帽子			○	○				○		
90	高 の 薬	落合烏帽子薬の奥			○					○		
91	九兵衛尾根	落合烏帽子梨木原			○	○						縄中期住居跡50 土 遺

No	遺跡名	所在地	旧石器 器	縄文時代			弥生時代 前中後	奈良・平安 土須次	中 生	備 考
				前	中	後				
92	窪 沢	落合烏帽子			○				縄中期住居跡7	
93	源 治 尾 根	落合烏帽子			○					
94	梨 木 原	落合烏帽子梨木原			○					
95	鹿 波 宮	落合烏帽子梨木原			○		○	○	縄前期住居跡4 平安住居跡1 縄中期住居跡2	
96	上 の 原	落合平岡			○				縄前期住居跡3 環状石垣跡 縄中期住居跡5 土壇	
97	向 原	落合烏帽子			○				縄中期住居跡8 土壇、石組遺構	
98	坂 上	落合平岡			○					
99	麻 内	落合烏帽子			○				縄中期住居跡9	
100	丸 森	落合烏帽子			○				縄中期住居跡1 土壇1	
101	啓 平	落合烏帽子			○				縄中期住居跡14 土壇	
102	森 平	落合烏帽子森平			○					
103	森 早 下	落合烏帽子森平			○					
104	清 水 端	落合烏帽子			○		○			
105	押 立	境高森					○			
106	大 泉	境高森			○					
107	小 泉	境高森			○					
108	宍 森	境高森						○	地下式土壇	
109	施 畑	境高森			○					
110	新 道	境高森新道			○				縄中期住居跡2	
111	井 戸	境高森井戸			○					
112	干 沢	境高森干沢			○					
113	新 田 平	境高森新田平			○					
114	大 花	境高森			○				縄前期住居跡2 縄中期住居跡1	
115	西 沢	境高森西沢			○					
116	曾 利	境高森曾利			○		○	○	縄中期住居跡76 平安住居跡3	
117	日 向	境高森日向			○				縄前期住居跡5 縄中期住居跡2	
118	井 戸 尻	境高森井戸尻			○		○	○	縄中期住居跡11 縄後期住居跡1	
119	池 袋	境高森池袋			○					
120	池 生	境高森池生					○	○		
121	小 井 戸	境高森			○					
122	地 蔵 林	境高森			○					
123	小 平	境高森小平			○					
124	尖 石	境高森尖石			○					
125	中 ノ リ	境高森	○		○					
126	泉 前	境高森泉前			○					
127	路 河 原	境高森路河原			○			○		
128	高 窪	境高森						○		
129	三 十 番	境高森			○					
130	円 見 山 下	境高森					○	○		
131	清 水	境高森								
132	先 達 城 跡	境高森						○		
133	甲 六	境高森甲六			○				縄中期住居跡4	



挿図2 御射山西遺跡・手洗沢遺跡 地形、グリッド配置図(1:2,000)

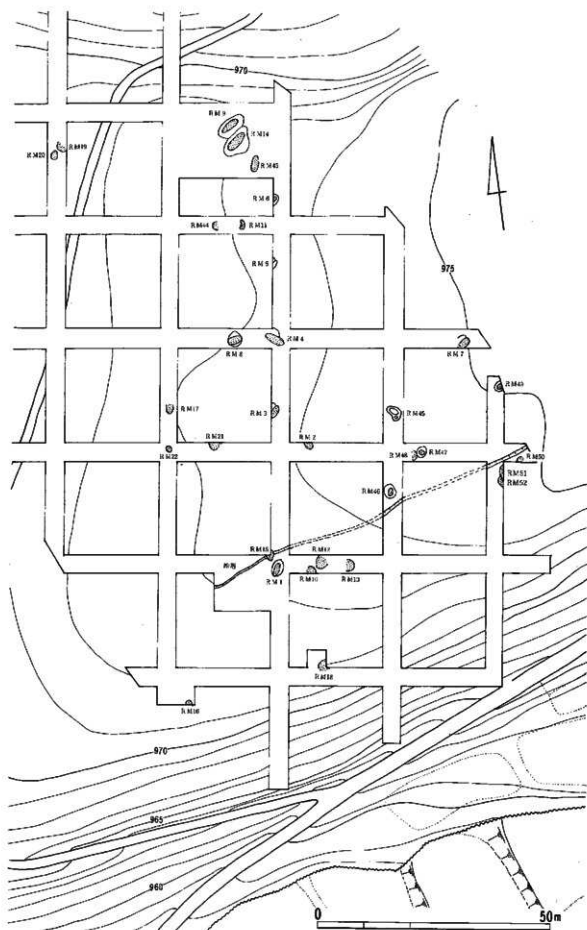
集している松林等々の条件により、従来行なわれてきた、本線センターラインを基線とした発掘区の設定方法では困難であるので、御射山西遺跡、手洗沢遺跡については、国土地理院座標を用いて発掘区の設定を行なうこととし、東西の基線をX-7.300、南北の基線をY-25.600にし、全域を2m方眼に区切りグリッドの設定をした。東西方向には、X-7.300、Y-25.600の基点から東へA・B、西へC・D・E・F・G・IIの計8の大地区を50m毎に設け、各地区内を東からA～Yの25小地区に分岔、南北はX-7.300を50ラインとし、北から02～49、南へ50～129の地区に分割し、2m四方のグリッドをAC-65と表現するようにした。御射山西、手洗沢両遺跡へは国土地理院座標をもとに、グリッド設定のため26本の基準杭を打ち測量を行なった。測量は正確を期するため、長野市の写真測図研究所へ依頼した。なお、南北の基線とした国土地理院座標Y-25.600から、磁北は6°20'西偏し、真北は0°10'東偏している。

## 2) 調査の経過

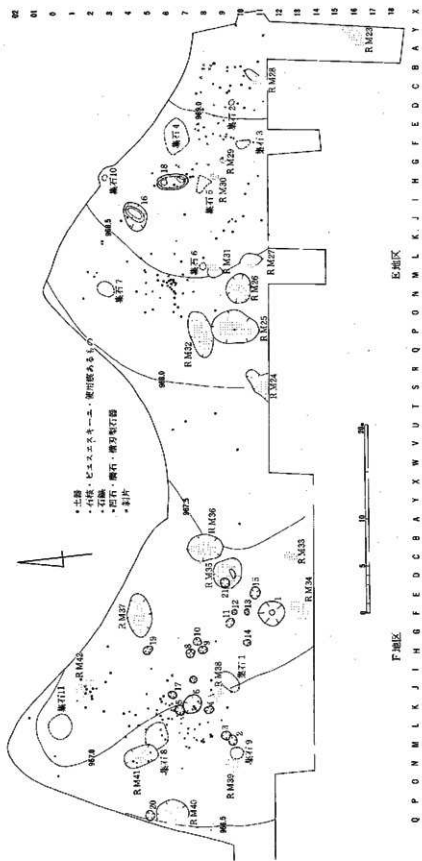
昭和53年8月21日、遺跡地内の立木の処理が終了していないまま、調査日数の関係から発掘調査に着手した。発掘式の後、上層確認のため、御射山西遺跡地内の任意の地点20箇所において、2m四方の平掘りを行ない、平行してグリッド設定を行なった。グリッド設定後、B地区XYライン4m×140mと、B・C・D地区の50・51ライン4mの表土除去、抜根をバックフォーによって行ない、以後この直交する二列を中心に、20m間隔で2グリッド分4m幅で試掘溝の表土除去を行なう。表土除去の終了したグリッドから手掘りによる掘下げを行ない、28日にB地又XY列、24～95グリッド、144㎡を終了した。ローママウンド5基の他に遺構は皆無であり、遺物も縄文時代早期の土器片数片と、黒曜石数点を得たのみであり、遺構の存在は希薄と考え、以後は20m間隔に入れた試掘溝内を4mおきに掘り下げていった。この結果、A～D地区において検出されたのは、ローママウンド25基、所層1のみで、他に遺構は皆無であり、遺物もCA-74～77、CF-74～77グリッドにおいて無文土器片、黒曜石片の比較的多量集積箇所があったのみで、他には点在しているだけであった。A～D地区調査終了後の9月8日頭殿沢遺跡へ移動、本線西部分の斜面の発掘に着手した。9月25日手洗沢遺跡の表土除去をバックフォーで開始する。頭殿沢遺跡では10月5日検出された、七塚・小竪穴・ローママウンドの測量を開始、さらに本線東側部分の調査に着手する。ほぼ全域の発掘を終了し、測量・写真撮影を残し10月11日手洗沢遺跡へ一転を、同19日主力を御射山西遺跡E・F地区へ注いだ。頭殿沢におけるすべての調査を11月6日に終了し、手洗沢遺跡は11月13日に全作業を終えた。この結果、頭殿沢遺跡において、竪穴・土壇・集石の遺構とともに、縄文時代早期の土器片、石器を得たが、51年度調査の際検出された早期生活址の続きと思われる。また、手洗沢遺跡では、当初期待されていた、48年に検出された、平安時代住居址を含む集落としての住居址は発見されず、溝状遺構のみが南斜面から検出されただけであった。尾根上の平坦部よりはローママウンド22基、竪穴と思われる土壇1基が検出されたのみである。

御射山西遺跡E・F地区は、御射山沢沿いに小さく強出する二つの尾根上に、縄文時代早期の押型文土器・無文土器や、凹石・磨石・石鏃等とともに、土壇・集石が検出され、早期の生活址と判断した。土壇の中で、1、16号土壇は、その規模、内部状況から竪穴の機能をもっていたことがうかがえた。このせまい範囲より、土壇21基、集石11基、遺物279点を検出した。霜柱が午後3時頃に立ち始め、朝は30cmもある霜柱をかきわけての調査が続き、発掘作業を11月25日終了し、以後調査員・調査補助員のみで御射山西遺跡の応援を受け、測量・写真撮影を行ない、12月7日すべての作業を終了した。

御射山西遺跡において、料金徴収所より30m以内は、渠道取付部分にあたり、工事主体者である長野県の発掘地区となるため、BA-53、BU-65、BA-89のグリッドを結ぶ以東の地区は、長野県より委託を受けた富上見町教育委員会が調査団を結成し、団長の武蔵雄六氏を中心に、昭和54年7月17日より28



押込 3 御射山西麓跡 A～D 地区遺構配置図 (1:800)



御射山西遺跡 E・F地区遺構・遺物分布図(1:400)

日まで発掘調査が行なわれた。同一遺跡であるため、グリッドの設定は中央道調査団で用いた地区割りを延長して行なっていたが、遺物、遺構番号も続き番号としてもらった。調査団からは、土屋、佐藤、青沼が出かけグリッドの設定を手伝った。その結果、ルームマウンド8基、断層とともに縄文時代早期・中期・後期の土器片、石器等約50点の遺物が発掘された。本稿では富士見町教育委員会、園長武藤雄六氏の了承を得て、遺構は全体図へ挿入し、遺物実図、石器拓影を掲載させていただいた。なお、県分組地区の調査報告書「中央道調査団インターチェンジ県道取付用地埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」(昭和54年)を各所で引用させていただいた。県分組地区の発掘調査面積は640㎡である。

### 3 遺 構

#### 1) 縄文時代の遺構 (挿図3・4)

御射山西遺跡のほとんど大部分を占める広大な尾根上のA-D区においては、ルームマウンド、断層の遺構しか認められず、遺物も縄文早期から後期の土器片30点程と、黒曜石片及び使用破の認められるもの80数点、石鏃2点、凹石2点程が点在しているのみであるのに対し、E・F地区の、御射山山沢に沿って西南する小尾根がラグドのコブ状に小さな二つの張出しをもつ地域には、検出された土壌、集石のすべてが葉中し、遺物も縄文時代早期土器片とともに多数の石器、黒曜石片等が集中して検出され、規模はごく小さいながらも、縄文時代早期の生活址としてとらえることができた。以下各遺構について概説する。

##### (1) 土 壌 (挿図4・5、図版34-1・2)

21基が検出されたが表土が浅いため、木の根による破壊等も見られ、明確な土壌としてとらえることができたのは少ない。土壌の分布は、御射山沢沿いに小さく張り出す二つの尾根の内、西側F区に19基が葉中し、東側E区には2基のみ存在するだけである。21基検出された土壌の中で、その性格等が顕推できるのは、1号、16号の2基で、規模、内部状況等により陥し穴と判断される。

①土壌1号(挿図5) FC-11-12グリッドより検出された。検出面のルーム中に漆黒の土が直径2.5mの円形に落込んでおり、相当大きな土壌が予想された。覆土の観察のため東半分を残し掘り下げた。覆土の様子全体に自然堆積の様相を示している。I-V層のルームブロックを含む褐色の堆積の後、VI-VII層が、次にまたルームブロックが含まれるIX・XII・XIII・XIVが堆積し、その後、X・XII・XVI・XVIII・XXの各層が順次堆積していったものと思われる。直径2.1m、底径0.8m、深さ1.9mの規模をもつ大きな土壌で、挿図5の断面図に▶で示した所に段差があり一巡している。また、土壌壁に一面に、掘削工具でつけられたと思われる幅3cm、長さ約25cmの痕跡があり、掘棒の使用がうかがえる。

②土壌16号(挿図5) EJ-5-5グリッドより検出された。東側の張出した尾根の端近くに位置し、南東3mには土壌18号がある。3.5×2.2m、深さ10cm程の楕円形を呈す浅い掘り込みの中に、1.9×1.1m、深さ1.2mの長方形を呈す土壌本体がある。土壌底部には直径10cm、深さ20-30cm以上的小ピットが不規則に10個あけられていた。この土壌底部にあけられた小ピットにはおそらく木の棒が立てられていたと思われる。本址を陥し穴であると判断した。覆土は自然堆積を示しているが最下層に見られるVII層はルームであり、小ピットに棒が立てられた後に固定させるために作られた層と思われる。

③ その他の土壌(挿図5) 土壌18号を除き他は円形・楕円形を呈す。いずれも掘り込みは浅く、最深30cm程である。表土が浅いために、木の根等に擾乱されているものも多く、覆土の混乱が多い。遺物はほとんど土壌内には落込んでおらず、検出面からの出土が多い。前述した2基の陥し穴とともに、縄文時代早期に属すると思われる。

##### (2) 集 石 (挿図6、図版34-3・4)

11基検出された。いずれも、八ヶ岳の火山活動にともない生成された、複層石安山岩の転石が用いられ

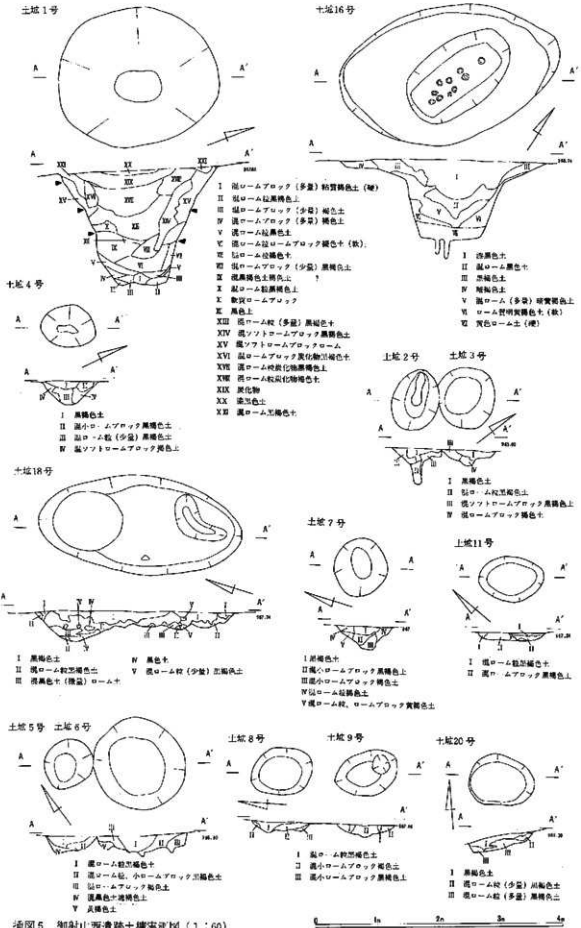
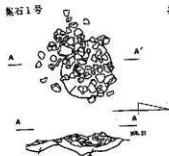


図5 御射山西遺跡土坑実況図 (1:60)



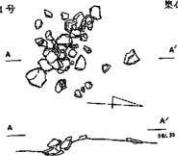
第二章 調查遺跡

墓石1号

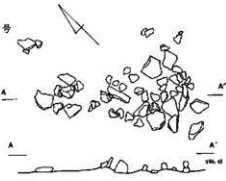


- I 赤褐色土
- II 灰ローム粒状褐色土
- III 黄ローム粒、ローム塊状褐色土

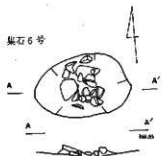
墓石4号



墓石5号



墓石6号

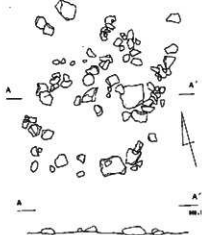


- I 灰褐色土
- II 黄褐色ローム土

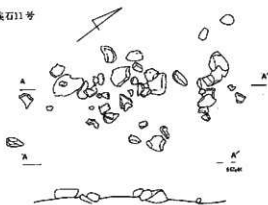
墓石8号



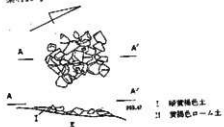
墓石7号



墓石11号



墓石10号



- I 黄褐色土
- II 黄褐色ローム土



押込6 御射山西遺跡墓石実測図(1:40)

ており、おそらく、すぐ北を流れる御射山沢より運びあげられたものと思われる。1・6号集石の2茶のみが土壌をもち、他の9基には下部遺構がない。9基のうち、2・4・5・10号集石は、50cm～1.2mの範囲にかたまっているが、3・7・8・9・11号集石は散乱した状態であった。いずれの集石も、使われている石に明瞭な焼け痕を見ることができなかった。

### (3) 遺物集中区(挿図4)

御射山西遺跡より検出された約430点の遺物のうち、約65%の279点がE A～E Y-02-14、F A～F Q-02-14グリッドに集中しており、20%の86点がC A～C F-74-79グリッドから出土した。

E・F地区より出土した遺物は、E区で24×14m、F区で10×16mのせまい範囲に集中していた。遺物はいずれも早期に属し、西地区より出土した土器片96片は山形押型文7点、楕円押型文15点、無文土器片62点、縄文2点の割合である。E地区のみ見れば、山形文7点、楕円文3点、縄文1点、無文52点で山形文と無文で94%を占める。一方、F地区では、山形文なく、楕円文12、縄文1、無文10で、楕円文が半数の52%を占め、E地区と比べれば押型文の差がはっきりと見られ、無文土器はE地区に圧倒的に多い。石器は、石鏃2、凹石8、磨石3、横刃型石器2、石核9、スクレイパー1、使用痕あるもの21がE地区から、F地区からは、石鏃2、凹石6、磨石2、石核7、使用痕あるもの10と、E地区から出土した石器の方が多い。また、黒曜石片、原石も50点ほどあり、F地区の17点の3倍にはのぼる。

C A～C F-74-77グリッドにも遺物の集中があり、無文土器片23点、山形押型文1点、縄文1点の他、石鏃3点、ビエス・エスキュー26点、使用痕あるもの13点の他、凹石1点、黒曜石片が出土した。殆どの遺物が、断層によってきたと思われる浅い凹地とその南に散在している。無文土器のうち10点程は早期にかかるものと思われ、他は後期のものである。

いずれも遺物散布の範囲はせまく、遺物の量から考えても長期間続いた生活址とは考えにくい。おそらく狩猟、採集等の折に営まれた跡と見ることができよう。

## 2) その他の遺構

### (1) ロームマウンド(挿図3・4・9・10、図版34-5・6)

御射山西遺跡の発掘面積は5300㎡で、検出されたロームマウンド数は52基である。平均100㎡に1基のロームマウンドがあることになり、未発掘の地区内も含め、相当たくさんロームマウンドが存在していることと思われる。時間的な節約もあり、わずかに5基を完掘できたにすぎない。

すべてのロームマウンドは屋根上の平坦部より検出され、斜面には皆無である。発掘調査した5基の他は平面図のみ検出しただけであるが、高さ4～40cmのマウンド部をもち、周囲の全周、片方、一部に黒色の落込みがあるものが約半数認められた。

発掘調査のできた各々のロームマウンドについて概説すると、ロームマウンド1号は、東西に走る新層のすぐ南の凹地に位置している。断層が起こる以前のものと思われる。3×0.9m、高さ4cmのマウンドをもち、下部墳3.8×2.5m、深さ37cmの規模をもつ。土層は中心部に下部墳底部にまで及ぶ明黄色ロームがつまり、南側の帯状に入る黒褐色土の入り込みが一番大きく、北側にはわずかにあるのみである。4号は1.5×1m、高さ10cmのマウンド部2つと、4.8×3.2m深さ30cmの下部墳からなり、ほぼ全周する位置から黒色土、混ローム粒黒色土が底部へ入り込むが、西側が強い。8号は2×1.6m、高さ30cmのマウンド部と、2.8×2.6m、深さ43cmの下部墳から成る。黒色土の入り込みは東側からが一番深く、他には少ない。9・14号は1.5mの間隔で隣りあい検出された。マウンド部は、9号5.5×2m、高さ31cm、14号は6.3×2.3m、高さ19cmと52基中で一番大きい。同様に下部墳も、9号は6.2×3.5m、深さ80cm、14号は6.8×4.5m、深さ92cmと最大である。黒色土の入り込みは少なく、南北方向の入り込みがやや大きい程度であ

る。断面から判断すると14号が9号に切られた状態が観察でき、9号の方が新しい。以上が発掘調査したロームマウンドであるが、未掘分もほぼ同様である。

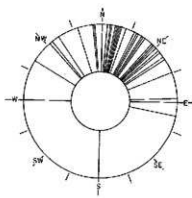
ロームマウンドに関する報告は、中央遺報告例では、昭和45年調査の飯田市大門原B遺跡が初見で、以後中央遺関係では、大門原タイプの土壇として扱われている。大規模発掘によりその調査例を増していく中で遺物の伴出がないこと等により性格づけは不明となっているが、昭和49年、「信濃」第26巻3号で能登健氏が風倒木痕説を、また、昭和50年武蔵雄六氏は「山麓考古」第3号で、肥料溜めとの説を提示している。他に住居址、おとし穴、貯蔵穴、墓域、産小屋等々の見解が示されている。本誌で検出されたロームマウンドは伴出遺物は検出面からのものが大部分で、下部壕からの出土例はなく、その性格については知り得ない。

ロームマウンドの性格を知るための1つの方法として、風向とロームマウンドの長軸角を比較してみた。風倒木痕を進展させる意味での1つの方法と思ったからであるが、発掘例が少ないため土層との比較検討もできず今後への課題となった。紙数の関係で詳述できないが、別の機会を待ちたい。

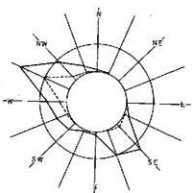
挿図7は今回発見された、ロームマウンドのマウンド部の長軸が示す角度である。北～東へ向くもの数が大部分を占める。大きく三つの方向に大別でき、 $N 0^{\circ} \sim 20^{\circ} E$ 、 $N 20^{\circ} \sim 35^{\circ} E$ 、 $N 40^{\circ} \sim 60^{\circ} E$ の方向にはほぼまとまる。挿図8-1は気象庁諏訪測候所から借用した資料で、1945年～1978年の平均風向割合で、実線は風速10 m/s以内、破線は10 m/s～14.9 m/sの風である。2は、長野県刊、「長野県の気象と災害」から、昭和20年～54年におこった台風・突風の記録を諏訪地方のみ抜き出して作図したものである。諏訪測候所は諏訪湖東岸にあり、この位置の観測資料と、八ヶ岳山麓にあるロームマウンドの方向について比較するのは非常に危険ではあるが、八ヶ岳山麓における資料がない現在あえて使用した。

これによると、普通に諏訪地方を吹く風は西北西の風が多く、挿図8-2諏訪地方の風(台風・突風)南東の風が吹いて多いことがわかる。さらに、台風・突風の最大風速も南～南南東の風が多く、大きいで西北西の風が多い。瞬間最大風速の方向も、南南東、西北西が多い。この風向とロームマウンドの長軸方向を重ねて見れば、長軸が示す方向と風向はほぼ直角となるものが多い。土層についてはその共通点を見い出せなく、風向との関連性については結論を出せず、さらに多くの例が必要となる。

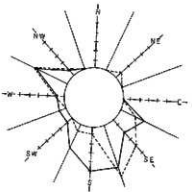
風向と直角に交わる長軸をもつロームマウンドの数が多くは指摘でき、早なる偶然とも思えない。また、黒色の落込みも、風向との関連が強いと思われ、これ程の資料では風倒木痕である証明もできないが、何らかの因果関係があると思われ、ロームマウンドの中には風倒木痕である可能性が高いものもあることがうかがえる。花粉分析などを通し、当時の自然環境の復元も今後必要となってくるであろう。なお、ロームマウンドができた時期については、上面に早期の土器片がある場合もあり、早期以後と考えたい。



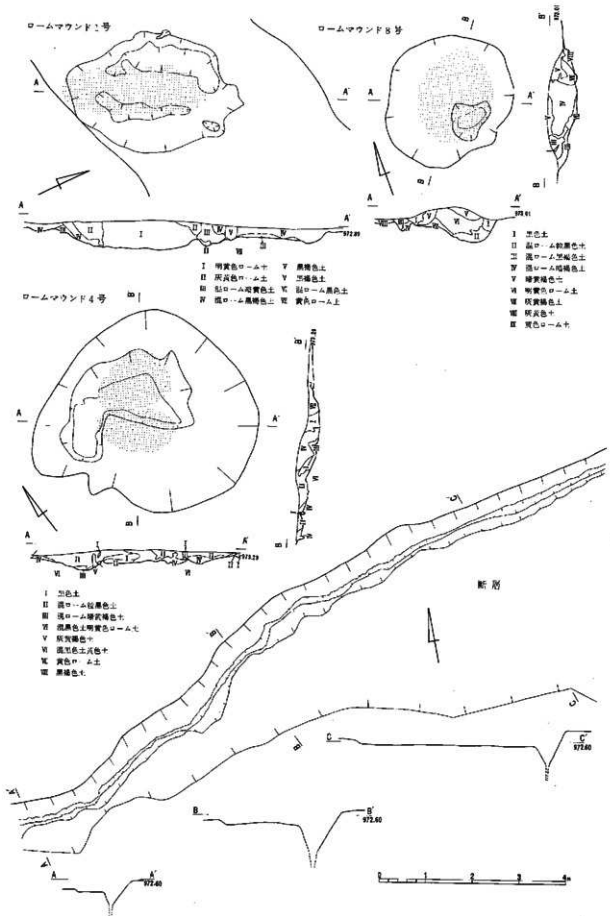
挿図7 ロームマウンド長軸方向



挿図8-1 諏訪地方の風(実線 10%  
破線-10%～14.9%)

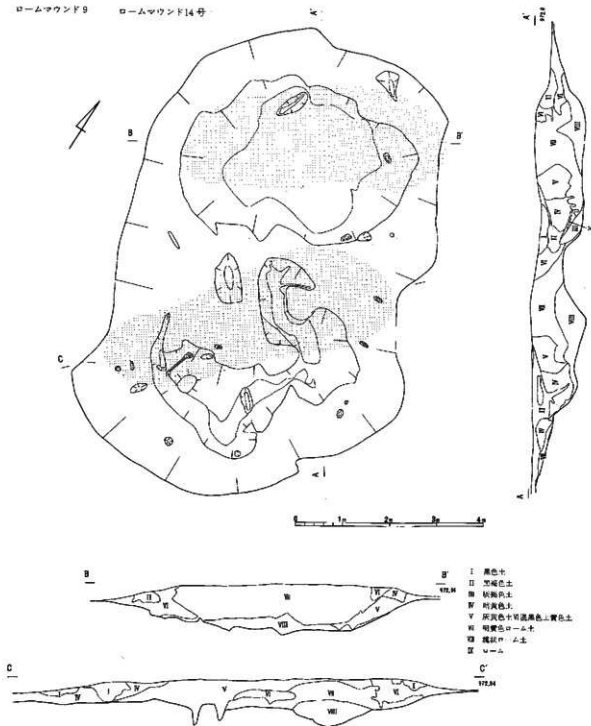


挿図8-2 諏訪地方の風(台風・突風)  
実線-最大風速、破線-瞬間最大風速



挿図9 御射山西遺跡ローママウンド・新層実測図(1:80)

ローママウンド9      ローママウンド14号



挿図10 御射山西遺跡ローママウンド実測図(1:80)

(2) 断層 (挿図9、図版34-7)

C地区～A地区にかけ、手洗沢に開析された尾根線より25m程尾根中央へ寄った地点に、ほぼ東西の方向に走っている。東はAY-63グリッド辺で消滅しているが、西は調査したCF-76グリッドより以西へ伸びていっているものと思われる。調査範囲で長さ70mを測り、段差は西へ行く程大きく30～40cmに達する。断層の南側には、10cm程の落込みが平行して走る。この断層は、泥流堆積物の上面が南方に向いずれたために発生したものと思われ、その規模、範囲は小さく、最大傾も、1～2m程度である。段差の走るCA～CF-74～77グリッドより早期・後期の上層片が出土しているが、断層をはさんで北・南側に早

期無文土器を検出していることから考え、おそらく早期末以後の時期に断層が起ったと思われる。

### (3) 比丘尼さま

尾根斜面裾に御射山社へ通じる松並木のある参道があり、そのかたわらに土地の人々が「比丘尼さま」と呼んでいる無縫塔が一基立っていた。むかしこの場所で行きだおれになった尼僧がいて、御射山神戸の人々が供養塔を立てたという。現在でも御射山祭の折には漕がけ(御射山社は原山塚ともいわれ、原と漕が通じる所から腹を痛まない(利益がある)やおそなえ物があげられている。工事のため破壊されるので、地元の人々が尾根上へ移転し、その跡を発掘したが、下部からは何も発見されなかった。地山をわずかに削り、切石の基壇を置き、その上に無縫塔が立てられたものであったようだ。いつ頃のものかはうかがい知れないが、おそらく近世以降のものであろう。

## 4 遺物

### 1) 縄文時代早期の土器

#### (1) 押型土器 (挿図11-1~21、図版35)

27点が出土し、内16点が楕円文、11点が山形文で、格子目文はない。楕円文の16点は3点がE地区から、大部分の13点はF地区より検出された。11点ある山形文は、3点がB地区、1点がC地区で、7点がE地区より出土し、地点により差がある。

楕円文は挿図11-1の図形に近い例を除き他はすべて細長い楕円形で、長軸5~6mm、短軸3mmのほぼ一定した大きさの紡錘形を示す。破片が小さいために全体を求め得ないが、帯状施文ではなく、全体に密接して施文されていると思われる。口縁部片は4片あるが、口唇部にわずかな無文帯が認められるが意識的に無文帯部が作られたかどうかは判断できない。胎土には石英粒、雲母片を中程度に含み、焼成は良好であるが、表面が剥落しているものもある。器厚は8mm前後である。原体の幅・長さを復元できる破片は少ないが、2単位の文様構成が4・7から観察できる。細久保式と思われる。

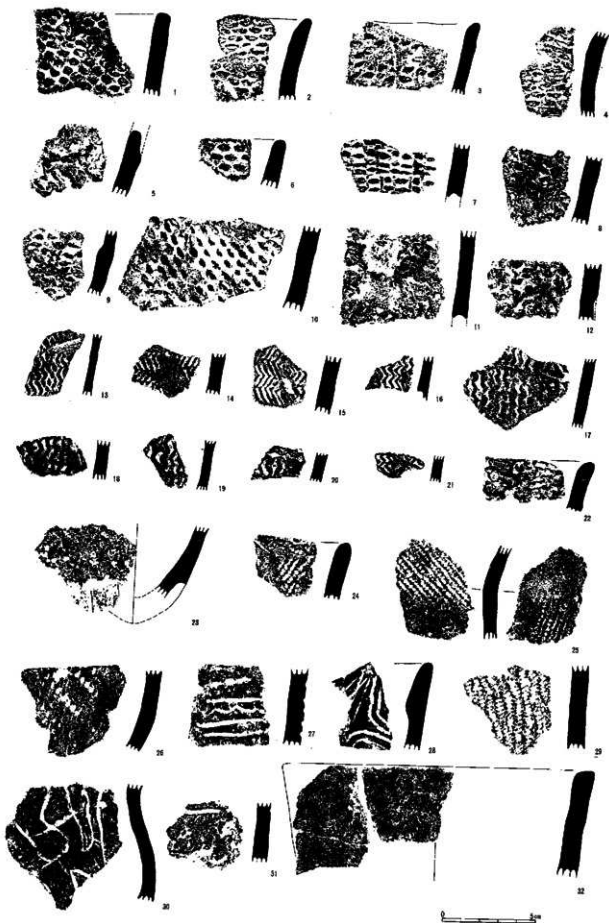
山形文は13~15がB地区より、他はE地区より出土したものである。14・15の器厚は7mmと厚く、他は4mmと薄い。山形の波動筋は薄手のもので6~9mm、厚手のものは15mmで器厚により差が認められる。山形のなす角はすべて鈍角を示すが、21のみほぼ直角に近い。山形の幅は2mm前後であるが、14・15は1mmと細い。破片が小さく原体の長さは復元できない。すべて縦方向に施文されるが、20のみ横方向に施文された下が縦方向となる。14のみ無文帯が作られている他は密接した施文と思われる。胎土には石英粒の混入があるが、13・15は雲母の混入もある。黒褐色を呈し焼成はよいが、14・15・21の焼成はややあまい。楕円文と同様細久保式に比定できよう。

#### (2) 無文土器 (挿図11-22・23、図版35)

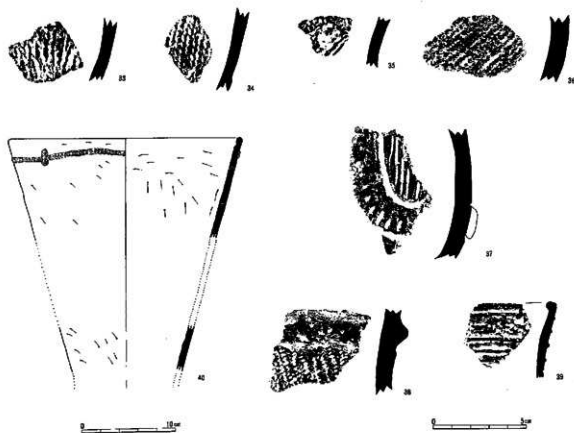
95片が出土したが、早期の土器片と思われるものは71点であり、そのうち92%にあたる65点はE・F地区より検出された。特にE地区から多く52点を数える。23はE地区より出土した尖底部で、胎土中に石英粒と多量の雲母が混入されている。焼成はよく、内面は黒色を帯びる。22は無文の口縁部で2個の補修孔がかけられるが、1個は完通していない。他の無文土器は口縁部4片の他はすべて胴部破片で、胎土に多量の雲母が含まれるもの、少量含まれるもの、全く含まれないものがあり、3~5個体分析が認められる。全体に焼成はよい。E地区においては無文土器と楕円押型文の占める割合が高く注意される。

#### (3) 縄文のある土器 (挿図11-24、25、図12-33-35、図版35)

3点出土した。24は口縁部片であるが胎土に石英粒と乳白色を呈す砂粒が混入されている。内部には横ナアの痕が残る。25は表裏に縄文が施文される。外反する口縁の内側と、頸部外側に逆よりの細かな縄文が施文されている。石英・雲母の細粒を胎土に含む。FK-5グリッド出土。26は、絡糸体瓦質文である。



神岡11 御射山河津跡出土土器の影 (1:2)



挿図12 御射山西遺跡出土：器実測図（1：4）・拓影（1：2）（昭和54年発掘）

焼成は非常によい。EH-10 グリッド出土。図12-33-35は燃糸文土器片で、胴部から胴下半部の破片で、焼成は非常によい。AY~AB-62、63グリッドより検出された。早期でも前半のものと思われ、押型文土器に先行するものであろう。

(4) その他（挿図11-27、図版35）

27は田戸下層式土器片と思われる。CKグリッドより出土した。棒状工具による沈線が4条横走し、その裏に波状に沈線が施文される。胎土に石英粒を含み焼成は余りよくなく風化がはげしい。

2) 縄文時代中期の土器（挿図11-28・29、12-36・37、図版35）

挿図11-28・29、図12-37・38がそれである。28は半截竹管による平行沈線が施文される波状口縁部片で焼成は非常によい。胎土に石英粒・雲母を含む。縄文中期初頭、九兵衛尾根1式。29は右燃りの縄文が全面に施文される胴部片で井戸尻Ⅲ式と思われる。36-37は井戸尻Ⅰ式に属する土器片で、37は櫛形文が施される。

3) 縄文時代後期の土器（挿図11-30-32、12-38-40、図版35・38-1）

30は棒状工具による沈線が施文される。暗褐色を呈し胎土に石英、乳白色砂粒を含み焼成はよい。称名寺式併行の上層である。31は頸部片と思われ一条の沈線が横走する。32は無文の口縁部で、口径17cmをもつ深鉢形土器で、器厚は約1cmと厚く、器面に指圧痕がみられる。CE-75グリッドの土器集中区より出土した。挿図12-40は昭和54年度の発掘でBL・M-63グリッドからまともに出て検出された。口縁部に粘



土紐を貼布し、刻みを入れ8の字形に粘土紐を貼布する。治土に1mm前後の砂粒を多く含む焼成はよい。器面内外にヘラ削りの痕がのこる。口縁部はラッパ状に広がり、胴部から底部近くですばまり、底部がやや開く器形をもつと思われる素之内式土器である。

## 4) 石器

127点出土した。その内訳は、石鏃10点、スクレイパー2点、石核状石器2点、ピエス・エスキュー7点、石楯状石器が2点、打製石斧1点、横刃型石器5点、磨石10点、凹石18点、砥石1点、使用痕のある黒曜石69点で、他に黒曜石剥片、原石等が出土している。

## (1) 石鏃 (挿図13-1-10、図版36)

すべて黒曜石製で透明度の高い良質な石質である。基部は抉りの深いもの、浅いもの、平基、有柄の4種に分けられ、側辺線は、直なもの、外湾するものに分けられる。抉りが深いものは直な側辺をみせるが抉りの浅いもの、平基のものは外湾する側辺をもつ。2は他と異なる形態をもち、返し部分の外反する。調整もていねいである。

## (2) スクレイパー (挿図13-11-17-70、図版36)

11は砕質粘板岩、70は黒曜石製である。ともに刃部に簡単な調整が施されているのみである。11の右中央部の後縁には磨耗痕跡が認められる。

## (3) 石核状石器 (挿図13-12・13、図版36)

2点とも黒曜石製である。「中央道報告書—諏訪市その3」千原頭社遺跡において始めて注意された遺物である。2点ともに不特定方向からの剥離が見られ、13は一面に自然面を残している。

## (4) ピエス・エスキュー (挿図13-14-20、図版36)

両端に打撃をうけた時に生じる粗かなつぶれをもち、二方向からの剥離面をもつ。いずれも黒曜石製で、18を抜き、一面、あるいは部分的に自然面が残る。平面形態は長方形を呈するものが多い。19-20は他のものと違い、側辺に切断面と思われる痕跡を残す。

## (5) 使用痕のあるもの (挿図13-21-31、図14-32-44、図版36)

すべて黒曜石製で21-37が剥片、38-43は石核、44は原石の側辺に1~数ヶ所の縦かな刃つぶれ、刃こばれ状の使用痕が認められる。石器全体の54%を占める。側辺につけられたものが大部分を占めるが、37のように先端部につけられるものもあり、直・外湾・内湾と使用痕の形態に三種類があげられる。42・43に見られるよう、使用痕としてではなく、あきらかにスクレイパー・エッジとした方がよいものもある。

## (6) 石楯状石器 (挿図15-45・16-69、図版36・38)

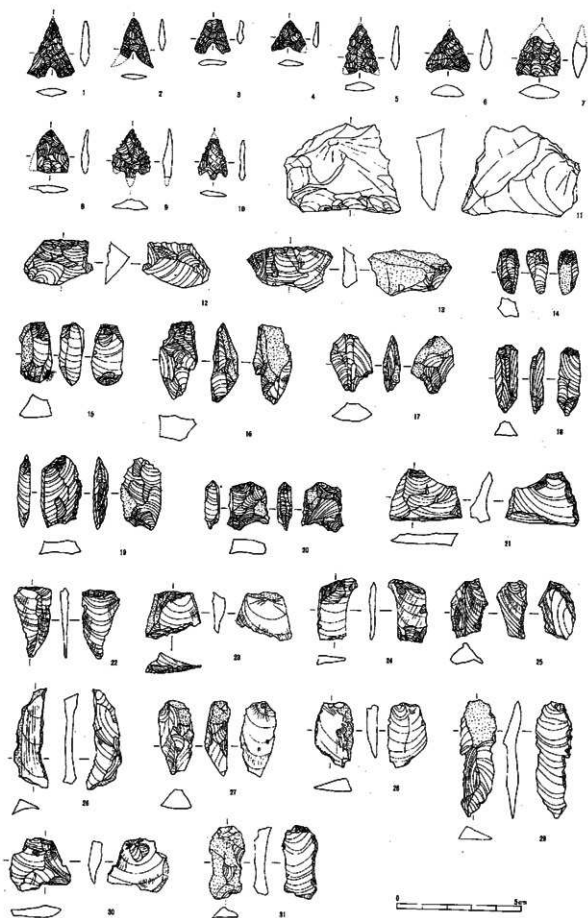
45は粘板岩製、69は珪質頁岩製である。45は簡単な調整のみで作られており、胴部でややくの字状を呈し先端は尖がる。その形状、大きさ等より、石楯もしくは刺突具としての機能が考えられる。69は昭和54年度に発掘されたもので縦長の石匙状の形態をもつ。平板な石材の両側辺にそれぞれ反対面から幅6mm程の調整を加え側縁を形づくっており先端を尖らせている。縄文時代後期に属するものと武藤雄六氏は判断している。

## (7) 打製石斧 (挿図15-46・図版37)

1点のみの出土である。粘板岩製で、身部が中程より厚くなり刃部へと続く。側縁は一方のみからの調整で作られており、刃部には顕著な加工が認められない。

## (8) 横刃型石器 (挿図15-47-49・16-74・75、図版37・38)

49・74が硬砂岩製で、他は粘板岩が用いられている。いずれも刃部は楔形を呈し、背部は丸みをもつが平らである。いずれも直刃をもち、背部も刃部と平行になるものがほとんどであり、中央道調査団での横



挿圖13 御射山西遺跡出土石器実測図(1:5)

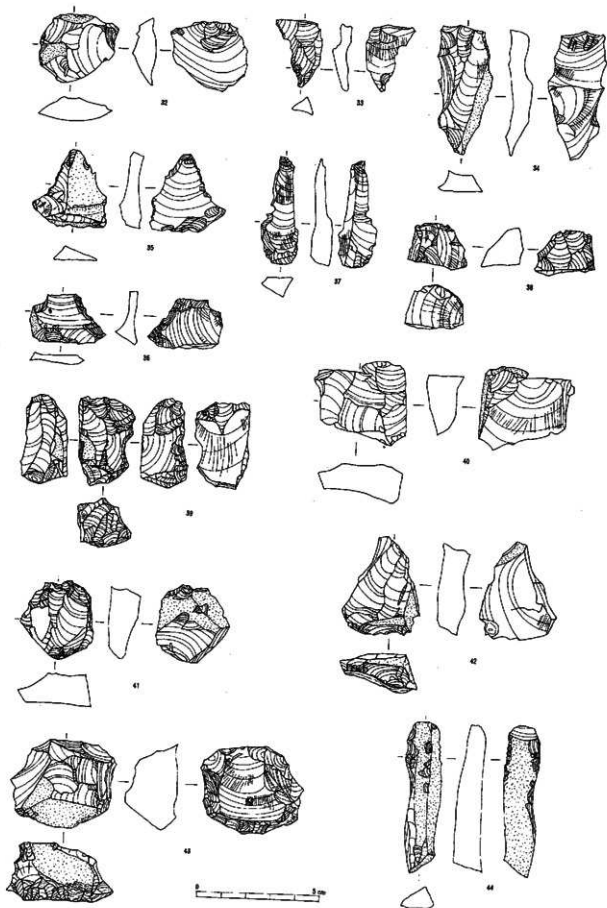
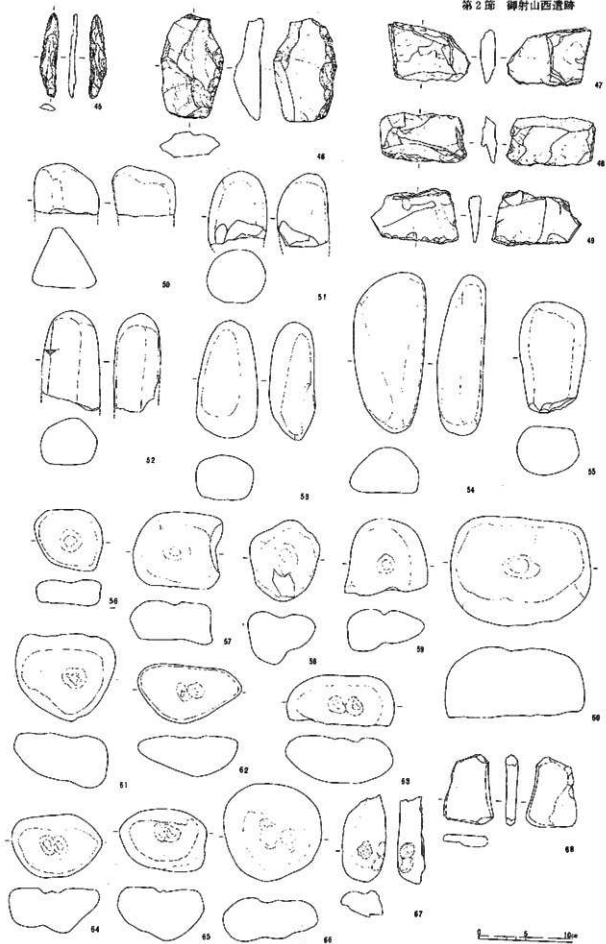
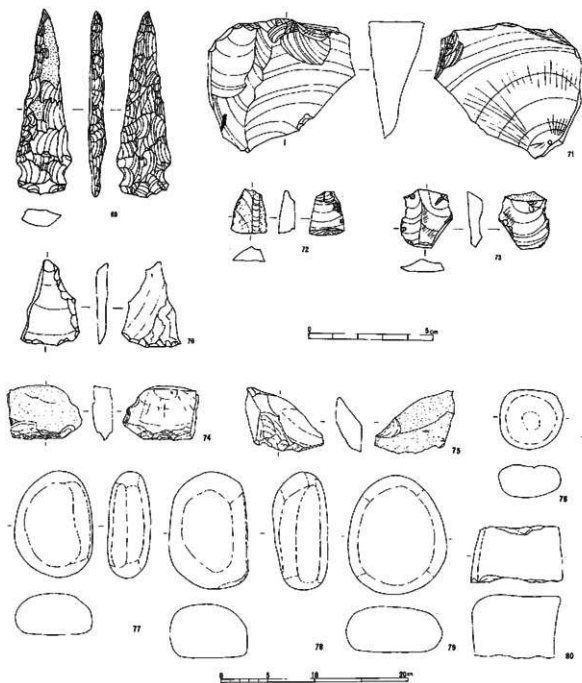


插图14 御射山西遺跡出土石器実測图(1:1.5)



挿図15 御射山西遺跡出土石器実測図(1:4)



採図16 御射山西遺跡出土石器実測図 (69~70, 1 : 1.5, 74~80, 1 : 4) (昭和54年発掘)

刀型石器の形態分類、I B類に属する。

(9) 磨石 (採図15-50-55・16-77-79、図版37・38)

52の硬砂岩製のものを、他はすべて輝石安山岩製である。早期に特徴的に見られる断面三角形を呈すいわゆる特殊磨石は50のみであり、他は自然礫が用いられ、側面・平面に磨痕が認められる。80は平板石皿としてとらえられている。

(10) 凹石 (採図15-56-67・16-76、図版37)

すべて輝石安山岩製である。凹みが表裏に、1 : 0、1 : 1、1 : 2、2 : 2、とバラエティに富む。凹みの直径は2cm内外でほぼ一定しているが、深さは、わずかに凹むものから最高7mmまでで、平均3~5

mm程度である。平面形は色々で、転石を任意に使用しており統一性はない。67は他の円石と違い、鋭角なものでついた痕跡が上面に1、側面に2ヶ所見られる。中央道路線内の岡谷市船委社遺跡からこれと同じつけられ方をしたものが打製石斧にあり、いわゆる凹石とは別種の使われ方をしていたものと思われる。

#### ⑩ 砥石（押図14-68、図版38）

安山岩製で厚さ1cmの平板な自然石を用いている。表表面と側面を全周する磨痕跡が認められるが、特に側面の磨耗が顕著で、図の左側面は約3mm程内湾し使用の多さをあらわしている。大きさ、形状から固定させて使用したものでなく、おそらく手をもって使用されたと思われる。

## 5 まとめ

御射山西遺跡の中心部は、御射山沢に沿って小さく張り出す二つの尾根上部にあり、縄文時代早期の人々の生活址としてとらえることができた。その規模は小さく、20m四方程度の範囲で2ヶ所に認められる。その1つであるE地区の生活址には、大小の集石が7基、七蓋1基とともに、楕円押型文と無文土器が散在しており、尾根縁に陥し穴がある。F地区の生活址では土塊18基、集石4基と山形押型文、無文土器が発出された。数は少ないながら石器の致種類と、黒曜石片も検出された。おそらく御射山沢での漁撈、東に広がる広大な地域での狩猟・採集等のための生活の跡であろう。

土塊1号・16号は陥し穴としての機能をもっていた遺構である。早期土器片が上面より検出されていることも考えれば、おそらく同時期か時間的に若干の差がある範囲で掘られたものと考えられる。御射山沢をへだてた北側の尾根には、頭蓋状遺跡があり、本址が利用される以前の押型土器（立野式・沢式など）等が発掘され、縄文時代早期の生活址としてとらえられている。その意味でいえば、本址の陥し穴は頭蓋状遺跡の人々が利用したことも考えられよう。全面発掘でないため2基のみの発見であったが、おそらく御射山社附近から伸び、手洗沢遺跡へと続く広大な尾根上にもっとたくさんの陥し穴が設けられていたに違いない。陥し穴は普通けもの道に作られると聞く。1号・16号の土塊は、生活址の範囲内に位置しており、生活址が使用された時期に同時存在していたものと思われたい。おそらく時期的に違う場所に設けられていたことも考えられよう。

52基というたくさんの数が検出されたロームマウンドについてはその性格をつかむことはできなかったが、風の方向とはほぼ直角に交わる長軸をもったマウンドが多いことが、不備な資料からではあるが推測できる。風に対し直角のマウンド部は風倒木の根が持ちあげたロームが崩れ落ちた後にできた層であると考えると同時に、その数の多さから他の説は満足させられない。発掘面積から割り出せば、100mに1基のロームマウンドがあり、それをこの尾根上の面積に単純にあてはめれば、実に400～500基の数があつたことになる。同時期にできたものとは思えないながら、その数は多すぎるからである。まだまだ資料不足、検討不十分であり速断はゆるぎないが、この地は豊かな森林が広がり、その所々に縄文時代の各時期を通じて人々が、狩猟・採集のためのキャンプを張っていたと考えたい。今後花粉分析等も行ない、当時の自然環境の復元をしていけば、ロームマウンドの性格もはっきりとつかめることができよう。しかし、ここで試みた風向との関係も不備な点が多くほとんどであり、他地域との比較もなされていない。地域差も考えられ、一様な結論づけができようはずもない。今後課題をのこしたまま、さらに比較検討を続けていきたい。

遺跡地内を走る断層としては、中央道用地内の諏訪市荒神山遺跡が報告されている。本址もその一例となるであろうが、断層の起った時期をはっきりと決める資料に乏しいのは残念である。

本報告にあたり、快く資料をお貸しいただいた気象庁諏訪測候所、ご指導、ご協力をいただいた富士見町教育委員会、武藤雄六氏にお礼申し上げます。

## 第3節 手洗沢遺跡 (STAB)

## 1 位置 (挿図1、図版39)

手洗沢遺跡は、諏訪郡富士見町御射山神戸にある。前節で報告した、御射山西遺跡が立地する尾根の南斜面にあり、位置・環境については前節1の本文中に含めたので割愛する。本遺跡は、昭和48年度に本線部分の調査がなされ、昭和48年『中央道報告書—諏訪富士見町の1—』で報告されているので参照願いたい。

## 2 調査の経過

昭和53年10月11日、頭殿沢遺跡の測量・写真を残し二巻編成で一巻は御射山西遺跡E・F地区、一巻は手洗沢遺跡の調査に着手した。8月末までにグリッドの設定を終了してあったので、昭和48年度に発掘された平安時代住居址の広がりや道うたみ、直ちに南斜面の発掘に着手した。しかし、住居址の検出はできず、わずかに平安時代の杯破片数点を検出したのみで、他に溝状遺構を、海拔960mラインで二本、尾根の上縁で一本検出したのみであった。10月23日、南斜面の調査を断念し、尾根上部の平坦地の調査に着手した。すでにバックフォードで表土下30cmまでを除去してある85・86と98・99各ライン、南北のFX-Y、GK-G-Lラインを掘り下げる。住居址の検出はなく、遺物もわずかに認められるのみで、GK-L-95・96グリッドで土壌1基を検出した他は22基のロームマウンドが検出されただけである。11月5日、土壌3号の測量を終へ、発掘したロームマウンド5・6・15・16号の4基の測量、写真撮影を11月13日終了させ、手洗沢遺跡の調査のすべてを終了した。なお、遺構番号は昭和48年度の遺構番号を引きついで、土壌は3号より、溝状遺構は2号より、ロームマウンドは4号からそれぞれつけた。

## 3 遺構

本址より検出された遺構は、尾根の南斜面より溝状遺構2、尾根上の平坦部より土壌1基、溝状遺構1とロームマウンド22基である(図1)。以下それぞれについての発掘所見を概述する。

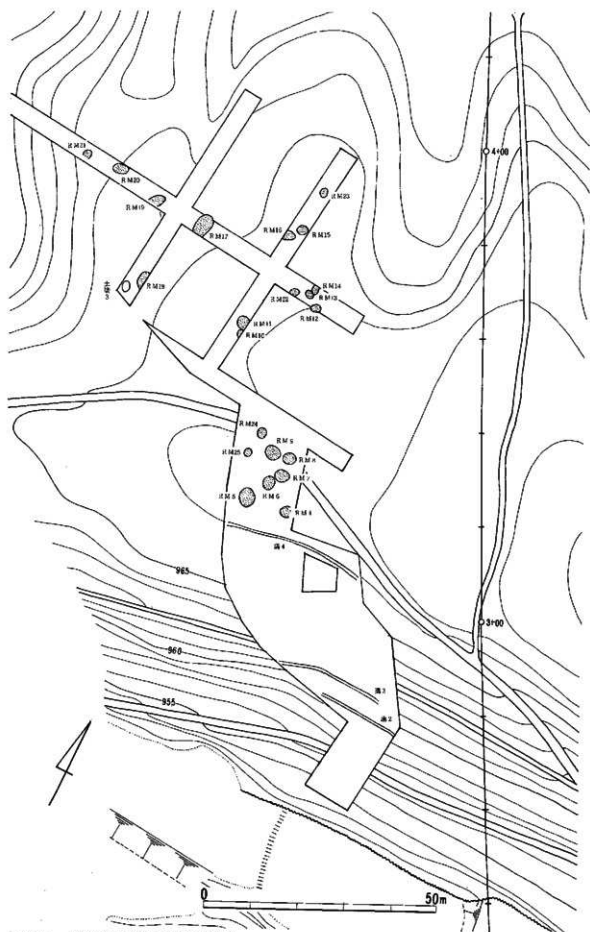
## (1) 土壌3号 (挿図2、図版39)

尾根上の平坦部が西方へ傾斜していく縁の部分に、長軸をほぼ北に向け検出された。2.3×1.2m、深さ65cmの規模をもつ楕円形の土壌である。底径は2.1cmで、断面逆台形を呈しており、覆土は自然堆積を示し、土壌底部へ壁にそって黄褐色土が落ち込み、次に黒褐色土が、最後に黒色土が落ち込んでいる。土壌検出面、及び覆土最上層より6点の土器片が検出された。いずれも縄文時代中期九共衛尾根I式土器で土壌に附随したものとは思われないが、本址はそれ以前に構築されたものであろう。近くに人の居住した痕跡もなく墓塚の可能性は薄い。おそらく御射山西遺跡で検出されたと同様の陥穴としてとらえたい。

## (2) 溝状遺構 (挿図1)

3本検出された。内2本は南斜面に、1本は尾根上縁部に、等高線に沿って東西の方向に走っている。溝2は昭和48年度に検出された溝1とつながると思われる。いずれも幅50cm、深さ20cmで、斜面の下辺に落込部はなく斜面へと続く。覆土最下層に砂質層が若干認められる。伴出遺物はない。

## (3) その他の遺構

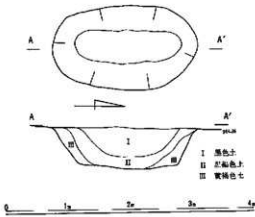


(挿図1 手洗沢遺跡遺構配置図 (1:800))



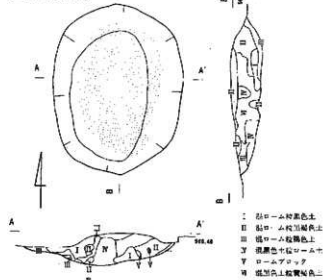
第二章 調査遺跡

土坑3号



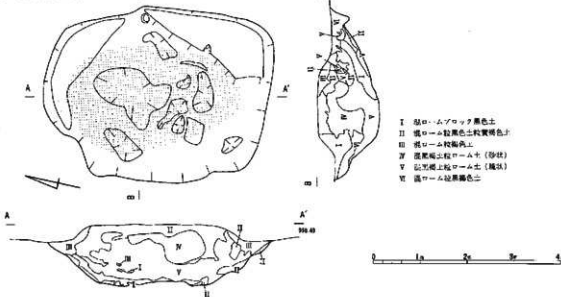
I 黒色土  
II 赤褐色土  
III 黄褐色土

ロームマウンド6号



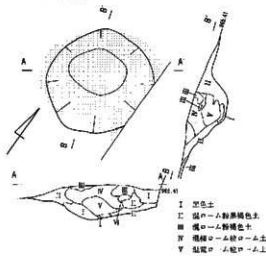
I 灰ローム状黒色土  
II 灰ローム状黄褐色土  
III 灰ローム状褐色土  
IV 灰褐色土にローム土  
V ロームアゾップ  
VI 埋込瓦上段黄褐色土

ロームマウンド5号



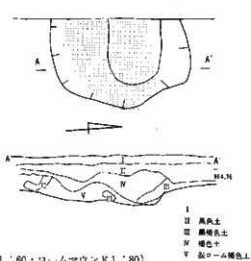
I 灰ロームアゾップ黒色土  
II 埋込ローム状黒色土に黄褐色土  
III 埋込ローム状褐色土  
IV 埋込褐色土にローム土(砂状)  
V 埋込瓦上段ローム土(塊状)  
VI 埋込ローム状黄褐色土

ロームマウンド15号



I 黒色土  
II 灰ローム状黄褐色土  
III 埋込ローム状褐色土  
IV 埋込ローム状ローム土  
V 埋込ローム状ローム土

ロームマウンド16号



I 黄褐色土  
II 赤褐色土  
III 褐色土  
IV 埋込ローム土

挿図2 手洗沢遺跡 土坑・ロームマウンド実測図(土坑1:60・ロームマウンド1:80)

ロームマウンド22基がある。すべて尾根上の平坦部より検出され、斜面には皆無である。22基のうちの4基を発掘調査し、他は平面プランのみ確認した。

ロームマウンド5号は、3.6×2.3 m、高さ30 cmのマウンド部と、4.3×3.7 m、深さ96 cmの下部壕をもつ。マウンド長軸はN15°Wを指す。マウンド部は上面に黄褐色土がのり、下部壕底部まで黒褐色土を含むブロック状のロームが堆積する。マウンドの周縁からローム粒、ロームブロックを含む黒色土、褐色土が入り込んでいる。ロームマウンド6号は、2.9×1.8 m、高さ21 cmのマウンド部がN1°Wとほぼ磁北を向き、下部壕は3.6×2.8 m、深さ45 cmを測る。マウンド部は黒色土粒を含む黄褐色土が主体をなし、北方向よりローム粒を含む黒色土、黒褐色土、褐色土が多量に入り込んでいる。ロームマウンド15号はほぼ円形を呈し、マウンド部が下部壕より広い範囲を占める。マウンド部は1.7(以上)×1.5 m、高さ20 cm、下部壕は2.2×1.8 m、深さ50 cmの規模をもつ。黒色土、黒褐色土の入り込みは大きく、下部壕底部にまで及ぶ。東・北方向からの落込みが大きい。長軸はN70°Eを指す。ロームマウンド16号は半分程発掘したのみである。ロームが多量に混じる褐色土のマウンドがあり、褐色土が北側より入り込む。マウンド部1.9(以上)×1.8 m、高さ17 cm、下部壕1.9(以上)×2.9 m、深さ28 cm。長軸はN88°Eを向く。

#### 4 遺物

##### 1) 縄文時代の遺物

手洗沢遺跡より出土した縄文時代の遺物は、前期・中期・後期に属する土器片、石鏃、スクインバ、横刃型石器、磨石があり、裂片等を含めても72点と少ない。

##### (1) 縄文時代前期の土器 (神図3-1・2、図版40)

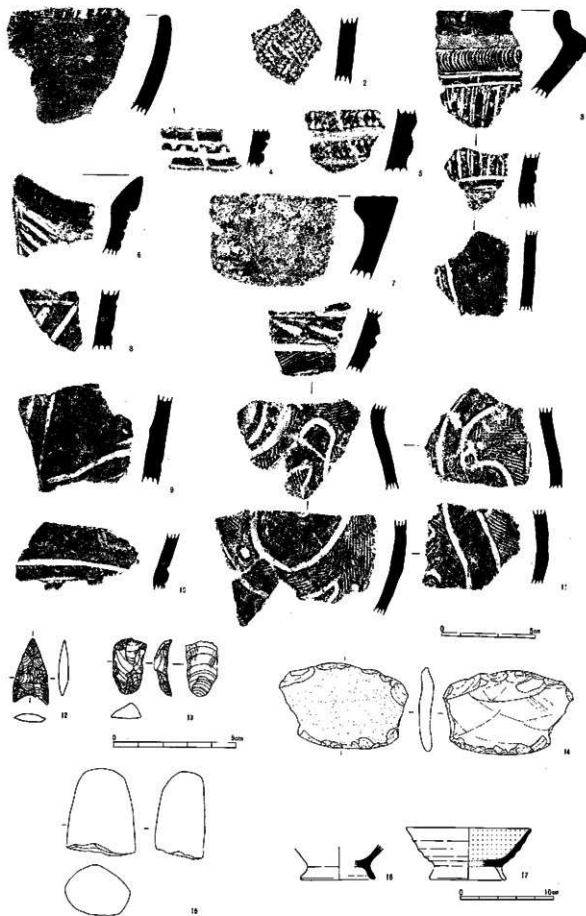
1は無文の深鉢形土器の口縁部で、口唇部にはへら状工具により刻み目がつけられている。胎土には石英粒、雲母粉を中程度含む焼成は非常によい。器面には指によると思われる横ナデの痕が残し、裏面はへらによる横ナデの痕が見られる。2は胴部破片で、左磨りの縄文が施される。胎土には小さな石英粒が中程度含まれる。焼成は非常によい。表面にはへらによる横ナデ痕が見られる。

##### (2) 縄文時代中期の土器 (神図3-3~7、図版40)

3は深鉢形土器のくの字状に折れ曲る口縁部と、それに続く胴部から底部近くの破片2片で、無文の口唇部に焼き半截竹管による爪形文が幅1 cmで横走り、その下へ幅1 cmの半截竹管による二条の沈線がつけられ、さらに、縦方向へ平行し密接する平行沈線が施される。胴下半は、横走る二条の沈線で区切られ、底部近くは、二条から数条の平行沈線が縦方向に施される。胎土中に雲母が多量に入れられ、石英粒が中程度混入されており焼成は非常によい。九兵衛尾根I式の土器で、上瀬3号の周周及び覆土中より検出された。4は棒状工具により交互に刻み目が入れられ、上下を粘土紐で横定する。5は二条の粘土紐上に半截竹管による爪形文がつけられる。6は液状口縁部の破片で半截竹管による平行沈線が斜めにつけられている。胎土には微細な砂粒と雲母が若干含まれている。7は深鉢形土器の無文の口縁部で、胎土に石英粒を多く含む。4・5は九兵衛尾根I式、6・7は井戸尻III式に属する。

##### (3) 縄文時代後期の土器 (神図3-8~11)

8・9は棒状工具により沈線が施される。胎土には石英粒が中程度と雲母が若干含まれる。焼成は非常に良く堅い。両者とも内面に横ナデの痕が残る。9の表裏にはススの付着がある。称名寺式土器と思われるが、8は骨利V式であろうか。10は頸部片で、二条の沈線が横走る。表裏面に横ナデ痕が残る。胎土に若干の石英粒を含み、焼成はよい。11は甕之内式土器で、胴部破片のみ20点近くがFL-103・104グリッドより検出された。口縁部近くに、幅1.3 cm程の粘土紐上を棒状工具により斜め方向に凹みが入られ、胴部には地文に縄文を施し、沈線により面し磨消部を作っている。所々に円形の刺突がある。胎土に



挿図3 平洗沢遺跡出土土器拓影、石器尖側圖（1～11-1：2,12-13-1：1.5,14-17-1：4）

石英粒が混入され、表面は黒褐色を呈する。内面はていねいなミガキがなされ光沢をおびている。

#### (4) 石器 (採区3-12~15、図版40)

12の石錐は黒曜石製で、長さ2.6cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.2gを計る中形品である。基部の切りは浅く、側縁は外湾する。13はいわゆるサムエンドスクレーパー状を呈す。刃部には細かな調整痕が見られる。縦はぎの剥片が用いられ、肩部は湾曲する。長さ2.2cm、幅1.2cmの小さなもので、透明で良質な黒曜石製である。14は横刃型石器で、厚さ1.4cmの一面に自然面を残す平板な硬砂岩が用いられ、刃部と背部に簡単な剝削が加えられているのみである。長さ9cm、幅13.6cm、重さ254g。15は磨石の半欠品で現長9cm、幅7.4cm、厚さ5.3cmを計る。硬砂岩製で、両側面に磨かれた面が残る。他に黒曜石片16点が検出されたのみである。

### 2) 平安時代の遺物 (採区3)

平安時代の遺物は、土師器杯片7点、黒色土器片3点が検出されたのみである。採区3-16は土師器杯底部で底径8.4cmを計る。明黄褐色を呈し胎土中に石英粒が若干混入される。焼成はよい。右回転のログロで成形され、全面に横ナデの痕が見られる。EO-122グリッド出土。17は内面黒色土器杯で、高台部を欠き、底部3分の1、胴-山縁部が5分の1個体からの復元である。ES-111グリッド、ルーム直上の漸移層より検出された。胎土に石英他の砂粒を中程度含み、焼成は余りよくなく風化が進んでいる。内面は黒色研磨されているが、ていねいではない。器外面に水びき痕が残る。両杯とも平安時代後期に属するものである。他に平安時代にかかる遺物の出土はない。

## 5 まとめ

当初期待されていた高斜面一帯からの平安時代住居址の検出はなかった。48年度発掘の1号住居址より上流120mに、住居址南面が道路切通しにのぞいていたことを考えれば、集落は尾根東へと続いているものと思われる。斜面下に良があり、東の上下に住居が展開しているとの期待もあったが、斜面が急すぎるためであろうか。いずれにしても斜面上への住居の構築等より、多数の住居によって集落が構成されていたとは思わず、多くて7~8軒程度の規模と思われる。ルームマウンドが所在する平坦地は御射山西遺跡と同一平面であり、各期にわたって狩猟・採集等の後背地としてとらえることができ、土壌3号の存在と、各期にわたる土器片の点在がそれを裏づけていると考える。御射山・御射山中の両遺跡の位置から、おそらく縄文期の集落は、尾根の東方に営まれていたのであろう。

#### 参考文献 (第2・3編分)

- 『新ヶ丘』 新ヶ丘遺跡調査団 1973
- 【資料】 尖石考古博物館 1966
- 【よせの台】 長野市教委 1978
- 【縄久保遺跡の調査】 長野県大河村教委 1976
- 沢田実則『縄文器型文遺跡』『石器時代』2 1955
- 松沢正生『縄久保遺跡の器型文』『石器時代』4 1957
- 松島道『長野県立野遺跡の考古学上』『石器時代』4 1957
- 武蔵雄六『所謂“ルームマウンド”に就いて』『山麓考古』3 1975
- 今井啓爾『縄文時代の掘穴と民俗誌上の墓所の比較』『物質文化』27 1976
- 宮沢貞、今村康博『縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題』『調査研究集録』1 1976
- 【中央道報】 昭和46年~52年
- 松島義孝・伴信夫『糸魚川一帯縄文遺跡の活動によって定られた深沼河南京津の縄文住居』『第9回研究』18-3 1979

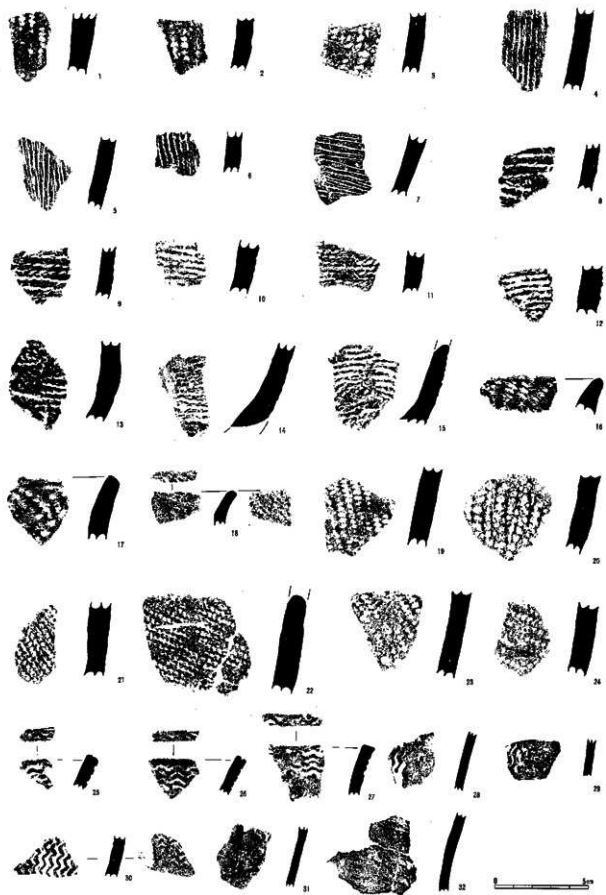


图1 類聚坑遺跡の土器拓影圖（早期I—III群）



图2 頭戴狀遺跡七器拓影图(早期IV·V群)

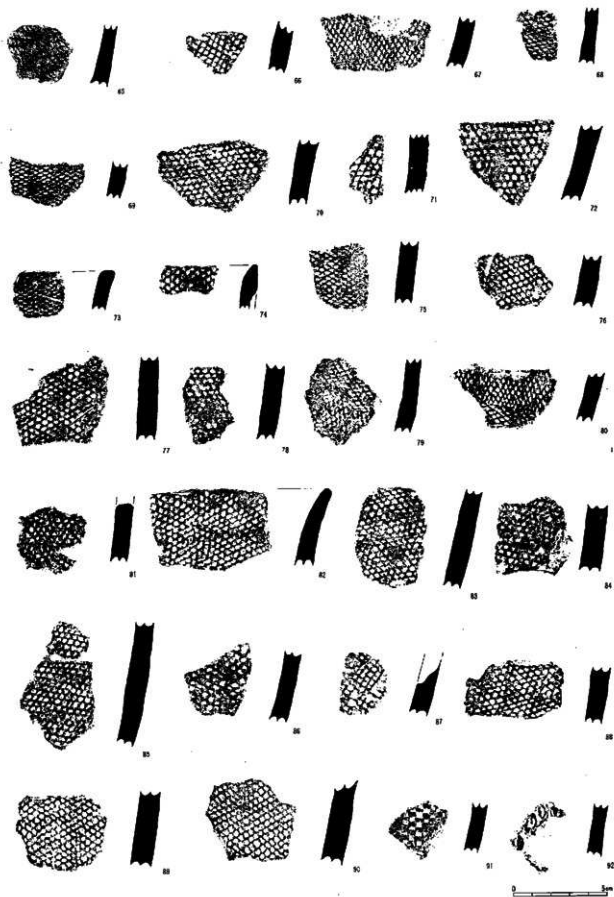
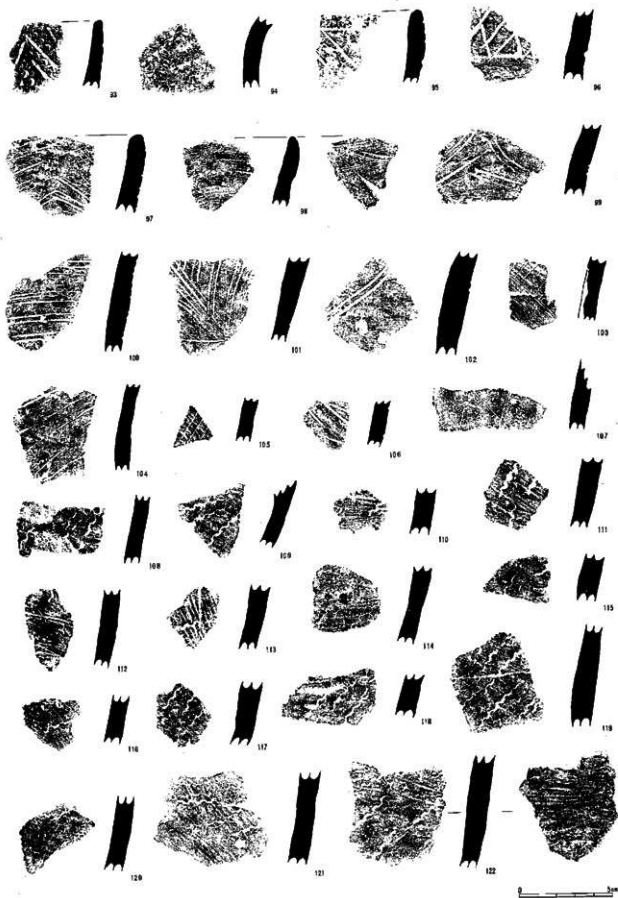


图3 瓦城沢遺跡土器拓影图(早期Ⅳ・Ⅴ群)





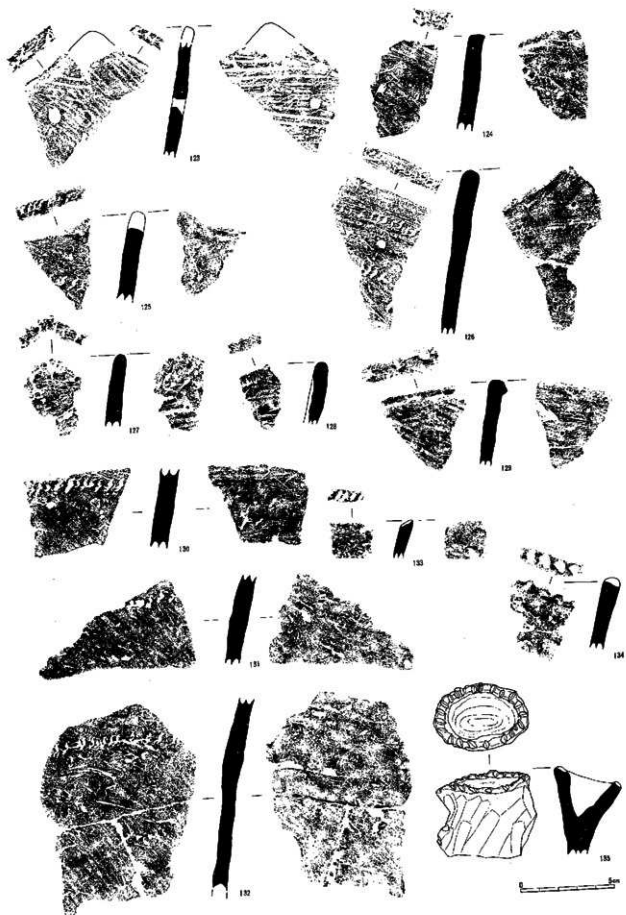


図5 須賀沢遺跡土器拓影図（早期Ⅳ～Ⅴ群）

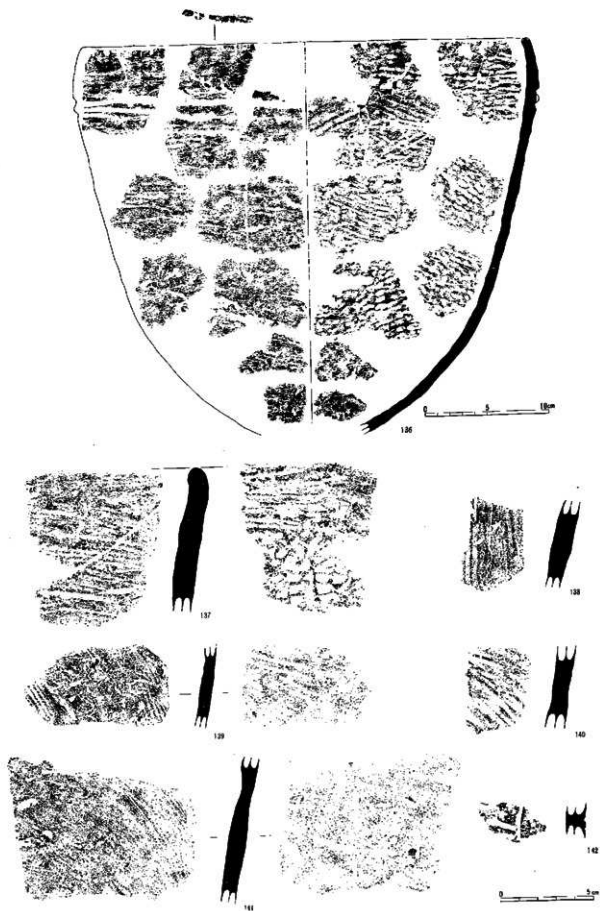


図6 頭載沢遺跡I: 器拓影図(早期Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群)

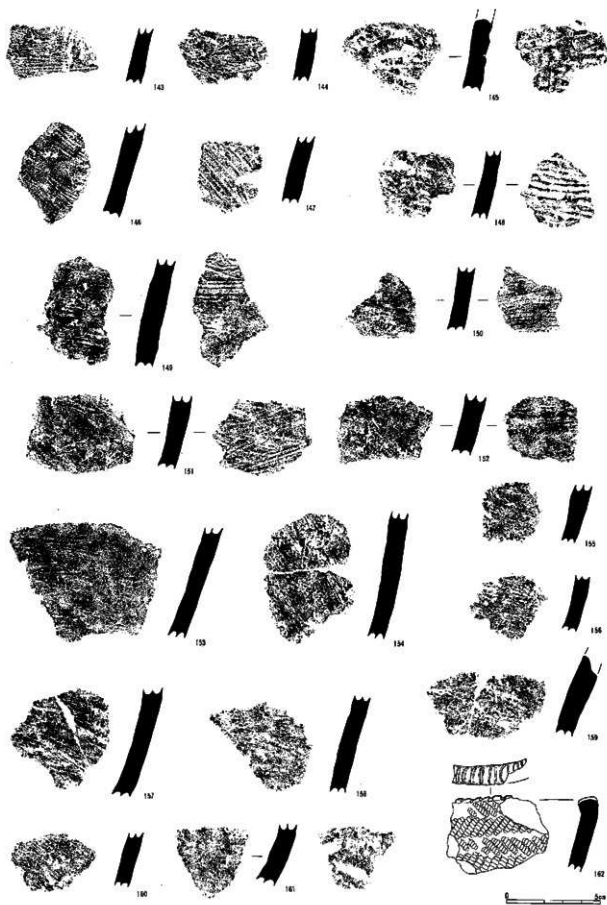


图7 颍颥河遗址出土器影图(早期·中期·XIV—XVI期)

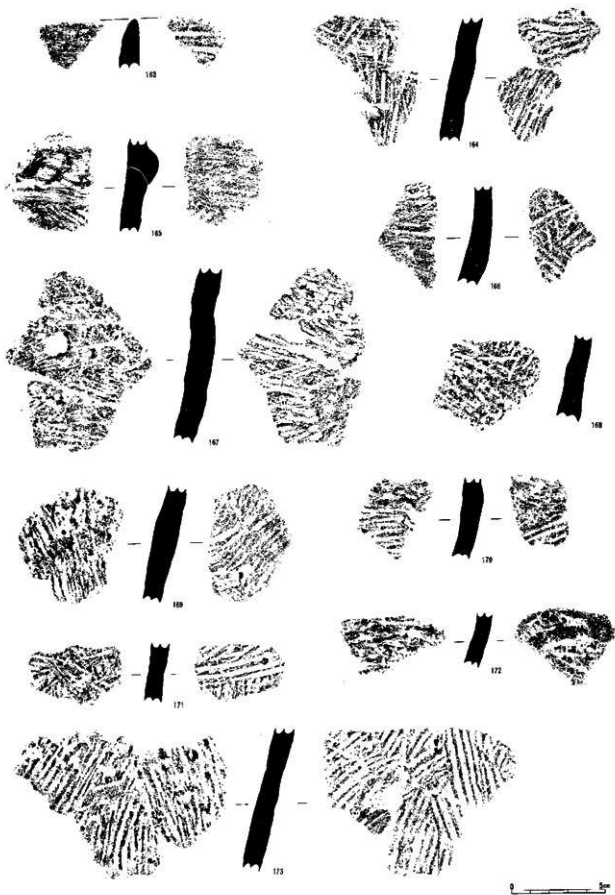


图8 瓊崖漢墓出土銅鏡拓影区(早期XIII群)

5号・10号・11号・12号住居址

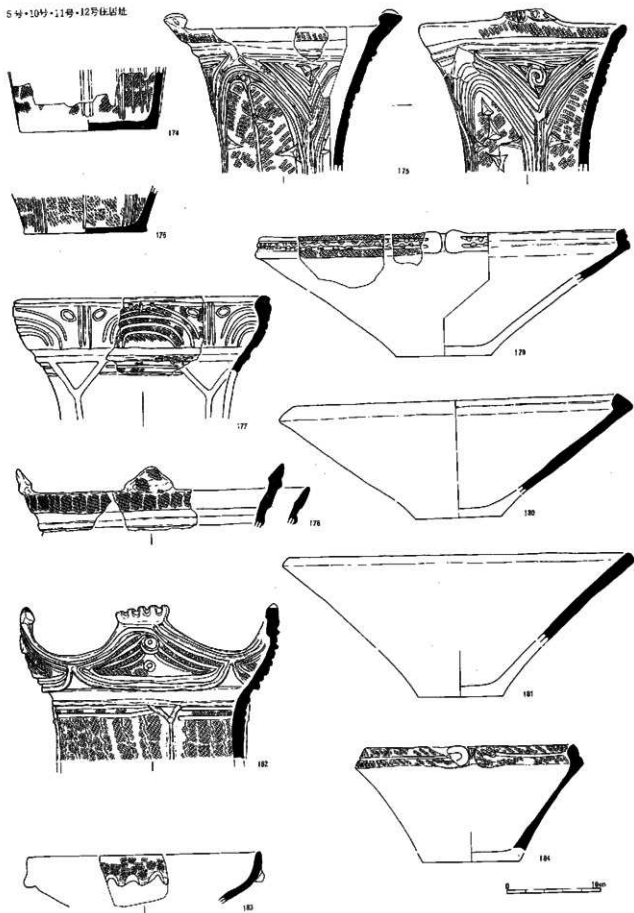


图9 頭取沢遺跡土器実測図(中期40号 5・10・11・12号住居址)

12号・14号住居址

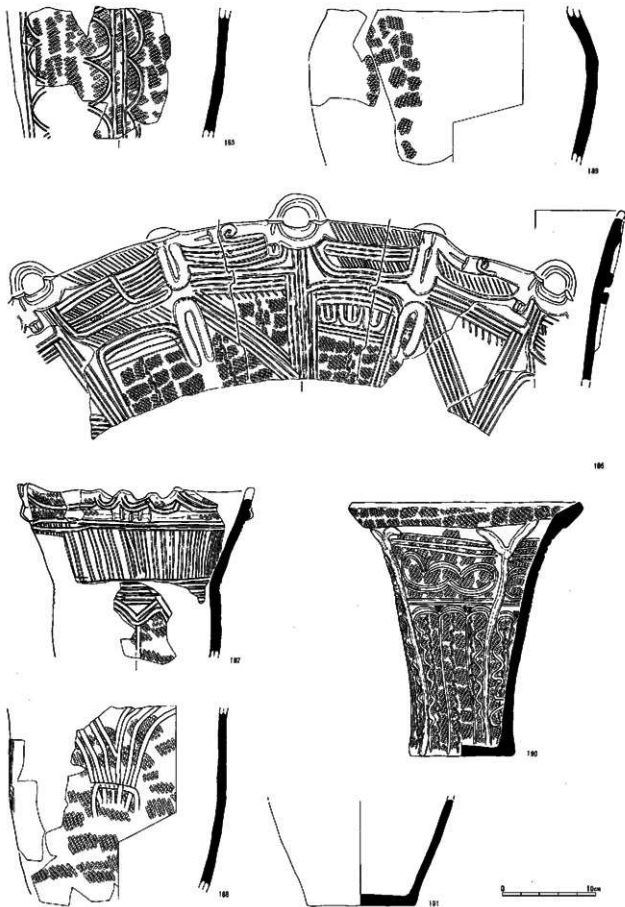


図10 頭巖沢遺跡出土器実測図（中期銅器 12・14号住居址）

14号・15号住居址・上横・遺構外

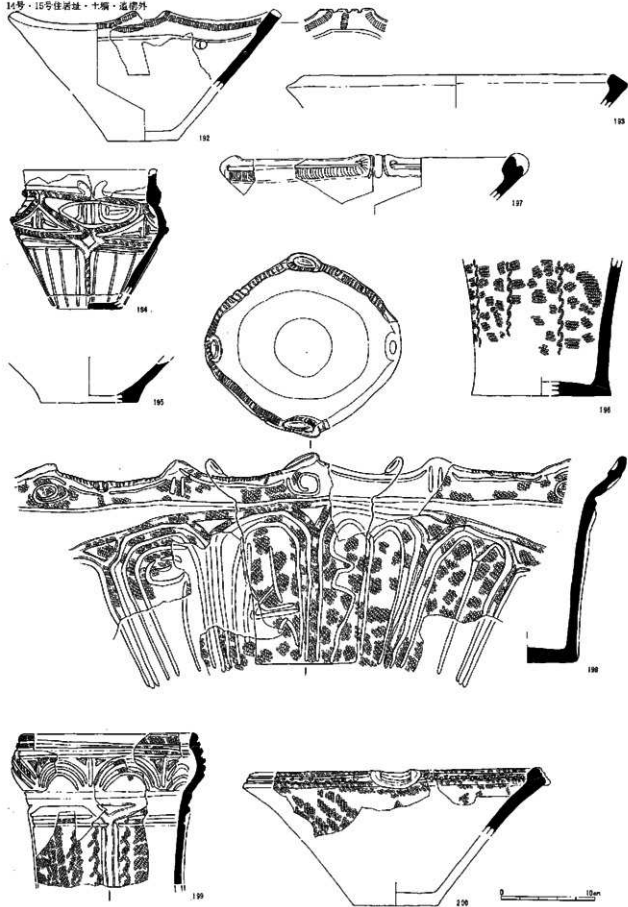


図11 須賀沢遺跡土器実測図（中期勿羅 14・15号住居址・上横・遺構外）

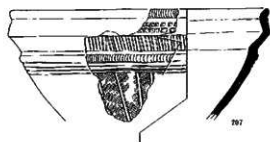
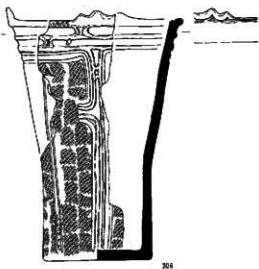
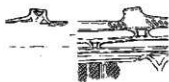
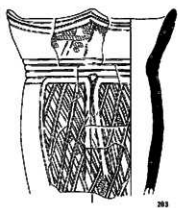
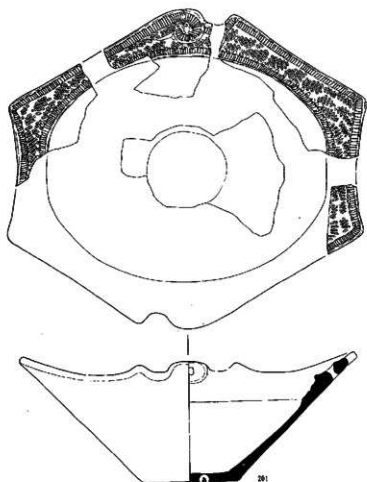


圖12 頭版式遺跡土器実測図(中勢初版 上境・遺構外)



流纹外

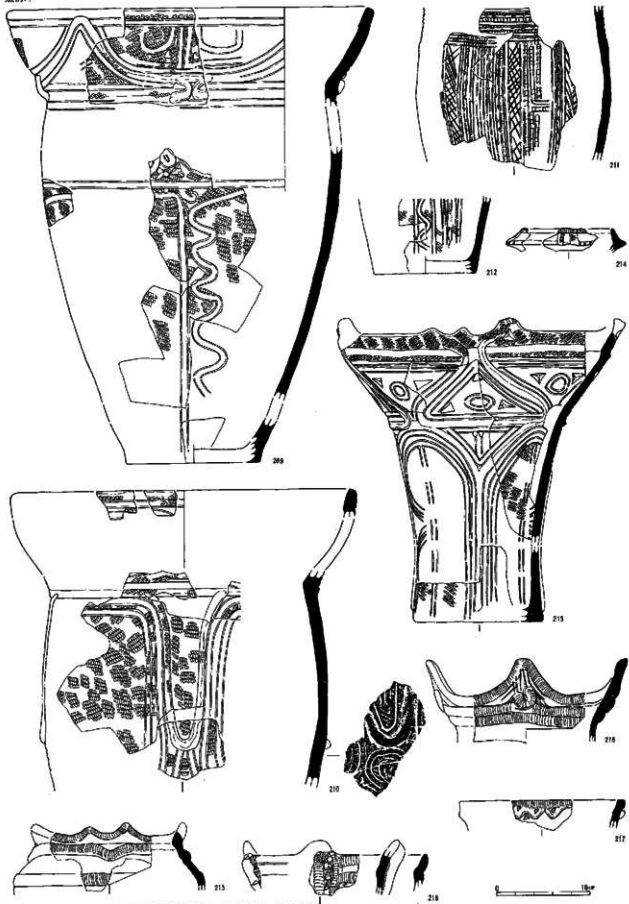


图13 新石器时代陶器尖刺图（中为初形 流纹外）

遺構外

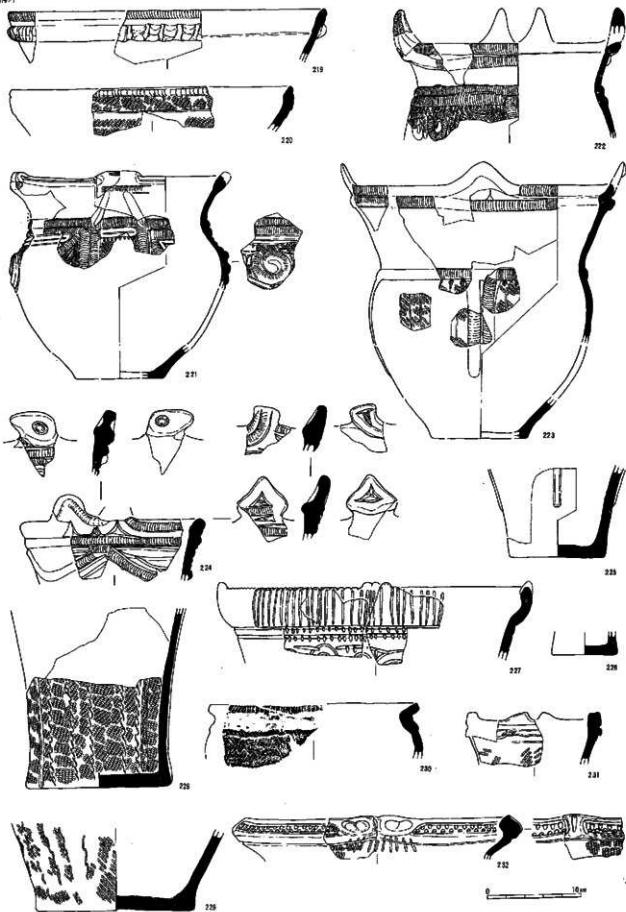


图14 頭藏泥遺跡I: 盤庚測區(中期中初級 遺構外)

遺跡外



图15 頭藏狀遺跡土器尖刺圖(中端杯頭 遺跡外)

遺構外・3号・4号住居址

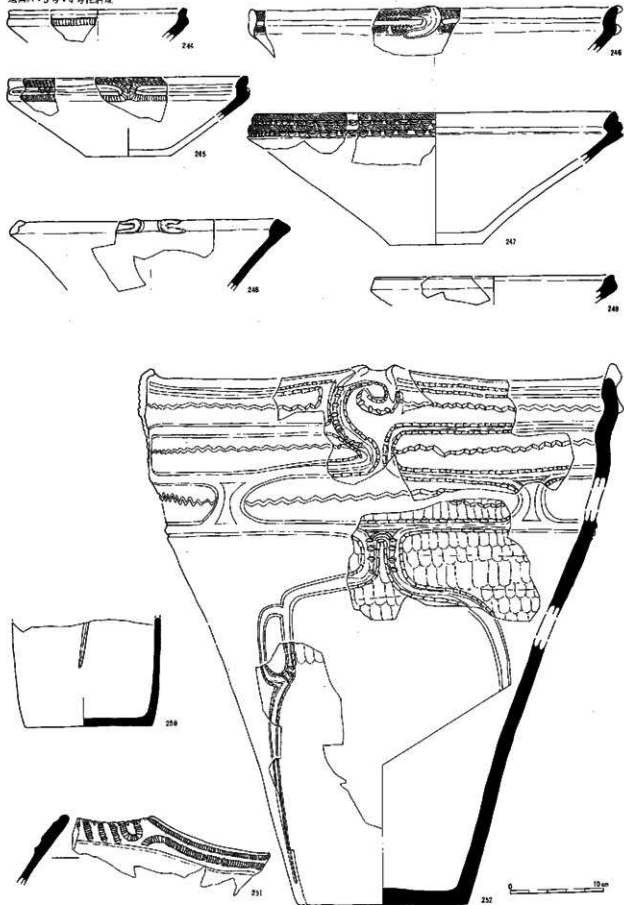


図16 頭城沢遺跡土器実測図（中期前期 遺構外・中期中葉 3・4号住居址）

4号・9号住居址

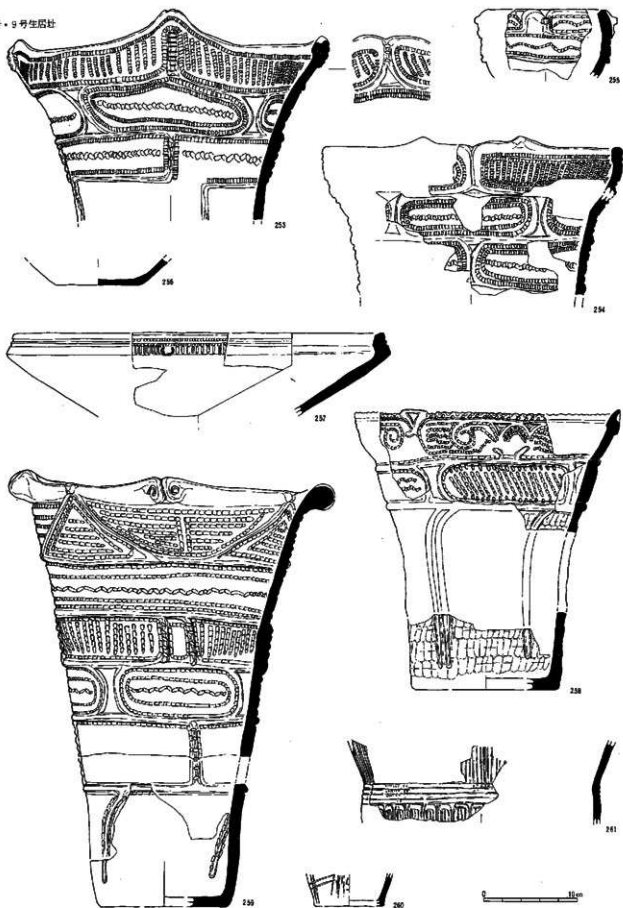


图17 須成沢遺址土器実測図（中期中葉 4・9号住居址）

三編・墓石・遺構外

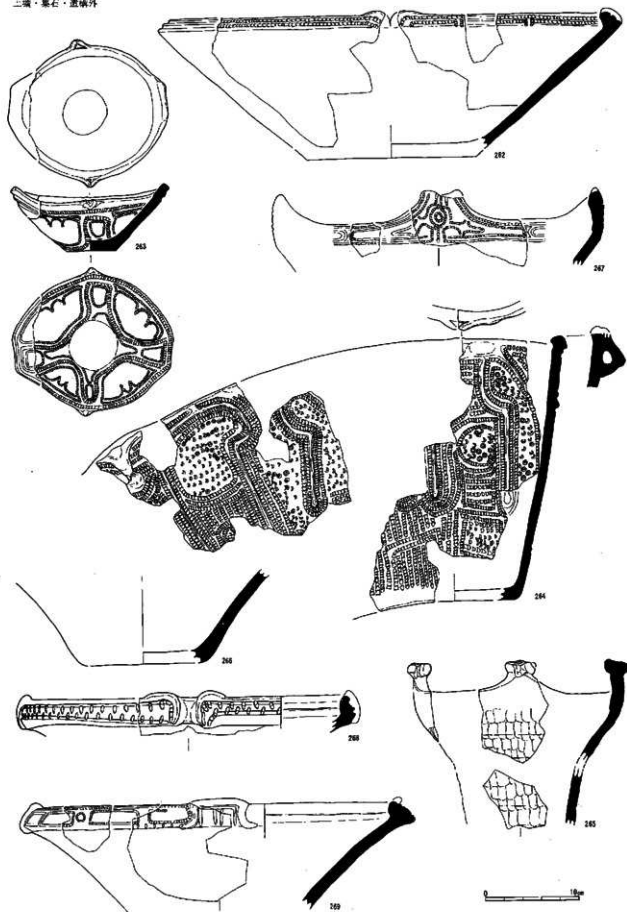


图18 明殿汉墓跡出土器类测图(中期中葉 土质·墓石·遺構外)

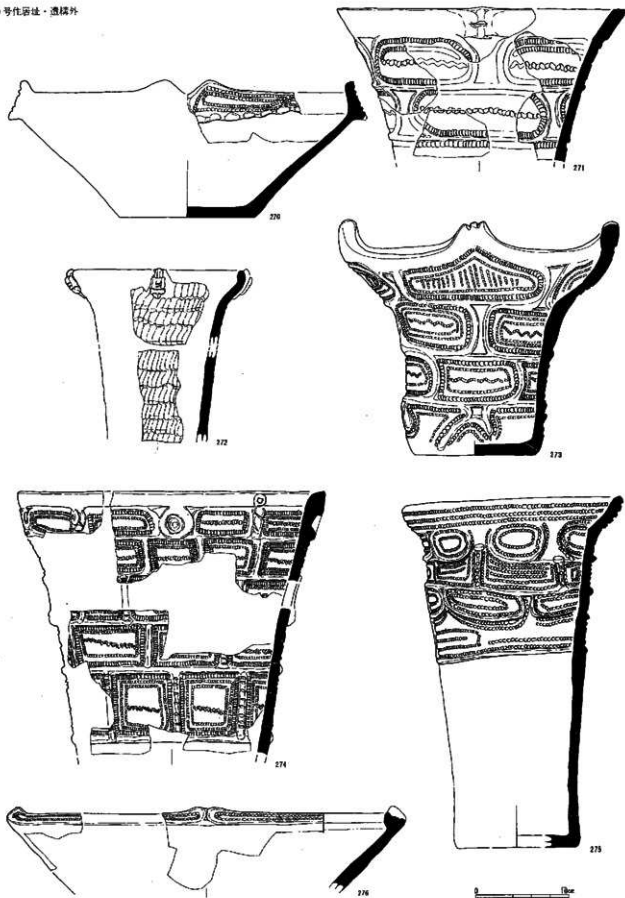
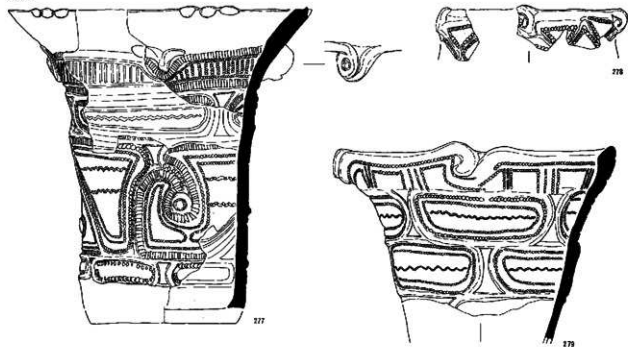


圖19 頭取沢遺跡土器実測圖（中塚中裏 9号住居址・遺構外）

遺構外



(後期)

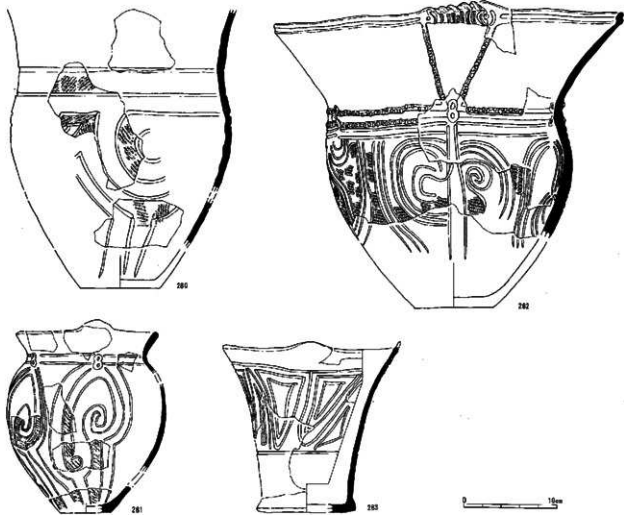


图20 頭紋式遺器土器実測図(中期中葉・後期 遺構外)



3号住居址



5号住居址



10号住居址

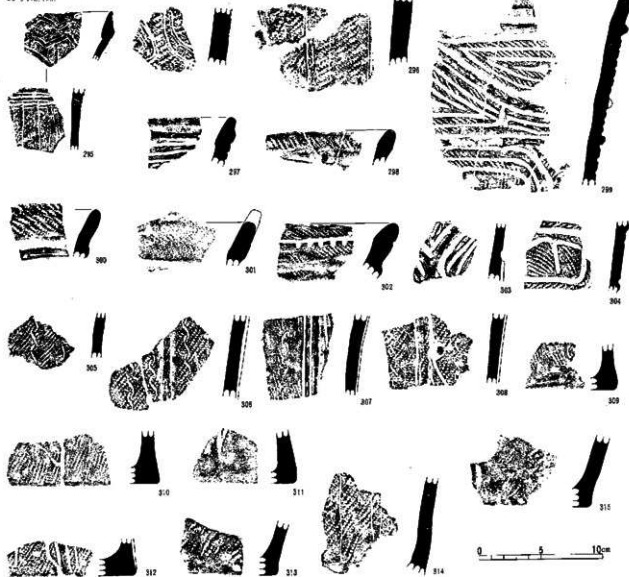
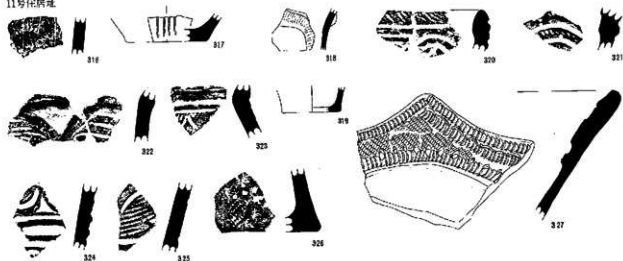
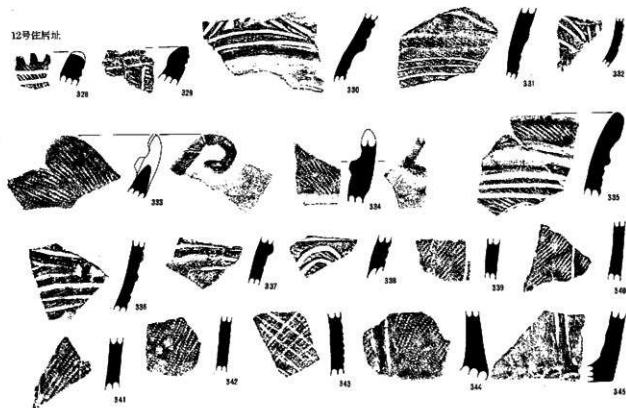


図21 頭取沢遺跡土器拓影図(中期初頭 3・5・10号住居址)

11号住居址



12号住居址



14号住居址

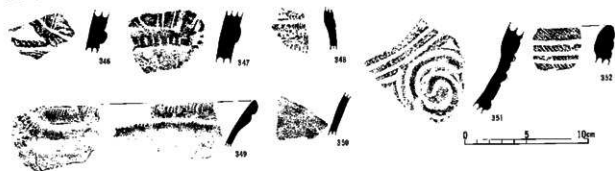
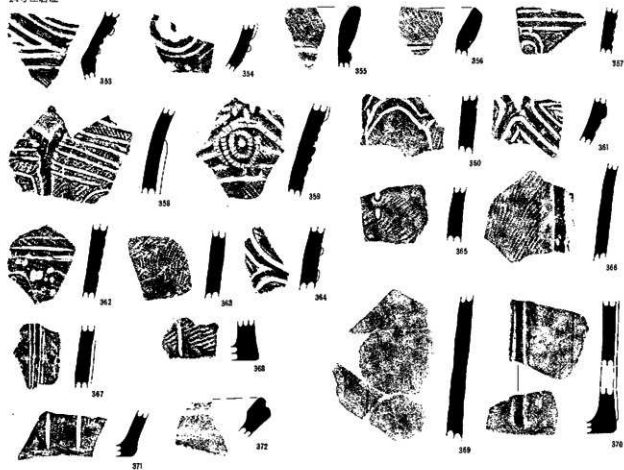


图22 頭戴式遺跡土器拓影図(中期初頭 11・12・14号住居址)

14号住居址



15号住居址

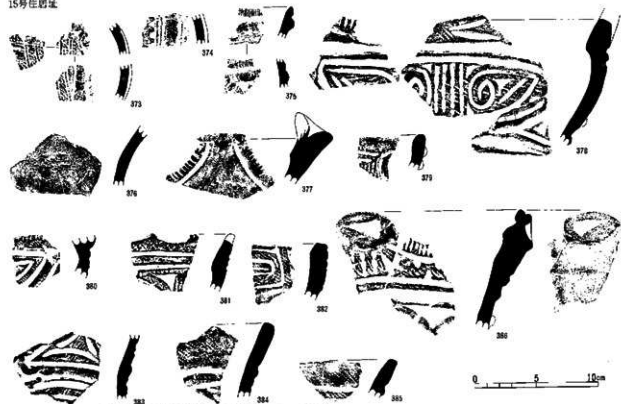


图23 河套河遺跡I:器物影区(中期初頭 14・15号住居址)

15号住居址



4号・9号住居址

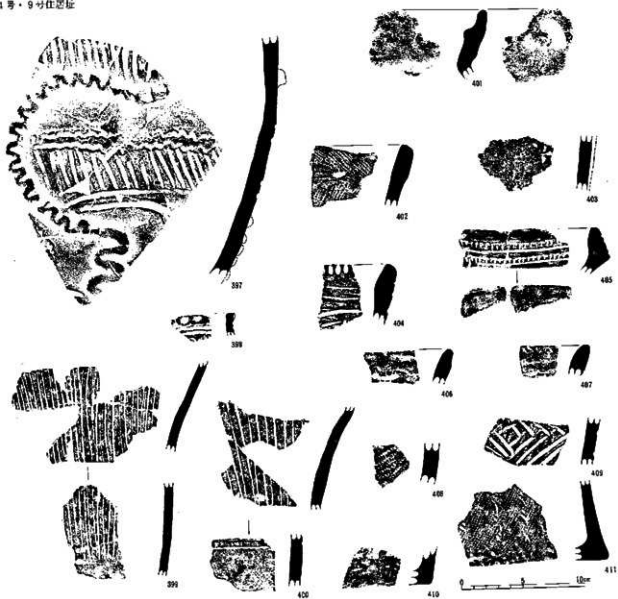
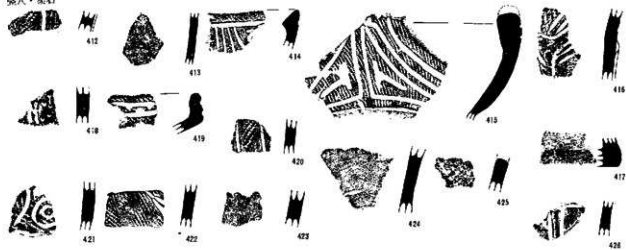


图24 頭藏沢遺跡土器拓影图(中朝初頭・中葉 15・4・9号住居址)

窯穴・灰石



土塊

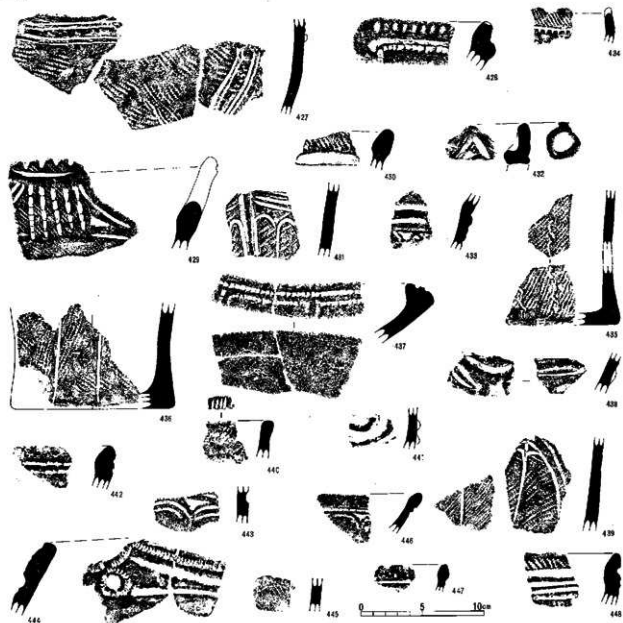


図25 彌殿次遺跡土器拓影図 (窯穴3・4 灰石2・5・7 土塊8・9・  
18・19・20・23・27・28・29・37・51・55・56)

上層

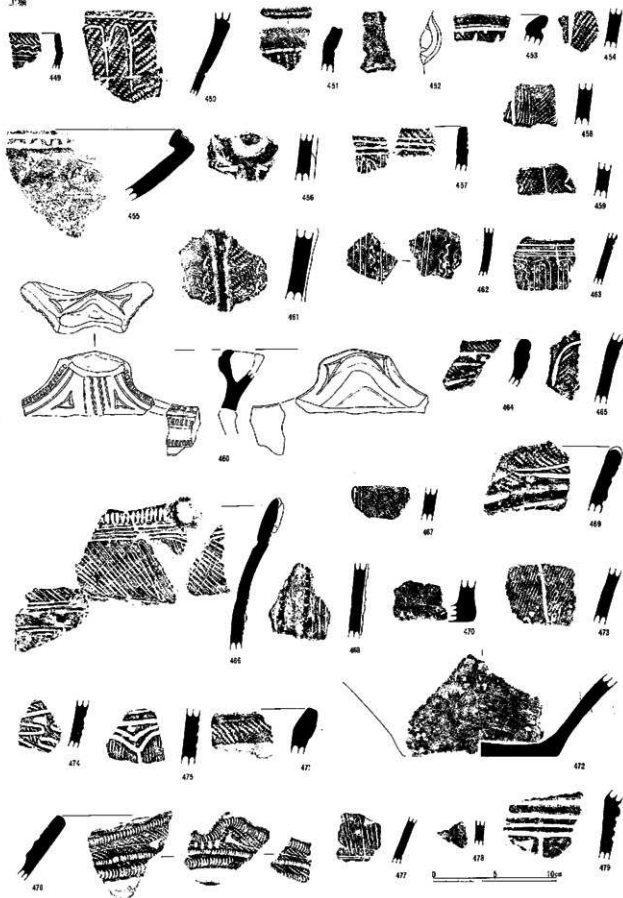


図26 頭殿沢遺跡土器拓影図 (上層67・58・69・70・86・88・100・102・107・124・128・131・132・134・135・139・143)

上層



图27 原城沢遺跡土器拓影图 (土層 167-174-182-184-185-189-193-210-217)

土版



圖28 頭戴式遺跡土器形圖 (土版 220·225·228·231·235·238·248·252  
·258·269·281·300·301·319·320·325·366)



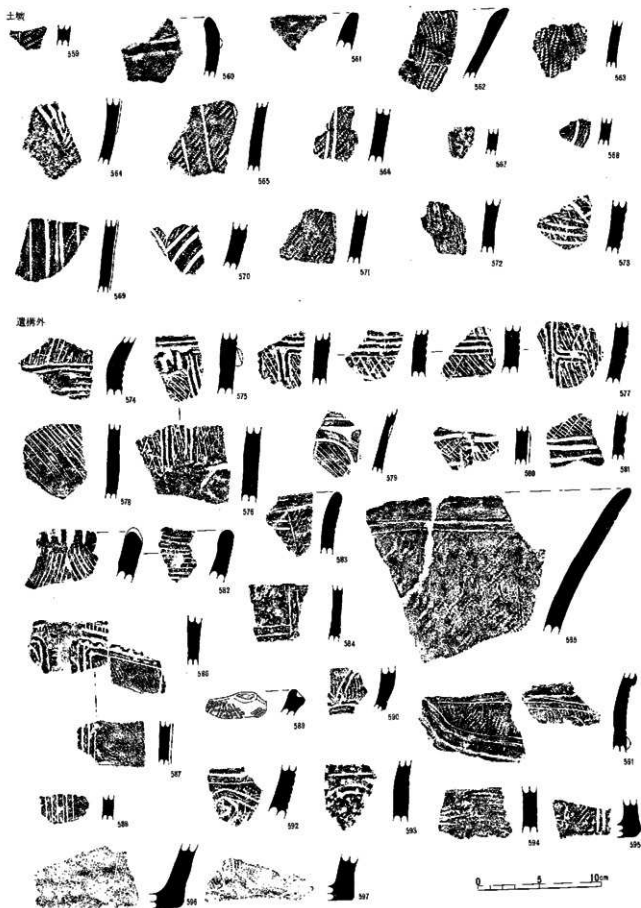


図29 縄紋状遺跡土器拓影図(土瓶367・368・373・374・381・384・397・394、中塚和瓶 遺構外)

遺構外

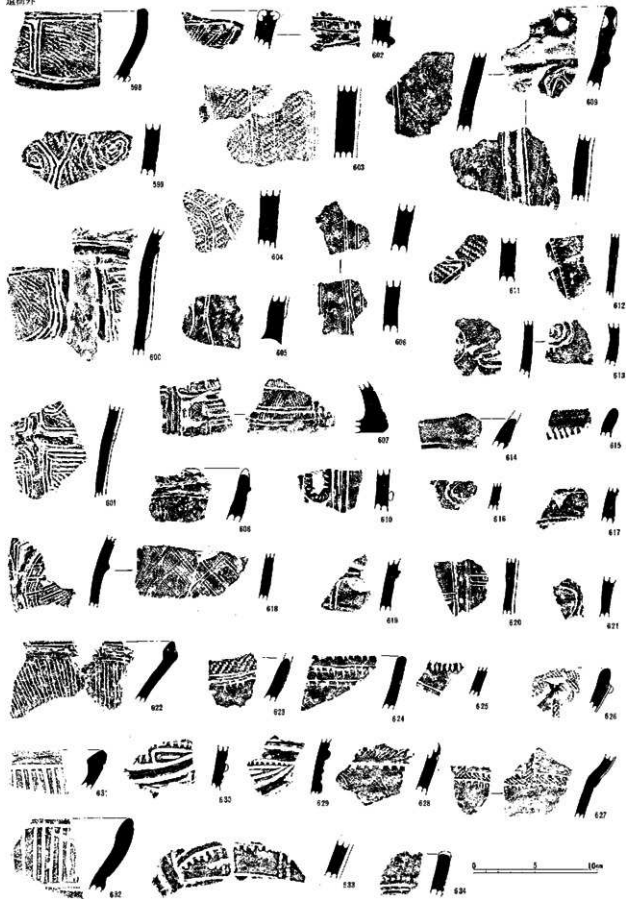


図30 頭城沢遺跡出土器拓影図(中期初頭遺構外)

遺構外



図31 酒殿沢遺跡土器拓影図(中期初頭 遺構外)

玉柄外

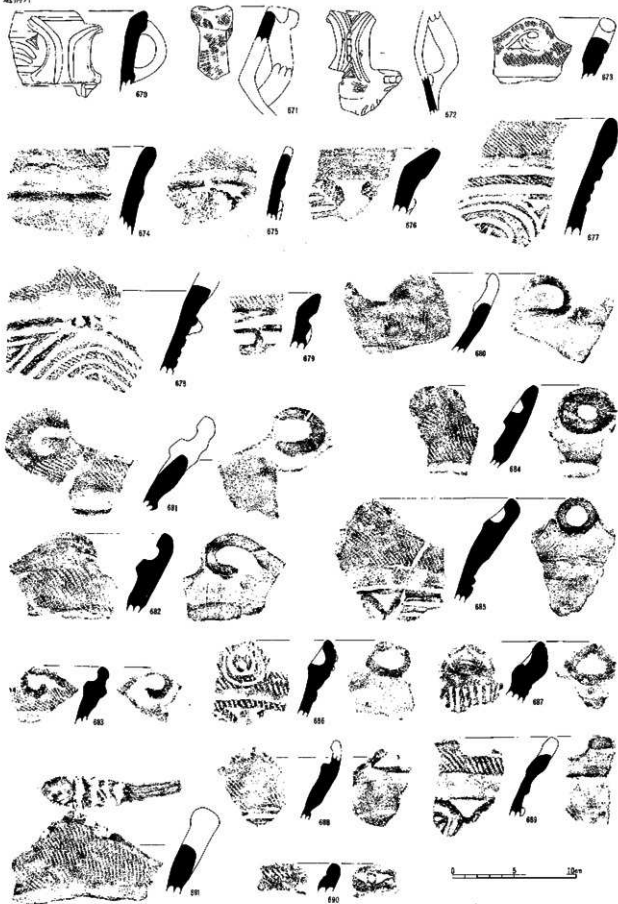


图32 原始织造跡土器拓影图(中期初湖 玉柄外)

透模外

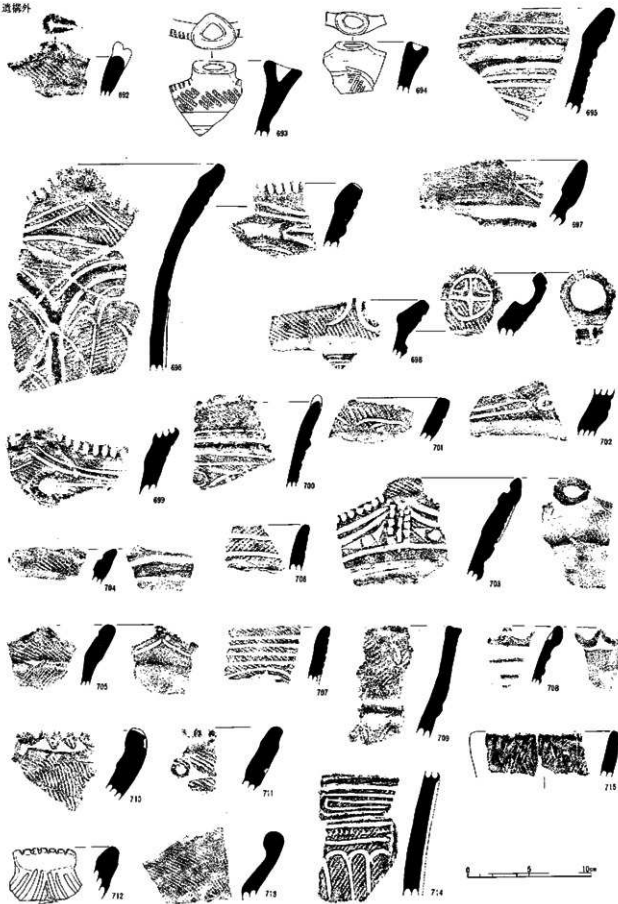


図33 須織沢遺跡土器拓影圖(中期初須 透模外)

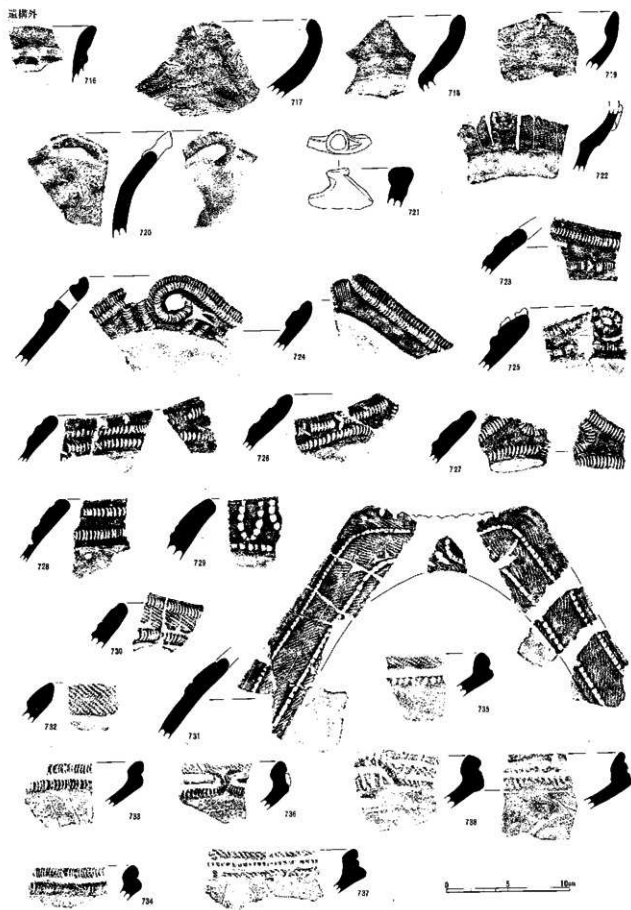


图34 頭戴泥濶跡土器拓影图(中期初頭 濶濶外)

遺跡外



圖35 頭部遺跡上部拓影圖(中期初葉・中葉 遺跡外)

遺構外

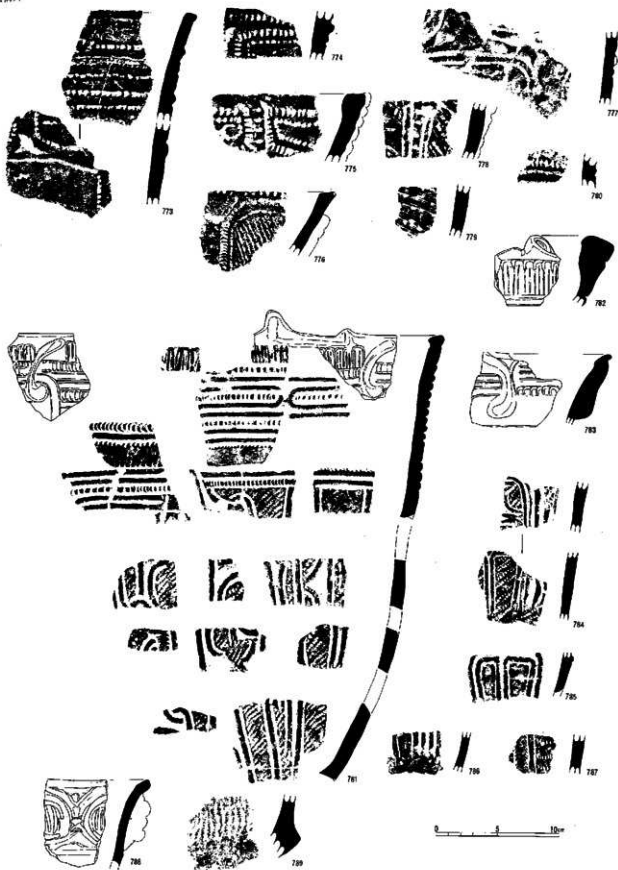


图36 頭戴狀遺跡七部拓影圖 (中期中葉 遺構外)



遺跡外



図37 原野沢遺跡土器拓影図(後期 遺跡外)

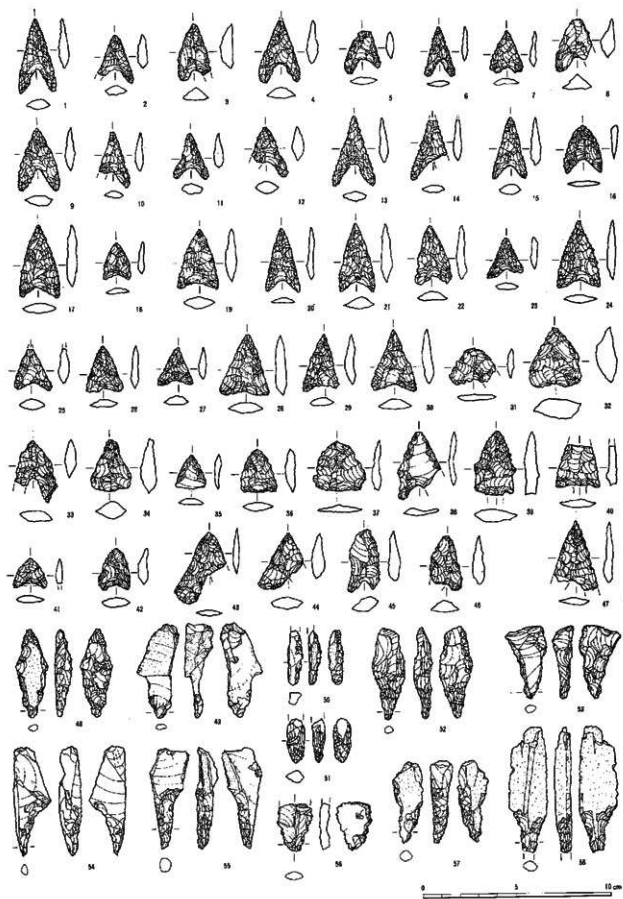


图38 頭巖沢遺跡石器尖頭区(石鏃・石鏃)

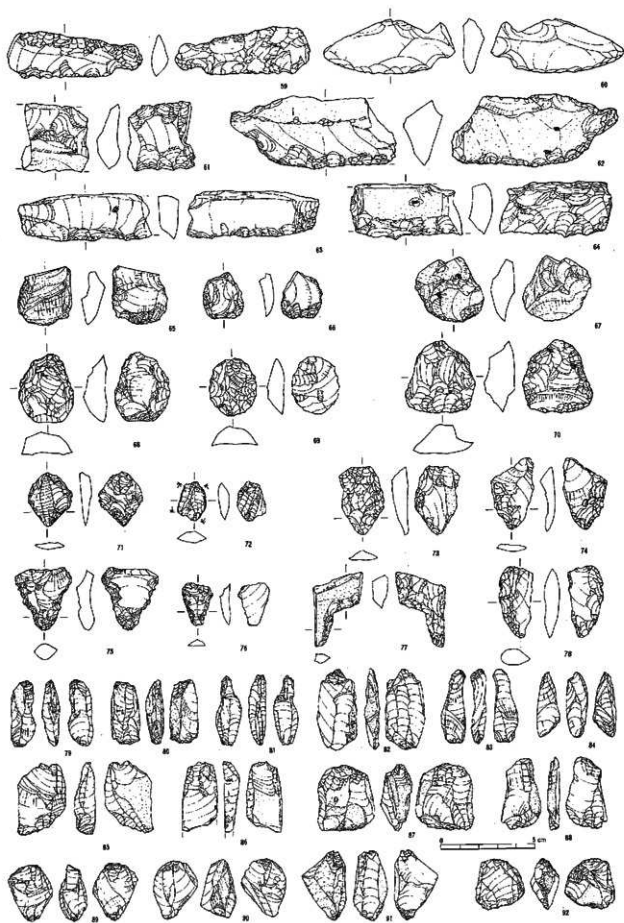


図39 瀬飯沢遺跡石器実測図 (スクレイパー・彫刻器類)

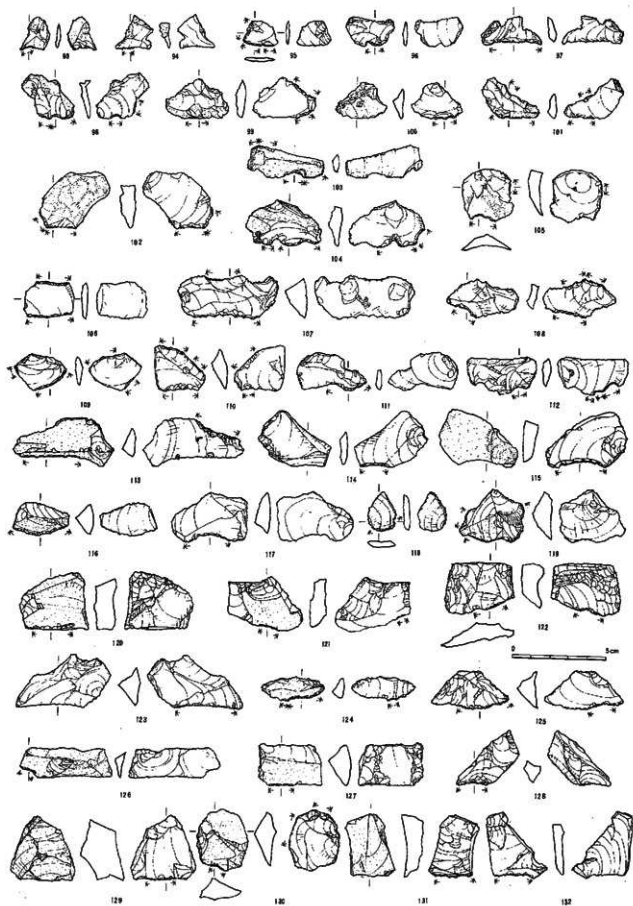


図40 頭取遺跡石器実測図（使用痕ある石群）

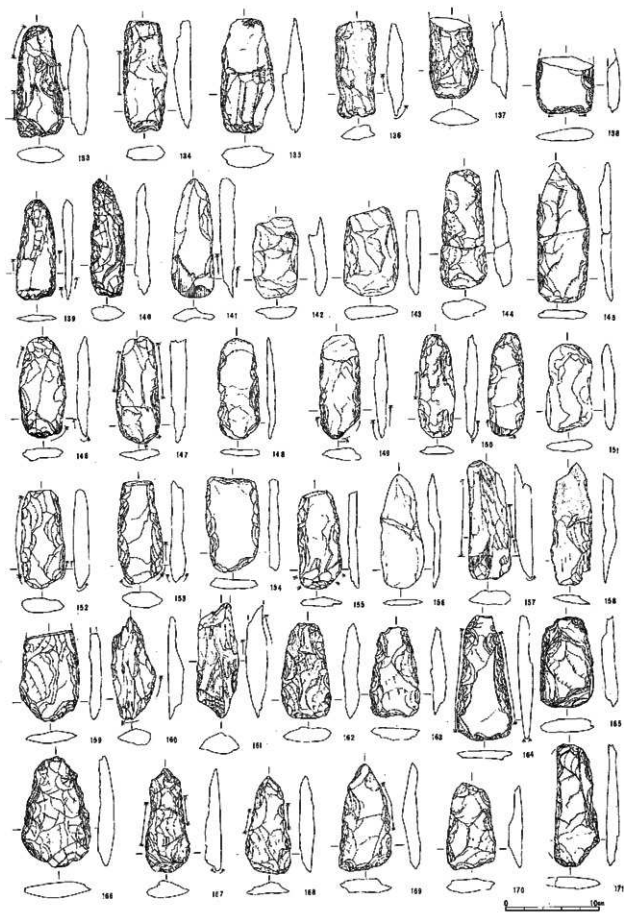


图41 兩淮遺跡石器实例圖（打製石斧）

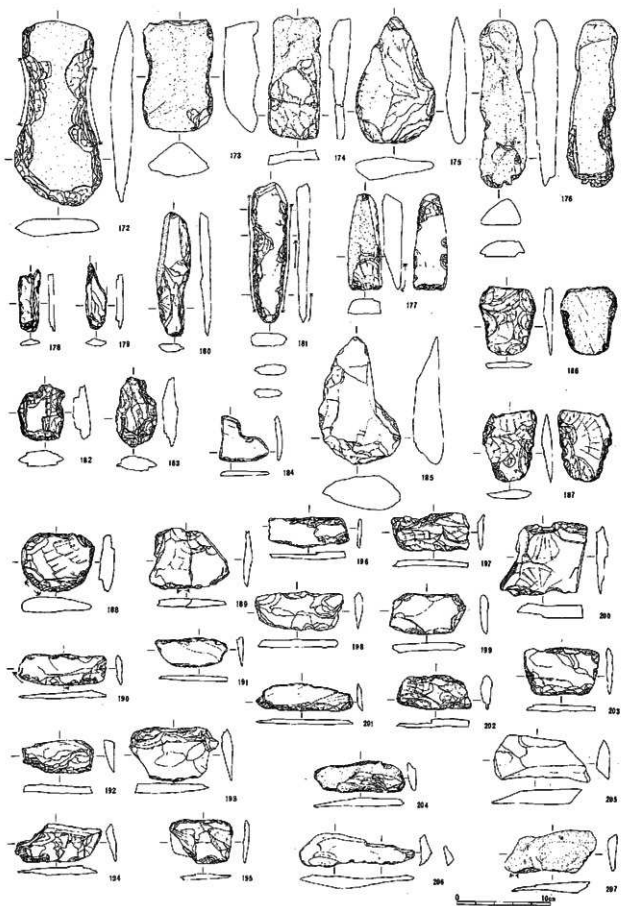


図42 頭部遺跡石群実測図（打製石片・その他・横刃型石器）

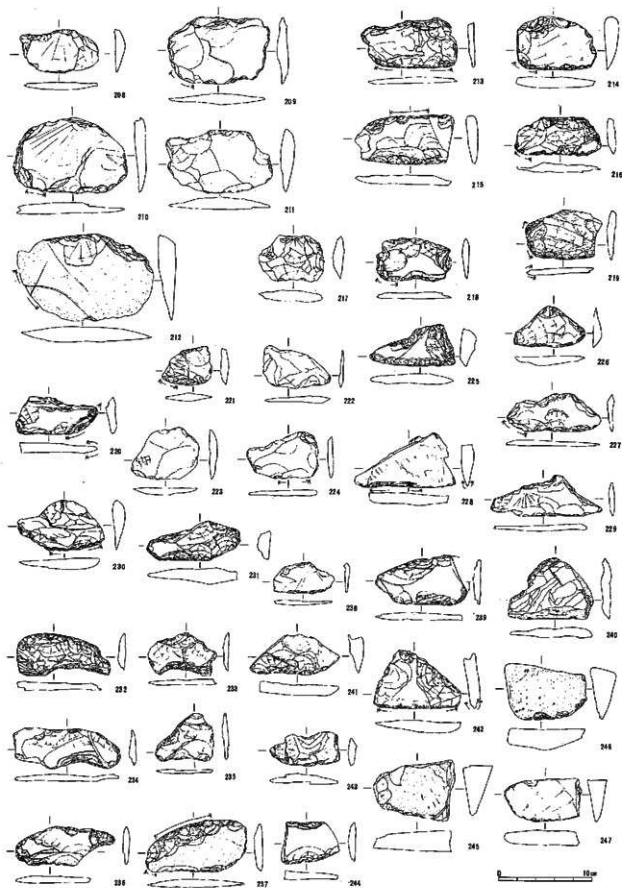


圖43 類礫泥遺跡石器尖頭圖 (橫刃型石斧)

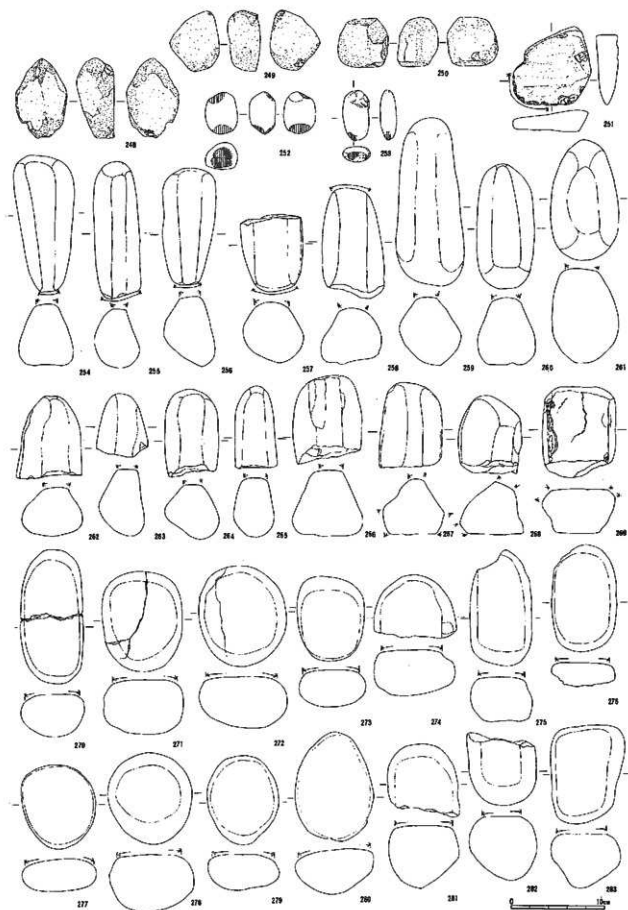


図44 頭戴沢遺跡石器実測図（射打器・特殊磨石・磨石）



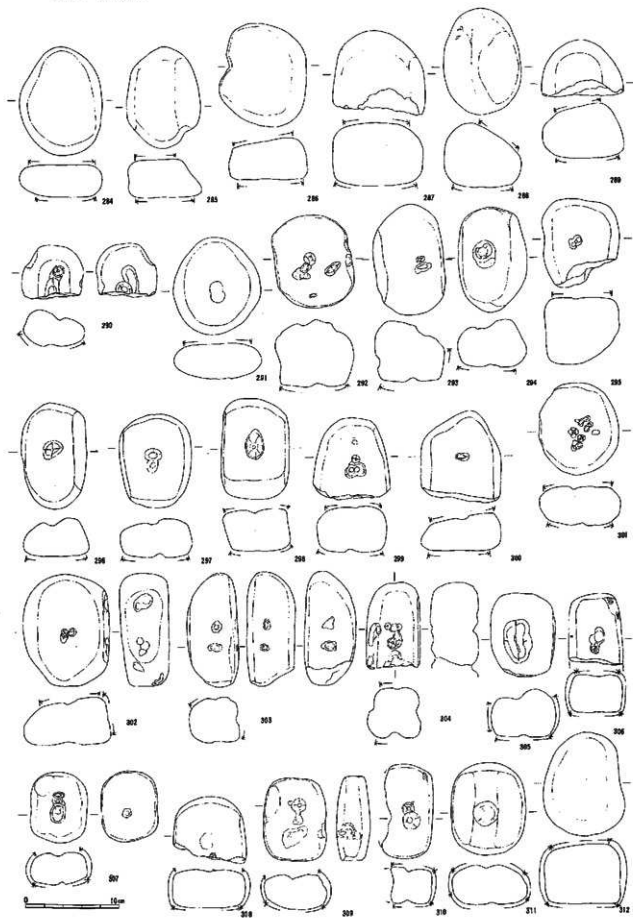


図45 頭城沢遺跡石帯実測図(卵石)

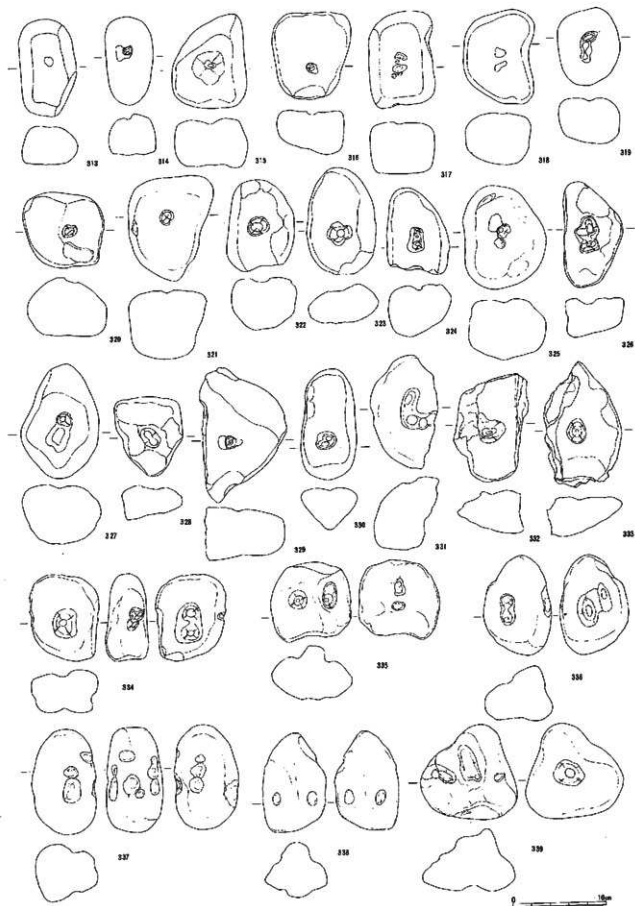


图46 頭殼狀遺跡石器尖圖 (白石)

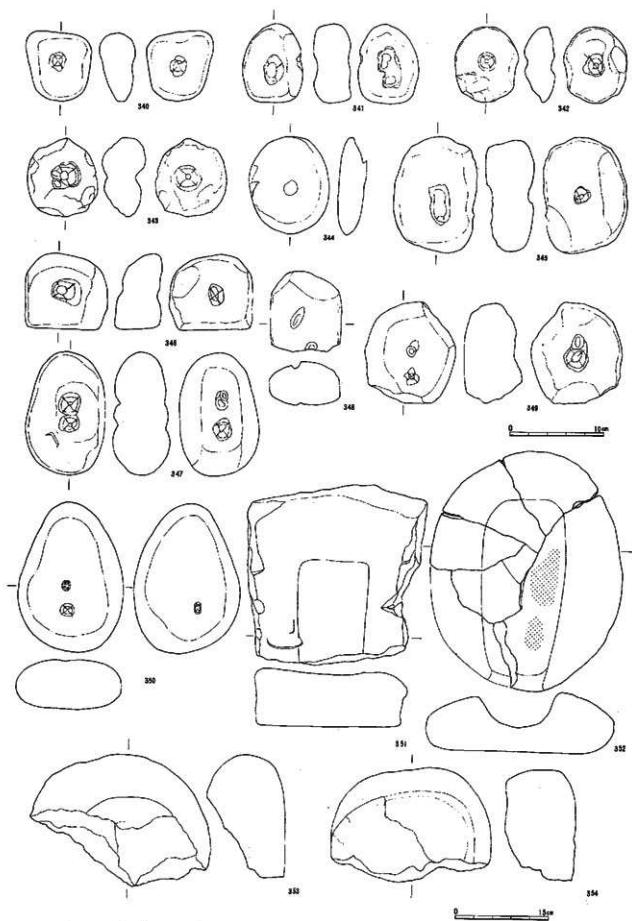


圖47 頭藏沢遺跡石器実測圖(凹石・石皿)

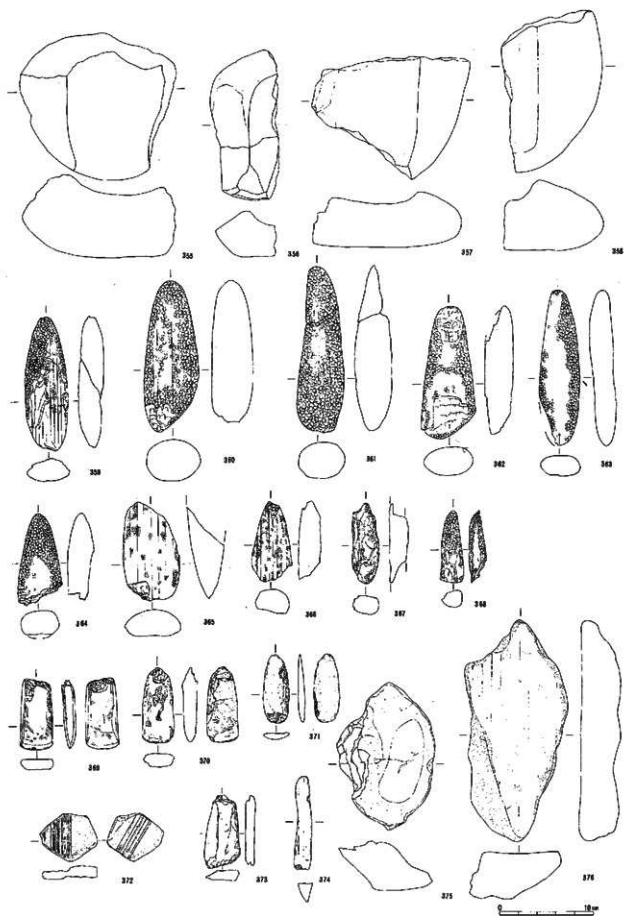


図48 頭戴沢遺跡石器実測図(石二・乳棒状磨製石斧・石刀)

土製陶板

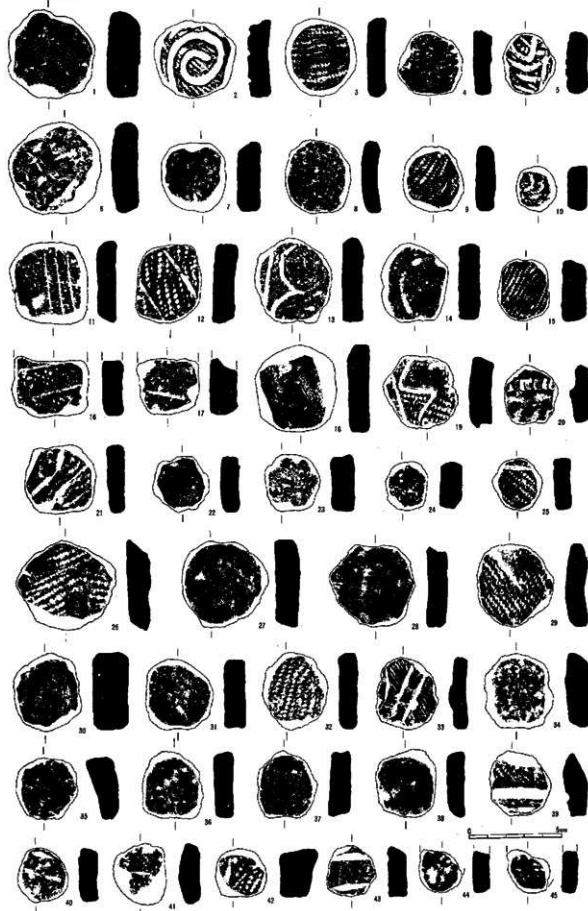


圖49 河套遺跡土製陶板拓影圖(正製陶板)

表3 頭殿沢遺跡土壌一覽表

A…円形 B…楕円形 C…方形 D…三角形 E…不整形 ( )の数字は遺物数  
 a…たらい次 b…有ビット c…二段状 d…階梯状 打穿…打製石斧 磨弁…磨製石斧 横刃…横刃石斧  
 F…土層 RM…ロムマウンド 塚…塚跡 溝…溝跡 片…土層片 中期初…中期初頭 中期中…中期中葉

土層 番号	探 査 号	形 態	大 き さ (cm)	状 態	出 土 遺 物	土 層 区 番 号	時 期
2	既報告		440 330	120 RM	土師器(1)		平安時代
3	既報告		112 95	31 火葬墓	土師器(1) 円石(既344)		平安時代
4		A d	102 94	30 合葬ローム内に 埋りこまれる			
5		C a	142 122	35 窪多く混入			
6	19-8	B b	115 68	34 内面にビットあり			
7		B u	182 120	31	磨製石片(1) F9・23と同一個体	262	中期中葉
8		B a	108 72	35 上面に平石	磨製石片(2) 九兵衛目深片II深片(1)	427-428	中期中葉
9		B a	162 126	21 内面に窪多	九兵衛目深片且深片(1) 磨製石片(1)	429	中期中葉
10		R a	148 113	30 F9を切る			
11		B d	113 75	44 F17を切る 裏側一段浅い	横刃(既203)		
12		A b	188 184	47 ビットあり 木炭含む	九兵衛目深片(1) 平出3A深片(1) 磨製石片(1)		中期中葉
17		B u	— 70	20 F11に切られる			
18	19-6	B b	122 102	23	九兵衛目深片(3)	430-431	中期初頭
19		B d	118 97	36	九兵衛目深片(3)	432-434	中期初頭
20		B d	— 107	23 墓道にかかる 土層薄くして出土	九兵衛目深片(2)	435-436	中期初頭
22	19-4	R d	143 123	22 底面に平石 木炭含む			
23		A a	105 92	17	磨製石片(1) F7-9と接合	437-262	中期中葉
24		B a	147 118	29			
26		A d	95 88	17			
27		A c	133 127	26			
28	19-12	A c	244 208	25 水形の外りに主要部浅い 木炭含む	九兵衛目深片(2) 石皿片(1)	438-439	中期初頭
29		B a	100 75	16 木炭含む	九兵衛目深片(1)	441	中期初頭
30		B d	120 110	29 木炭含む			
33		A d	105 97	24 木炭含む			
35		B a	180 130	22 木炭含む 腐土混入			
37		A d	285 275	46 RM	九兵衛目深片(3) 磨製石片(1)	442	中期中葉
40		A a	95 93	15 底面に平石 木炭含む			
47		B a	119 87	11 大小の窪多			
49		A d	154 133	28 西側に深い黒土 上面に平 石	九兵衛目(1) 中期中片(1)		中期中葉
51		B l	75 75	15 上面に自然石 木炭含む	九兵衛目深片(1) 五箇合目浅片(1)	443-445	中期初頭 平安時代
52		A a	50 20	16 木炭含む 底面型	九兵衛目深片(2) 土師器(1)		
53		A a	75 75	15 上面に自然石、木炭含む			
54	19-3	A a	80 80	10 底面に自然石			
55		R a	200 125	11 F59を切り F60に 切られる	中期初頭片(1) 磨製石片(1) 打穿(既158)	446	中期中葉
56		A a	170 170	35 F66に切られる 底面に自然石	九兵衛目深片(5) 土製陶板(既24)	447-448	中期初頭
57	19-5	B c	160 100	34 中央大きく落ちこむ	九兵衛目深片(1) 平出3A深片(1) 鉛光目深片(1) 打穿(既158)	449	中期中葉
58		B c	125 100	29 西側に深く落ちこむ	九兵衛目深片(1) 東海系漆片(1) 打穿(2)	450-221	中期初頭
59		B u	150 100	40 F55-60との切合あり			
60		B a	140 85	28 F55-59に切られる			
61		H a	85 75	16 縁部に炭化材あり			
62		B d	100 70	17 底面に平石	打穿(1)		
63		B d	80 60	15 上面に自然石			
64		A d	65 65	22 底は小さく平			
66		A a	100 100	12 F56との切合い			
67		B d	80 60	18			
68		B a	110 80	22 甕壁はゆるやかに傾斜	土製内瓶(1)(既2)		
69		B a	100 70	18 上面に自然石	磨製石片(1)	451	中期中葉
70		E a	105 70	17 上面に自然石多	中期初土師器(1)	452	中期初頭
71		B a	90 65	29			
86		B u	130 88	23	五箇合目浅片(1) 九兵衛目深片(2) 磨刃内 了深片(1) 打穿(1)(既139) 横刃(既201)	453-454	後期初頭
87		B a	— 135	24 F88を切っている			
88		B a	— 75	31 有輪道路にかかる			
92		A a	70 70	14	九兵衛目深片(2)	455-456	中期初頭
93		B d	110 80	20 壁軟弱			
94		B a	105 88	22			
97		B d	110 70	20			
98		A a	80 80	20 F99に切られる 底面凹凸			
99		A a	80 80	15 F98を切りF99に切られる			
100		E a	270 265	26 底面南東側へ傾斜 上面に平石	九兵衛目深片(6) 平出3A深片(1) 横刃(既240)	457	中期中葉

土壌 番号	採回 番号	形 態		大 き さ (cm)			状 態	出 土 遺 物	土器図番号	時 期
		平面	断面	長軸	短軸	厚さ				
101		B	a	114	90	18				
102		B	a	210	-	21	3位を切る。木炭を含む	九兵衛II燧石(2) 平石3A燧片(2) 打斧(区175) 横刃(区216)		中期中葉
116		B	c	128	86	32		中期初葉片(1)		中期初葉
118		B	a	150	145	10	内部に石(2)あり	凹石(区319) 打斧(区161)		
122		B	a	267	102	27	二・三の土塊の集合か	中期中葉片(2) 九兵衛II燧片(1)		中期中葉
123		B	a	88	78	12	木炭含む	中期初葉片(1)		中期初葉
124		A	d	78	74	22		九兵衛II燧片(1) 打斧(1)	460-461	中期初葉
128		B	a	105	83	24		九兵衛II燧片(8)	458-459	中期初葉
130		B	a	118	104	19		中期初葉片(1)		中期初葉
131		B	a	100	80	28	炭化物含む	九兵衛II燧片(2)	464-465- 469	中期初葉
132		E	d	140	130	38	F133-191-192を切る	九兵衛II燧片(2)	470	中期初葉
133		B	a	90	80	16	F132に切られる	九兵衛II燧片(9)		中期初葉
134		E	d	400	320	30	RM	九兵衛II燧片(2) 中期中土燧片(1)	471-472	中期中葉
135		B	a	110	78	15		中期初葉片(1)	473	中期初葉
138		B	a	70	60	16				
139		D	d	375	295	115	RM	九兵衛II燧片(2) 浅片(1) 打斧(1)	474-476	中期初葉
140		E	a	310	127	34	炭化物含む 木炭多量含む	平石3A燧片(1)	477	中期中葉
141		E	d	123	80	30	F150に切られる 土器密着して出土	九兵衛II燧片(2) 平石3A燧片(1) 後期燧片(1)		後葉初葉
143		E	d	350	235	60	RM	九兵衛II燧片(2) 平石3A燧片(1) 比翼門板(区10)	478-479	中期中葉
144		B	b	105	82	51		九兵衛II燧片(2) 中期中土燧片(2) ビエス・エス・エヌ		中期中葉
148		B	d	90	62	25				
150		E	d	200	120	53	F141を切る 底等袋状となる			
157		B	d	75	70	26				
159		B	a	114	86	23		打斧(区170)		
160		B	a	152	90	27	底面凹凸している			
161		R	a	80	60	13				
166		B	a	121	89	14	上表に平石	中期初葉燧片(1)		中期初葉
167		B	a	95	65	15		九兵衛II燧片(2)		中期初葉
173		B	c	102	80	18	底面凹凸している		480-481	
174		B	a	120	96	32		九兵衛II燧片(1) 横刃(区174)	482	中期初葉
175		B	a	88	67	29				
177		A	a	120	105	17				
178		D	d	112	100	24				
182		B	a	-	190	33	4位に切られる	九兵衛II燧片(2) 横刃(区200)	198-483	中期初葉
184		B	a	115	90	32	内部に燧石含む	九兵衛II燧片(多) 燧片(区250) 大クレーパー(区5)	484-503 199-202	中期初葉
185		R	a	123	73	22	大部に土器片多	九兵衛II燧片(多) 打斧(区142) 土製門板(区27) 石鏝(区49)	504-508 199	中期初葉
186		A	d	108	90	36		中期初葉片(1)		中期初葉
189	19-9	E	d	85	-	45	4位を切る	九兵衛II燧片(2) 斬道式完形(1) 石鏝(区34)	263-569 510-509	中期中葉
190		A	a	90	84	17	後期土器層上中に多く 混じる	九兵衛II燧片(2)		中期初葉
191		B	a	114	-	28	F132に切られる			
192		B	a	76	25	25	F132に切られる			
193		B	d	550	410	122	RM 183を切る	押型文片(1) 九兵衛II燧片(2)	511	中期初葉 早 期
194		E	d	260	60	60	RM 194に切られる	押型文片(1)		
195		B	a	140	130	30		押型文片(1)		
202		E	a	125	93	21				
209		B	a	80	66	16	F210に切られる 平石			
210		B	u	88	62	7	F209を切る	九兵衛II燧片(3)	512	中期初葉
211		A	c	67	66	20		中期初土器片(2)		中期初葉
217	19-10	C	d	157	130	37	木炭含む	九兵衛II燧片(2) 炭素の炭化物	514-515	中期初葉
219		B	a	137	105	13	木炭含む			
220		B	a	98	77	13	腹じかに平石	九兵衛II燧片(1)	516	中期初葉
225	19-2	B	a	80	70	21	底面に平石	中期初葉片(2)	517-518	中期初葉
228	20-14 図版10	B	d	268	210	155	RM 西側が深く落ちこむ	押型文片(2) 中期初葉片(1) 特殊燧石(区257)	519	中期初葉
229		R	a	110	87	26	舎壁ロームに埋りこむ	中期初土器片(1)		中期初葉
230		E	d	177	127	35	舎壁ロームに埋りこむ			
231		E	d	375	350	70	RM 底面に燧石多	押型文片(1)	520	早 期
232		H	a	110	71	22		押型文片(1) 早期燧片(1)		早 期
235	20-15 図版9	E	d	380	230	100	RM 塊状あり	厚燧片(4) 中期初土器片(多) 打斧(区162) 土製門板(1)	521-523 505	中期中葉
237		E	d	420	215	55	RM 北側に深溝あり			
238		E	d	420	215	55	RM 南側に溝 木炭含む	押型文片(2) 中期初片(4) 後燧片(1) 磨石(区270)	524-526	後 期
239		B	a	141	114	17	東側の底面が深い	押型文片(3)		早 期

土層 番号	探洞 番号	形 態	大 き き (cm)			状 態	出 土 遺 物	土器図番号	時 期
			平面	断面	長軸/短軸/深さ				
240		E a	167	103	24				
241		B a	175	90	34				
243		H a	96	83	18	内部に大石		526	中期初葉 早 期
244		B a	124	77	14	内部に礎多			中期初葉 早 期
245		B a	108	95	22				早 期
246		B a	185	150	33	木炭含む			後 期
247		B d	80	50	22	突出不定形			後 期
248		D a	490	290	95	RM 内部に礎多		527-530	中期中葉
250	19-1	D a	87	75	17	浮いて平石			
251		H a	90	65	22	下252を切る			
252		B a	160	130	19	底面軟弱		531・201	中期初葉
253		B c	100	85	18	裏面が深く落ちこむ			
254		B u	80	60	16				
255		B a	80	70	15				
256		B a	115	80	20		九兵衛目埴片(4)		中期初葉
257		B b	130	110	20	裏面にビット 炭化焼片少量含む			
258		E a	105	90	15	内部に自然石			
259		D a	60	45	17				
260		A a	35	35	25				
261		R a	120	90	20	覆土に大きな土塊			
262		B a	160	105	23	木炭含む 底面に焼石			
263		B a	130	90	19	下265を切る 木炭片少量含む			
264		B a	80	60	16				
265		D a	95	70	18	下263に切られる			
266		H a	110	70	10	木炭少量含む			
267		A a	150	150	13	底面に自然石			
268		B b	130	80	21	裏面にビット			
269		B a	130	80	21	木炭含む	九兵衛目埴片(1) 埴片(1) 埴沢埴片(1)	532-534 265	中期中葉
270		A u	50	50	21	下271を切る	九兵衛目埴片(1)	535	中期初葉
271		A a	150	150	22	下270に切られる			
272		B a	85	85	23				
273		A a	100	85	18				
274		B a	150	130	16				
275		B a	100	80	21	木炭少量含む			
276		B a	110	60	24				
277		B a	160	95	13		磨石(図285)		
278		B a	100	85	16		打棒(1) 磨棒(図364)		
279		A a	85	85	24		鎌刀(図231)		
280		A a	70	70	24	木炭少量含む			
281		A a	85	85	31		埴石(1)		
283	19-7	A b	80	80	30	木炭片少量含む	九兵衛目埴片(6)	536-537	中期初葉
284		C a	115	105	33	木炭片少量含む 底面歪い			
285		A a	95	95	24	木炭片少量含む			
286		A d	115	115	29	木炭片少量含む			
287		B a	100	80	16	壁軟弱底面歪い	九兵衛目埴片(1)	202	中期初葉
290		B a	75	65	20		石製(1)		
291	19-3	A c	115	125	150	中央に柱状ビット 焼石あり			
292		H a	100	70	22	木炭片少量含む			
293		B d	80	70	22	底面凹みあり			
294		C a	105	70	15	底面に大石(2)			
295		B a	90	75	23	木炭片含む			
300	20-16	H d	630	550	115	RM	埴片(6) 九兵衛目埴片(1) 埴片(1) 打棒(器171) 土製河板(器12) 埴片(1) 九兵衛目埴片(2) 埴片(3)	539	後 期
301	20-17 (図版9)	B d	580	450	100	RM 裏面歪入 ビット(4)		540-543	後 期
302		B d	180	100	90	RM 礎多			
304		B d	215	186	61	内部に礎多 底面に石(1)	平出3A埴片(1)		中期中葉
305	図版10	B d	183	120	38	木炭片含む			
306		A d	95	80	21	木炭片含む			
307		B a	145	90	23		磨石(1)		
308		D d	150	110	34	底面凹みあり			
309		H c	125	95	41	底面凹みあり			
310		B a	110	95	20				
311		B d	180	80	41	壁軟弱する			
312		B a	170	145	21				
314		B d	86	76	22				



土塊 番号	挿入 番号	形 態	大きさ (cm)			状 態	出 土 遺 物	土器図番号	時 期
			平面 長さ	断面 短軸	厚さ				
316	19-11 図版10	C a	130	115	21				
317		B h	150	120	101				
319		B a	65	58	17	土器表面に密着して出土	九兵衛II深鉢(1) 破片(9) 上製刀根(図25)	205・206 544・545	中期初頭
320		H d	280	275	70	RM	沢式片(1) 九兵衛II深片(4)	546-550	中期初頭
321		R a	83	67	27				
322		B a	97	83	24				
323		B a	97	50	23				
325		B d	415	310	90	RM	早期織機片(1) 中期片(1) 九兵衛I・II片割 平出3A片(1) 打差(互150) P石(互324) ビエス・エスキーエ(787)	551-557	中期初頭
325A		B d	380		50	RM Bを切る	中期初片(1)		中期初頭
325L		B d	-	265	28	RM Aに切られる			
327		H d	87	75	25		中期初片		中期初頭
331		B a	110	85	21				
333	B a	100	80	23	両側の底層が深い				
340	D d	75	55	52	底層に木炭層積				
341	D d	160	100	36	下342を切る	中期中深片(1) 平出3A深片(3) 石埴打差(1)		中期中葉	
342	A a	200	-	32	下341に切られる	中期無文調片(1)		中 期	
343	A a	65	-	25	下341に切られる 木炭含む				
344	A d	110	110	39		中期初深片(1)		中期初頭	
345	B a	130	85	36					
346	B a	90	70	36					
347	A d	100	100	28	木炭含む				
348	B a	90	60	30	内層に自然石				
351	B a	145	145	32	下352を切る				
352	H a	120	90	21	下351に切られる				
353	A a	95	95	24	下354を切る 灰は緑銅する				
354	A a	90	90	40	下353に切られる 木炭含む				
355	A a	95	95	26	壁紙料する				
356	D a	130	70	55					
357	H a	80	55	21	木炭少量含む				
359	B a	100	75	24					
363	B a	150	90	22					
364	A a	70	70	15					
366	B a	100	90	22		九兵衛II深片(1)	558	中期初頭	
367	B d	-	85	42	15粒に切られる	九兵衛II深片(1)	559	中期初頭	
370	C	-	40	33					
371	B	-	74	58					
373	B	-	73	-		九兵衛II深片(1)	561	中期初頭	
374	H	-	65	-		九兵衛II深片(7)	562-566	中期初頭	
375	E d	-	420	60	RM				
376	E d	410	400	110	RM				
377	E d	400		53	RM				
378	B d	230	150	65					
379	R d	350		50	RM				
380	R d	380		65	RM	打 差(図164) 九兵衛II深片(1)	567	中期初頭	
381	B d	140		100	RM				
382	E d	173		45	内層に埋				
383	B a	60	55	30					
384	C a	90	80	22		九兵衛II深片(1)	568	中期初頭	
385	R d	260	175	45		早期片		早 期	
386	B a	130	75	23					
387	B a	98	85	28					
388	A d	165	160	25	内訳: 雑多				
390	H d	135	100	38					
391	B d	140	88	38					
392	A d	90	75	25					
393	A a	80	70	18					
395	H d	-	70	90					
396	B a	55	35	32					
397	E d	330		65	RM	九兵衛II深片(2)	573	中期初頭	
398	D d	148		50	RM				
399	K d	185	90	43	RM				

表4 頭取沢遺跡縄文時代早期・前期土器観察表

番号	絵土	出土地・成形・調整・成形手段の特徴	施文・施行手法の特徴	色調			備考
				外面	器内	内面	
1	白色・白色不透明粒子を含む。	土城238 内外面入念にナデ。外面に艶が認められる。	器面軟かい段階でR態糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	黒色	暗赤灰色	赤褐色	
2	白色粒状・金雲母 <sup>1)</sup> を含む。	B B 47 外面入念にクテナデ。内面割落で不明。	器面軟かい段階でR態糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
3	金雲母多量・白色不透明粒子を少量含む。	R D 68 外面入念にナデ。艶が認められる。内面入念に指によるココナデ。	器面軟かい段階でL態糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	明赤褐色	明赤褐色	暗赤褐色	外面、割れ目に煤が付着。
4	白色・白色不透明粒子を含む。	土城238 内外面入念にココナデ。外面に艶が認められる。	器面硬い段階でR態糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	赤褐色	明赤褐色	赤褐色	内面に煤が付着。
5	白色・白色不透明粒子を含む。	C N 55 外面入念にナデ。艶が認められる。内面割落で不明。	器面硬い段階でR態糸4条巻を縦方向逆時計廻りに施文。	赤褐色	赤褐色	黒色	内面に煤が付着。
6	石英・白色粒子を含む。	C T 56 外面入念にナデ。艶が認められる。内面粗いナデ。	器面硬い段階でR態糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。	赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
7	金雲母・白色不透明粒子を含む。	C N 55 外面入念にナデ。艶が認められる。内面粗いナデ。	器面硬い段階でR態糸(時計廻り巻)を縦方向に回転施文。5回経途時計廻りに施文。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤灰色	外面に煤が付着。
8-9	金雲母・長石砂子を含む。	C D 46・土城248 外面入念にナデ。艶が認められる。内面粗いココナデ。	器面硬い段階でR態糸を縦方向に回転施文。	明赤褐色	明赤褐色	黒色	縦線を少量に含む。反側面か。
10	白色粒子を含む。	A S 47 外面施文で不明。内面入念にココナデ。	器面軟かい段階でR態糸を縦方向に回転施文。	明赤褐色	明赤褐色	明赤灰色	
11	白色粒子・金雲母を含む。	A M 57 外面施文で不明。内面入念にココナデ。	器面軟かい段階でR態糸施文。	暗灰色	暗灰色	灰褐色	縦線を少量に含む。
12	白色粒子を多量に含む。	A O 46 外面施文で不明。内面入念にココナデ。	器面軟かい段階でR態糸施文。原形部分沈線状に深く刻む。	明赤褐色	明赤褐色	赤褐色	
13	金雲母・長石砂子を含む。	土城248 外面粗いナデ。内面指押さめの指痕痕跡を残す。指によるナデ。外内とも小さな凹みあり。	器面硬い段階でL態糸施文。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	縦線を少量に含む。
14	長石・白色粒子を含む。	A O 47 外面施文で不明。内面粗いナデ。積み上げ痕がみられる。	器面軟かい段階でR態糸施文。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	内面に煤が付着。
15	長石・白色粒子・金雲母を含む。	A S 47 外面施文で不明。内面入念にココナデ。	器面軟かい段階でR態糸施文。施文の先端部は灰部から胴部へ行っている。	褐色	褐色	褐色	施文施文後ナゾっている。
16	金雲母・白色不透明粒子を多量に含む。	B B 51 内外面粗いココナデ。口唇部他より入念にココナデ。	器面軟かい段階で太い原形を用い、横方向に施文。原形L R。	暗灰色	暗灰色	暗灰色	
17	白色不透明粒子を含む。	土城231 外面施文で不明。内面硬い段階で粗いココナデ。	器面軟かい段階で撚りのあまい原形Rを横方向に施文。	暗灰色	暗灰色	暗灰色	焼成・色調等16に近似する。
18	金雲母を多量に含む。	B G 67 内外面施文で不明。両面とも艶が認められる。器面硬い段階で艶出しを行っている。	原形R Lを内外面、口唇部に横方向に施文。	赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	焼成は良好と思われる。

番号	粘土	当地産・成形・調整・造形手法的特徴	施文・旅行手法的特徴	色調			備考
				外面	器内	内面	
19	石英・長石・白色不透明粒子を多量に含む。	C Q 60 外面にふい艶が認められる。内面入念にココナテ。	原形LRを左方向へ斜位回転施文。	赤黒色	赤黒色	暗赤褐色	外面に縁が付着。
20	金雲母・白色不透明粒子を含む。	A Y 47 外面施文で不明。内面硬い段階でココナテ。	原形LRをBケース時計廻り施文。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
21	長石粒子を多量に含む。	土層 228 内外面入念にナテ。内面ココナテ。	原形LR Lを縦方向に施文。	明赤褐色	明赤褐色	赤黒色	22と同一形状か。
22	花崗岩碎片を多量に含む。	C H 56 外面入念にナテ。内面粗いココナテ。	原形LR Lを縦方向に施文。	赤褐色	赤褐色	赤褐色	焼成・色調施文方法が21と近似。
23	白色不透明粒子を含む。	土層248 内外面粗いナテ。内面ココナテ。内面小さな凹凸がみられる。	原形LRを左方向へ斜位回転。	明赤褐色	明赤褐色	暗赤褐色	
24	白色不透明粒子を含む。	C Q 59 内外面とも入念なナテ。内面ココナテ。	原形LRを縦方向に施文。	褐色	黒色	黒色	19に粘土・焼成・色調が似る。
25 1 32	黒鉛・白色粒子を含む。	C D 53, C E 55, B R 37, 土層320, C A 54, B A 59 内外面入念にココナテ。32は器面硬い段階でクラナテ(ケズリ?)を行っている。内面艶が認められる。	原形は器面が硬い段階で施文している。原形心形の反復が小破片で確認できない。単位不明。	灰色	暗灰色	暗灰色	式式土器を一括して扱った。
33 1 41	砂・白色不透明粒子を含む。	C B 47, H J 53, Y Y 54, 土層139, 土層231, 2号住床 内外面とも入念にナテ。	殆ど器面の硬い段階で、原形を施文する。33・34は原形二山で反復する。2単位。	褐灰色 赤褐色	褐灰色 赤褐色	褐灰色 赤褐色	種式土器を一括して扱った。
42 1 91	石英粒子を多量に含む。	52-54・55・57-59, 61-63, 67-69, 73-75・79・80・87・91 外面施文で不明。内面粗いココナテ。小さな凹凸がみられる。	粘土に基準をおいて分類したもので、型により違ふ。器体としてみれば、器面が軟かい段階で施文している。確認できる原形の反復数、4単位。	明赤褐色 赤黒色	明赤褐色 赤黒色	明赤褐色 赤黒色	式式土器を一括して扱った。
44 48 50	金雲母を多量に含む。	C T 56・C S 47・C L 54 内外面とも入念にココナテ。44・48は外面に艶が認められる。	器面軟かい段階で施文。44は原形端帯施文後、指でナゾリ無文部を作っている。	赤黒色 明赤褐色	赤黒色 赤褐色	赤黒色 黒色	
	花崗岩碎片を多量に含む。	42・43・45-47・49・51・56・58-60・64・74・78・81・84・90 外面は入念にナテで平滑。内面は粗いココナテが行われ、小さな凹凸がみられる。	原形は楕円の格子目を用いるもののみである。格子目以外の原形は、僅か5片である。格子目は器面硬い段階で施文している。	赤褐色 暗赤褐色	褐灰色 赤褐色	暗赤褐色 黒褐色	粘土は21・22に類似する。42・43・51の外面に縁が付着。
	花崗岩碎片を含む。	70・72・77・82・83・85・88・89 内外面とも入念にナテ。	原形は不定形に印刷したものを用いている。原形の反復はつかぬない。軟かい段階で施文していると思われる。	赤褐色 黒褐色	赤褐色 黒褐色	黒褐色 黒褐色	指V群4類のものに含まれる。
92	白色不透明粒子(長石)を含む。	C C 55 内外面とも入念にナテ。内面ココナテ平滑である。	縦方向に施文している。	灰褐色	灰褐色	灰褐色	縁線を含む可能性が有る。
93	金雲母・石英粒子を多量に含む。	不明Z 内外面とも入念にナテ。内面ココナテ。外面光沢をもつ(磨削している可能性あり)。	棒状工具による平行沈線・貝殻縁線で区画内充填。	暗赤褐色	黒褐色	褐色	断面サンドイッチ状になる <sup>2)</sup> 。
94	石英・白色粒子を多量に含む。	B U 41 外面粗いココナテ。内面器面が硬い段階で粗いココナテ(ケズリ)の可能性あり。	器面硬い段階で、貝殻縁線をおかして施文している。	褐色	黒褐色	褐灰色	縁線混入不明。
95	石英・白色粒子を多量に含む。	15号住 内外面入念にココナテ。口縁部覚れて不明。外面にふい艶が認められる。	棒状工具による沈線。口辺部一周一平行沈線一貝殻縁線で区画内充填。	赤黒色	黒褐色	褐灰色	断面サンドイッチ状。外面に縁が付着。

番号	類 十	色十地点・成形・調整・成形手法的特徴	施文・施行手法的特徴	色 調			備 考
				外面	器内	内面	
96	白色・白色不透明粒子を含む。	CL41 外両面ヨコナデ。内面粗いヨコナデ。	棒状工具による沈線。下端又一面一格子目沈線(Bケース)印。	褐色	黒灰色	赤褐色	断面サンド状。繊維少量を含む。
97	白色不透明粒子を含む。	CB56 内外面とも入念なヨコナデ。内面器面が深い段階でヨコナデ。1層層入念なナデ。	半軟竹管状工具の腹部を使用。「ハ」の字状に左一右へ施文。器面深い段階で施文している。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	繊維混入不明。
98	白色不透明粒子を含む。	CC60 外面入念な調整。糸状の深い線のみある。内面入念なナデ。1層層入念なナデ。	外面深い段階で糸状のものを横方向に施文(調整?)。内面2本の平行沈線を引く。	褐色	褐色	褐色	
99	白色不透明粒子を含む。	CESS 外面ヨコナデ。内面入念にヨコナデ。	外面深い段階で半軟竹管状工具の腹部使用。「ハ」の字状に施文している。	暗褐色	明褐色	明褐色	微量の繊維を混入する。
100	金雲母・白色不透明粒子を含む。	BC67 内外面入念にヨコナデ。外面器面深い段階でヨコナデ。	半軟竹管状工具の腹部使用。横方向の平行線としての。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	内面に粘り付けた繊維がある。
101	白色不透明粒子を含む。	二層248 外両面入念なナデ。縦方向にナデ?で、にぶい艶を出している。内面荒れていて不明。	半軟竹管状工具の腹部使用。下端面一先線で区画→左から右→右から左下へ施文。	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	微量の繊維を混入する。
102	金雲母・白色不透明粒子を少量を含む。	CC51 内外面とも器面深い段階でヨコナデ。浅い糸状のもの(98と同じ)を横方向に施している。	半軟竹管状工具の腹部使用。右から左下へ施文。	赤褐色	黒褐色	褐色	99,100,102は同量の繊維混入。
103	赤色・白色・黒色強粒子を含む。	CC57 外面糸状により平滑にされている。にぶい艶が認められる。新位。内面剥落で不明。	半軟竹管状工具の腹部使用。工具を平行移動して施文している。	赤褐色	赤褐色	赤褐色	
104	金雲母・白色粒子を含む。	CA59 内外面入念にヨコナデ。外面浅い糸状のものを横方向に施している。	鋭利な棒状工具による単一沈線と、器面深い段階で平行に引いている。	赤褐色	赤褐色	褐色	繊維微塵に混入する。
105	赤色・白色・黒色強粒子を含む。	CC56 外面入念にナデ。外面浅い糸状のものを斜めに施している。内面深い段階でヨコナデ。	半軟竹管状工具の腹部使用。103と同様の施文方法。	黒褐色	褐色	暗赤褐色	103と同一部体と思われる。
106	白色粒子・金雲母を少量含む。	CU39 外面粗いヨコナデ。小さな凹凸あり。内面ヨコナデ。平滑。	棒状工具による単一沈線。深い沈線である。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	
107	白色粒子を少量含む。	CJ39 内外面とも入念なナデ。外面タテナデ。内面ヨコナデ。	細い直並線を器面深い段階で格子目(Bケース)に施文。	灰褐色	灰褐色	灰褐色	外面に煤付着。
108 109	砂粒子を含む。	CR59, BY63 内外面入念にナデ。内面小さな凹凸がある。	尺線模様を立てて右下へ施文。深い段階で施文している。	赤黒色	黒褐色	赤黒色	同一部体? 繊維共に少量含む。
110 113	白色粒子を含む。	BG38, AW36 外面糸状を斜位に施し平滑にしている。内面入念なナデ。	尺線模様は108・109よりもわせて施文している。	明褐色	明褐色	明褐色	
114 122	白色不透明粒子を含む。	土層248・CF48・CI50。土層301。土層231 内外面糸状を横方向に入念に施している。内面器面深い段階で指によるヨコナデ。糸状のものは深い段階で横方向に平滑に施している。	尺線模様を立てて右下へ施文している。器面深い段階で施文している。	赤褐色 赤黒色	褐色 黒褐色	赤褐色 赤黒色	少量の繊維を含む。河一側体かは不明。122に煤が付着。
123	砂粒子を微量を含む。	CK40 内外面とも糸状で平滑にしている。内面ににぶい艶が認められる。	1層層に尺線模様を施している。	赤黒色	黒褐色	赤黒色	断面サンドイッチ状。
124	砂粒子を微量を含む。	CA42 外両面糸状による入念に施している。内面小さな凹凸がみられる。口唇部粗いナデ。	1層層に尺線模様を施している。	赤黒色	褐色	褐色	

番号	類 十	出土地点・形状・調整・彫刻手法の特徴	施文・施行手法の特徴	色 調			備 考
				外 型	器 内	内 型	
125	白色不透明粒子を少量含む。	C K 41 内外面とも粗いヨコナデ。小さは凹凸がある。口唇部に入念にナデ。艶が認められる。	小突起が流状を成すと思われ。一旦平口輪にして貼り付けている。口唇部裏縁で施文している。	赤褐色	黒色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
126	白色不透明粒子を少量含む。	土境300 外面粗いヨコ。内面入念なヨコナデ。口唇部にお艶がある。内外面とも小さな凹凸がみられる。	口唇に2条、口唇部に腹縁を施文。連続的に施している。	赤褐色	黒色	明赤褐色	断面サンドイッチ状。
127	白色不透明粒子を含む。	C H 41 内外面とも条痕を横方向に施している。凹凸が小さい凹凸がある。	唇面硬い段階で口唇部に貝殻腹縁を施している。	赤褐色	黒褐色	褐色	断面サンドイッチ状。
128	白色砂粒子を少量含む。	C F 41 内外面とも条痕を横方向に施している。口唇部に入念にヨコナデ。	先染の鋭利なもので削んでいる。	褐色	黒褐色	暗褐色	
129	白色不透明粒子を少量含む。	C L 39 内外面とも入念に条痕を施す。内外面の条痕は異なる2種類を使い分けしている。	貝殻腹縁か歯状の工具のようなもので削んでいる。	褐色	黒褐色	褐色	断面サンドイッチ状。
130 132	白色不透明粒子を少量含む。	C R 45、C H 42、C F 40 外面斜位に条痕を施している。内面外面と両側の条痕を用いて横方向に粗く施している。指が指による横ナデをしている。凹凸がみられる。	貝殻腹縁を連続的に左から右へ施文している。	赤褐色	黒褐色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
133	白色不透明粒子を少量含む。	C A 42 内外面粗いヨコナデ。唇面硬い段階で施している。	板状の工具を用いて連続的に削んでいる。	褐色	黒褐色	黒褐色	
134	白色不透明粒子を含む。	A Y 46 内外面とも粗いヨコナデ。小さな凹凸がみられる。	指で左から右へ調染状に小さな波状をつくっている。	明赤褐色	赤褐色	明赤褐色	断面サンドイッチ状。
135	白色不透明粒子を少量含む。	C D 38 内外面とも唇面乾燥後、ヘラナズリをしている。	板状の工具を用い、連続的に削んでいる。	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	繊維含有は他に比べ少ない。
136	白色粒子を少量含む。	C D 38・土境235 外面縦線を多帯に含み器蓋はザラつきが入念にヨコナデ。内面は外面より繊維が洗んでいる。器全体条痕を横方向に施している。	口唇部、口唇部裏下に洗削刻みをもつ。器底全面に簡単なナデ→塗布を貼り付け→沈着を引くと同時に器唇部をナゾっている。	暗赤褐色 赤褐色	黒色	暗赤褐色 黒褐色	多量の繊維を含み完全な産成していない繊維がある。
137	白色砂粒子を含む。	C D 39 器蓋はザラつきが、器全体条痕を内外面横方向に施している。	施文と思われる。	黒褐色	黒褐色	黒褐色	繊維多量に含む。
138	新石粒子を含む。	C I 39 外面硬い段階で条痕を横方向に施文。内面粗いヨコナデ。	施文	明赤褐色	黒褐色	明赤褐色	
139	白色粒子を微量に含む。	C K 41 外壁ナデ後条痕を斜めに施文。内面粗いヨコナデと粗い条痕。	施文	暗赤褐色	黒色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
140	金雲母・白色不透明粒子を含む。	A M 57 外面硬い段階で条痕を斜めに施している。内面粗いヨコナデ。	施文	明赤褐色	明赤褐色	暗褐色	
141	白色粒子を含む。	C G 41 外壁ナデ後条痕を斜位に施している。内面横方向に条痕を施している。	施文	赤褐色	黒褐色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
142	金雲母を含む。	Z 内外面粗いヨコナデ。	沈着・押し引き	赤褐色	黒褐色	赤褐色	繊維を少し含み断面サンドイッチ状。
143	灰石・白色粒子を多量に含む。	C F 48 外面粗い条痕を横方向に施している。内面粗いヨコナデ。	施文	褐色	暗褐色	暗褐色	

番号	胎土	出土地・成形・製法・整形手法の特徴	施文・施行手法の特徴	色調			備考
				外面	器内	内面	
144	長石粒子を多量に含む。	CJ57 外面硬い条痕で横方向に施している。内面硬い段階でヨコナデ。	無文	赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	内面に焦げが付着。
145	白色粒子を含む。	CF40 外面條線ヨコナデ。凹凸がある。内面條線を主に横方向に施している。	加文	明赤褐色	黒褐色	褐色	断面サンドイッチ状。
146	金雲母・白色不透明粒子を含む。	土質385 外面ヨコナデ後斜位に条痕を施文。内面硬い段階でヨコナデ。内外面とも小さな凹凸がある。	無文	赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	
147	白色粒子を少量含む。	CG57 外面入念に条痕を斜位に施している。内面器蓋覆れて不明。	無文	赤褐色	黒褐色	赤褐色	
148	白色粒子を少量含む。	CD39 外面入念に条痕で横方向に施文。内面入念に条痕を施している。	無文	暗赤褐色	黒色	赤褐色	断面サンドイッチ状。
149 152 154 157 158	白色不透明粒子を含む。	CF48 内外河条痕を横方向に入念に施している。内面の条痕が深い。内面ヨコナデ後条痕。	無文	赤褐色	赤褐色	黒褐色	
153	白色不透明粒子を含む。	CQ59 外面浅い条痕を横方向に入念に施している。内面覆れていて不明。	無文	赤褐色	褐色	褐色	
155	白色不透明粒子を含む。	CF48 内外面とも粗いナデを横方向に施している。	無文	赤褐色	褐色	褐色	
156	金雲母・白色不透明粒子を含む。	CF48 器面硬い段階でヨコナデ。内外面とも砂粒が移動して條痕状になっている。	無文	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	内面に焦げ付着。
159	長石粒子を多量に含む。	土質300 外面硬い段階でヨコナデ。砂粒が移動して條痕状を成す。	無文	赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	器内に堅果種子出歯がある。
160	砂粒子を含む。	CF48 内外面とも硬い段階でヨコナデ。砂粒が移動して條痕状を成す。	無文	赤褐色	赤褐色	赤褐色	
161	白色不透明粒子を少量含む。	CR59 内外面入念にナデられ平滑である。内面に指おさえの痕跡がある。	無文	明赤褐色	褐色	明赤褐色	
162	長石粒子を多量に含む。	CL59 内外面とも入念なヨコナデ。ともに指により平滑である。	施文2種類を用い、L R→R L→L R→R Lの順序で下から上に横方向に施文している。	赤褐色	黒褐色	灰色	断面サンドイッチ状。
163 173	白色粒子を多量に含む。	内外面とも器面軟かい段階で給条線条痕を上半は横方向、下半は縦方向に施している。	給条線条痕を全面に施す→輪帯彫り付け→条痕を挿入→挿入部を沈め縦紋にヨコナデしている。	褐色	黒褐色	褐色	断面サンドイッチ状。

注1 所需金雲母で、火成岩に含まれている黒雲母と同種のもとの混入が、色調より便宜的に用いたものである。

注2 安藤了昭氏は「平尾遺跡」の報告中で電子顕微鏡を引く方法について記しているが、文章と図が違っている。文章に従えば、AケースがBケースで、BケースがAケースである。

注3 特に編織土器によく認められるように、外面から器内、内面まで同一の色調であるものを完全蒸焼した土器と呼ぶならば、これらは不完全蒸焼のもとの混入が、おそらく器がはいるを防ぐために、焼成時間を短くした結果と考えられる。

表5 頭取沢遺跡縄文時代中期・後期主要土器一覧表

角持角押文(組a)、二序三角押文(A、C、)、莖(A、B)

文様帯変化のあるものから第1文様帯(D)、第10文様帯(A1(含蓋帯)、花崗岩D)チャット等を除く

土器番号	出土地点	器内	器外	主たる文様特徴 (施文具の特徴)	単位	胎土	色	調	備考
174	5住	横ナ	横ナ	RL+半沈線内外ザラザ	4	A1	赤褐色	底全面	
175	10住	横ナ	横ナ	RL+半沈線+三又文夾起? A+B+A'+B'	4	A1	暗赤褐色	胴全面	
176	10住	横ナ	横ナ	加筋R+半線 内面輪ねみ取・茎付蓋	4	A1	赤褐色	底半周	
177	10住	横ナ	横ナ	RL+半沈線+交互刺突	-	A1	赤褐色	実胴部	
178	10住	横ナ	横ナ	半沈線+LR+(時計廻り)内面刺落外面連付帯	4	A1	黒褐色	実胴部	
179	10住	横ナ	横ナ	RL+半沈線+交互刺突	-	A2	茶褐色	実胴部	
180	10住	横ミ	横ミ		-	A1	赤褐色	底	
181	10住	横ミ	横ミ		-	A2	茶褐色	底	
182	11住	横ナ	横ナ	RL+半沈線	4	A1	茶褐色	底	
183	12住	横ナ	横ナ	繊細なLR陰帯二から、縁に下から指圧	-	A2	暗褐色	実胴部	
184	12住	横ミ	横ミ	RL(時計廻り)+半沈 体部外型傾り取	3	A1	赤褐色	口縁部	
185	12住	横ナ	横ナ	RL+半隆起帯B字文 陶文原体2種類	4	A1	赤褐色	実胴部	
186	14住	横ナ	横ナ	半隆起+平行沈線+莖文・RL 区画陰帯 竹管内面ナデ 外面連付帯	2	A1	赤褐色	全面	
187	14住	横ナ	横ナ	RL+半隆起+平行沈線 胴Y字文系統 外面再火熱のため黒褐色	2	B	暗褐色	実胴部	
188	14住	横ナ	横ナ	RL+半隆起線 外面連付帯	4	A1	暗褐色	実胴部	
189	14住	横ナ	横ナ	RL 軟質	-	A1	赤褐色	底	
190	14住	ナ	横ナ	RL+半沈線+三角印刺 多量の砂粒含み器面ザラザ	4	A1	赤褐色	底	
191	14住	横ナ	斜ナ	外面雨り接ナデ 内面窪れる、外面連付帯	-	A1	暗褐色	底	
192	14住	横ミ	横ミ	連続爪形文 輪付孔	-	A1	茶褐色	実胴部	
193	14住	ミ	横ナ		-	A1	茶褐色	底	
194	15住	横ナ	ミ	区画陰帯+半沈線+RL 口縁2単位、胴4単位	-	A1	赤褐色	口縁穴	
195	15住	横ナ	ミ		-	A2	暗褐色	底	
196	15住	横ナ	横ナ	結節LR 泥具によるナデ 輪ねみ取 器面ザラザ	-	A2	茶褐色	全面	
197	15住	横ナ	横ナ	連続爪形文+半沈線	4	A1	赤褐色	実胴部	
198	土182	ナ	ナ	RL+半沈線+莖文 土質184と結合	2	A1	赤褐色	一部穴	
199	土184	横ナ	ナ	RL+半沈線 +土質185と結合	4	A1	暗赤褐色	底	
200	土184	斜ミ	横ナ	RL+半沈線+交互刺突	-	A1	暗褐色	底	
201	土252	横ナ	横ナ	RL(時計廻り)+連続爪形+刺突	4	A2	暗赤褐色	実胴部	
202	土282	ナ	ナ	RL+半隆起線+莖切止+三角印刺 土質5・287と結合	-	B	赤褐色	実胴部	
203	遺構外	横ナ	ナ	RL+半隆起線+莖面押止点 内面下部 灰化物付帯	-	B	赤褐色	底	
204	遺構外	横ナ	ナ	RL+半沈線 内面黒褐色	-	A1	赤褐色	実胴部	
205	土319	横ミ	斜ナ	連続爪形RL+半隆起線+莖切止線・復形文 内面指圧痕	4	B	赤褐色	底	
206	土319	横ナ	ナ	RL+半沈線+三角印刺 土質311と結合	4	A1	赤褐色	底	
207	遺構外	斜ナ	ナ	LR+連続爪+半隆起線・結節状沈線	-	A1	赤褐色	実胴部	
208	遺構外	ナ	横ミ	半隆起線 内面灰化物付帯	-	A2	暗赤褐色	底	
209	遺構外	横ナ	ナ	RL+半隆起線+押圧爪形・三又文	4	A1	赤褐色	実胴部	
210	遺構外	横ナ	横ナ	莖帯+RL+半隆起線+爪形押圧文 A+B 内面ザラザ	4	A1	暗赤褐色	実胴部	
211	遺構外	横ナ	横ナ	半隆起線・結節状沈線+交互刺突・莖切止 内面下部灰化物	-	B	暗赤褐色	実胴部	
212	遺構外	横ナ	横ナ	LR+平行沈線 内面下部灰化物	-	A1	暗赤褐色	底	
213	遺構外	横ナ	横ナ	LR+平行沈線+押圧点・三角印刺 土質73・75で小片	4	C	赤褐色	底	
214	遺構外	横ナ	横ナ	連続爪形文 内面爪文	4	B	暗赤褐色	実胴部	
215	遺構外	横ナ	横ナ	連続爪形文	-	B	赤褐色	底	
216	遺構外	横ナ	横ナ	連続爪形+半隆起線+三又文 隆起部付帯に窪帯で割付	4	B	暗赤褐色	実胴部	
217	遺構外	横ナ	横ナ	連続爪形+押圧点	-	B	暗赤褐色	実胴部	
218	遺構外	横ナ	ナ	RL+三角印刺+連続爪形文	-	B	暗赤褐色	実胴部	
219	遺構外	ナ	ナ	連続爪形・莖帯へは上から、下下から指圧 外面窪付帯	-	B	暗赤褐色	実胴部	
220	遺構外	横ミ	横ミ	LR+連続爪形文	-	A1	暗褐色	底	
221	遺構外	横ミ	横ミ	RL+連続爪形+半隆起線+刺突・莖切止 土質58で小片	-	C	暗褐色	実胴部	
222	遺構外	横ミ	横ミ	RL+連続爪形+半隆起線+刺突・莖切止 内面下部斜接ナデ	-	C	暗褐色	実胴部	
223	遺構外	横ミ	横ミ	RL+連続爪形+半隆起線+刺突・莖切止 外型窪付帯	-	C	赤褐色	実胴部	
224	遺構外	横ミ	ミ	莖帯内面竹管内面ナデ後系形+半沈線三又文	-	A1	赤褐色	実胴部	
225	遺構外	横ナ	ミ	内面窪向とも黒褐色	-	A1	底全面		
226	遺構外	横ナ	莖刺		-	A2	赤褐色	底	
227	遺構外	横ナ	横ナ	半沈線+下からの押圧印点・11指押圧文 外面窪付帯	-	A1	暗赤褐色	実胴部	

土器番号	出土地点	器内	器外	主たる文様特徴 (施文具の特徴)	単位	胎土	色調	備考	
228	遺構外	横ナ	横ナ	無施R・O段他色白線(逆時計回り) 内面炭灰化物付着	4	A1	赤 褐	5%	
229	遺構外	横ナ	横ナ	RL 炭化物付着	-	A1	暗赤褐	全周	
230	遺構外	横ナ	横ナ	内外指によるナデ+RL・L線寛切 外面横付着	-	A2	暗赤褐	実測部	
232	遺構外	横ナ	横ナ	RL+半沈線+交互刺突	-	A2	暗赤褐	実測部	
234	遺構外	横ナ	横ナ	RL+半沈線 輪子痕あり(径6×4mm)	-	A2	赤 褐	5%	
235	遺構外	横ナ	横ナ	RL+半沈線+三角印刺突 内面寛れる、外面一部縦	-	A2	赤 褐	5%	
236	遺構外	横ナ	横ナ	RL(時計回り)+半沈線+三角印刺突 ②A+B+A'+B'	4	A1	暗赤褐	把手3次	
237	遺構外	横ナ	横ナ	RL	-	A1	暗赤褐	5%	
238	遺構外	横ナ	横ナ	RL+半沈線+三角印刺突 L線欠 内面炭化物付着	4	A1	暗赤褐	半完	
239	遺構外	横ナ	横ナ	内面黒色 器内暗赤褐	-	A1	赤 褐	5%	
240	遺構外	横ナ	横ナ	外面調整的ナデ+口縁やL状有 頸部あまい縦線	-	A1	赤 褐	5%	
241	遺構外	横ナ	横ナ	実割な隆帯、L線入念なナデ 底内面炭化物付着	-	A2	赤 褐	実測部	
242	遺構外	横ナ	横ナ	内面暗褐色 長石少量 金雲母多量含	-	A1	赤 褐	5%	
243	遺構外	横ナ	横ナ	内面黒褐色	-	A1	赤 褐	5%	
244	遺構外	横ミ	横ミ	L線下四線+連続L形文	-	A1	暗赤褐	実測部	
245	遺構外	横ナ	横ナ	RL+半沈線+連続L形文+交互刺突	4	A1	赤 褐	5%	
246	遺構外	横ミ	横ミ	RL+半沈線	-	A1	赤 褐	5%	
247	遺構外	横ミ	横ミ	RL(逆時計回り)+半沈線+押爪形文	-	A1	明赤褐	5%	
248	遺構外	横ミ	横ミ	フの字貼付ナデ+半沈線	-	A1	赤 褐	実測部	
249	遺構外	横ナ	横ナ	隆帯にそいナデ、輪縁み帯隆帯(部分)、砂粒移動痕、隆帯L	-	A1	赤 褐	全周	
250	251	3位	横ナ	横ナ	ナデ調整+Lガキ+連続系彩文+刺突・口唇厚圧	-	A1	赤 褐	実測部
252	4位	横ナ	横ナ	L線は指圧後隆帯ナデ、L線上連続指圧痕 角押-3.5mm	-	A2	赤 褐	底全周	
253	4位	横ナ	横ナ	②A+B+A'+B' 角押-5mm 縦状懸垂下部は左から連続指圧	4	A2	煙 褐	全底	
254	4位	横ナ	横ナ	幅1cmの底で調整、角押-4mm・5mm	4	A1	赤 褐	5%	
255	4位	横ナ	横ナ	指圧→指ナデ 角押-3mm、口縁 炭化物付着	-	A2	茶 褐	5%	
256	4位	横ミ	横ミ	柄み上げ痕 内面刺突	-	A2	赤 褐	5%	
257	4位	横ナ	横ナ	柄内押+縦押圧・押し 角押-3mm	-	A1	赤 褐	実測部	
258	9位	横ナ	横ナ	角押文+横圧列点・三角印刺 角押-3mm 縦線貫通	-	A1	赤 褐	底L	
259	9位	横ナ	横ナ	角押-3mm 外壁上部炭化物・胴下部横刷り	4	A2	黒 褐	全周	
260	9位	横ナ	横ナ	平行沈線文	-	B	煙 褐	5%	
261	9位	横ナ	横ナ	平行沈線文 平内より2片、他はグリット出土	-	B	煙 褐	実測部	
262	土7	横ミ	横ミ	角押-4mm 砂粒ザラザク 補修孔1ヶ	-	A2	暗赤褐	5%	
263	土田	横ミ	横ミ	角押文による区画内を三角押文L施文 角押-4mm A+A'+B+B'	4	A1	引赤褐	一部欠	
264	土田	横ナ	横ナ	角押文+竹筒立刷痕 角押-竹筒5mm 膠状把手	-	A2	暗赤褐	実測部	
265	土田	横ナ	横ナ	L線貫通ナデ取割痕 中初洗鉢粘土に貼る。	-	A1	暗赤褐	実測部	
266	安石5	横ナ	横ナ	体部隆帯より砂粒移動痕顕著、パミス含む	-	A2	赤 褐	5%	
267	遺構外	横ナ	横ナ	角押文+刺突 角押-2mm 底成貝	-	A2	赤 褐	5%	
268	遺構外	横ナ	横ナ	体部隆帯より砂粒移動痕 部分的に押引沈線+粗面隆帯交互刺突	4	A1	赤 褐	実測部	
269	遺構外	横ナ	横ナ	角押文+沈線+押圧 角押-3mm	-	A1	暗赤褐	5%	
270	遺構外	横ミ	横ミ	角押-3mm 刺 縦線文 体部砂粒移動痕顕著	-	A2	赤 褐	底全周	
271	遺構外	横ミ	横ミ	連続L形・6mm・竹筒-5mm	-	A2	赤 褐	1/5	
272	遺構外	横ミ	横ミ	縦線L形・輪縁み	-	A2	赤 褐	1/5	
273	9位	横ナ	横ナ	縦線L形 底角三押A-6mm・角押-3mm L線一部赤色塗彩	4	A1	暗赤褐	1/5	
274	遺構外	横ナ	横ナ	角押文類似 深いL形帯地 原体-5・3mm 内面寛れる	-	A2	煙 褐	実測部	
275	遺構外	横ナ	横ナ	底刷引文・縦線帯底押圧跡目 径B-4mm 胴下砂粒移動痕	4	A2	赤 褐	5%	
276	遺構外	横ミ	横ミ	三押B 砂粒移動痕顕著	-	A2	赤 褐	5%	
277	遺構外	横ナ	横ナ	連続L形-9mm 三角押文 ②A+3B ②A+B+L'K'1B'	4	A2	暗赤褐	1/5	
278	遺構外	横ナ	横ナ	三押A	-	A2	赤 褐	5%	
279	遺構外	横ミ	横ミ	三押A 広範囲体同一か。人字状把手	4	A2	暗赤褐	全周	
280	遺構外	横ミ	横ミ	沈線区画+L 内面指圧痕 L線 導付着	-	A2	暗赤褐	実測部	
281	遺構外	横ミ	横ミ	沈線区画+L+刷痕 内外二次焼成?で発れる。	-	A2	明赤褐	実測部	
282	遺構外	横ミ	横ミ	Rの字文+括弧文+半沈線+角線文+L'R	-	A2	赤 褐	5%	
283	遺構外	横ナ	横ナ	A+5B 口縁突起2対 口縁内外面炭化物付着	6	A2	煙 褐	1/5	



表6 頭取沢遺跡出土小形石器一覧表

図番号	出土地点	現存計測値 (cm・g)				破損状況	形態分類
		長さ	幅	厚さ	重さ		
33	9号住居址No35	2.50	(1.70)	0.45	(1.05)	逆刺一端破損	224 n 22
10	12号住居址No63	2.25	(1.25)	0.35	(0.72)	同上	21322
9	12号住居址No64	2.55	1.70	0.40	0.95		214 n 22
22	土壇142	2.30	1.45	0.30	0.90		324 n 51
24	土壇189	2.10	1.60	0.65	1.55		53276
33	土壇247	1.55	(1.45)	0.30	(0.38)	逆刺一端破損	32234
35	土壇248	1.30	1.20	0.25	0.34		524 n 76
16	土壇394線上	1.90	1.45	0.25	0.58		224 n 12
1	1号住居址No25	3.00	(1.50)	0.40	(0.50)	逆刺一端破損	214 n 22
45	1号住居址	2.45	1.25	0.55	1.36		00002
38	1号住居址西土器集中区	2.65	(1.80)	0.20	(0.83)	逆刺一端破損	32152
17	A C 52	2.95	1.60	0.40	1.52		314 n 14
	A L 62耕作土	2.20	(1.30)	0.50	(1.18)	逆刺一端破損	23322
2	A M 61	1.90	(1.40)	0.35	(0.62)	"	22322
40	A M 61窪込黒	(1.75)	1.75	0.35	(1.20)	先端・窪欠損	6 Z 7.37
36	A N 58耕作土	1.70	1.50	0.40	0.85		424 n 65
3	A N 61 II層No18	1.15	(1.30)	0.30	(1.05)	逆刺一端破損	324 n 53
42	A N 62 II層	1.60	1.28	0.40	0.83		324 n 11
14	A O 46	(2.40)	(1.35)	0.30	(0.60)	先端逆刺一端破損	2 Z 232
11	A O 60 II層耕作土No4	1.75	1.40	0.40	0.48		31252
39	A P 61 No 27	(2.60)	1.75	0.50	(2.00)	窪欠損	62177
41	A Q 61 III層No92	(1.20)	1.35	0.20	(0.33)		624 n 17
31	A Q 64 III層No93	1.40	(1.85)	0.20	(0.58)	逆刺一端破損	33344
32	A R 63 III層	2.30	2.10	0.80	3.58		424 n 51
	A S 55	1.85	(1.00)	0.30	(0.43)	逆刺一端破損	31332
18	A S 61 III層No75	1.50	1.10	0.25	0.33		324 n 14
	A U 41耕作土	(2.30)	(2.00)	0.65	(1.95)	逆刺一端破損	Z 2 Z 2 Z
12	A W 61	1.95	(1.40)	0.50	(0.72)	逆刺一端破損	22252
25	A X 51耕作土	1.65	1.55	0.45	0.75		33351
4	A X 64耕作土	(2.40)	1.60	0.40	(1.04)	先端破損	Z 2 Z 352
46	A X 64耕作土	2.20	(1.30)	0.40	(1.08)	逆刺一端破損	02652
24	A区表採取	2.40	1.80	0.30	1.20		31221
26	A Z	1.85	1.45	0.30	0.70		42314
	B A 40	(3.00)	(2.45)	0.35	(1.80)	逆刺一端破損	Z 2 Z 2 Z
5	B B 37	1.70	1.55	0.50	0.50		244 n 52
43	B E 62耕作土	2.75	(2.20)	0.25	(0.97)	逆刺一端破損	22244
27	B F 61 II層No10	1.45	1.40	0.30	0.40		32334
	B F 63 No 14 I層	(1.75)	(1.3)	0.25	(0.55)	逆刺一端破損	Z 1 Z 2 Z
6	B G 61黒色土層No83	1.95	1.20	0.20	0.26		21352
37	B H 50耕作土	2.10	1.95	0.35	1.26		434 n 75
8	B H 67 I層No57	2.05	(1.45)	0.50	1.05	逆刺一端破損	234 n 32
	B J 59褐色土層No96	2.05	1.10	0.20	0.28	逆刺一端破損	Z 133 Z
13	B K 44耕作土	2.80	1.70	0.35	0.87		21323
19	B K 60 No 36	2.35	1.60	0.40	1.25		324 n 11
15	B K 60黒色土層	2.45	1.40	0.40	0.58		31322
	B L 59耕作土No34	(2.15)	(1.40)	0.30	(0.75)	逆刺一端破損	Z 1 Z 2 Z
20	B L 59黒褐色土層No81	2.55	1.40	0.20	0.60		31322
44	B L 64耕作土	2.15	(1.80)	0.50	(1.16)	"	32342
21	B X 44黒褐色土層	2.75	1.40	0.45	1.26		314 n 11
28	B X 54褐色土層	2.40	2.00	0.45	1.52		42381
47	B X 58耕作土	(2.70)	(1.80)	0.40	(1.30)	逆刺一端破損	313 Z 2
	B X 58耕作土	(2.05)	(1.20)	0.35	(0.62)	逆刺一端破損	Z 13 Z 2
7	C D 44黒褐色土層	1.65	1.30	0.30	0.40		42352
	C P 43	2.20	(1.45)	0.35	(0.96)	逆刺一端破損	Z 24 n 6 Z
	C Z	2.15	(1.25)	0.45	(1.20)	逆刺一端破損	21332
30	表採取	2.40	1.80	0.30	1.20		31221
29	Z	2.20	1.45	0.35	0.78		31331

石造

図番号	出土地点	現在計測値 (cm・g)				破損状況
		長さ	幅	厚さ	重さ	
49	土塚185	3.80	1.45	0.35	0.78	
50	A O61No41	(2.15)	0.60	0.50	(0.60)	先端のみ残存
52	A P15褐色土	3.60	1.80	0.65	2.55	
53	A Q40田原	2.90	1.05	0.70	2.13	
54	A R60	4.25	1.50	0.85	4.14	
48	A R64II層No.3	2.20	1.55	0.90	2.95	
57	A S50	3.25	1.25	0.90	3.25	
35	A V59黒色土	4.65	1.40	0.75	2.98	
56	A W30No104	3.40	1.25	0.60	2.45	溝み部一部欠損
58	A W44暗褐色土	(5.00)	1.55	0.65	(4.22)	先端欠損
51	表紙	(1.75)	0.70	0.50	(0.67)	先端のみ残存

スクレイパー類

図番号	出土地点	形質分類	現在計測値 (cm・g)				破損状況
			長さ	幅	厚さ	重さ	
68	12号住居址No.9	両指状エンド	2.70	2.20	0.90	5.35	
65	ド184	スクレイパー	2.10	2.20	0.85	4.50	
66	A O62II層	〃	1.85	1.60	0.50	1.60	
69	A R62II層No.2	両指状エンド	2.30	1.90	0.70	3.04	
61	B F53編移層No.6	サイド	3.30	(2.75)	0.90	7.53	両端破損
70	B U64褐色土	スクレイパー	2.90	2.70	1.25	7.74	
63	C G56	サイド	1.90	(5.30)	0.80	11.02	：破破損
62	C J30	〃	3.25	(5.00)	1.35	19.60	〃
62	C M42	〃	2.85	(6.60)	1.40	25.00	〃
67	C R45	スクレイパー	2.60	2.45	1.00	5.55	
67	C V56耕作土	スクレイパー	1.95	1.90	0.6	2.10	片
64	Z	サイド	2.15	(4.30)	0.85	11.74	：破破損

定形石器

図番号	出土地点	現在計測値 (cm・g)			
		長さ	幅	厚さ	重さ
74	14生	2.85	1.80	0.55	1.95
78	土塚235	2.85	1.35	0.60	2.15
77	A J53	2.40	1.95	0.65	2.70
73	R C68	2.70	1.70	0.70	2.65
71	B G62No.85黒色土	2.15	1.75	0.45	1.50
72	B Z	1.55	1.05	0.45	0.65
75	C A-Z	2.40	2.30	0.60	2.85
76	C II-58	1.70	1.20	0.35	0.60

石匙

図番号	出土地点	現在計測値 (cm・g)			
		長さ	幅	厚さ	重さ
59	B D65	1.85	5.40	0.65	7.75
60	C T42	2.20	5.30	0.80	8.55

彫刻彫器

図番号	出土地点	型式分類	現在計測値 (cm・g)				破損状況
			長さ	幅	厚さ	重さ	
79	5住	彫 刻 器	2.25	2.10	0.85	3.75	
	9号住居址復土	彫 刻 器	2.00	1.90	0.60	2.00	
	14作No.69	〃	1.85	0.95	0.50	0.75	
	14号作居址	ビス・エスキーユ	1.85	1.15	0.60	1.10	
	上溝144	ビス・エスキーユ	2.70	1.10	0.70	1.60	
	土塚288	骨 槌 型	2.65	0.95	0.70	1.30	
	土塚325	ビス・エスキーユ	2.85	1.90	0.80	3.65	
	A H51	彫 刻 器	2.00	1.95	1.10	3.40	
	A I59	ビス・エスキーユ	2.50	1.55	0.70	2.90	
	A J59	コ ア 型	2.10	1.25	1.00	2.60	
	A J69	ビス・エスキーユ	2.65	2.20	1.10	6.90	
	A O・A P61褐色土	コ ア 型	2.20	1.65	1.05	3.40	
	A P56	彫 刻 器	2.15	2.30	0.75	3.35	
	A S48	骨 槌 型	3.25	1.55	0.55	2.55	
	A S52耕作土	ビス・エスキーユ	3.60	2.85	1.00	7.45	
	A U50	骨 槌 型	2.50	1.15	0.70	1.80	
	A U56	コ ア 型	2.30	1.75	1.40	4.30	
	A V65耕作土	ビス・エスキーユ	2.85	1.40	0.60	2.65	
	A W69	〃	3.25	1.35	0.95	3.70	
	A X62	コ ア 型	2.60	1.40	1.20	3.50	
B G60II層	片 彫 刻 器	2.95	1.85	0.80	5.35		
B P38	骨 槌 型	2.80	0.95	0.65	1.50		
B S39	骨 槌 型	2.90	0.95	0.65	1.15		
B U41	ビス・エスキーユ	2.85	1.60	0.50	1.75		
B Y50(15号住居址)	〃	(3.40)	2.65	(1.20)	6.65		
B Y54耕作土	コ ア 型	1.90	2.00	0.65	2.40		
C A55黒褐色土	骨 槌 型	2.45	1.05	0.60	1.15		
C B47耕作土	骨 槌 型	2.55	1.45	0.75	2.70		
C R52	彫 刻 器	1.80	1.10	0.50	0.75		
C I54	片 彫 刻 器	4.90	2.55	1.00	12.60		
84	Z	骨 槌 型	2.55	0.95	0.80	1.30	
	Z	〃	2.40	1.20	0.65	1.45	
	Z	コ ア 型	3.30	1.55	1.10	5.05	
91	Z	片 彫 刻 器	3.65	2.35	0.70	7.40	

表7 頭取沢遺跡出土大形石器一覧表

図 番号	出土遺構	器 種	長さ (cm)	巾 (cm)	最大 厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	形態	備考
133	BV54	打製石斧	11.9	5.1	1.7	145	不明	IA	
134	B U35	"	11.9	4.7	1.6	136	硬砂岩	"	
135	12号作No2	"	12.2	5.8	2.4	167	緑色片岩	"	
136	B D70	"	10.2	4.2	1.8	128	"	"	
137	A I J58	"	8.7	5.2	1.7	86	"	"	
138	14号住No24	"	6.0	6.1	1.4	65	砂岩	"	
139	土壌86	"	10.7	4.2	0.5	95	緑色片岩	IAB	
140	C A55	"	12.8	3.7	1.6	102	"	"	
141	A I 45	"	12.7	4.6	1.7	127	"	"	
142	土壌285	"	8.7	4.7	1.7	81	頁岩	"	
143	A I J58	"	9.5	5.8	1.5	136	砂岩	"	
144	3号作痕跡	"	12.6	5.0	2.9	149	"	"	B 3 打製集合
145	A T53	"	14.9	5.5	1.2	134	"	"	
146	B Y43	"	10.7	5.0	0.9	99	緑色片岩	IB	
147	A R54	"	12.4	4.6	1.7	128	"	"	
148	4号住No32	"	10.7	4.4	0.8	50	頁岩	"	
149	B Y43	"	11.0	4.3	1.0	85	"	"	
150	土壌325	"	11.0	3.9	0.9	76	緑色片岩	"	
151	A W43	"	9.3	3.9	1.3	84	砂岩	"	
152	A V56	"	10.5	4.8	1.2	119	"	IC	
153	土壌58	"	11.0	4.7	1.8	127	"	"	
154	14号住No42	"	10.1	5.7	0.7	107	"	"	
155	14号住No42	"	10.4	4.5	1.9	86	緑色片岩	"	
156	11号作No17	"	12.2	4.6	1.3	67	頁岩	"	
157	土壌57	"	12.7	4.5	1.8	108	緑色片岩	"	
158	土壌35	"	13.1	4.1	1.0	106	"	"	
159	A W40	"	9.5	6.3	1.2	110	砂岩	ID	
160	B I 63	"	10.9	4.6	1.7	92	緑色片岩	IE	
161	土壌118	"	12.2	3.5	2.3	149	"	"	
162	土壌235	"	10.1	5.1	1.7	117	"	IIA	
163	C F54	"	9.6	5.4	1.7	98	"	"	
164	13号300No24	"	13.3	5.9	0.9	146	砂岩	IAB	
165	14号住No12	"	9.6	5.7	1.9	108	"	"	
166	C D39	"	11.8	7.3	1.6	161	"	IIB	
167	C D51	"	11.0	4.8	1.8	92	砂岩	"	
168	A Y66	"	10.5	4.9	1.9	88	緑色片岩	IIC	
169	A X64	"	11.3	5.5	1.5	131	砂岩	"	
170	土壌159	"	9.2	5.3	1.4	83	"	"	
171	13号300No13	"	13.0	4.9	1.3	103	"	IID	
172	C C53	"	19.8	9.3	2.3	512	"	III C	
173	A M62	"	11.8	7.4	3.7	390	安山岩	"	C K43 集合
174	CM45	未成品	13.2	5.5	2.1	113	緑色片岩	"	
175	土壌102	"	13.4	8.4	2.5	273	"	"	
176	A P56	その他の石器	17.8	4.9	2.9	340	"	"	
177	B A62	"	16.2	3.4	2.1	116	"	"	
178	A T46	"	6.5	3.0	0.6	10	"	"	
179	B W50	"	7.0	2.2	0.7	25	"	"	
180	土壌57	"	13.2	3.6	1.1	74	"	"	
181	土壌279	"	14.9	3.9	1.4	127	"	"	
182	Y G65	"	6.0	5.0	1.7	59	"	"	
183	B C33	"	7.4	4.3	1.6	59	"	"	
184	A U49	石 錐	5.2	4.9	0.5	17	砂岩	"	真化中遺物
185	R G61	磨 礮	13.6	8.8	3.7	325	緑色片岩	"	
186	14号住No21	"	7.2	5.5	1.6	52	砂岩	"	
187	B R-Z	"	8.6	5.6	1.1	47	"	"	
188	B E65	竊刀型石斧	6.2	7.8	1.5	90	緑色片岩	IA	
189	B W55	"	6.5	8.6	1.0	55	頁岩	"	
190	土壌174	"	3.2	9.4	0.9	31	緑色片岩	IB	
191	5号住No1	"	3.1	7.6	0.7	19	"	"	
192	9号住No21	"	3.5	7.6	1.1	37	"	"	
193	12号住No40	"	5.6	9.6	1.0	90	頁岩	"	
194	14号住	"	4.1	9.3	0.5	38	緑色片岩	"	
195	5号作No13	"	4.6	9.4	0.8	22	"	"	
196	B R65	"	3.2	8.6	0.7	20	"	"	
197	9号住No15	"	4.0	8.3	0.7	32	"	"	
198	A I J58	横刃型石斧	4.1	9.5	0.8	45	頁岩	IB	頭取沢のもの
199	A X64	"	4.3	7.8	0.9	47	"	"	
200	土壌182	"	7.5	8.5	1.4	112	"	"	
201	A Y66	"	2.9	10.4	0.5	24	緑色片岩	"	
202	土壌86	"	3.7	7.8	1.2	39	"	"	
203	土壌11	"	5.0	8.0	0.8	52	"	"	
204	B I 66	"	3.3	9.7	0.8	28	"	IC	
205	A U46	"	4.5	14.0	1.6	80	砂岩	"	
206	A C56	"	3.6	12.3	1.3	54	緑色片岩	"	
207	9号作No20	"	4.5	9.7	1.1	34	"	"	
208	C C57	"	4.6	8.5	1.1	37	砂岩	IIA	
209	A T46	"	7.0	10.8	1.1	129	緑色片岩	"	
210	A O46	"	8.1	12.2	1.2	146	砂岩	"	
211	A Y66	"	6.7	11.0	1.4	111	"	"	
212	A Y47	"	9.3	14.6	1.9	244	"	"	
213	A Y44	"	5.3	10.2	0.6	30	頁岩	IIB	
214	4号住No42	"	5.7	8.4	1.6	39	砂岩	"	
215	14号住No11	"	5.1	10.5	1.6	73	"	"	
216	土壌202	"	4.1	9.2	1.1	45	"	"	
217	14号住No23	"	4.6	7.0	1.1	48	頁岩	IIC	
218	B B44	"	4.5	8.0	0.7	45	不明	"	
219	A X64	"	3.4	8.0	0.9	60	緑色片岩	II B	
220	A X64	"	4.0	8.7	1.1	47	"	IIA	
221	A V44	"	3.9	5.3	0.9	18	砂岩	"	
222	14号住No39	"	4.0	7.2	0.7	18	頁岩	"	
223	C D39	"	5.3	6.9	0.9	35	砂岩	"	
224	B A42	"	6.9	7.7	0.6	34	頁岩	"	
225	AWZ	"	4.5	9.1	1.6	65	オカルス	"	
226	C Q60	"	4.4	7.5	1.0	37	緑色片岩	"	
227	C D56	"	4.1	10.0	0.8	30	頁岩	"	
228	七草	"	5.8	10.7	1.3	80	"	"	
229	A Y63	"	4.3	11.9	0.7	47	緑色片岩	"	
230	B V43	"	5.3	9.2	1.2	57	頁岩	IIA	
231	土壌279	"	4.2	9.9	1.7	70	砂岩	IIB	
232	R H64	"	4.5	10.0	1.0	46	"	IIC	
233	B F65	"	4.1	7.3	0.7	26	緑色片岩	"	
234	B D38	"	4.3	11.5	0.7	50	頁岩	"	
235	A P48	"	4.9	6.1	0.5	22	緑色片岩	"	
236	B T-	"	4.2	10.5	0.8	33	頁岩	"	
237	9号作痕跡	"	5.5	10.7	0.9	72	砂岩	"	
238	14号住	"	3.4	6.6	0.7	17	緑色片岩	IIA	
239	9号作No26	"	5.3	9.8	0.8	55	頁岩	IIB	
240	土壌100	"	6.3	8.8	1.1	69	砂岩	"	
241	C A43	"	4.3	9.6	1.6	63	頁岩	"	
242	B Y46	"	6.2	9.3	1.3	80	砂岩	"	
243	C D48	"	3.5	7.4	1.0	25	"	"	
244	4号住No34	"	4.5	6.1	0.9	31	"	"	
245	B Y49	"	6.5	8.6	3.1	159	砂岩	"	
246	C L C	"	5.6	8.3	2.3	132	不明	"	
247	B D42	"	4.5	8.2	2.0	90	緑色片岩	"	
248	4号作63	竊 刀 斧	8.4	5.4	3.9	225	緑色片岩	"	頭取沢のもの
249	B A63	"	6.4	5.2	3.4	171	緑色片岩	"	
250	土壌305	"	5.2	5.2	4.1	186	"	"	
251	4号住No67	"	8.3	8.2	2.0	239	"	"	
252	14号住	その他	4.4	3.4	2.7	59	安山岩	"	
253	14号住	"	5.3	2.2	1.6	35	頁岩	"	
254	C F44	特殊石斧	7.5	6.5	6.5	882	安山岩	"	
255	Y X50	"	14.6	4.9	6.2	730	"	"	
256	C区Z	"	12.5	5.6	7.4	789	"	"	
257	土壌228	"	10.9	5.6	6.2	626	"	"	
258	C T56	"	12.3	6.6	5.8	630	"	"	
259	C L42	"	13.0	7.3	7.2	900	"	"	
260	土壌55	"	13.3	5.0	7.7	776	"	"	
261	B F56	"	12.9	7.2	10.0	1012	"	"	
262	C区Z	"	10.9	7.0	4.2	386	"	"	

區 碼	出土遺物	器 種	長 cm	寬 cm	厚 cm	重 g	石 質	形 態	備 考
263	AU56	特殊磨石	5.7	4.5	7.0	222	安山岩		
264	漆杯		5.6	5.6	3.8	386			
265	CXZ		5.7	4.4	6.3	386			
266	STD BZ		5.7	7.3	7.0	640			
267	BD63		5.9	6.7	5.7	408			
268	AH54		5.8	6.8	5.6	300			
269	AN59		9.7	7.8	4.8	658	綠色片岩		
270	土塊238	磨石	14.2	6.7	4.5	617	安山岩	土塊 磨石	
271	CL40		10.7	8.5	5.8	732			
272	CL40		10.9	9.4	5.5	710			
273	CL40		9.0	7.2	4.9	292			
274	BF67		16.0	8.8	4.8	356			
275	BF67		12.2	6.6	4.7	47C			
276	AV66		11.3	6.8	2.0	359			
277	4号作No.35		9.0	7.9	3.3	312			
278	CI.41		9.8	9.0	5.2	640			
279	AMS58		9.6	7.7	3.7	373			
280	AU60		11.7	8.4	4.7	513			
281	土塊246		17.2	7.5	6.6	49C			
282	4号作No.31		10.6	7.9	5.6	494			
284	C142		11.6	8.9	3.4	456			
285	土塊277		10.9	7.8	4.0	596			
286	B39		11.1	9.2	4.4	603			
287	土塊48		16.4	8.7	5.8	432			
288	CK41		11.4	8.2	6.9	736			
289	14号作No.54		16.3	9.9	6.7	822			
290	STD BZ		15.0	6.5	4.3	127			
291	BA60		10.4	9.2	3.8	302	砂岩		
292	DY57		9.9	8.2	6.7	683	安山岩		
293	CA55		11.8	7.4	5.4	704			
294	BR65		11.2	7.3	5.1	575			
295	BR40		9.9	7.9	7.1	576			
296	AU45		11.3	7.0	4.1	442			
297	DA61		10.0	7.9	4.1	506			
298	AQ51		16.3	7.3	4.8	477			
299	AM58		8.6	8.2	4.9	342			
300	AIZZ		9.9	8.6	4.0	402			
301	BB40		5.8	8.5	4.2	457			
302	B117		15.0	8.3	5.0	776			
303	YT68		12.1	6.4	5.3	615	安山岩		
304	11号作No.5		18.9	5.8	6.3	382			
305	AY66		8.9	7.0	5.1	402			
306	DD65		17.9	5.9	4.5	261			
307	YW66		7.6	6.1	3.1	210			
308	AY66		16.9	7.8	4.1	228			
309	AU46		8.9	6.8	3.7	378			
310	BC64		10.1	5.0	3.8	289			
311	STD BZ		9.9	8.0	4.2	518	砂岩		
312	HA47		11.1	8.6	6.3	850	安山岩		
313	HA60	磨石	20.4	6.9	4.1	523			
314	AK59		9.4	5.1	4.2	276			
315	BD37		9.9	7.9	5.2	548			
316	STD BNo.7		9.3	8.4	4.5	383			
317	HR40		9.9	7.0	5.5	637			
318	AC54		10.0	7.2	5.5	496			
319	土塊138		8.1	6.5	4.8	327			
320	14号作No.25		8.1	8.6	6.1	500			
321	HS39		11.1	8.7	7.3	720			
322	AQ59		9.9	7.1	5.4	477			

區 碼	出土遺物	器 種	長 cm	寬 cm	厚 cm	重 g	石 質	形 態	備 考
323	BD63	磨石	11.4	7.5	3.9	368	安山岩		
324	土塊206.4		16.0	6.6	5.4	385			
325	HRX60		11.0	8.6	6.2	618			
326	BC38		11.2	6.1	4.1	316			
327	AIZZ		12.0	8.3	6.2	535			
328	YY66		8.5	7.1	3.5	298			
329	AY65		14.3	5.0	5.6	402			
330	BR55		11.7	6.1	4.2	342			
331	BR37		12.0	10.0	7.0	552			
332	BY57		11.0	17.0	5.5	432			
333	AL55		13.3	8.9	4.2	417			
334	AX64		8.9	7.4	4.6	366			
335	Z		7.9	5.6	5.7	384			
336	AV65		10.7	7.3	5.8	438			
337	AX64		11.2	6.7	6.0	566			
338	AC54		10.4	6.7	5.8	377			
339	BA46		10.0	9.9	6.6	674			
340	AA30		7.3	7.1	4.0	298			
341	AK52		8.5	6.5	4.0	262			
342	BH50		8.1	6.8	3.2	183			
343	AD52		8.4	7.4	4.5	277			
344	土塊3		10.5	8.7	2.9	393	砂岩		
345	BY45		12.8	8.7	5.2	543	安山岩		
346	HR65		8.1	8.8	5.0	444			
347	AC56		13.2	8.5	8.1	783			
348	AN61		16.0	7.1	4.6	292			
349	1号作土塊 編中區No.3		10.7	9.6	6.1	772			
350	Z		23.6	17.0	7.8	3630			
351	Z	石 皿	28.7	28.6	9.0	4200			
352	BE65		37.7	30.6	9.5	1080			土塊No. D08 -BA60作合
353	BE65		31.0	28.5	12.5	1708			
354	Z		57.5	25.6	11.2	3000			
355	CXZ		16.7	16.2	18.9	2600			
356	CB56		16.8	17.2	14.3	3138			
357	BC68		13.1	16.8	5.9	1220			
358	AT60		17.9	10.9	7.1	1429			
359	AS46	片狀磨石作	14.3	4.5	2.4	265	綠色片岩		
360	AV60		13.8	5.7	4.3	565			
361	CA47		17.6	4.8	3.9	420			3号作 和11号 作合
362	AL47		16.1	5.8	13.8	3071			
363	AP46		16.5	4.2	2.5	289			
364	土塊278		39.0	14.7	12.7	1610			
365	AW66		18.4	16.0	3.6	268			
366	B53		18.9	11.0	2.6	121			
367	CD49		18.5	2.8	1.6	60			
368	CC47		7.6	2.5	1.8	49			
369	RD65	小短磨石作	7.5	3.5	1.2	65	呢絨岩		
370	AS46		6.5	7.9	3.3	1.1	綠色片岩		
371	RD43		7.2	2.3	0.7	20	綠色片岩		
372	CM47	砥石	5.1	5.9	1.3	36	安山岩		
373	AT49		7.4	3.9	1.2	37			
374	BB37		16.0	1.8	2.0	46	小礫		
375	黑石1		15.6	16.5	5.2	900	安山岩		
376	黑石1		23.5	16.7	4.4	1380			

表8 調査穴遺跡出土土器面一覧表

調査 番号	出土地点	現存寸法値 (cm-g)			形状 分類	部位	成形 状態	保存 状態	土		備考		
		長さ	幅	厚					胎土	面土			
14	11号住居遺跡上	4.85	3.55	1.15	19.4	IV	刷	b	100	施	金雲母+黒雲母+長石	大塚跡見込シロソコ成	
1	15号住居跡No28	4.70	4.60	1.75	41.6	I	刷	c	100	施	長石+黒雲母		
24	土層56	2.60	2.30	1.20	8.0	V	底	c	100	施	黒灰	砂粒+長石	
2	土層68	4.15	4.40	1.10	22.0	I	刷	b	100	施	明赤釉 赤黒	長石+金雲母	跡面ミガキ
10	土層143	2.40	2.15	1.00	5.8	I	刷	c	100	施	赤黒	金雲母+長石	
5	土層184	3.30	2.80	1.10	13.5	I	刷	b	100	施	明赤釉 赤黒	砂粒	
10	土層184	2.50	1.60	0.90	(6.6)	III	刷	c	50	施	黒	長石	
27	土層185	4.60	4.60	1.30	29.9	II	刷	c	100	施	黒灰	長石	
	土層235	4.35	2.70	1.20	(18.9)	II	刷	b	70	施	黒灰	長石+砂粒	
21	土層248-No32	3.70	3.80	0.95	14.6	V	刷	b	100	施	明赤釉 赤黒	砂粒	
12	土層300-No21	4.20	3.50	1.20	21.5	III	刷	c	100	施	赤黒	明赤釉	長石+金雲母
25	土層319	2.80	2.70	0.50	7.4	V	刷	c	100	施	赤黒	明赤釉	長石+長石
12	土層325	3.90	(2.25)	1.40	(13.3)	I	刷	c	60	施	明赤釉	長石+金雲母	
	土層Z	3.40	(2.70)	0.80	(9.4)	IV	刷	c	60	施	明赤釉	砂粒	
	土層Z	3.45	3.40	1.00	(10.3)	III	刷	c	95	施	明赤釉	砂粒	
3	A B56	2.60	2.70	0.95	7.6	IV	刷	c	100	施	明赤釉	金雲母+砂粒	跡面ミガキ
37	A I56	4.10	3.80	1.00	19.0	I	刷	b	100	施	明赤釉	金雲母(黒雲母)	
9	A K59	3.60	3.25	1.15	14.3	II	刷	b	100	施	明赤釉	砂粒	
9	A K59	3.50	3.25	1.00	13.0	I	刷	b	100	施	明赤釉	長石	
13	A M58	4.55	4.10	1.10	23.8	a	刷	c	100	施	明赤釉	長石+石英+金雲母	跡面ミガキ
18	A M58	2.30	2.70	0.95	6.4	IV	刷	b	100	施	明赤釉	長石	
	A M60	4.70	4.35	1.20	28.3	IV	刷	b	100	施	明赤釉	金雲母+長石	
26	A O43	3.85	3.75	1.30	18.9	II	刷	b	100	施	明赤釉	砂粒	
26	A O45	4.80	5.30	1.25	32.9	II	刷	a	100	施	明赤釉	金雲母+長石	横み上げ痕あり
39	A I41	3.35	3.35	1.20	13.9	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石+金雲母	
40	A V64	(3.55)	3.95	1.25	21.0	III	刷	c	50	施	明赤釉	金雲母+砂粒	
	A V67	2.80	2.70	1.05	8.6	II	刷	c	100	施	明赤釉	長石	
	B A44	2.40	2.60	0.90	5.0	IV	刷	c	100	施	明赤釉	砂粒	
17	B R34	(3.00)	3.35	1.45	(16.2)	III	刷	c	50	施	明赤釉	長石+砂粒	
36	B B37	3.65	3.25	1.05	15.1	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石+金雲母(黒雲母)	
45	B B40	(2.30)	2.30	0.85	(4.2)	II	刷	c	40	施	明赤釉	長石	
11	B C35	4.40	4.00	1.05	19.7	III	刷	c	100	施	明赤釉	長石	
6	B C38	4.95	4.90	1.40	37.5	I	刷	b	100	施	明赤釉	長石+金雲母+砂粒	
15	B D36	3.30	2.80	1.25	15.0	IV	刷	b	100	施	明赤釉	長石+金雲母	
23	B E39	3.05	3.00	1.25	10.8	V	刷	b	100	施	明赤釉	長石+砂粒	
28	B E56	3.65	3.20	0.95	13.6	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石+金雲母+砂粒	
30	B H46	4.20	3.65	1.90	33.8	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石+金雲母	
41	B I60	3.30	2.90	1.15	10.0	II	刷	c	100	施	明赤釉	長石+砂粒	
19	B I63	3.90	3.80	1.20	21.9	IV	刷	b	100	施	明赤釉	長石	
16	B K45	(3.30)	4.00	1.10	(17.3)	III	刷	c	50	施	明赤釉	長石+石英+金雲母	跡面ミガキ
	B K65硝子土	2.25	3.95	1.10	19.3	I	刷	b	100	施	明赤釉	金雲母+砂粒	
	B O38	4.95	3.85	1.05	9.2	IV	刷	b	100	施	明赤釉	砂粒	
35	B V43	3.30	3.30	1.50	16.8	I	刷	b	100	施	明赤釉	金雲母+長石	
	B V53	(2.65)	2.95	1.00	10.2	III	刷	c	50	施	明赤釉	長石+砂粒	
29	B V67	4.40	4.10	1.00	19.1	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石	
34	B W57	4.90	3.70	1.35	21.5	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石	
44	B Y40	(2.30)	(2.25)	0.85	(5.1)	IV	刷	c	50	施	明赤釉	砂粒	
20	B Y41	3.15	2.90	1.00	7.8	IV	刷	b	100	施	明赤釉	砂粒	
	B Y64黒硝	3.80	3.85	1.05	16.4	II	刷	b	100	施	明赤釉	金雲母	跡面ミガキ
22	C B51	3.00	3.05	0.95	9.3	V	刷	b	100	施	明赤釉	長石	
7	C E64	3.75	3.50	1.25	18.6	I	刷	b	100	施	明赤釉	長石+砂粒	
28	C E64	4.35	4.65	1.00	25.6	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石+石英+金雲母	
31	C S56	3.80	3.60	1.10	16.6	I	刷	b	100	施	明赤釉	砂粒	
4	C V43	3.40	3.45	0.95	12.3	I	刷	b	100	施	明赤釉	長石	
8	Z U42	3.95	3.00	0.85	13.0	I	刷	c	100	施	明赤釉	長石	
32	Z56	4.15	4.00	0.95	16.0	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石+金雲母+砂粒	
33	Zユ1	3.95	3.30	0.90	11.9	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石	
42	Z	2.60	2.75	2.05	14.6	II	刷	c	100	施	明赤釉	長石	
43	Z	2.70	2.65	1.00	6.9	II	刷	b	100	施	明赤釉	長石	横み上げ痕あり
	Z	3.25	2.50	0.95	8.7	III	刷	b	100	施	明赤釉	長石+金雲母+長石	横み上げ痕あり

註・成形状態

a 打ち欠いて成形を成すもの  
b 打ち欠き一部を研削し砂粒を成すもの  
c 研削し砂粒を成すもの

图

版



2. 遺跡近景  
(BC区西側)



3. 遺跡近景  
(BC区東側)





尾雁岡上部近景



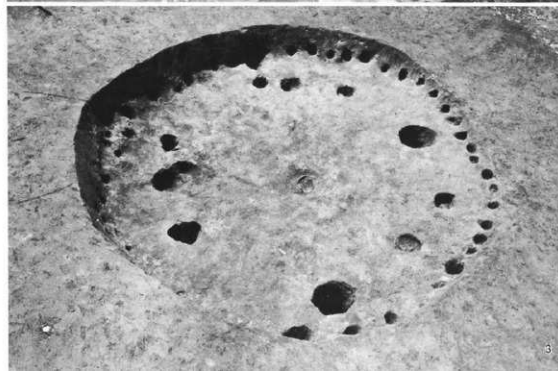
1. 農道取付部  
近景



2. 早期土器集  
中区



3. 3号住居址

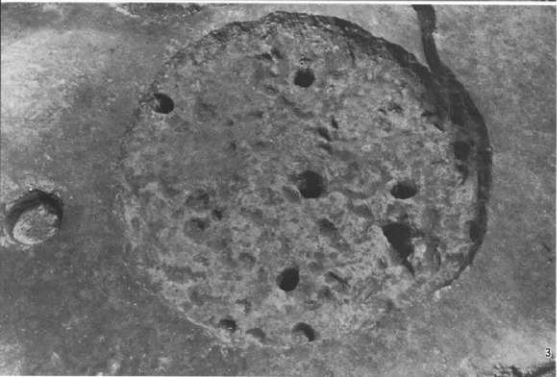




1. 4号住居址



2. 5号住居址  
(1)  
炭化材出土  
状態



3. 5号住居址  
(2)  
精査終了後

1. 10号住居址



2. 4号住居址



埋裏炉

3. 3号住居址



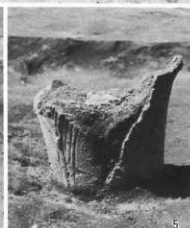
埋裏炉

4. 12号住居址



埋裏炉

5. 10号住居址



埋裏炉

6. 14号住居址



埋裏炉

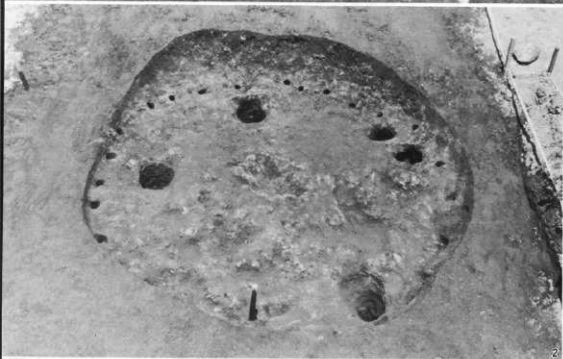
7. 15号住居址



埋裏炉



1. 9号住居址



2. 11号住居址



3. 12号住居址

1. 14号住居址



2. 15号住居址



3. 9号住居址  
石圍炉(新)  
と埋炭炉  
(旧)





集石1.  
1. 上面



2. 中間木炭出土面



3. 底面

1. 凹地のロー  
ムマウンド  
群



2. 土壇 235 と  
その周辺



3. 土壇 301





1. 集石 4  
2. 集石 8



3. 土壇 228  
4. 土壇 304



5. 土壇 319  
6. 矢柄研磨器  
と押型文土  
器の出土状  
態(C1-52)



7. 土壇 189



1. 遺跡遠景  
(調査前)



2. 遺跡遠景  
(調査後)



3. 本線南側近景





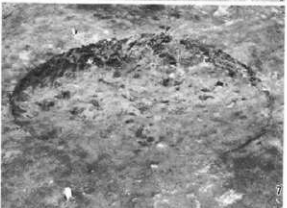
1. 西側近景



2. 土塚 374  
3. 土塚 385



4. 土塚 390  
5. 礫石土塚 394



6. 土塚 388  
7. 竪穴 4

1. 遺物出土状態(1)  
15号住居址



2. 土器出土状態(2)  
9号住居址



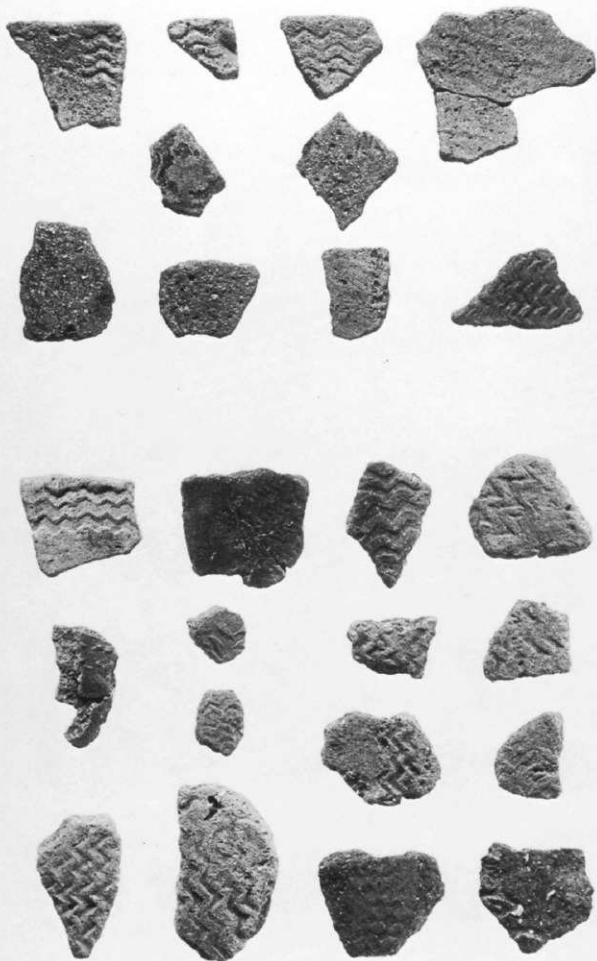
3. 土器出土状態(3)  
AX-62



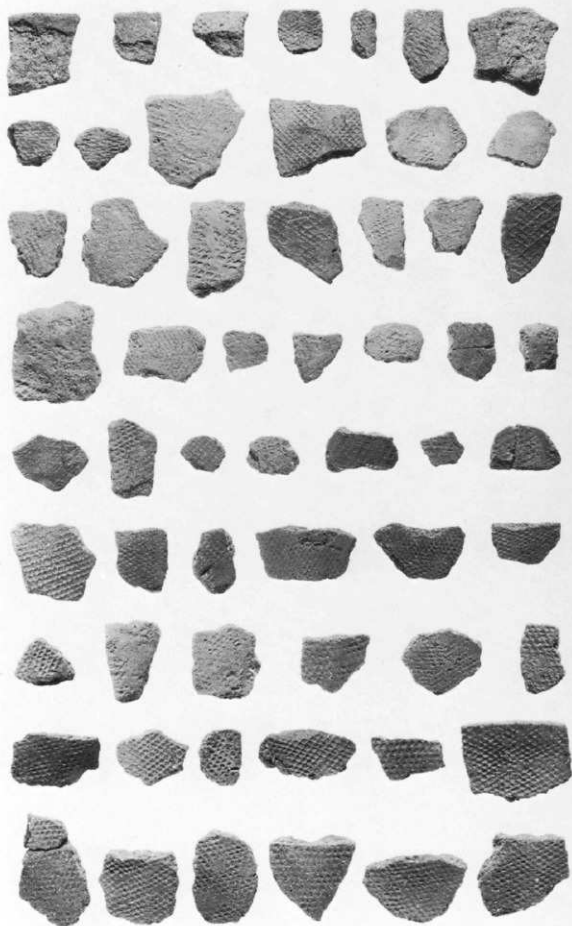
早期繩文土器(1)  
(繩文・捺糸文)



早期繩文土器(2)  
(山形押型文)



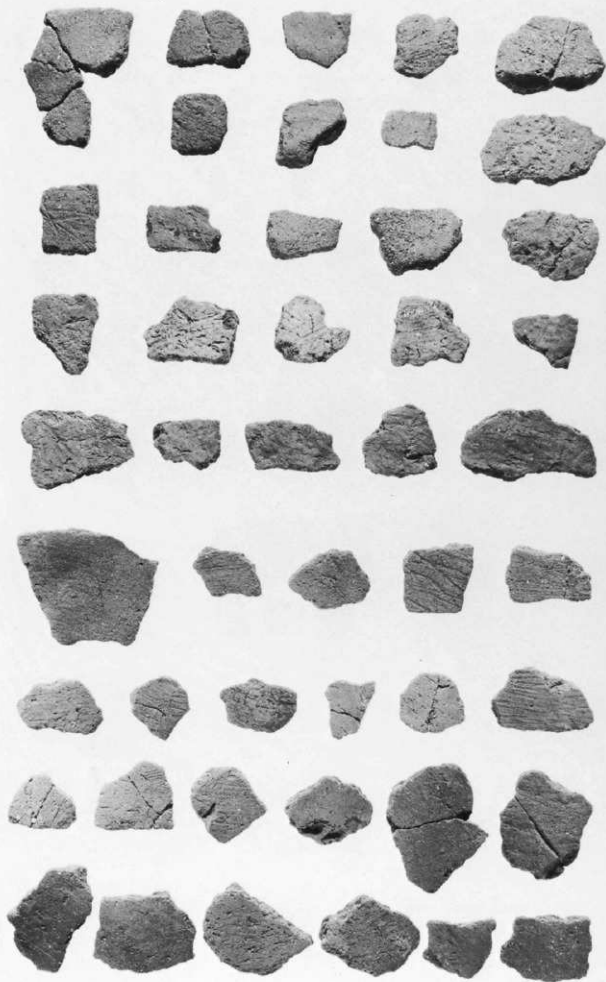
早期縄文土器(3)  
(格子目押型文)



早期縄文土器(4)  
(貝殻模倣文)



早期繩文土器(5)  
(糸紋)



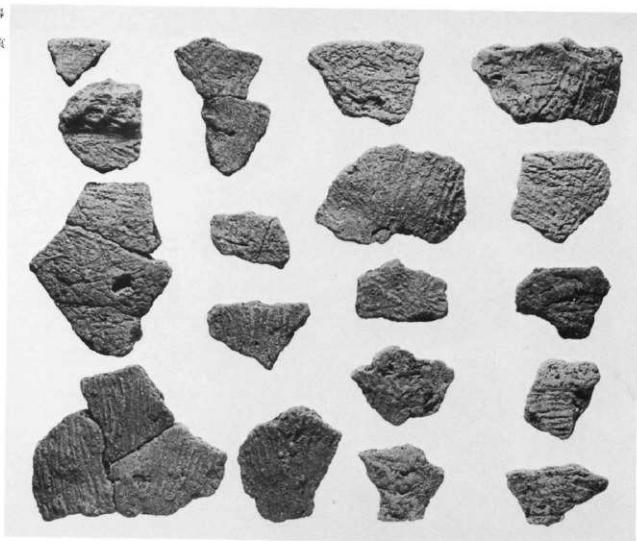


早期縄文土器

(6)

(格条体圧痕文)

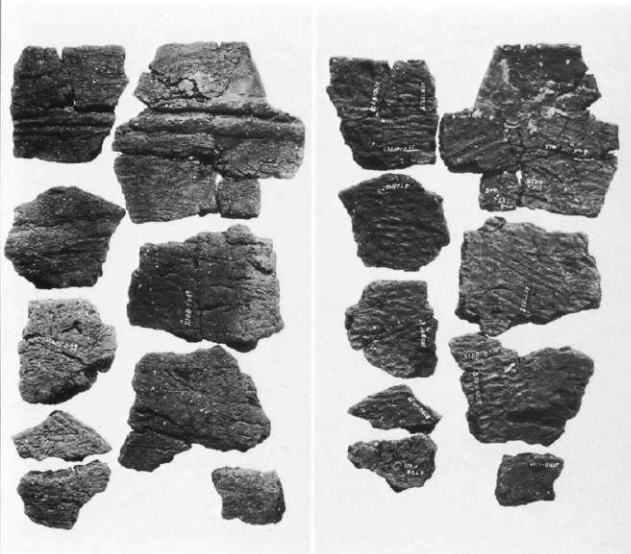
表面



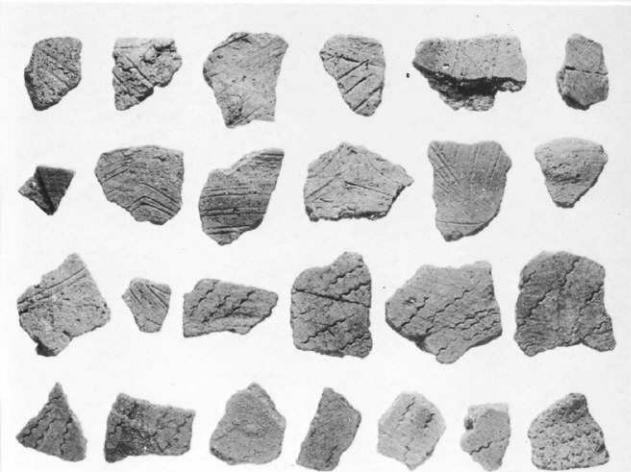
裏面



早期繩文土器  
(7)  
(条痕文)  
左・表面  
右・裏面



早期繩文土器  
(8)  
(貝殼複線文)





175



184



222



205



190



186



191



211



194



228



213



236



223



185



216



198



238



235

1. 中期初頭繩  
文土器破片  
(1)



2. 中期初頭繩  
文土器破片  
(2)





275



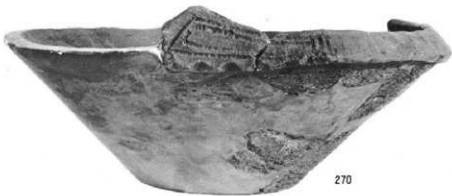
263



279



250



270



259



259



258



273



258

中期中葉縄  
文土器(3)  
(253. 277)



277



283



282

後期縄文土  
器  
(282. 283)



253

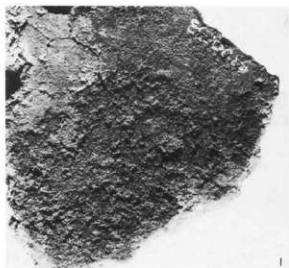


中期中葉繩  
文土器(4)

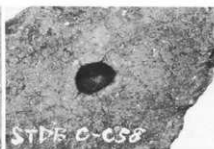


781

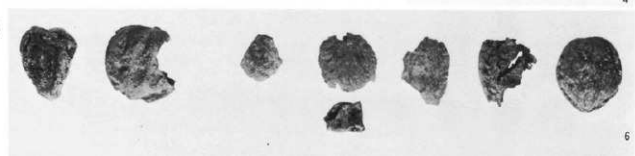
煮澤付着土  
器(1)



種子圧痕土  
器(2・3・4・5)



炭化物  
( $\llcorner$ 石 $\lrcorner$ )(6)



6

1. 石錐(1:2)



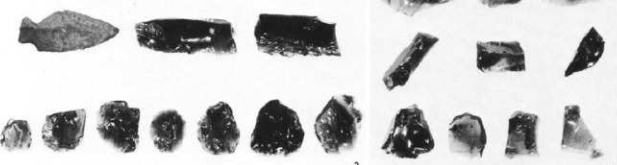
2. 石錐(1:2)



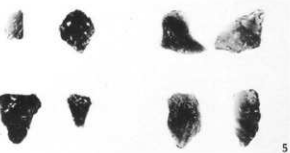
3. 石匙・スクレーパー類  
(1:2)



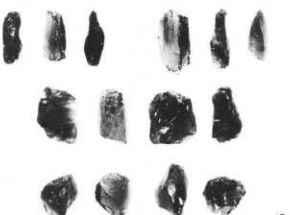
4. 使用痕ある  
石核  
(1:2)



5. 定形石器  
A~D  
(1:2)



6. 彫刻器類  
(1:2)



7. 使用痕ある  
剥片  
(1:2)



打製石片  
石類



横刃型石器



敲打器

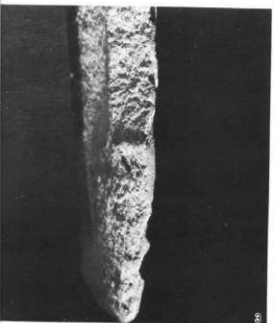
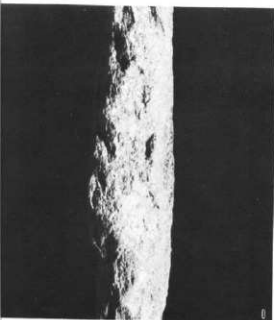


特殊の製石  
器



81 石器に残された製作・  
使用の痕跡

- (1)調整痕  
(2)磨耗痕

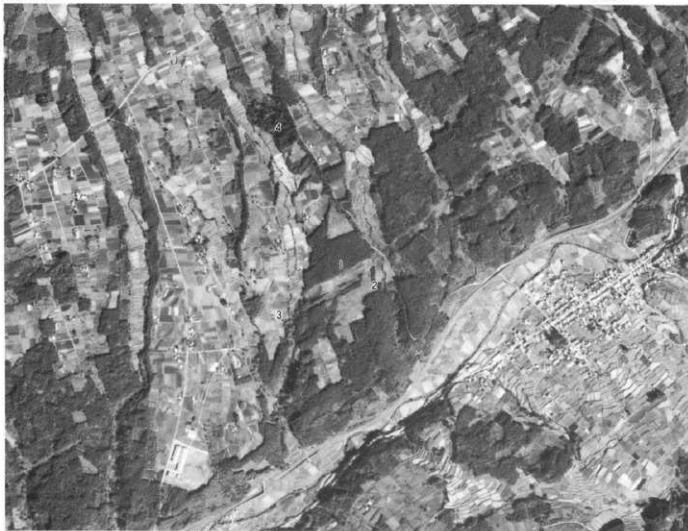


- (3)線条痕  
(4)磨耗痕



- (5)線条痕  
(6)局部磨製

1. 遺跡付近  
航空写真  
(国土地理院発  
行CB-73-7Y  
CB-11使用)



1. 御射山西遺跡  
2. 手洗沢遺跡  
3. 頭殿沢遺跡  
4. 御射山神社

2. 遠景(南より)

